Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | OUFCブックレット　第19巻 |
| Author(s) | 三好, 恵真子; 吉成, 哲平 |
| Citation | OUFCブックレット. 2025, 19, p. 1-265 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/100627 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Osaka
University
Forum
on
China

「21世紀課題群と東アジアの新環境」

シンポジウムシリーズ③

# ポスト体験時代の記憶の継承

## ―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―

三好恵真子・吉成哲平 編

OUFC
BOOKLET
vol.19
2025/3

OUFC BOOKLET
Vol.19

「21 世紀課題群と東アジアの新環境」
シンポジウムシリーズ③

# ポスト体験時代の記憶の継承

## ―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―

三好恵真子・吉成哲平 編

刊行に寄せて

# 「ポスト体験時代の記憶の継承」――「歴史への真摯さ」から受け継ぐ生活者の思想的営為

三好 恵真子 *

2024 年のノーベル平和賞に、核兵器のない世界を目指しながら被爆者の救済や「証言」活動を続けてきた「日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）」が選ばれた。日本の団体がこの賞を受賞するのははじめてのことであり、深い苦しみを抱え続けながら、さらには被爆者の高齢化が余儀なくされる中で、長きにわたる地道な活動に込められてきた「願い」が、まさに報われる瞬間でもあった。それと同時に、現在、同じ生活の場面で、ウクライナ侵攻が続き、また激しい戦闘が展開されるパレスチナ情勢を目の当たりにする中で、私たちが身をもって「平和」について、なお一層考えていかなくてはならない時を迎えていることを改めて痛感することにもなった。

まもなく戦後 80 年を迎え、次第に風化が進むアジア・太平洋戦争を巡る体験と記憶は、戦争体験者の証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」へ突入しつつある今日、未来世代への継承が切実なる課題となっている。これまで歴史学や社会学の領域を中心に「記憶の歴史化」に光を当て、歴史叙述では見ることのできなかったあるいは見過ごされてきた側面に注目し、新しい視座から歴史を見直そうとする試みがなされてきた[1]。その一方で、歴史

* 大阪大学人間科学研究科・教授

[1] 具体的には、以下等を参照。石原俊 2022「「戦後の終わり」にどう向き合うか」

資料や証言のアーカイブ化、さらにはAIとデジタルを活用する最新のテクノロジー活用による復元[2]が広く注目され、「記憶」が客体化され「記録」化していく時代へと移り変わる傾向も見られるようになった。

こうした動向の中で、近年における「戦争体験の継承」に関する既存研究では、社会的・歴史的な出来事にまつわる体験者と非体験者との間に横たわる「体験の非共有性」の克服に関して、調査者のポジショナリティを問いながら、非体験者がいかに当事者の体験に「参与」していけるのかについて、調査を通じて表現していく試み[3]が蓄積されつつある。とりわけ非体験者が体験者の「トラウマ的記憶」を共有することに関心が集まっており、聞き取り等を通じた非体験者による「トラウマの二次受傷」（トラウマの感染）に体験継承への一つの方向性が見出されている[4]。つまり、経験や記憶の継承のプロセスは、私たちが過去の出来事を知識として知ることだけではなく、非体験者の「身体的、情動的な実践」により支えられていることを示唆している。その一方で、戦争体験世代と戦後世代との間での当時の複雑な対立や当事者の過酷な体験の語り難さ、また、これまで蓄積されてきた膨大な記録などが等閑視されることにより、戦争体験にまつわる記憶が今日の視点から定型的なストーリーとして継承されてしまう危険性[5]も指摘されている。

それでは「体験者」と「非体験者」の間に横たわる深い溝、またそれへの

---

『学術の動向』27(12)、46-49頁。

[2] 例えば、建築学の渡邉英徳氏は、長崎原爆資料館と広島平和記念資料館の写真と被災者の証言などの資料を三次元のデジタルアース上に紐付けたり、モノクロ戦争写真をAIにより「カラー化」して蘇らせ、70数年前の日常と記憶を若者が取り組むという「記憶の解凍プロジェクト」を手がけている。

[3] 小倉康嗣　2013「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティ―なんのために，どのように表現するのか」、浜日出夫・有末賢・竹村英樹編『被爆者調査を読む―ヒロシマ・ナガサキの継承』慶応義塾大学出版会、207-254頁、あるいは屋嘉比収　2009『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす―記憶をいかに継承するか』世織書房など。

[4] 蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか―ポスト体験時代の歴史実践』みずき書林。

[5] 福間良明　2020『戦後日本、記憶の力学―「継承という断絶」と無難さの政治学』作品社。

もどかしさや困難を乗り越えて、戦争を直接経験していない私たちが、体験者の経験や記憶を伝え継いでいくためには、何をなすべきであろうか。そこで参照したいのが、歴史学者のテッサ・モーリス＝スズキ氏が『過去は死なない―メディア・記憶・歴史』の中で示唆している「歴史への真摯さ」と「連累」という概念である[6]。同氏は、私たちの歴史知識が教科書だけでなく、小説や写真、映画等の様々なメディアによって日常的に影響を受け、構築されている側面に配慮しつつ、とりわけ写真は過去の出来事を巡る感情を鑑賞者へ喚起させやすいメディアであると言及している。加えて、「過去についての自分の解釈を―カメラマンのそれとは根本的に相容れないかもしれない解釈を―構築するわたしたちを見る者の役割をも、包括する営為」が、「“歴史への真摯さ”を生みだす」と論じている。すなわち、「歴史への真摯さ」とは、「歴史のさまざまな声に耳を傾けること」により過去についての自分の理解を形づくり、つくり直す「内省のプロセス」であり、またその営みが、直接的には経験していない過去の出来事に対し、いかに応答しうるかを現在の私たちに問いかけている「連累」の重要性へと繋がっていくとする。

またこうした考え方は、社会学者の有末賢氏が「ポスト体験時代」という時代背景と関連づけながら提唱した「球体としての記憶」という発想[7]と同調するものである。有末の論考では、記憶を、個人的記憶と集合的記憶、体験者と非体験者、メディアと事実情報という 3 つの次元で構成される座標軸の間に移動する球体に例え、記憶が単なる次元を超えた重層性と全体性を持つものとして強調されている。一方、社会学者の直野章子氏による、「事後的に設定された課題における「被爆体験」とは、被爆者自身にとっても過去の出来事であり、「記憶としての体験」である」ゆえに、「記憶が立ち現れる文脈、つまり、現在の記憶の枠組みによって影響を受け、出来事のただ中で

---

[6] テッサ・モーリス-スズキ　2014『過去は死なない―メディア・記憶・歴史』岩波書店。

[7] 有末賢　2016「集合的記憶と個人的記憶: 記憶の共有性と忘却性をめぐって」『法學研究: 法律・政治・社会』 89(2)、19-40 頁。

は生じていなかった感情や感覚が含まれることもある」という指摘[8]にも耳を傾ける必要がある。すなわち、生身の人間が持つ現実としての過去の経験、そしてそれらがどのような形で身心に記憶として残されていくかについて受け止め、理解していく係わりの中で、私たちが引き受けるべき「記憶の継承」の意味が見えてくるのではないだろうか。言い換えれば、過去を生きる人々が暮らしの中で感じてきた矛盾と葛藤を自分たちとは切り離されたものとして捉えるのではなく、そうした一人ひとりの人生の歴史の先に、いま、私たちが生きているこの社会的構造があるのだという「連続性」を改めて理解していくプロセスがとりわけ重要になるのではないかと考えた。

このような背景も踏まえつつ、私たちは、2023 年 6 月、次世代を担う学生たちを主体としながら戦争・戦後体験の意味を問い、未来への展望を描いていくために、大阪大学人間科学研究科附属未来共創センターIMPACT オープンプロジェクトとして、「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」を立ち上げた[9]。このラボは、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点における「拠点形成プロジェクト」として 2022 年度に採択されたプロジェクト「21 世紀課題群と東アジアの新環境:実践志向型地域研究の拠点構築」[10]から生まれたものであり、その根底には、第二次世界大戦後の東アジア地域秩序の再編による歴史の重層性を踏まえながら有志の教員により 2007 年設立された「大阪大学中国文化フォーラム」[11]の精神[12]が

---

[8] 直野章子　2020「当事者になる——体験の継承者から記憶の担い手へ——（特集●戦争・被爆体験の継承）」『生協協同組合研究』8、18–25 頁。

[9]「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」HP：https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/

[10]本プロジェクトは、非対称戦争とテロリズム、新型感染症と公衆衛生、環境問題や核管理、国境紛争と歴史問題、あるいは少子高齢化と社会保障など、緊急性を要する 21 世紀課題群と東アジアとの関係性に着目しながら、若手研究者の育成を軸芯に据えた現代中国研究の「対話型」研究プラットフォームの構築を試みている。拠点形成プロジェクト「21 世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築」の紹介：https://www.gjs.osaka-u.ac.jp/project/2022b/

[11] 有志の教員により 2007 年に組織化されたものであり、中国の変容を中心・周辺（core-periphery）関係の再編過程とみなし、「中国」を中華人民共和国と等値せず、「多元的多民族社会と華人社会」という空間的拡がりおよび「近現代の軌

受け継がれている。すなわち、東アジア地域秩序に関わる諸課題は、従来の国家間関係のもとではもはや解決しえないことを認識しつつ、本フォーラムでは、東アジアの国際公共財形成への基盤として、「人間の安全保障」にひとつの方向性を見いだそうとして活動を続けてきた。そして設立以来、日本・中国大陸・台湾・韓国における国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」を十数年に渡り経年的に開催しており、face to face の相互の信頼を糧に、一年また一年と国境を越えた対話を地道に続けてきたプロセスがあるからこそ身をもって実感するのは、21 世紀の東アジア地域において、20 世紀のような「戦争」により分断されることのない、紛争や対立を生み出さない「アジア地域史像」の構築であり、未来世代に引き継ぐべきことは、争いのない平和であるという願いを深めてきたのである。

今年度は、上記のグローバル日本学教育研究拠点「拠点形成プロジェクト」の最終年度にあたり、その総括としての第 3 回目のシンポジウムを開催することとなった。これまでを簡潔に振りかえるならば、第 1 回目のシンポジウムでは、沖縄返還、日中国交回復、国連人間環境宣言の採択という戦後の節目となる 1972 年からさらに半世紀という 2022 年という時代の節目を強く意識しつつ、「この 50 年の歩みを共に考える―それぞれの出来事をいま振り返る意味」をテーマとして、その時代をリアルタイムでは経験していない若手研究者たちが協働しながら積極的に企画を立案し、それぞれ渾身の研究を披露しながら、参加者とともに考えていく場・空間の醸成を試みた [13]。続く、

---

跡と前近代からの逆照射」という歴史的射程から、その特質を捉えることを特徴としている。この間、「研究と教育の有機的連携」の活性化を基盤に据えつつ、時代の要請に応えながら、地域研究のあるべき姿を積極的に提示してきた。日本・中国大陸・台湾・韓国の国境を越えた学術交流である国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」（会議言語中国語）を十数年間にわたり主宰しており、息の長い人的交流を通じた対話の基盤を育んできた。大阪大学中国文化フォーラム HP: http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/

[12] 詳細は以下を参照されたい。田中仁・三好恵真子 編　2012『共進化する現代中国研究―地域研究の新たなプラットフォーム』大阪大学出版会。

[13] 三好恵真子・林礼釗・吉成哲平編　2023『この 50 年の歩みを共に考える―それぞれの出来事をいま振り返る意味（「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シン

第 2 回目では、「記憶の継承ラボ」の立ち上げとその活動を踏えながら、3 人の学生たちの基調報告に加え、長崎城山小学校平和祈念館の平和案内人として長年尽力されている山口政則氏と松尾眞一郎氏に貴重なお話を伺うことができた[14]。長崎の市民活動により被爆建物や遺構を残す運動が積極的に継続されているが、その中で、城山小学校被爆校舎平和発信協議会前会長の内田伯氏が残された功績が大きいと山口氏は強調されていた。内田氏の「目から消え去る物は、心からも消え去る。原爆の遺構は、残すこと、見て感じること、伝えることに意味がある」という大切な言葉も紹介されながら、その遺志を受け継ぎつつ地道に活動を継承されているのである。山口氏も松尾氏も被爆を経験されていないものの、長崎に共に暮らし続け、一人ひとりの被爆者に寄り添い、その言葉にならない想いも受け止めながら相互に支え合い、戦争経験や記憶を受け継ぐべく、未来世代に向けた平和活動を実践されている。こうした日々の暮らしの中で被爆者を支える平和案内人の方々へ感謝の意を深めながら、私たちが改めて気づかされたのは、戦争体験者と非体験者を繋ぐべく存在としての、現場の「伴走者」としての実践者の存在の尊さであり、まさに「ポスト体験時代の記憶の継承」において核心的な役割を果たしているのではないかと。

こうして「記憶の継承ラボ」では、これまで長崎、そして沖縄、福島、水俣などの各地を訪れ、五感で学びの機会を得る一方、現場で尽力する実践家の方々から多くの示唆を頂くことができた。そして第 3 回目のシンポジウムの開催に繋がったのが、沖縄戦とその歴史を背負った現在について多様な学びと新たな視野の拡がりを頂いた沖縄訪問である。とりわけ冷戦下の 1950 年代に建設が本格化した嘉手納基地の門前町として発展する中で独自の文化を築いてきた街として知られる「沖縄市コザ」を訪れた際、沖縄が数世紀にわたり経てきた歴史の厚みを受けとめつつも、現在も同地で起きている出

---

ポジウムシリーズ①)』OUFC Booklet Vol.17: https://hdl.handle.net/11094/90714

[14] 三好恵真子・吉成哲平 編 2024『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ②)』OUFC Booklet Vol.18: https://hdl.handle.net/11094/94661

来事をめぐり、当初、複雑な葛藤を抱かざるを得なかった。ただし、このような私たちに対して、現地での貴重な出会いを頂くのみならず、様々な背景を持ってコザに暮らす一人ひとりの模索やエネルギーにより、この街がつくられてきたのだという息づく戦後史を諭してくれたのが、市史編集に日々尽力される職員の方々であった。そこには、これからのコザの街をつくっていくために、多くの人びとが訪れてその歴史を知ってほしいという、コザに暮らす人たちの眼差しによる「コザの戦後史」の継承への願いが託されていた。ともすれば先の大戦を巡る歴史記憶が、ナショナリティや「加害／被害」の対立構図へと分断的に回収されがちになる。しかしながら、私たちが強く認識するに至ったのは、それぞれの地域に生きる人びとの営み続けてきた戦中・戦後の「生活の現場」を重層的な歴史空間として現在の私たちへと連続的に捉え直していくことへの重要性である。

以上より、第 3 回目のシンポジウムとして、「ポスト体験時代の記憶の継承—アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ—」を「拠点形成プロジェクト」と「記憶の継承ラボ」の共同主催にて、2024 年 10 月 26 日（土）に広く一般にも公開したオンライン形式で開催するに至った。今回は、その趣旨に鑑み、「沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」」並びに「大阪大学中国文化フォーラム」に共催としてご協力頂いた。シンポジウムには、前回までと同様に国内外からおよそ 100 名のご参加を得ることができ、時間を延長しながらの深い議論が展開された。参加者は、これまでのシンポジウムに毎回参加してくださる方々もおられる他、グローバル日本学教育研究拠点の広報の力も借りながら沖縄に携わる研究者の参加も充実していた。

以下、プログラムを示すように、第一部の「コザの戦後史の継承が拓いていく未来への展望」では、沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」に関わりながら長年にわたり沖縄市史編集に尽力され、体験者の貴重な「語り」の聞き取りも行われている恩河尚氏と伊敷勝美氏にご登壇頂いた。そして学生たちの現場での記録写真と応答させながら、対話形式にて沖縄市の戦後史に関する貴重なお話を頂戴した。続いて第二部では、「戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為」を基調とする 2 つの研究成果報告

を行い、ディスカッサントから総括のコメントを頂いた。引き続き第三部の「アジア地域史から共に考える私たちの暮らし」へと展開し、それぞれの土地で戦中戦後の現実と向き合い続けながら営まれてきた生活者の思想的営為を、ポスト体験時代に生きる私たちがいかに受けとめつつ未来へと活かしていくことが出来るかについて、参加者と共に考えながら、熱量を込めた有意義な議論を交わすことができた。

(プログラム)
第一部 ＜話題提供＞コザの戦後史の継承が拓いていく未来への展望
モデレーター：吉成 哲平（大阪大学人間科学研究科 DC）
① それぞれの土地の歴史を背負う現在から浮かび上がる東アジアとの結びつき
「記憶の継承の現場で展開される「戦後」を生きる人びとの複雑な経験」
　「記憶の継承ラボ」の院生メンバー
② 現場からのレスポンス「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」
「沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」の取り組み」
　恩河 尚（沖縄市史編集担当）
　伊敷 勝美（沖縄市史編集担当）

第二部 ＜基調報告＞戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為
① 生活の中で生まれゆく写真表現から「戦後」を捉え直す
「写真家たちが向き合った 1970 年前後の現実―「写真 100 年」の歴史から内省した現場での撮影表現の意味―」
　吉成 哲平（大阪大学人間科学研究科 DC）
② 国境移動の経験を通じて心身で受けとめていった重層的な歴史
「日中「二つの東北」の痛みと向き合いながら暮らす結婚移民の中国人女性たち―「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ結び目となりゆく歴史実践―」

王 石諾（大阪大学人間科学研究科 DC）
ディスカッサント：小林 清治（大阪大学人間科学研究科）

第三部 ＜総合討論＞「アジア地域史から共に考える私たちの暮らし」

以上を踏まえ、本書は、本シンポジウムの総括として編纂し、OUFC（Osaka University Forum on China）Booklet のシリーズの一環として刊行するものであり（冊子体と電子版）、グローバル日本学教育研究拠点「拠点形成プロジェクト」の 3 年間の成果の極致としても位置づけていきたい。とりわけ第一部における恩河氏と伊敷氏の語りは、現場で共に暮らしてきたからこそ見えてくる歴史の真相やそこに暮らす人びとの姿や想いを生身に感じることができ、私たちに新たな発見と内省をもたらすとともに、コザ戦後地域史として学術的にも高い意義を放っている。そして第二部は、いずれも戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の重みに目を向けながら研究を進め、今年度末に博士号を取得した 2 人の院生による先駆的な報告を研究論文として掲載した。こうしたことからも学生たちが主体となる「記憶の継承ラボ」の成長と未来への可能性を実感するとともに、現場の方々との出会いが、学生たちをしっかりと育ててくださっていることを改めて実感しつつ、感謝の思いを深めている。さらに、第三部の「＜総合討論・応答＞アジア地域史から共に考える私たちの暮らし」では、当日の白熱した総合討論・質疑応答の文字起こしに加え、本書ならではの魅力として、シンポジウムに参加してくれた様々な専門性を持つ 7 名の若手研究者たちが、それぞれの思いを紡いでまとめ上げた寄稿文も収録することができた。翻って、各部の中扉や巻末には、編者の一人である吉成哲平氏（写真家でもある）がそれぞれの現場にて撮影した写真も添えている。こうして、いまを生きる私たちが受け継いだことの大切さを噛みしめ、まだ見ぬ未来世代の人たちにもいつか届けられることを祈念しつつ、私たちは編集に際して、より一層心を込め、願いを託した。

まず、第一部＜話題提供＞「コザの戦後史の継承が拓いていく未来への展望」では、はじめに、①それぞれの土地の歴史を背負う現在から浮かび上が

る東アジアとの結びつき「記憶の継承の現場で展開される「戦後」を生きる人びとの複雑な経験」として「記憶の継承ラボ」の大学院生メンバーが、「被爆地長崎での平和活動」、「「満洲」の歴史の文脈にある中国東北部」、「社会転換期の中国東北部における環境実践」、「写真家東松照明の足跡を辿るために訪れた沖縄」というそれぞれの切り口から、現場での写真を介しつつフィールドでの学びを共有した。また、それを受けて、恩河氏と伊敷氏から頂戴した②現場からのレスポンス「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」は、モデレーターを務めた吉成氏がリードする形での対話形式で展開した。当日は、精彩な対話により拓かれていく、これまで文字や記録に残されていない貴重な経験や出来事も多く含まれており、本書では、その臨場感を極力失せぬままに伝えるために、録画からの文字起こしを基本とし、沖縄に残されている貴重な写真も併せながら再現を試みた。

沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」は、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」と形容される沖縄市の戦後史を見つめ直すことを目的とした資料館である。沖縄戦の降伏調印式から60年の節目となる2005年9月7日にコザ・パルミラ通りに開室した「沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート」と、2009年9月7日に開室した「ヒストリートⅡ」を移転・拡充し、2018年8月8日に再オープンしたものであり、沖縄市の内外から多くの人びとが訪れている。館内には、戦後の沖縄市のまちの様子を伝える貴重な写真資料やモノ資料が展示されている。沖縄市の市史編集を担当されている恩河氏と伊敷氏から、当日は、沖縄市の戦後史を見つめ直し、そして継承していくことに込める思いについても伺うことができた。

恩河氏は、大学時代に歴史学を専攻しながら江戸時代の日琉史について研究され、また現在は沖縄市史編集を伊敷氏と共に長年続けられながら、沖縄国際大学での講義や各種講演等も担われている。まず恩河氏より、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」と形容される沖縄市の中でもコザの街の成り立ちについて丁寧な解説を頂き、内省とともに非常に多くの新たな学びを得ることができた。また今回は事前収録の動画を通じてご参加頂いた伊敷氏からは、終戦から80年が近づき、戦争体験を語る方々も少なくなり、そうした人た

ちの戦後の記憶について記録し、それらをどう継承していくのかということを考えるべき大事な時期に差し掛かる中で、このシンポジウムを開催することは、大変な意義深いことであると、冒頭にて激励の言葉を賜った。吉成氏は初めてコザを訪れた際に、ヒストリートにて伊敷氏から真摯な説明を伺う中で、「いつからが「戦後」なのだろう」という、切り分けられない「戦時」と「戦後」への問いが頭をよぎった[15]という。それに対し、恩河氏と伊敷氏から、地域ごとに戦争体験の様相が大きく異なる沖縄の中でも、特に沖縄市に暮らしてきた人びとの複雑な経験についてご教示頂くと共に、「沖縄市」という地域の戦後史を知ることがなぜ？という問いを育み、ひいては未来の「まちづくり」へと拓かれていくことを力強く諭して頂いた。

続く第二部＜基調報告＞「戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為」における 2 つの基調報告は、それぞれの現場から得た多くの学びにも支えられながら、「拠点形成プロジェクト」の総括も込めた論考としてまとめあげた研究論文を掲載している。

基調報告①の吉成氏は、これまでの 3 回のシンポジウムでいずれも基調報告を務めており、「記憶の継承ラボ」でもリーダー役として、学生たちを日々牽引してくれている。またこれまでも紹介してきたように、吉成氏は 10 年以上にわたり写真を通じた表現活動を続けてきた写真家でもあり、その素養を活かしつつ、「写真実践」という独創的な方法論を体系化している[16]。加えて、柳田民俗学の心意論や 70 年代の大衆文化論に大きな示唆を受けつつ、石田忠氏の長崎被爆者の生活史研究、鶴見和子氏の生活記録運動、さらには鶴見俊輔氏や小田実氏らの生活者の思想との緻密な応答を図ることにより、「戦後」を捉え直す新たな方法論として昇華させることにも成功している[17]。

---

[15] 吉成哲平　2023「いつからが「戦後」なのだろう―写真家たちが見つめた暮らしから辿り直す」世界思想社 ウェブマガジン「せかいしそう」『ガクモンの目』第 3 回：https://web.sekaishisosha.jp/posts/7347

[16] 吉成哲平(著)，三好恵真子(監修)　2021『写真家 星野道夫が問い続けた「人間と自然の関わり」』大阪大学出版会。

[17] 吉成哲平　2025『写真家 東松照明らが表現し続けた生活者の思想的営為―「写真実践」より拓かれていく見過ごされてきた「戦後」の暮らしとその重み

今回の報告の舞台は、第 1 回目のシンポジウムでも着目した今からさかのぼること半世紀前の 1970 年前後であり、東西冷戦下でベトナム戦争が続いていた 60 年代後半にアメリカがベトナムへの北爆を開始し、戦争が一層激化する中で、1964 年の東京オリンピックに続き 70 年には大阪万博が開催され、名実ともに戦後日本は経済大国化へと突き進んでいった時期でもあった。そうした時代の潮流において世界的にも学生運動に揺らいだ 1968 年は、日本では 1868 年の明治維新から 100 年という節目にあたり、政府主催にて「明治百年記念式典」が挙行されることで、以来約 1 世紀の近代国家としての日本の発展が国を挙げて慶ばれていた。同時に日本写真家協会の主催にて「写真 100 年―日本人による写真表現の歴史展」が開催され、写真史における重要な出来事と位置づけられ、それが写し出した近代日本の歴史への反省は、職業的写真家だけに留まらず、同時代のアマチュア活動へと広く衝撃を与えていったのである。にもかかわらず、写真に関連する既存研究では、当時の写真家自身の持つ「表現意識」への懐疑とその反面での匿名的な「記録」の肯定という概して定型的な文脈から論じられており、写真家たちが向き合った 1970 年前後の現実とその心の内が見過ごされてきたという課題が残ることを吉成氏は指摘する。そこで本報告では、「写真実践」による分析を試み、高度成長がもたらした繁栄とひずみを前に過去の大戦と死の意味が問い直されていく時代の中で、写真家たちが人びとの暮らしを未来に向けて「表現し続けた意味」を解明している。さらに生活の中で生まれゆく写真表現から「戦後」を捉え直す、これらの「写真実践」による成果の意図するものは、この一連のシンポジウムが目指してきた「ポスト体験時代」に生きる私たち未来に受け継ぐべき生活者の思想的営為へと結実していくものでもあった。

基調報告②の王氏の論考は、旧満州の歴史的記憶を引き継ぐ中国東北部において、80 年代以降の「単位制社会」の弱体化に伴って結婚移民となり日本の福島に移動してきた 50 代から 60 代の中国人女性に目を向け、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生き抜く女性の「歴史実践」について、彼

---

―』大阪大学、博士論文。

女らの主観的意味世界に接近しつつ、対話的構築主義によるライフストーリー法により読み解いている[18]。王氏は、6 年前より福島で調査を始めているが、そこで気づいたのは、この地域に長年に暮らしている中国人は、主として結婚移民の女性であり、中でも中国東北部出身者が圧倒的に多いという現実であった。すなわち、日中国交正常化により 1980 年代に中国残留日本人の帰国が始まり、彼らや呼び寄せられた家族を中心に日本人との人脈ネットワークが形成されながら、かつての「満洲」の歴史現場である中国東北と日本を繋ぎ続けていたのである。しかし、こうした女性たちの多くは、片言の日本語しか話せないまま移住してきており、長い間日本で暮らす中でもいまだに簡易な日本語を駆使して暮らしている。また日本人の夫が家の長男ゆえに義父母との同居と介護を担うことが一般的であり、夫の苗字を冠した日本の名前を使って暮らしているため、地域の中国人同士であっても互いの本名を知らないことは珍しくないという。他方で女性たちにとって、「先進国としての日本」のイメージを抱きながら意気揚々と移住したものの、その後の生活は、思い描いていた「幸せな人生」とは異なるものであった。とりわけ 3・11 震災以降に女性たちは自発的に「インフォーマルな形」で集まりながら支え合い、主体的にネットワークを構築していたものの、彼女らの「語り難さ」の背後には、かつての「満洲」からもたらされた傷跡と重ね合わせるかのように、移住後に待ち受ける彼女らが一人では抱えきれない様々な辛さがあることが次第に見えてきた。それにもかかわらず、彼女らが福島の地に根を張って暮らしを営み続けているのは一体なぜなのであろうか。こうした根源的問いに向き合い、女性たちが暮らす「東北」という社会に潜む複数の権力構造と深く結びついた彼女らの「語り難さ」を受け止めながら、王氏は根気強く調査を続けた。その結果、国境を越えた生活の本当の「豊かさ」とは何かを模索しながら展開される女性たちの日々の営みが、「単位制」の弱体化や戦争の痕跡という、双方の「東北」の痛み受け止めつつも、日中の尊

[18] 王石諾　2025『日中「二つの東北」を生きる中国人女性の移動をめぐる歴史実践—戦争の痕跡を受け止めつつ震災を乗り越えようとする一人ひとりのライフストーリー—』大阪大学、博士論文。

い結び目となりゆく「歴史実践」であることが次第に見えてきたのである。

以上、2 つの基調報告に対して、小林氏によるディスカッサントの応答が、その意味をより深め、豊かなものとしてくれた。小林氏は、3 回のシンポジウム全てのコメンテーターを担ってくれており、毎回貴重な示唆を頂くとともに、「記憶の継承ラボ」の活動も側面から支えてくれた。小林氏は、環境社会学を専門とし、リスク理論研究並びに環境リスクをともなう廃棄物処理施設等の立地をめぐる地域コンフリクトを研究対象として、理論と現場を往還させながら現実を直視し、教育研究を積み重ねられてこられた。科学技術の発展は、豊かさとともに人間や環境に対するさまざまなリスクをもたらすが、経済成長を優先する社会では、後者の側面はあまり重視されず、社会の周辺部にしわ寄せされる傾向がみられる。小林氏は、環境リスクをともなう廃棄物処理施設の立地をめぐる地域紛争を研究対象として、リスクを可能なかぎり低減した上で、残されたリスクを共有する社会の仕組みについて考察を続けている。近年は、東日本大震災を踏まえつつ、原子力発電関連の施設コンフリクトに関する研究を進めており、ウルリッヒ・ベックのリスク社会論の視座から議論を深めている。

今回のシンポジウムでは、2 人の基調報告に対するコメントを中心に議論を展開して頂いた。王氏の研究では、結婚移住によって「二つの東北」に生きる女性たちの日常生活の場に息づく歴史記憶を一人ひとりのライフストーリーとして描き、また吉成氏の研究では、東松照明氏が、長崎と沖縄の戦争の傷跡に圧倒的な衝撃を受けて、写真家として何ができるかを問い続けながら、同時代を生きる「伴走者」の立場から、一人ひとりの人生の歩みを描いていったとする。こうして対象も方法論も異なる 2 人の論考であるが、一つの共通点が見いだせたという。2 人の研究が重視しているのは、「それぞれの土地で戦中・戦後の現実と向き合い続けながら営まれてきた生活者の思想的営為」の、何らかの属性（「中国人女性」「被爆者」「ウチナーンチュ」など）によってひとまとめにすることのできない、「複数性」ではないだろうかと。すなわち、戦中・戦後の経験を伝える一人ひとりの声の多数性を、ともすれば大きな主語の下に回収しがちになる中で、むしろそれらの多数の

声を多数のままに耳を傾け、そして、それらの「あいだ」での対話を醸成していくことが、記憶の継承を実りのあるものすることにつながると、一連のシンポジウムの意義も含めて、総括してくれた。

最後に、第三部の＜総合討論・応答＞「アジア地域史から共に考える私たちの暮らし」では、冒頭にて、深い議論が展開された当日の総合討論の模様を文字起こしにより再現しているが、どのような難問に対しても、恩河氏が論理明晰な回答を見事に示して下さり、日々の実践の蓄積から得た博識の重みが身にしみて伝わってくる内実である。

また、上記にも触れたように、ここではシンポジウムに参加してくれた 7 名の若手研究者の寄稿文をレスポンスとして本書独自に掲載している。教育哲学の視点から上林梓氏（大阪大学 21 世紀懐徳堂・特任研究員）、共生の哲学の視点から中谷碩岐氏（大阪大学人間科学研究科 MC）、環境学･地域研究の視点から黄璇氏（東京大学大学院農学生命科学研究科・生態水文学研究所・学術専門職員）、朝木日力格氏（大阪大学人間科学研究科 DC）、張曼青氏（京都大学フィールド科学教育研究センター・特定助教）、馬建氏（新潟食料農業大学食料産業学部・助教）、また人間と文化の視点から西村花菜氏（放送大学・人間と文化コース・全科履修生）というように、それぞれが専門性を踏まえつつもその一方で、いずれも自身の経験、ひいては出自やその文化とのつながりを再帰的に振りかえりつつ、個の人間の持つ営為を物差しとしながら歴史の重層性を確認している点は意義深い。すなわち、先述のテッサ・モーリス＝スズキ氏の言葉を借りるならば、私たちが現在から過去を見ているというその視点の限界を認識し、また自身の観点を同時代のほかの人たちのそれと比較しつつ過去について学ぶことが、今を生きる私たちにとって意味ある位置を現在に創りだすための継続的な努力の一環となり得るということについて、身心から実感してくれた証に間違いない。

なお、ここで附記しておきたいのは、本書のコラム③でも触れられているように、前回の登壇者の長崎城山小学校平和祈念館の山口氏と松尾氏が、今回のシンポジウムではフロアーからご参加くださっており、シンポジウムを終えた数日後に山口氏が、沖縄の恩河氏に御礼を込めてお電話され、それぞ

れの現場での戦争体験の継承や平和学習の重要性についての対話が実現したことである。沖縄市は長崎と広島に各年交代で「平和大使」を送っておられるゆえに、恩河氏もシンポジウムの際に御礼をしたかったとおっしゃり、長崎の方々とご縁を非常に喜んでおられる様子に胸が熱くなる思いであった。恩河氏と伊敷氏から事前に伺っていた「沖縄だけではなく、それぞれの地域が直面してきたはかり知れない戦争と「戦後」の現実があるからこそ、各地域の状況についてお互いが対話し、情報交換をすることで理解を深めつつ、前へ進んでいきたい。」という言葉の重みを改めて噛みしめながら、その尊さに心から感服する思いである。

冷戦体制終結後の 1990 年代以降の日本では、敗戦を起点とする民主主義や平和、経済的繁栄に支えられてきた「長い戦後」意識[19]が次第に相対化されていく中で、東アジアの近隣諸国との間でのアジア太平洋戦争の歴史認識をめぐる和解への取り組みが徐々に進んできた。しかし、2000 年代の東アジアの共同歴史研究の過程で「正義」をめぐる、それぞれの国の間の隔たりが顕在化し、相互の歴史和解を依然として困難なものとしている[20]。それゆえに、東アジアにおける歴史和解を進める上でとりわけ重要となる「謝罪」、「共同歴史研究」、「戦後補償訴訟」、そしてそれに加え、アジア地域の交流に共通する土台を探す必要性が、国際的にもいままさに提起されている[21]。そこで私たちは、国家による加害や被害の歴史に回収しえない、戦中・戦後の一人ひとりの思想的営為を当事者と共に切り拓いてきた現場の「伴走者」の模索とその実相に深い敬意を払いながら、ポスト体験時代の記憶の継承につ

---

[19] Gluck, Carol. 1993 “The Past in the Present” In Andrew Gordon, ed. *Postwar Japan as History*, 64-95. Berkeley: University of California Press.（キャロル・グラック 2001（沢田博訳）「現在のなかの過去」アンドルー・ゴードン編著（中村政則訳）『歴史としての戦後日本』みすず書房）。

[20] Hashimoto, Akiko. 2015 *The Long Defeat: Cultural Trauma, Memory, and Identity in Japan.*（橋本明子 2017（山岡由美訳）『日本の長い戦後—敗戦の記憶・トラウマはどう語り継がれているか』みすず書房。

[21] Shin, Gi-Wook. 2014 “Historical Reconciliation in Northeast Asia: Past Efforts, Future Steps, and the U.S. Role.” In Daniel Sneider, Gi-Wook Shin, Daniel Chirot., eds. *Confronting Memories of World War II: European and Asian Legacies*, 157-185. University of Washington Press.

いて、アジア地域史の視座から拓かれる対話を願いつつ、本拠点形成プロジェクトの終了後も、引き続き次世代とともに、その連帯に向けての可能性に目を向けてきたい。なにゆえに「歴史への真摯さ」は、「社会的・空間的位置を異にする他者の見解に関わることで、過去についての自分の理解をかたちづくり、またつくりなおす、という継続的な対話」であり「内省のプロセス」にあるのだから。

以上、現場の実践者の皆様と共に作り上げてきた私たちのシンポジウムシリーズ 3 巻が、平和を希求する作品として、より多くの方々のお目にとまり、そしてまだ見ぬ未来世代の人たちからも共感を呼び、温められ続けることを、心静かに祈念し続けていきたい。最後に、本書をまとめるにあたり、貴重な写真の数々の掲載を許可くださった田場典哲様、松村久美様、沖縄市史編集担当様、沖縄県公文書館様をはじめ、お世話になった多くの方々に、この場を借りて衷心より感謝申し上げる。

# 目　次

刊行に寄せて「「ポスト体験時代の記憶の継承」――「歴史への真摯さ」から受け継ぐ生活者の思想的営為」……三好恵真子　i

## 第一部　＜話題提供＞
## コザの戦後史の継承が拓いていく未来への展望

第一部に際して
沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」にて学ぶことで埋めていく沖縄の複雑な歴史の上にある現実との「距離」……吉成哲平 3

①それぞれの土地の歴史を背負う現在から浮かび上がる東アジアとの結びつき
記憶の継承の現場で展開される「戦後」を生きる人びとの複雑な経験
……「記憶の継承ラボ」の院生メンバー 9

②現場からのレスポンス「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」
沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」の取り組み
……恩河尚・伊敷勝美（沖縄市史編集担当）29

コラム①
私の写真実践【初級編】――父と母と一緒にコザを歩く……上林梓 59

## 第二部　＜基調報告＞
## 戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為

報告①　生活の中で生まれゆく写真表現から「戦後」を捉え直す
写真家たちが向き合った1970年前後の現実――「写真100年」の歴史から内省した現場での撮影表現の意味……吉成哲平 67

コラム②
「問う」ことで拓かれていく見過ごされた歴史――東京南部・下丸子のある工場の軌跡から見えてくる東アジアの戦争と「戦後」……吉成哲平 109

報告②　国境移動の経験を通じて心身で受けとめていった重層的な歴史
日中「二つの東北」の痛みと向き合いながら暮らす結婚移民の中国人女性たち――「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ結び目となりゆく歴史実践……王石諾 117

コラム③
東アジアをめぐる各地域で営まれ続けてきたひとびとの暮らしの経験とその記憶の「対話」に向けて……吉成哲平 157

ディスカッサント
戦中戦後の経験を伝える一人ひとりの声の「多様性」……小林清治 163

コラム④
集団就職から戦後日本の鉄鋼業発展を支えた技術を生み出し次世代へと道を拓いたある職人の物語――二つの博士号へと結実させたリカレント教育……三好恵真子 169

## 第三部　＜総合討論・応答＞
## アジア地域史から共に考える私たちの暮らし

総合討論
シンポジウムにおける質疑応答の記録……
吉成哲平・恩河尚・小林清治・三好恵真子・王石諾・他参加者 179

レスポンス①
「実践された場所」としての沖縄――おばぁを演じる……上林梓 193

**レスポンス②**
Hip Hop のローカルな時空間、あるいは光の暴力と記憶の系譜学についての随想 中谷碩岐 203

**レスポンス③**
場所記憶と場所依存が促す離島地域活性化の力学――沖縄小浜島の観光体験がもたらす示唆 黄璇 211

**レスポンス④**
「あなたはモンゴル人？それとも中国人？」――内モンゴルのモンゴル人として生きる私の葛藤 朝木日力格 219

**レスポンス⑤**
中国内陸農村の高齢者女性たちの「声なき声」に耳を傾ける意味 張曼青 227

**レスポンス⑥**
阿賀の過去と現在 馬建 237

**レスポンス⑦**
「知りたい」を通して過去とつながる――ポスト体験世代の生活者として 西村花菜 245

**コラム⑤**
その他参加者の声 249

附録①：シンポジウム案内用チラシ 251

附録②：フィールドの写真 253

執筆者紹介 259

あとがき 吉成哲平 265

# 第一部　＜話題提供＞

## コザの戦後史の継承が拓いていく未来への展望

（沖縄市・中央パークアベニュー　2024 年　©Teppei Yoshinari）

第一部に際して

# 沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」にて学ぶことで埋めていく沖縄の複雑な歴史の上にある現実との「距離」

吉成 哲平 *

2023 年 3 月、私は初めて沖縄を訪れる中で、沖縄市コザにある沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」（以下、「ヒストリート」）を訪ねました。コザを訪れるきっかけとなったのは、「写真実践」という独自の方法論からその撮影表現の軌跡を辿り直している写真家の東松照明さん（1930-2012）が、かつて同地をくり返し訪れる中で数々の貴重な写真を残しており、彼が撮り続けた沖縄の歴史的状況について現場での学びを深めたいと考えたからです。この「ヒストリート」への訪問を通じて、沖縄市史編集担当の恩河尚さんと伊敷勝美さんとの大切なご縁を頂いたことが、今回のシンポジウムにご登壇頂くことへ結実していきました。以下では、「ヒストリート」を訪れる中で受け止めてきた事柄を振り返ることで、シンポジウム第一部の導入に代えたいと思います。

「ヒストリート」への訪問当日は、3 月半ばの暖かな陽気のもとで、気持ちの良い青空が広がっていたことを覚えています。前日まで沖縄本島南部の戦跡を歩いていた私は、朝に那覇の国際通りを路線バスで出発し、普天間基地を一望することができる嘉数高台公園（宜野湾市）で途中下車したのちに、再びコザへ向かいました。約 78 年前の沖縄戦で日本軍が堅牢な陣地を構築し、米軍との熾烈な戦闘を繰り広げた嘉数の高台から基地を望むと、その住宅地との近さがまざまざと感じられ、日常の暮らし

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

の中に基地があるという事実をどのように受け止めることが出来るだろうかと、やはり複雑な葛藤を覚えずにはいられませんでした。それは、私自身が「日本本土」の出身であり、更にはこれまで基地と直接的にはほとんど関わりのない環境で暮らしてきたからこそ、一層強い実感として身に迫ってきたように思います。高台にはいくつかの慰霊碑が建立されていましたが、中でも、沖縄戦における朝鮮半島出身の戦没者を慰霊するための「青丘之塔」を目の前にすると、沖縄戦とその後の歴史が東アジアの国境を越えた複雑な出来事として展開されてきたことが改めて胸に刺さります。

そして、沖縄国際大学近くの停留所から再びバスに揺られて、コザへたどり着きました。胡屋十字路から嘉手納基地の第 2 ゲートへと真っすぐに延びる広い「ゲート通り」を歩いていくと、道の両端に軒を連ねる天ぷら屋さんやバー、テーラーなどのカラフルに彩られたお店が目に映り込んできます。それは、沖縄が復帰する 1972 年の春に東松さんが「カラフルな！あまりにもカラフルな！！」（『アサヒカメラ』1972 年 3 月号）という作品の中で、コザで撮影した色彩豊かな写真を載せていたことを彷彿とさせる風景でもありました。それから既に半世紀以上の長い時間が流れているものの、米軍基地から派生した独自の文化をコザが生み出していったまちであることが

**写真 1　沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」と三角看板（右奥）**

眼前の風景からも、実感をもって窺い知ることができます。

この「ゲート通り」にあるのが、「ヒストリート」です。入口の近くには、資料館の名前が書かれた三角形の看板（三角看板）が掲げられており（写真 1)、それは復帰前のコザにあった「A サインバー」などで、縦書きの英語の店名を示すために使われたものと同じ形をしているそうです。館内に入ると、沖縄市の戦後史を伝える当時のモノ資料や写真の数々が展示されており、まちの歴史を切り拓いてきたひとびとのエネルギーが伝わってきます。

この最初の訪問の際に声を掛けて下さったのが、沖縄市史編集担当の伊敷勝美さんでした。詳しくは、これから始まるシンポジウム第一部の対話の記録を是非お読み頂きたいと思いますが、伊敷さんからは、沖縄での地域ごとの戦争・戦後体験の違いや、当時の様々な資料と証言を元にまちの歴史を丁寧に見つめ直していることなど、「沖縄市」という地域史を窓にすることで広がりをもって見えてくる歴史の重みについて教えて頂きました。それは、これまで様々な媒体を通して耳にしてきた「基地の街」という言葉からしばしば想起されがちな固定観念を解きほぐすものであり、とても有り難く受け止めています。そして、その後私たちがたびたび沖縄市を訪れる中で、伊敷さんのご紹介を通じて、同じく沖縄市史編集担当として長年尽力されてきた恩河尚さんとのご縁を頂くことにも繋がっていきました。沖縄市に足を運ぶ様々な方たちとの議論が大好きだと仰って下さる恩河さんからは、沖縄戦を経て、刻々と変化してきた沖縄市の歴史とその動態性をきめ細やかに教えて頂いています。それは、沖縄市にまつわる「過去」のそれぞれの出来事が、「現在」という時間へとどのように繋がっているのかを丁寧に見つめ直していく大切さでもあるのではないかと受け止めています。

先に述べたように、東松さんの足跡を辿り直しながら、日本本土と沖縄との間の複雑で、困難な歴史についての学びを深めていくにつれて、私は実際に沖縄の戦跡や戦後史の現場へと足を運ぶことに、一層の緊張感を抱えていました[1]。なぜなら、歴史学者のテッサ・モーリス＝スズキ氏が「わたしたちは過去の出来事に「連累（インプリケーション）」して

[1] 吉成哲平　2024「沖縄の風景の中に生きている沖縄戦の記憶を受け止めて」、三好恵真子・吉成哲平 編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18、39-43 頁。

写真 2　恩河尚さん（沖縄市史編集担当）

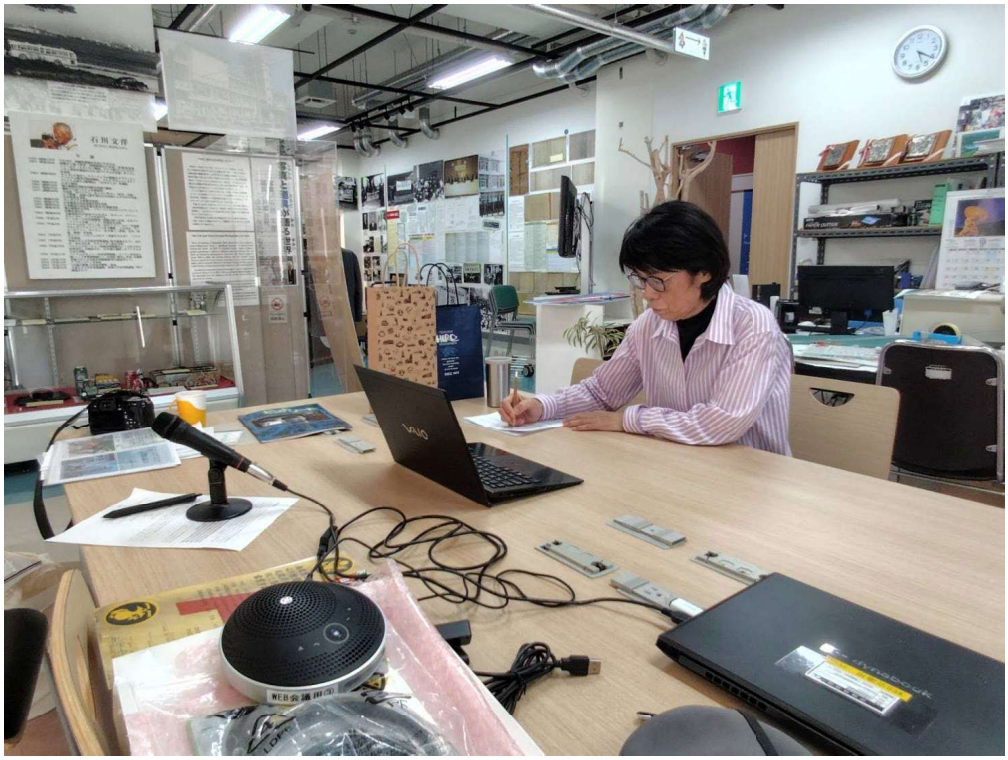


写真 3　伊敷勝美さん（沖縄市史編集担当）

いる。過去によって創られた制度、信念、組織のなかに生きているからである。しかし同時に過去がわたしたちのなかに生きているからでもある」（モーリス＝スズキ 2004=2014: 309）と指摘した通り、沖縄の地が経験してきたこと、そしていま直面している現実に対して、いかに向き合うことができるのかを鋭く問われているように感じるからです。一方で、私たちが「ヒストリート」で学んでいく沖縄市の戦後史からは、「支配」や「差別」、「抵抗」など、ある一つの見方だけでは見過ごしてしまうかもしれない人びとの暮らしの中の模索の重みであり、ひいては、それぞれの土地で「戦後」を生き抜いてきた人びとの経験とその記憶を「対話」させていく重要性について貴重な示唆を頂いています。

このように、「ヒストリート」を含む沖縄市で学ぶ時間を少しずつ積み重ねていく中で私が内省しているのは、軽々しく言うことはできませんが、「日本本土」と「沖縄」という「壁」をつくって、どこかで構えていたのは自分自身であったのかもしれないということです。もちろん、沖縄が経てきた過去とその上にある現在について私の知らないことは数多くあり、その「距離」は常に忘れてはならないものであると思います。しかし、沖縄市に来て、様々な角度から沖縄市について考えてほしいという恩河さんや伊敷さんのメッセージを有り難く受け止めつつ、対話を重ねていく中で、沖縄に対する過度な構えが逆にその「理解」を遠ざけてしまうだけでなく、沖縄の歴史と繋がっていく回路をも自ら閉ざしてしまう危険性があるのではないかと痛感しています。その点で、本シンポジウムを機に、前回（2023 年）のシンポジウムでご登壇頂いた長崎の実践家の方々と、沖縄市の恩河さんや伊敷さんとの新たな対話の輪も広がっていったことは、私たちにとって非常に嬉しい出来事でした。このことについては、本書の第二部に掲載しているコラム③で改めて述べたいと思います。

今回のシンポジウムへの登壇をお引き受け下さった恩河尚さんと伊敷勝美さん、そして、いつもお力添えを頂いている沖縄市史編集担当の皆様に深謝申し上げます。当日の熱量のこもったシンポジウム第一部の対話の記録を読んで下さった読者の方々が、沖縄市へ、そして沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」へ是非、足を運んでくださることを心から願っています。

**引用参照文献**

テッサ・モーリス＝スズキ　2014『過去は死なない―メディア・記憶・歴史』岩波書店。

① それぞれの土地の歴史を背負う現在から浮かび上がる東アジアとの結びつき

# 記憶の継承の現場で展開される「戦後」を生きる人びとの複雑な経験

「記憶の継承ラボ」の院生メンバー*

**吉 成**：それでは、第一部を始めたいと思います。モデレーターは大阪大学人間科学研究科博士後期課程の吉成が務めます。よろしくお願いいたします。先ほど三好先生からお話がありましたように、これまで私たちは、戦争・戦後体験や記憶の継承に向けて尽力する現場の方々から学ぶ機会を頂いてきました。とりわけ沖縄を訪れ、沖縄戦とその後の時代を生きてきた人びとの暮らしについて学ぶ中で私たちを温かく迎えて下さったのが、沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」（写真 1）の恩河尚さんと伊敷勝美さんです。

「ヒストリート」は、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」と形容される沖縄市の戦後史を見つめ直すことを目的として、沖縄戦の降伏調印式から 60 年の節目となる 2005 年 9 月 7 日にコザ・パルミラ通りに開室した「沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート」と、2009 年 9 月 7 日に開室した「ヒストリートⅡ」を移転・拡充し、2018 年 8 月 8 日に再オープンした資料館であり、沖縄市の内外から多くの人が訪れています。館内には、実物大の米軍基地フ

* 大阪大学人間科学研究科

本稿は、シンポジウムの第一部①における「それぞれの土地の歴史を背負う現在から浮かび上がる東アジアとの結びつき」の録画の文字起こしを元に構成したものである。

**写真 1　沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」**

**（2024 年 10 月吉成撮影）**

**写真 2　「ヒストリート」の館内**

**（2024 年 10 月吉成撮影）**

ェンスや再現された A サインバー、街並みのジオラマなどを備えつつ、戦後の沖縄市のまちの様子を伝える貴重な写真資料やモノ資料を展示しています[1]（写真 2）。

恩河さんと伊敷さんのお二人は、沖縄市の市史編集担当として長年にわたり沖縄市の歴史を伝え継ぐことに尽力されています。本日は恩河さんにお越し頂くと共に、伊敷さんについてはご都合のため事前収録のメッセージを頂いています。恩河さん、今日はお忙しい中貴重なお話を伺う機会を下さり、本当に有り難うございます。

**恩　河**：よろしくお願いいたします。

**吉　成**：恩河さんは、大学では歴史学を専攻され、とりわけ江戸時代の日琉史について学ばれたご経験をお持ちであり、現在は沖縄市史編集担当として、沖縄市の戦争・戦後体験に関する証言の聞き取りと記録の取り組みを、長年伊敷さんと共に続けてこられていらっしゃいます。まずは、恩河さんより自己紹介とシンポジウムへのメッセージをお願いいたします。

**恩　河**：沖縄市史の恩河と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。こういった機会にお招き頂き、本当に感謝申し上げます。長丁場になるかと思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

**吉　成**：恩河さん、どうもありがとうございます。そして、伊敷さんにつきましては、今月（2024 年 10 月）に沖縄市の「ヒストリート」で恩河さんと伊敷さんと打ち合わせを一緒にさせて頂いた際に、事前のメッセージを頂いておりますので、ここで動画のほうを流させて頂きます。

**伊　敷**：よろしくお願いいたします。皆さん、初めまして。沖縄市役所総務

[1] 沖縄市戦後資料デジタルアーカイブ「Web ヒストリート」も是非ご覧下さい。https://www.histreet.okinawa.jp/histreet/FAA10/init#gsc.tab=0

部総務課市史編集担当の伊敷といいます。今回、シンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承」への参加に声をかけて頂き、吉成さん、そして三好先生、それから研究室の皆さまには感謝いたしております。来年、終戦から 80 年になります。私たちが色んな体験を聞く中で、戦争体験を語る方たちも少なりました。私たちが、その人たちの戦後の記憶も然りですが、その記憶と、それからそれを記録する、そして、それをどう継承していくのかということを考える、大事な大事な時期に来ていると思います。その時期に、このシンポジウムを開催することは、大変意義のあることだと思っております。今日は、私はビデオでの参加となりました。どうぞよろしくお願いいたします。

**吉 成**：私たちが「ヒストリート」とご縁を頂くきっかけをつくって下さった伊敷さんにも、このように動画でご参加頂けることを大変有り難く受け止めています。ここからは、恩河さんと伊敷さんからお話を伺うにあたり、まずは「記憶の継承の現場で展開される「戦後」を生きる人びとの複雑な経験」として、私たち院生がこれまで記憶の継承にまつわるそれぞれのフィールドで受け止めてきた事柄について、現地で撮影した写真をもとに共有させて頂きたいと思います。それでは、担当のみなさん、よろしくお願いします。

**姜**：みなさま、こんにちは。「記憶の継承ラボ」の院生メンバー、環境行動学研究室 M2 の姜星羽と申します。私は、中国東北部出身の留学生です。今日は、昨年のシンポジウム[2]でお世話になった長崎の「城山小学校平和祈念館」を訪れるために、今年 8 月に行ったフィールドワークについてご報告したいと思います。今回、「記憶の継承ラボ」の吉成さんのリードにより、私と同じく初めて訪れる留学生であるチョモさんと上官さんも一緒に長崎を

---

[2] 昨年度のシンポジウムは、ブックレットにまとめており、電子版は OUKA からご覧頂けます。
『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（「21 世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ②）』OUFC Booklet Vol.18 (2024)
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/94661/oufc_18.pdf

**写真 3　長崎・爆心地公園での山口さんの案内（2024 年 8 月吉成撮影）**

訪問しました[3]。

この写真（写真 3）は、吉成さんが撮影した、私たちの長崎でのフィールドワークの様子です。去年のシンポジウムでお話を頂いた平和案内人である山口さんと松尾さんから被爆体験の継承と平和への祈りについて現地でも貴重なお話を伺いました。被爆から 79 年を迎え、長崎での 3 日間のフィールドワークでは、私たち 4 人は長崎の原爆に関連する歴史的な場所を訪れる機会を頂きました。特に、城山小学校平和祈念館では、山口さんと松尾さんのご紹介により、原爆と長崎について深く学ぶことができました。本日のシンポジウムでは城山小学校平和祈念館の方々もご参加くださっているので、ここで心から感謝申し上げたいと思います。

城山国民学校（現在の長崎市立城山小学校）は、爆心地から 500m の距離にあり、最も爆心地に近い学校でした。被爆の当時、多くの教職員が被害を受け、周辺に住んでいる生徒たちもたくさん犠牲になりました。この写真（写

[3] 「【活動報告】「記憶の継承ラボ」の院生メンバーによる長崎でのフィールドワーク報告」https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/2024/08/27/news-11/

**写真 4　長崎城山小学校と城山小学校平和祈念館（2024 年 8 月姜撮影）**

**写真 5　城山小学校・少年平和像（2024 年 8 月チョモ撮影）**

真 4）は、城山小学校とその遺跡が一緒に写っている様子です。左側は現在の城山小学校の校舎です。右側は被爆当時の校舎、現在の平和祈念館です。この二つの建物が過去と現在の象徴と理解されると、その間のつながりはなんでしょうか。そのつながりは、少年平和像に対する「お辞儀」にも現れているのではないかと分かりました。

この写真（写真 5）は、チョモさんが撮影した写真です。真ん中に立っているのは少年平和像です。城山小学校の生徒や教職員は、登下校時に少年平和像に向かってお辞儀をします。最初、私は、このお辞儀が小学生たちにとって負担ではないかと感じましたが、城山小学校での 2 日間の見学と祈念式に参加する中で、このお辞儀が日常の中で自然に心からの行動になっていることがわかりました。日々の中でのこのお辞儀が、過去と現在をつなぐ橋渡しになっているように感じました。私も、留学生として、自分の故郷の戦争記憶やそれがもたらした痛みを、どのように受け止めるべきかについて新たな認識を得たようにも思うのです。

**写真 6　長崎の街並み**
**（2024 年 8 月姜撮影）**

そして、今回のフィールドワークを通じて、より立体的な長崎の姿を感じることができました。この写真（写真 6）は最終日に長崎大学への訪問の後で撮ったものです。みんなで 3 日間の被爆に関する見学経験を整理した帰り道で、長崎の日常的な街の景色を見ながら改めて気が付きました。歴史を記録している様々な場所では、いずれも戦争に対する反省や、平和に対する願いが通底にあります。そして、それらは、今、私が見ている普通の、日常の瞬間の景色の中に込められていることが、一層重要で貴重ではないかと、

その時強く感じました。

最後に、長崎での 3 日間で現地の実践家たちから多くのことを学び、心から感謝しています。私は中国東北部におけるフィールドワークを元にした研究をしているので、現地でのこうした深い学びを、研究にも活かしていきたいです。

**吉 成**：姜さん、どうもありがとうございました。それでは引き続き、中国東北部と福島でのフィールドワークをしている王さんから、よろしくお願いします。

**王**：博士後期の王石諾です。これまで私は、「満洲」の歴史の文脈にある中国東北部出身で、日本東北地方の福島県に結婚移住した、中国人女性たちのライフストーリーについて研究を進めてきました。昨年のシンポジウムでは、60 年代、70 年代生まれで「満洲」の植民地時期を直接経験していない女性たちが、福島へ移住し、日常の中で、身近に暮らしている満洲経験者との出会いにより、改めて幼い頃から中国東北部で無意識に体感してきた「満洲」の痕跡が蘇ってくることについて報告しました[4]。こうした女性たちの多くは中国東北の土地柄による人脈ネットワークを頼りながら、日本の東北地方に結婚移住しており、日中「二つの東北」の繋がりがいまだ脈々と続いているのです。

昨年の報告でも紹介した、仮名ですが霞さんという方がいるのですが、今年の夏に、霞さんが一時帰国する際に、私も同行して、初めて中国東北部を訪れました。先ほど発表した姜さんの生まれ育った地域でもあります。霞さんがこれまで話してくれていた故郷の町を、一緒に歩く機会を頂きました。

後ほどの第二部でも報告させて頂きますが、長らく調査に協力してくださ

---

[4] 王石諾　2024「結婚移民として日中「二つの東北」を生きる中国人女性のライフストーリー――対話的インタビューから見えてくる戦争認識とその継承」、三好恵真子・吉成哲平 編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18、45-75 頁。 https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/94661/

っている女性たちは、新中国建国により作られた「単位社会」が、1978 年からの市場経済体制転換により崩壊していく過程で、中国東北部から 90 年代に福島に結婚移住し、その後も東日本大震災を含め、様々な厳しい経験があったのですが、最終的には福島に留まり続けることを選択しました。霞さんもその中の一人です。詳しくは第二部で報告するように、こうした故郷は、彼女たちにとって再び戻って暮らすことが難しい状況になっているのですが、時々帰省する機会を作っています。

霞さんの故郷は、中国東北部にある炭鉱の町で、60 年代・70 年代の彼女が幼い頃、中国全体の生活がまだ厳しかったのですが、「満洲」時代から発展した石炭産業が、戦後も町の基盤となったので、この豊かな町で、彼女は育ちました。ただ、その頃、彼女自身は「いつかこの町を出たい」とずっと思っていたそうです。なぜなら、炭鉱労働がどれほど厳しいものかを、小さい頃から見聞きしていたからでした。この写真（写真 7）に写っているように、今では静かに見える町の露天掘り炭鉱の周りには、かつて労働者の仮設住宅が立ち並び、ばい煙の中で石炭を運ぶ機関車が走っていたそうです。厳しい労働環境の中で、命を落とす人も多く、霞さんの同級生にも、父親を炭

**写真 7　中国東北部の霞さんの故郷・衰退中の露天掘炭鉱（2024 年 8 月王撮影）**

**写真 8　霞さんの故郷の町・鉄道沿線に並んだ空き家（2024 年 8 月王撮影）**

**写真 9　霞さんの故郷の町・鉄道と機関車（2024 年 8 月王撮影）**

鉱の事故で亡くした子がたくさんいたと話してくれました。「炭鉱で働く人たちは、みんなお酒が大好きだった。だって、明日生きていられるか分からないから」。彼女のこの言葉から、炭鉱町の繁栄の裏で、多くの命や家族の切ない思いがあったと、改めて感じられました。

しかし、80 年代から産業構造の転換に伴い、町の炭鉱は次々と閉鎖され、人口の高齢化も進んでいます（写真 8・9）。かつて賑やかだった町も、今では錆びついた鉄道や空き家が並ぶ風景に変わってしまいました。こうした故郷の町を見つめながら、「心が痛む…」と呟いた霞さんの姿が、脳裏に残ります。

一方で、霞さんの移住先である日本東北の町も、かつて炭鉱で栄えていました（写真 10）。また炭鉱閉鎖後は、温泉リゾートの開発により、観光地への転換を模索していました。その仕組みを学びつつも、彼女は離れていても常に故郷を再生する方法を考えているのです。

**写真 10　日本東北地方の霞さんの移住先・元炭鉱町（2024 年 2 月王撮影）**

今回の旅を通じて、教科書等の歴史の勉強では見えてこない、その土地で歴史を生きる人々の姿が心に残っています。そして一緒に足を運ぶことにより、改めて霞さんの「故郷」への思いについても、少しずつ理解が深まってきました。それは、霞さんにとって、かつて誇りに思いながらも離れたかった町ですが、離れたからこそ、かえって後ろめたさを感じつつ、何とか「元気を取りもどさせたい」町でもあるのです。後ほどの第二部で詳しく報告しますが、こうした変わりゆく故郷で失われた大切なものを、彼女は震災後の福島で改めて見つけていくことになるのです。こうした日中「二つの東北」を生きる深い意味について、第二部でお伝えしますので、ぜひ最後までお聞きいただければ嬉しいです。

**吉 成**：王さん、ありがとうございました。それでは、同じく中国東北部で激動する社会転換期における環境 NGO の模索と実践について見つめている冷さんから、報告のほうをよろしくお願いします。

**冷**：みなさん、こんにちは。博士後期の冷昕媛です。先ほどの王さんの発表から、中国東北部が激しい社会転換に翻弄された実情が少し伺い知れたと思います。私は、去年のシンポジウムにて、社会転換期に同じ中国東北部で活動してきた環境 NGO リーダーである万さんの奮闘について報告しました[5]。ここでは、私がフィールドワークを通じて、現場の砂漠化の深刻さの中で、万さんが地域社会との関係を徐々に深めていった奮闘から、私の感じ取ったことをお伝えします。

まず、この写真（写真 11）は、去年 4 月に初めて現地を訪問した時に撮影した村の一角です。両側にはトウモロコシの畑が広がり、中央には羊の群れが見えます。この場所は、万さんの NGO がある近くの村の土地で、一見

[5] 冷昕媛　2024「社会転換期における環境ガバナンスへの参与――中国環境 NGO リーダーの奮闘記から読み解かれる内在的自律性とその啓示」、三好恵真子・吉成哲平 編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18、85-106 頁。https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/94661/

すると普通の村の風景に見えますが、次の写真（写真 12・13）のように、砂漠化の取り組みが不足している隣の村にいくと、一目瞭然、万さんが地域で取り組んできた砂漠化防止の成果が分かりました。この日は、風が強く、この写真は車輪が砂地に嵌まった時に撮ったものですが、一面に広がった砂

**写真 11　中国・吉林省通榆県の村の一角　（2023 年 4 月冷撮影）**

**写真 12（左）　車窓から見た砂漠化した土地（2023 年 4 月冷撮影）**

**写真 13（右）　砂に侵食された耕地（2023 年 4 月冷撮影）**

地と砂に侵食された耕地です。万さんによれば、さきほどの、今はトウモロコシ畑のある土地も、当初はこうした風景であり、それに衝撃を受け、活動し始めたそうです。

そこで、私も万さんの当時の取り組みを体験したいと思い、この写真（写真 14・15）のように倒れたフェンスの修復作業を手伝いました。万さんはこの地に 2000 年に来てからの最初の 10 年間くらいは、毎日フェンスに沿って約 100 ヘクタールの草原を巡視し、フェンスの損傷や、外部からの侵入者がいないかを確認したそうです。実際に体験してみると、その大変さを肌身で感じ、また砂地のような場所を歩くと、足元が崩れやすく、一歩一歩が非常に困難な状況でした。さらに、草の中のトゲに足が刺されて、痒みと痛みに苦しみながら歩いていると、気がつけば靴底に穴が開いてしまいました。

**写真 14（左）　倒れたフェンス（2023 年 9 月冷撮影）**
**写真 15（右）　倒れたフェンスを修理する（2023 年 9 月冷撮影）**

万さんが活動してきた土地の外では、当時の住民たちは耕地拡大に熱心なあまり、結果的に砂漠化を助長していることがわかりました。また活動を続ける中で、地域住民は国営牧場の職員として生活が保障されていた一方、市場経済化の政策転換により、経済的な負担が大きくなってきたことに気が付いたそうです。そこで、万さんは砂漠化を技術で防止するのみならず、住民のニーズに応じつつ、新たな栽培技術を導入したり、村民を支援するボラン

ティア活動も始めました。こうして長年の万さんの奮闘する姿が地域の若者たちにも確実に影響を与え、受け継がれるようになりました（写真 16）。特に私が調査で赴いた間も、地元の若者たちは、以前万さんが担っていたフェンスの巡回と修復、また祝日には高齢者を慰労するなど、自発的に行っていました。また、万氏が住民たちに「ちゃんと食事をして、体に気をつけて、何かあったらすぐに連絡して」と挨拶する姿に感動しました。こうした日常的なやり取りから、地域の人びとが抱く万さんへの親密さや感謝の気持ちが伝わってきました。

以上のことから、万さんの長期にわたる砂漠化防止の一連の活動は、初期の忍耐強いパトロール、住民を理解し寄り添う努力、そして次世代への教育と愛情が、地域を巻き込んで環境改善していく鍵になると確信しました。

**写真 16　若者がリードする環境 NGO の活動の様子（2023 年 9 月冷撮影）**

**吉　成**：冷さん、ありがとうございました。冷さんは大きな社会の転換の中で環境 NGO の現場の実践家の方の模索について報告してくれたと思います。最後に私のほうから、長崎と沖縄でフィールドワークをする中で受け止めたことについてお話をさせて頂ければと思います。

第二部で詳しくお話するように、これまで私は、「戦後写真の巨人」とも称され、被爆後の長崎や復帰に揺れる沖縄を撮り続けた写真家である東松照明の足跡を辿り直してきました。よく知られるように、東松は 1969 年に初めて訪問した復帰前の沖縄で、米軍統治下を生きる人びとの暮らしの現実を知った衝撃から、晩年に沖縄で亡くなるまで数十年にわたり同地を撮り続けていきました[6]。

東松の足跡を辿るために、私も幾度か沖縄を訪れて「まち歩き」をしていますが、日本本土と沖縄との間の数世紀にわたる非対称的な関係性の歴史を考えると、正直なところ沖縄へ足を運ぶことに、少しためらいの気持ちもありました。今日の発表では、そうした葛藤を抱えながらも訪れる中で受け止めてきた沖縄戦にまつわる記憶についてお伝えしたいと思います。

最初に紹介するのは、今年の 6 月に那覇で撮影した写真（写真 17・18）です。ここは、かつて「シュガーローフの丘」と呼ばれ、79 年前の沖縄戦で日米両軍により激しい戦闘が行われたのちに首里が陥落し、南部の戦いへと続いていったことで知られています。その一方で、商業ビルや高層マンションが立ち並び、近くのモノレールの駅から通勤通学の人びとの歩く現在の風景を前にして、80 年近く前の沖縄戦の光景をすぐに想像することに難しさを感じていました。とりわけ私の心から離れなかったのは、本土決戦を延ばすための持久戦を通じて多くの人びとが亡くなっていった戦争を、どこかで引き返すことは出来なかったのだろうかというもどかしさでした。そして

---

[6] 復帰前後の東松照明の足跡に関しては、過去の 2 回のシンポジウムでも発表しています。詳細は以下の論考もご覧下さい。

吉成哲平　2023「写真家 東松照明が伝えようとした復帰前の沖縄の現実――平和憲法を持つ「祖国」の退廃への葛藤と責任」、三好恵真子・林礼釗・吉成哲平編『この 50 年の歩みを共に考える―それぞれの出来事をいま振り返る意味』OUFC Booklet Vol.17、3-42 頁。https://hdl.handle.net/11094/90714

吉成哲平　2024「「私性」から「公性」へと拓かれてゆく「写真実践」――写真家 東松照明が直面し埋めようとした沖縄の現実との距離」、三好恵真子・吉成哲平 編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18、3-38 頁。https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/94661/

**写真 17　沖縄「慶良間チージ（シュガーローフ）」（2024 年 6 月吉成撮影）**

**写真 18　「シュガーローフの丘」から展望する那覇市街（2024 年 6 月吉成撮影）**

**写真 19　「那覇市第一牧志公設市場」（2023 年 3 月吉成撮影）**

この場所は、沖縄戦後に米軍の住宅地となったあと 1980 年代に返還され、那覇新都心として再開発が進められた場所であることも忘れてはならないと感じます。

そうして那覇の街を歩いていると、沖縄の内外から訪れる沢山の人びとに出会いますし、そんな賑やかな街の様子に魅了されることも確かです（写真 19）。しかしながら、79 年前に、同じ場所に広がっていた筆舌に尽くし難い光景を思うと、それから人びとはどんな風に暮らしを営み続けてきたのかという過去から現在への連続性について、いつも考えさせられてしまいます。

そして、本日これからお話頂く沖縄市の戦後史と深く関わる写真として紹介したいのは、昨年 3 月に私が初めてコザのまちを訪れた際に撮った一枚（写真 20）です。写真に写るのは、嘉手納基地に通じている「ゲート通り」です。先ほどご紹介させて頂いたヒストリートの伊敷さんにコザの戦後史を教えて頂きながら私が思い起こしていたのは、約半世紀前にベトナム戦争下で賑わう当時のコザのまちに暮らしていた、様々な人びとの人生のことについてでした。そこには、明日はベトナムの戦場で命を落とすかもしれない兵

**写真 20　コザ「嘉手納基地へ続くゲート通り」（2023 年 3 月吉成撮影）**

士たちがいて、基地の中で働いて来た沖縄の人びとがおり、また離島や県外から移り住んできた人びともいたことなどを思うと、一人ひとりが暮らしの中で経験してきた複雑なコザのまちの歴史があることが、私にも少しだけ垣間見えるような思いがしました。この点については、是非次のセッションで恩河さんと伊敷さんから詳しくお話を伺えればと思います。

このように現場に身を置くと、やはり沖縄の複雑な「戦後」の現実との間に距離を感じます。その一方で、それぞれの場所で沖縄戦後の歴史を伝え続けてきた現場の方々から、目の前の風景の中に内包されている沖縄戦後の記憶を少しずつ学ばせて頂いていることをとても有り難く思っています。

以上が、私たちそれぞれが現場で受け取った「戦後」の複雑な現実となります。

② 現場からのレスポンス「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」

# 沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」の取り組み

吉成 哲平(モデレーター)* 恩河 尚*, 伊敷 勝美*

**吉 成**：ここからは現場からのレスポンスとして、沖縄市の市史編集に長年尽力されてきた恩河さんと伊敷さんから沖縄市の戦後史を見つめ直し、そして継承していくことに込める思いについて伺っていきたいと思います。それでは、恩河さんどうぞよろしくお願いいたします。まず、恩河さんからは沖縄市コザのまちの成り立ちの概要について少しお話を頂いた後に、私の方からこれまでコザのまちを訪れて、恩河さん、そして伊敷さんから沢山貴重なお話を伺う中で特に印象に残ったことについて、対話形式で質問をさせて頂きながら、さらに詳しくお話を伺っていきたいと思っています。それではまず、沖縄市のコザのまちの成り立ちについて、恩河さんの方からよろしくお願いいたします。

**恩 河**：はい、恩河です。よろしくお願いいたします。先ほど来、「沖縄市」

---

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程
* 沖縄市役所総務部総務課・市史編集担当
* 沖縄市役所総務部総務課・市史編集担当

本稿は、シンポジウムの第一部②における現場からのレスポンス「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」の録画の文字起こしを元に構成したものである。

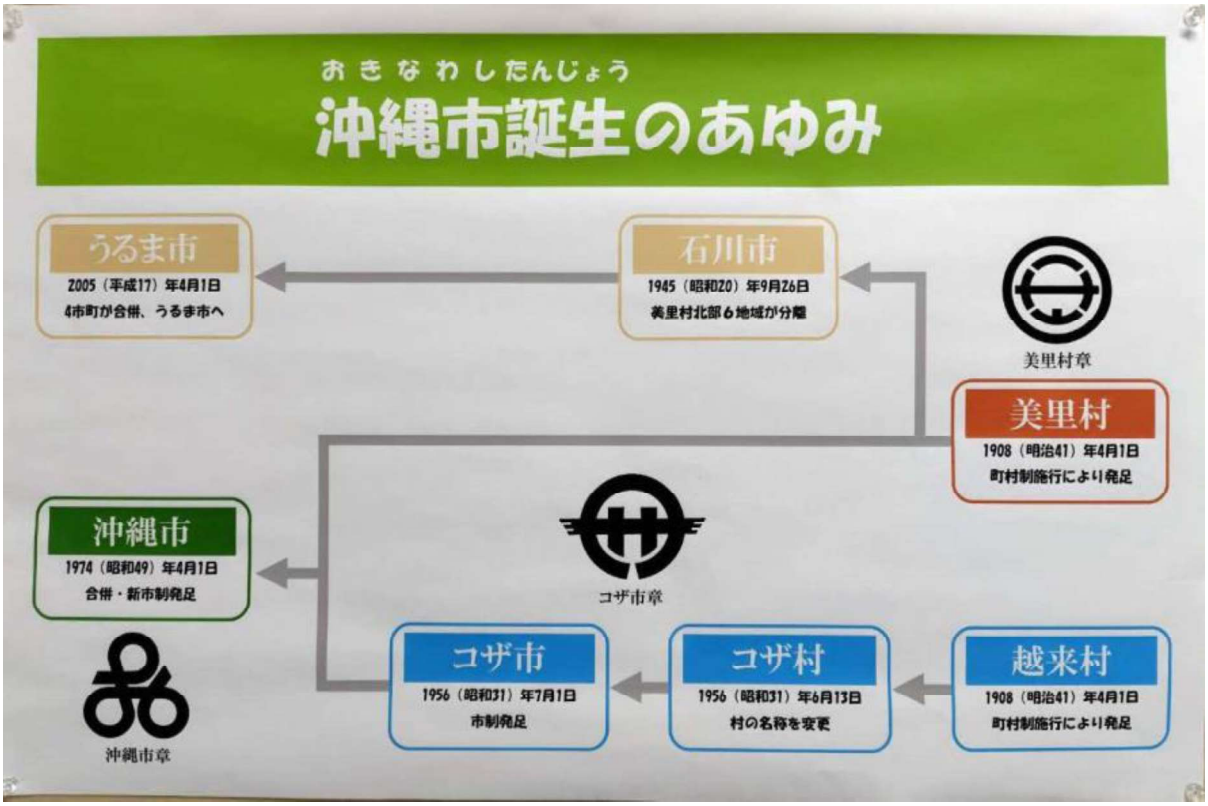



**写真 1　沖縄市誕生のあゆみ**

や「コザ」という言葉が出てきて、もしかしたら皆さん方がちょっと混乱なさっているかもしれませんので、わがまちの成り立ちについて若干交通整理しておきましょう。

写真 1 のほぼ真ん中の右側をご覧になってください。赤い色で「美里村」とあります。この美里村とコザ市が合併して「沖縄市」ができます。美里村はそれほど大きな変動はないのですが、下の方に書いてありますコザの方は、当初は「越来（ごえく）」と呼んでいました。最初は「越来村（ごえくそん）」といいました。それが「コザ村（そん）」という、これは 2 週間ぐらいの短期の自治体だったのですが、コザが発展していくに従って、それが「コザ市」まで昇格しました。そのコザ市と美里村が合併して、沖縄市が誕生したということです。

ですから、我々はいま「沖縄市史」と言っていますけれども、「沖縄市」というのは合併した後の名前なのです。それ以前は、「美里村」と「コザ市」というふうに言っていました。それでは、以上のことを頭に入れながら、コ

ザ市が越来村から発展して、どうやってできたのかを少しお話していきたいと思います。

美里村と越来村は、戦前はほとんど―沖縄全体がそうだと思うのですが―純農村でした。それが戦後に、特に越来村の方が一変します。そのきっかけは、僕は二つの台風だったというふうに思っています。少しだけ（二つの台風の）年代を覚えて頂きたいのですが、「1948 年」と「1949 年」です。この年に「リビー」と「グロリア」という、とても大きな台風が沖縄を襲いました。沖縄の人間は台風に強かったはずなのですが、特に 49 年のグロリア台風は、戦後最大級の台風と言われていまして、例えば、瞬間最大風速 64.5m を記録しているそうです。それから、台風に強いはずの沖縄の人間の死傷者が約 300 名、家屋の半壊全壊合わせると 3 万戸という大変な被害を沖縄にもたらしました。そして台風ですから、米軍にとっても大変な被害を受けたのです。米軍はその能力の過半数をこのグロリア台風とリビー台風で失ったと言われており、色々ありましたが、最終的にはアメリカの連邦議会は、どんな台風が来ても大丈夫なように、5800 万ドルという莫大な基地建設予算を承認します。

その背景には何があったのかというと、ほぼ同じ年の 1948 年に北朝鮮が独立しました。そして 1949 年に中華人民共和国、中国が独立します。さらに、1950 年からは朝鮮戦争が始まるという、非常に東アジアが緊張した状況にあり、米国議会は 5800 万ドルの―算数が弱くてよくわからないんですけども、当時 1 ドルが 360 円の時代です。後で計算なさってみてください―莫大な基地建設予算が下りたのです。そのときに、アメリカ軍の論理、考え方としては、単に基地を再現、再興するというだけではなくて、沖縄と日本本土の経済復興にもこの予算は役立てますよという論理で、どうも連邦議会を説得したみたいです。実際に、この 5800 万ドルの予算が投下されたのは 1950 会計年度ですが、そのときに本土から 21 社の建設会社が沖縄の基地建設の入札に参加します。具体的に言いますと、「間組」、「清水建設」、「熊谷組」など、全部で 21 社が参加しました。少し興味があって、それぞれの建設会社の社史をちょっと調べてみたら、例えば大林組の社史ではこんなふ

うに書かれていました。（うる覚えなんですけれども）わが国の建築業界が近代的な脱皮を遂げるにあたって、沖縄工事、基地建設工事、これの果たした役割はとっても大きいと。わが社の発展、それも基地建設工事のおかげだというようなことが、僕が調べた範囲でいくつかの建設会社の社史に書いてあるんです。

このように、当時アメリカの最新の建設機械とか建築のノウハウなどを本土に持って帰って、大手ゼネコンまで発達していくんですね。それで、日本の高度経済成長の支えというか、寄与していくというような、そういう流れがあるようです。そうしますと、大体お分かりだと思うんですが、1950 会計年度と言えば終戦直後になりますね。そうすると沖縄というのは、ほとんど仕事がないという状況の時に、そこで米軍相手の商売をしようとか、色んなことで特にわがコザ市に沢山の人々がやってきます。具体的に言いますと、沖縄の中で南北大東村を除けば、全市町村からコザにやって来ているんです。ちなみに私たちのまち、沖縄市は人口 14 万ぐらいを数えるのですが、そのうちの 3 分の 2 もしくは 7 割弱ぐらいは、他市町村に本籍地を持つ人たちで構成されています。それに加えて、奄美大島からも沢山の人びとがコザの方にやって来て、色んな米軍相手の商売に携わっていく。そういう面があります。

それからもう一つ、人口の動き、人びとの動きを見てみますと―ここからは私が勝手にそう解釈しているだけですので、「ホンマでっか！？」みたいな感じで聞いて頂ければいいと思いますけども―ご存知かもしれませんが、沖縄は、広島とか熊本とか、あの辺りと一緒で「移民県」と言われているのです。戦前に相当数の移民者が海外、それから日本本土にも移っているんです。それが、沖縄戦が終わった段階で相当数、引き揚げが来るんですね。明治学院大学の土井智義先生の論文[1]を読んでみると、約 18 万人の引き揚げが（日本本土から）あったようです。

---

[1] 土井智義　2018「沖縄県公文書館が所蔵する引揚げ関係資料の紹介―「日本」から「琉球列島」への引揚げ計画を中心に―」『沖縄県公文書館研究紀要』20、39-54 頁。

そういった状況の時に、当時の沖縄民政府（現在の沖縄県の前身）の知事は志喜屋孝信（1884-1955）さんと仰るんですが、彼が 1946 年 7 月ぐらいの議会の日誌にこんなことを書かれているのです。「日本から同胞が 14 万引き揚げてくるのはとても嬉しい」と。嬉しいと同時に、一方で「住居や食事をどうすればいいんだろう」というようなことを記録に残されています。そういった感じで、うちの沖縄市でいうと、「本字」という江戸時代からずっとある集落 2 ヶ所と、それから、「屋取」ってお聞きになったことがありますでしょうか。首里や那覇辺りから、向こうで食えないで都落ちして、地域に降りてきて集落をつくる。その集落のことを「屋取」というんですけども、沖縄市は 2 つの大きい集落とそれから 10 箇所の屋取集落、これだけの集落が今、嘉手納基地内に収容されているんですね。そんな感じで、集落は基地に取られて戻れない。それから、大切な生活手段である田畑もないという状況、これが沖縄戦の歴史的な意義かなというふうに思っていますが、そういう状況の時に日本本土や海外から 18 万もの人びとが押し寄せてくるんです。

そうすると、これをどうするかというと、先ほどの志喜屋知事の話でもこんなことを言っているんですね。「このままでは大変なことになるので八重山の方に人びとを移そう」と。もう既に、1946 年に志喜屋さんはそういうことを考えていまして、結局どういうことが起きるかというと、沖縄戦と引き揚げの歴史的な意義として—僕は「三態」と言っていますけど—三つの民族移動、人口移動があったんじゃないかと。一つは、南米のボリビアです。そこに戦後、相当数の人たちが沖縄から移っています。それから今一つは、「裏石垣」と言うんですけれど、八重山の北側ですね。マラリア地帯って言われていますけど、そこの方に沖縄本島とか、宮古から沢山の人びとが移っている。もう一つは—もうお分かりだと思いますが—「基地の街」、コザに人びとが来る。そういう感じで、急激に米軍の基地建設工事を頼りにというか、仕事を求めて、米軍相手の飲み屋とか軍作業、基地内の作業等々もあり、それから質屋さん（写真 3）とか、米軍人・軍属相手の商売をしに沢山の人びとがやってきて急激に都市化していったというのが、コザ市だということです。

写真 2　「夜のセンター通り」
（田場典哲撮影、1962 年。所蔵：沖縄市総務課 市史編集担当）

写真 3　「質屋」（1963 年、センター通り、沖縄県公文書館所蔵）

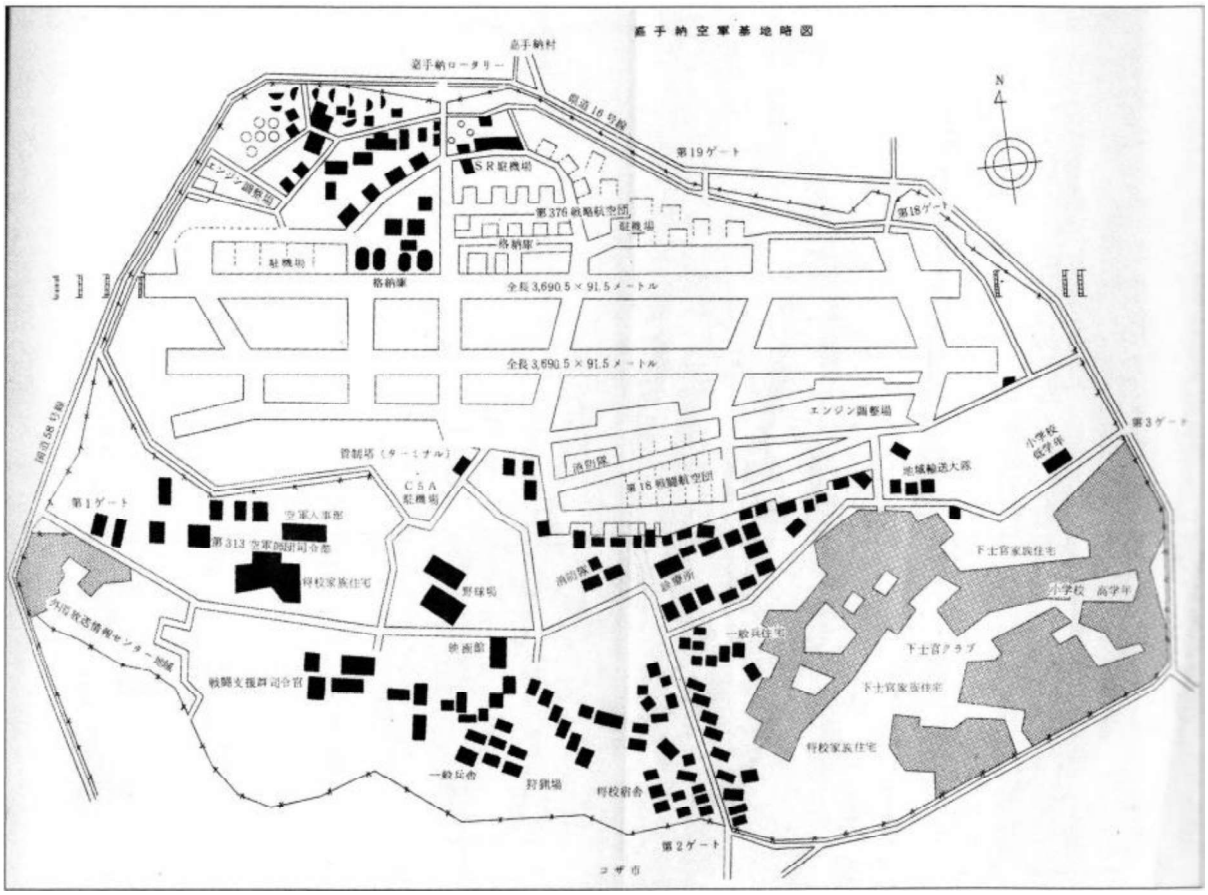



**写真 4　「嘉手納空軍基地略図」（沖縄県渉外部基地渉外課編『沖縄の米軍基地』1975 年）**

吉成さん、だいたいこんな感じですが、最後にこれ（写真 4）を説明しておきましょうか。これは、嘉手納基地のマップです。上の方が 3700m 級と言われている滑走路が 2 本あるんですね。その下の方が、これは実は住宅エリアなんです。ほとんどの部分が住宅エリアで、下の方に「第 2 ゲート」と書かれていますけども、この第 2 ゲートが、先ほど吉成さんが写真で見せてくれた「ヒストリート」がある通りの外になります。つまり、（基地の）周辺は北谷町とか、嘉手納町とかいくつかあるんですけども、なぜコザがこんなふうに急激に都市化していったかというと―これは私の勝手な解釈なんですけど―やっぱりこの住宅街に向けて、嘉手納基地の一番大きなメインゲートである第 2 ゲートに隣接していたのが越来村、コザ市だったんですね。

ですから、そういうことでわがまちが「基地の街」とか「戦後沖縄の縮図」、あるいは「基地の門前町」と表現されるように、急激に都市化していったんじゃないかというふうに考えているところです。

**吉 成**：恩河さん、貴重なお話をありがとうございます。沖縄市、そしてコザのまちの成り立ちについて非常にわかりやすくまとめて頂いて、大変ありがたく思っています。ここから質問と対話に移っていきたいのですが、今のお話を受けて、もう少しだけ沖縄市の歴史について背景として伺っておきたいと思います。先ほど最初に、コザは、戦前は純農村地帯だったというお話を頂きました。このあいだ、打ち合わせの際に恩河さんとお話させて頂く中で、コザの戦後の写真は色々残っているけれども、戦前の写真はほとんどないというお話を伺いました。その点について、戦前のコザがどんな場所であったのかということと、戦前を記録しているものが残っていないという点についても、もう少しお話を頂いてもよろしいでしょうか。

**恩 河**：わかりました。先ほどの絵（写真 1）で言うと、戦前の越来村、美里村なんですけど、例えば美里村には「泡瀬（あわせ）」というところがございまして、そこは沖縄一の製塩、塩の産地と言われていました。それから、沖縄の唯一の換金作物というのが、サトウキビなんですけど、そのサトウキビで作った黒糖を入れる容器を沖縄方言で「樽皮（タルガー）」と言います。その樽皮の産地としても、泡瀬がとっても有名なところでした。それから、コザ市（旧越来村）の方でいくと、かつては沖縄一の繁華街、飲み屋街と言われていた「上地（うえち）」というところは、竹細工の産地だったんです。それから、越来と美里ともに、みかん類、柑橘類の産地で、明治時代には修学旅行生がわざわざ北部あたりからやって来るという、結構それなりの特産物があったんですけど、基本的に純農村です。

それで、戦前の写真はほとんどないというのは、もちろん那覇とか、沖縄のあっちこっちに戦前の写真は残っているんですけども、残っているところを見ると大体有名なところなんですね。那覇市は首都ですし、それから宜野

湾の普天間―普天間飛行場があるところですね―あそこは、普天間神宮という有名な拝所があります。それから糸満は漁港の町、名護は北部の中心地であるとか、有名どころの戦前の写真はかなり残っているんです。ところが沖縄市、コザは、越来村も美里村もほとんど（残っていない）。泡瀬の写真は若干残っていますけども、何ていうんですかね、あまり物珍しくないというか、カメラマンたちの興味を引くような対象でないというか、純農村だったという、そういうところであんまり戦前の写真が残っていないのかなという気がしています。

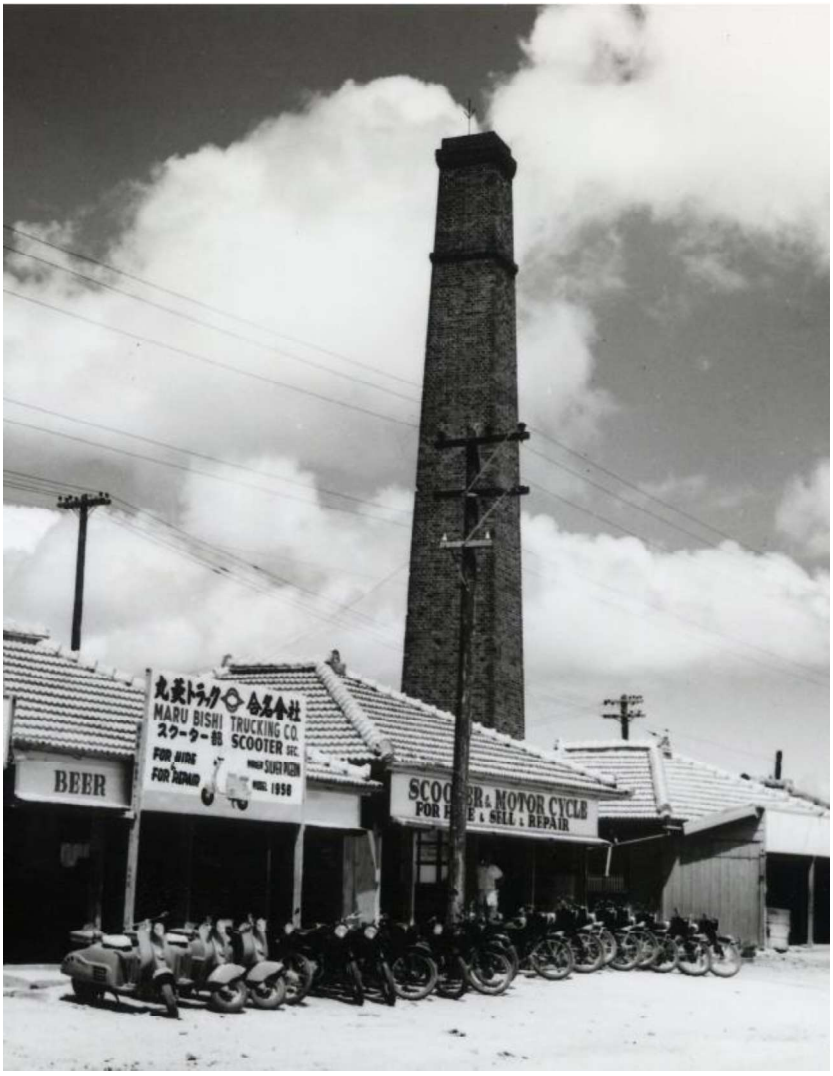



**写真 5　「貸しスクーター・オートバイ業」**
**（ゲート通り、1950～60 年代。所蔵：沖縄市総務課 市史編集担当）**

**吉 成**：ありがとうございます。そうですね、こちらの写真（写真 5）について、先ほど製糖工場、サトウキビのお話もありましたけれども、この「貸しスクーター・オートバイ業」という写真の背後に写っているのも、製糖工場の名残ということでしたでしょうか。

**恩 河**：そうです。地域の人たちで、共同で製糖工場を経営していて、その工場の煙突ですね。戦前からです、これは。ただ、手前の方は米軍相手のレンタルというんですかね、貸しオートバイで、戦前戦後が一目で分かるという非常に面白い写真だなというふうに思っています。

**吉 成**：ありがとうございます。写真も解説して頂いて、大変ありがたく思います。先ほど冒頭でお話頂いたように、48 年・49 年の大きな台風が来て、そして「基地の街」ができ、戦前の純農村地帯が大きく変わっていく点がとてもよくわかりました。それでは、ここからは恩河さんと伊敷さんから色々とこれまでお話を伺ってきた中で、特に私の印象に残ってきたお話について恩河さんに投げかけさせて頂いて、また詳しくお話を伺っていければと思います。

まず、恩河さんには、沖縄市の戦争体験について伺っていきたいと思います。先ほど私からの報告の中で、「ヒストリート」のあるコザのゲート通りの写真をお示ししました。昨年（2023 年）の 3 月に「ヒストリート」を訪れた際に、沖縄戦について、あるいは沖縄戦後のコザのまちについて教えて頂いたこととして大変心に残っていることの一つとしては―「念頭に置いておいて下さいね」というふうに伊敷さんから仰って頂いたんですけれども―沖縄では、米軍によってまもなく占領された中部や北部の地域と、激しい戦闘が続いていった南部の地域とでは、戦争体験の様相というのが大きく異なっていくというお話でした。

このように、沖縄戦の地域ごとにそれぞれの特徴があるのではないかと思うのですが、沖縄市に暮らしてきた方々にとっての沖縄戦の体験の特徴について、詳しくお話を伺うことはできますでしょうか。よろしくお願いいたし

ます。

**恩 河**：はい、わかりました。今、吉成さんの仰る通りでして、我々は、「沖縄戦というのは地域性があるんだ」という認識を持っています。具体的には、わが沖縄市は、まずは、恐ろしく米軍の統治下に入ったのが早かったということと、それなりの犠牲があったということをお話しします。まず、米軍の統治下に入ったのがすごく早かったという事例からお話し申し上げますと、米軍が沖縄本島に上陸したのは 1945 年 4 月 1 日です。その 5 日後に―これ沖縄市じゃないんですけども―沖縄市の隣の具志川市（現・うるま市）で、高江洲小学校が開校するんですね。大丈夫でしょうか。5 日後（4 月 6 日）には小学校が開校するということです。それから、これも隣の石川市で、石川学園（現・城前小学校）が 5 月 7 日に開校する。それからわが沖縄市でいいますと、6 月 6 日に古謝小学校が開校します。

**写真 6　「琉球列島（南西諸島）の降伏調印式」**
**（1945 年 9 月 7 日、嘉手納、沖縄県公文書館所蔵）**

この辺りの日にちを押さえていてください。南部の方で沖縄戦がまだ展開されている頃、中部では、沖縄市、具志川市、石川市あたりで、もう小学校が開校しているんですね。それから 6 月 7 日に、なんとわが沖縄市（越来村）では、村長助役選挙をやっています。というような感じで、恐ろしいぐらい、もう既に戦後への道を歩いているんですけども、それらの基本的な生活は、米軍の統治下に置かれた収容所の中での生活です。この写真（写真 7）は泡瀬というところで、私の出身地なんですが―これはどうでもいいんですけども―こんな感じで、収容所といっても焼け残った民家を利用しての収容所なんですけど、いち早くこういった収容所内での生活が行われていたということですね。ものすごい早かったということを、まずは頭に入れられてください。

それから、じゃあ、そんなに戦争の被害がなかったのかというと、そうではありません。例えば、沖縄県で 50 余りあった市町村の中で 9 番目にうちの町は戦没者を出しています。5500 名ぐらい出しているんですね。それか

**写真 7　「農作物の配給に集まる住民たち」**
**（1945 年 5 月 20 日、下原（泡瀬）、沖縄県公文書館所蔵）**

ら 5500 名のうちで 1700 名ぐらい、戦没者の数の約 3 分の 1 は海外で亡くなっています。先ほど少しお話させて頂きましたけども、沖縄県は移民県で、その沖縄県でも沖縄市（旧越来村・旧美里村）は移民の方々を相当出した自治体でして、特に南洋あたりで沢山亡くなっているという特徴があります。

それから、米軍と遭遇した時点で、自分のおうちにみんな隠れて、釘を打って外に出られないようにして、布団なんかに灯油、ガソリンみたいなものをかけて焼身自殺をした。いわゆる「集団自決」とか、「集団強制死」と言っていますけど、そういった悲しい事件が市内で起きています。

それからあと一点は、沖縄市には「こどもの国」というところがございまして、沖縄ではかなり少ない動物園なんですけども、そこに独立歩兵 12 大隊（賀谷支隊）という日本軍が駐屯していたんですね。駐屯していながら義勇隊を募る、つまり地域の人たちを集めて色んな軍の手伝いをしたりしていたんですけども、米軍の上陸と同時にコテンパンにやられます。それで賀谷支隊の兵隊から、遊撃隊として集まっていた地域の住民に、「ここで解散する」と。「解散して自分のおうちに戻って、家族を殺して、あなたも自殺しなさい、自決しなさい」という命令があって、実際にその通り行われた悲劇があります。そういった特徴も持っています。

それから、戦没者が出た時期と場所によって沖縄戦は結構大きな違いがあると思っています。例えば、あくまでも沖縄市民のデータなんですけども、本島北部の方に逃げた人たちというのは、死因を調べてみると「飢え」と「マラリア」なんですね。食料がほとんどなくて、体が弱って衰弱死していく、あるいはマラリアによって亡くなっていくという、飢えとマラリアによる死亡が圧倒的に多いです。

それから南部に逃げていった人たちは、先ほど吉成さんの報告にもございましたけども、被弾、弾に当たって死ぬという死因が結構多いんですね。その時期については、沖縄市内でいうと、米軍は沖縄市のすぐ隣の北谷に 4 月 1 日に上陸し、4 月 2 日と 3 日辺りには上陸地の反対側である東海岸まで到達しているんです。すると、4 月 5 日ぐらいまでには、ほぼ沖縄市内は米軍の支配下、統治下に入っています。実際にデータを見ても、どこにも逃げな

いで市内に残っていた人たちの 8 割は、4 月 1 日から 4 月 5 日までに亡くなっている。それ以降はほとんど死者が出ていないという特徴があります。ところが南部の方に逃げた沖縄市民というのは、6 月に死者が相当多いんです。そういったような感じで、地域とか時期によってもタイムラグがあって、地域史の沖縄戦はかなり地域性がある、地域の歴史によってだいぶ異なるよというふうに感じているところです。

それから最後なんですけど、先ほど降伏調印式の写真（写真 6）がありました。これは今、嘉手納基地になっていますけども、越来村森根というところで、1945 年 9 月 7 日に南西諸島の日本軍による沖縄戦の降伏調印が行われた時の写真です。嘉手納基地内のヒストリアンに、「どうしてここで沖縄戦の降伏調印が行われたの？」と聞くと、嘉手納基地のヒストリアンはこう言っていました。この先の方に、先ほど言った 3700m 級の滑走路があって、沖縄を攻めた米軍の第 10 軍の本部があったのがたまたま越来村森根だったという、そういうご回答でした。それでここに日本軍を呼んで降伏調印をやったんだよと。そういった降伏調印が行われた場所、これが、わが沖縄市、旧越来村だったということですね。そういったような沖縄戦の特徴があるかと思います。

**吉 成**：恩河さん、ありがとうございます。沖縄戦の慰霊の日の 6 月 23 日、終戦が 8 月 15 日で、連合国軍との降伏調印が行われた 9 月 2 日というように、「終戦」の節目となるいくつかの日付が私の頭にありましたが、それ以前に、既に 4 月の頭には収容所での生活が始まっていたなど、本当に「戦後」とはいつからと言うことができるのかを、お話を伺いながら改めて考えさせられています。

これは非常に重いテーマであるのですが、いま、沖縄戦における旧美里村での「集団自決、集団強制死」で亡くなった方々のことについてお話を伺いました。他の地域でのそうしたお話を踏まえて、沖縄市でも同様の話がないか、証言を聞き取る中で少しずつ浮かび上がってきたと、このあいだ伊敷さんから伺ったのですが、その点についてもう少しお話を頂くことはできます

でしょうか。沖縄市での「集団自決、集団強制死」が最初から分かっていたというよりも、少しずつ聞き取りをしていく中で徐々に浮かび上がってきたというお話だったかなと思うのですが……。

**恩 河**：はい。我々事務局ではそういうお話です。伊敷がお話したように。ただ、読谷村のチビチリガマとかシムクガマのお話をお聞きになっているかと思いますけど、あそこも二つのガマ（洞窟）で、一つは（シムクガマでは）移民経験者がいるということで全員生き残ったんですね。もう一つのチビチリガマでは、移民者がいなくて相当な自決者を出したという特徴がありまして、それを長い間読谷の方々は黙っていたんですよ。これはわが美里の事例もそうですし、地元の人たちはずーっと隠して、なるべく口外しないように、「こういう集団自決があったよ」、あるいは「家族を殺したよ」みたいな話はなるべくしないという状況にありました。それで我々もあまり知らなかったんですけど、少しずつ調べていくうちに地元の人たちもやっとお話しするようになりました。向こうにかなり問題意識の高い方がいらっしゃいまして、その方がみんなに声をかけて、音頭を取って体験記をまとめて、それで役所の方に相談があったものですから、役所の方で『美里からの戦さ世証言』（沖縄市役所、1998 年）として出した経緯がございます。

**吉 成**：ありがとうございます。それでは引き続き、沖縄戦後のコザのまちの成り立ちについて伺っていきたいと思います。先ほど収容所が出来たお話をして頂きましたが、恩河さんとお話する中で、米軍基地ができて、そこから派生していった様々な文化が触れ合うことで、非常に独特な食あるいは音楽などが生まれていったという側面についても伺ってきました。中でも恩河さんが、沖縄市はいわゆるチャンプルー文化というふうに言われるけれども、「コザ文化」という言葉を使いながら表現されていたのが印象に残っています。そのことについて、もう少しお話を伺ってもよろしいでしょうか。

**写真 8　「ジュークボックス」**
**（松村久美撮影、照屋、1970 年。所蔵：沖縄市総務課 市史編集担当）**

**恩 河**：チャンプルー文化についてのお尋ねなんですけど、「チャンプルー」というのは沖縄方言で「混ぜこぜ」みたいな意味なんです。本来は、料理の名前だと言われているんですよね。例えば、豆腐チャンプルーという、豆腐を主体にして色んな野菜なんかが混ざっている。あるいはゴーヤチャンプルーとか、そういう言い方をします。コザの文化も、いわゆる沖縄の伝統文化と共に、アメリカに代表される異文化が入ってきて、ごちゃまぜになってできたのが「チャンプルー文化」、「コザ文化」じゃないかと言われていますけども、それに関しては、全く異論はございません。

ただ、なんでいうんですかね、本当にその文化と文化がぶつかってきた当初、果たしてすぐに混ざっていくかという絶えず疑問がありまして……もっと具体的に言いますと、ハイブリッドの状態、時期があったんじゃないかと。そのあと混ざり合う部分もあるし、ハイブリッド化していく部分もあるという感じで受け止めています。具体的に言いますと、沖縄に「清明祭」という伝統文化があります。これは中国から入ってきた時期もわかっていまして、

1768 年に首里城近くに「玉陵（たまうどぅん）」という大きな尚家のお墓があるんですけど、そこで行われています。「清明祭」というのは、先祖のお墓に行って、そこで先祖を囲みながら沖縄の人たちは旧暦の 3 月ぐらいに食事をして、団らんをするという文化があるんです。これが最初首里で行われていて、徐々に地域に降りていくんですけれども、受け入れていない地域があるんです。

例えば、宮古・八重山は、「清明祭」という文化を受け入れていません。その代わりどのように先祖供養するかというと―あまりお聞きになったことがないと思いますけど―沖縄は正月が 3 回あると言われているんですね。一つは新正（新暦の正月）。それから旧正。もう一つはご先祖様の、亡くなった方々の正月というふうに、沖縄では「グソー」の正月がありまして、それが旧暦の 1 月 16 日（ジュールクニチー）です。そのときに先祖を祀るという文化が―多分これが古いと思うんですけど―根強く残っていて、宮古・八重山は 16 日をやります。

それで、沖縄本島は「清明祭」というふうに移っていきます。そこで先ほどのコザ文化の話に戻りますと、例えばコザに来た宮古の人たちがいきなり「清明祭」をやるか？という、実際私が聞き取りした段階でも彼らは「三重城（ミーグスク）」に行くって言うんですね。中世に、那覇港を囲むように二つの砲台（要塞）が置かれていました。一方は「三重城」、もう一方は「屋良座森城（ヤラザムイグスク）」というんですけども。普段は「いざ鎌倉」というか、戦争がない場合にはそこに出入りして人びとを見送るという習慣があって、宮古の人たちは沖縄本島にやって来ても、1 月 16 日に「三重城」に行って、自分の故郷である宮古を遥拝する習慣がずーっと続いているんです。しばらくしたら「清明祭」を受け入れるかどうかは分かりませんけども、そういったハイブリッドな状態、時期があったんじゃないかという、これが一つです。

それから、沖縄市にはインドの方々も結構多いんですけども、アパートを改装してモスクを作ってそこで拝みをするという、なかなか彼らなりの文化をしっかり守っているというようなところがあります。なので、私はハイブリッドな状況が一回、当初の頃にあったんじゃないかと思います。それから

コザ文化について言いますと、沖縄市はチャンプルー文化という話がありますけども、これは沖縄市（コザ）だけじゃないと思うんですね。中部はほとんど基地経済の下に置かれているという状況ですので、そういった米軍の基地経済に影響を受けた地域全体に注目をしようかなということで。ただ、米軍の影響が非常に強いところがわがまちだったんじゃないかということで「コザ文化」って呼んでいますけども。広い意味で言うと、中部の自治体は大体コザ文化の範囲内にあり、当然ながら沖縄市はコザ市と美里村が合併してできていますけれど、美里村も基地経済の影響を相当受けていますので、これも広い意味でコザ文化のうちに入るんじゃないかと。まとめますと、ハイブリッドであった時代をひとつ設けるべきということと、基地経済に影響を受けたのはコザだけじゃないよということもあるんですけども、コザが一番象徴的なまちだということで、「コザ文化」という考え方もあるのかなと、そんな感じです[2]。

**吉 成**：詳しくご説明頂いてありがとうございます。やはり歴史や文化の時間軸と申しますか、時間を連続的に捉えていくことが重要になるのかなと非常に感じております。先ほどのお話にもありました移民県と申しますか、沢山の色んな方々がコザのまちに来たというお話とも関わりますが、戦後の海外移民のことについて伺いたいと思います。これまで聞き取りをされてきた戦後に海外移住をしていった方の経験が、いわゆる「日本史」という枠組みには収まり切らないのではないかという実感、あるいは、これをどのように記述していったらいいのかについても考えさせられてきたというお話を恩河さんから以前伺いました。この点について、もう少しお話を頂いてもよろしいでしょうか。

**恩 河**：はい。非常に単純な話でして、例えば移民なさった方がブラジル、南米で生活する、あるいは南米の文化を享受していくというのは、日本の歴

---

[2] 恩河尚　2024「戦後文化を考える」『KOZA BUNKA BOX』20、42-43 頁。

**写真 9　「復帰前に使用された旅行証明書各種」**
**（所蔵：沖縄市総務課 市史編集担当）**

史じゃなくて、ブラジルの歴史になるんじゃないの？という、単純にそのぐらいの疑問なんですね。他の学問なさっている先生方では全然問題ないと思いますけど、歴史をやっている側からすると、日本という土地で営まれて、育まれたのが日本史じゃないの？という、そうすると、外国に行った人たちはどう扱えばいいの？みたいなことを非常に悩んでいました。事務局でも結構話し合いました。その中で非常にヒントを得たのが―もうご退官なさいましたかね―言語がご専門の大阪大学の工藤眞由美先生たちがブラジルやボリビアに行って、言語接触という感じで調査を行っているんですね[3]。「あ、そういう文化と文化の接触で、沖縄の文化が向こうに行ったらどうなるのかみたいな、そういう方法論があるんだ」というふうに気づかされまして。とても刺激的だったのは、沖縄の人たちは、ブラジルならブラジルに行くと、ほとんど方言で一世は過ごしているんですね。それが三世まで行くと、完璧にポルトガル語に変わっていくという非常に刺激的な主張をなさいまして、

[3] 工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵　2009『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房。

「ああ、こういうふうにアプローチする手があるのか」というのが一つです。

それからもう一つはですね、近藤望寧さんという方、この方は ICU の卒業生なんですけれども、「カルチュラル・スタディーズ」という方法論にのっとってコザを卒論にしてくれたんですね[4]。少し紹介しますと、いわゆる米軍基地があります。その米軍基地は暴力装置として見るだけじゃなくて、それが沖縄の住民の生とか生活にどのような影響を与えたのか、逆にコザ市民は米軍基地とどう結びついているのかを議論した非常に面白い論文がありました。そういうような、わがまちの文化の見方もあるんだなということ。

それから今一つは、深津萌花さんという、彼女は津田塾大学の院生だったんですけども、修論でタコライスを取り上げてくれています。メキシコ料理であるタコスが例えばテキサスあたり、メキシコに近いアメリカに渡っていって「テクス・メクス」という、いわゆるアメリカ風メキシコ料理に変わっていくらしいんですね。さらに、このテクス・メクスを食べたことがある、あるいはその作り方を知っている方々が沖縄に来て、沖縄タコスを作るんです。さらに、それがタコライスというふうに変わっていくという関係を、深津さんはアルゼンチン出身のガルシア・カンクリーニという文化人類学者の「ハイブリッド化の理論」という方法論にのっとって、メキシコのタコスがコザに来てタコライスに変わっていくまでを—最近では、タコライスは東京でもあるらしいですね—非常に興味深く書いていらっしゃいます。それでおかげさまで、私たちの『KOZA BUNKA BOX』（写真 10）の最新号（第 20 号）に、深津さんの修論を載せることができました[5]。かなり好評でよく出ています。

それから最後になるんですけど、中山寛子先生が法政大学の『沖縄文化研究』の 45 号にボリビア移民のことを書いています[6]。アメリカ政府が、「ポ

---

[4] 近藤望寧『コザに耳を傾ける：米軍基地文化の政治学』国際基督教大学学士論文（2018 年 3 月）。

[5] 深津萌花　2024「戦後沖縄における食文化の混淆化過程に関する研究—タコライスの創出と定着を事例に—」『KOZA BUNKA BOX』20、10-41 頁。

[6] 中山寛子　2018「第二次世界大戦後における沖縄からのボリビア移住に関する一考察：読谷村の集団移住を中心に」『沖縄文化研究』45、505-557 頁。

**写真 10　『KOZA BUNKA BOX』（2024 年吉成撮影）**

イント・フォー」という発展途上国の援助資金を使っていることを中心に議論しているんですけども、かいつまんで言いますと、こういうことです。ポイント・フォーというのは、名目は発展途上国への経済援助なんですけども、それによって共産化を防ぐという政治的な狙いがあったそうです。

少し長くなりますけれども、サンフランシスコ講和条約により沖縄が日本から離されたのが 1952 年です。この時に沖縄を統治した米軍（在沖米軍）は、戦時中の国際条約であるハーグ条約（ハーグ陸戦法規）が使われなくなったので、例えば 1952 年 11 月に布令布告で土地契約令を出すんですね。それで沖縄の土地を収用していく。そこに基地を作っていくという手続きを取ろうとするんですけども、あまりにも坪単価の契約料が低くて沖縄の住民はそれを拒否するんです。それでどうしたかというと、その翌年の 1953 年に土地収用令を出して、強制的に土地を使用していくという手順を踏むようになるわけです。先ほど吉成さんの報告でありました那覇新都心も、土地収用令で米軍に収用された場所でした。それから宜野湾市の伊佐浜や伊江島の真謝などが、次々と米軍基地として強制的に収用されていく。よく沖縄では「銃

剣とブルドーザー」という言い方をしますけども、それで沖縄県民は怒って全県的に土地闘争を展開するんです。

それで、やっと本題に戻りますけれども、この土地闘争で踏ん張った連中がアメリカ軍にとって少し目障りだったみたいで、この人たちを共産化するきらいがあるのでボリビアに送って、その矛先を和らげようみたいな議論があったということを中山寛子先生が論じているわけです。この論文を読んだときに、「あ、しめた」と、「これでボリビアは堂々と調査できるな」という感じで。まとめますと、「文化接触」という方法論を使って国外も調査できる根拠を得た。もちろんそれまでも調査はしてましたけども、ちゃんとした根拠を得たような気がしているという、そういう感じです。

**吉 成**：ありがとうございます。今のお話を受けて、移住した方から語られる言葉をどう記述するのかについてもこれまで恩河さんからお話を頂きました。「普段着の言葉」を書いていく重要性や、話者の言葉の中に古い日本の言葉がぽっと現れてくるというお話も大変興味深く伺ったのですが……その辺りについてもう少しお話を伺えたらと思います。いかがでしょうか。

**恩 河**：ある学会で、我々は『インヌミから』（沖縄市役所、1995 年）という引揚者に関する報告書を作って発表する機会を頂いたんですね。そのときにある大学の先生から―我々は綺麗な言葉で、話者の言葉を「ですます調」でまとめたんですけども―「沖縄の人は、方言は使わないんですか？」という指摘を受けたんですよ。「うわー」と思って、なんの説明もできなかったんですけど、それをちょっと反省しまして。いま、（『沖縄市史』の）移民編をまとめていますけど、移民編からはなるべくおじいちゃん、おばあちゃんが普段話されている言葉、それから南米でしたら南米で聞き取り調査したときの彼らが普段使っているような言葉を出来る限り忠実に残そうということで今、「ポケトーク」とかを使って悪戦苦闘しています。

その中で一つだけ、はっと気づかされたことがあって、何かというと、事務所で私が年齢的に最長不倒なんですね。圧倒的に私が年寄りということで、

方言などのテープ起こしは大体私がやっています。その中で、我々が古文書（近世文書）で読んでいた言葉を、おじいちゃんおばちゃんが使っているということにふと気づいて、非常にびっくりした覚えがあるんですけれども。具体的に言いますと、あるおばあちゃんがこう仰っていたんですね。「旦那が沖縄戦で亡くなって、旦那の戦前の公界（くげー）は全部自分に来た」という言い方をしていたんですよ。「公界」というのは、中世史研究の有名な網野善彦先生が使っている「無縁」、「公界」、それから楽市楽座の「楽」という、あの「公界」です。これはどういう意味かというと、「お付き合い」という意味なんですね。つまり、このおばあちゃんは、旦那が亡くなって、生前の旦那のお付き合いは、彼の死後全部自分に回ってきたよということを仰っていて、これは何度も聞き直しましたけど、非常にびっくりしました。近世の言葉を方言で使っていたということですね。

それからあと一つは、おじいちゃんなんですけども、自分のおうちはコザ高校―あ、コザ高校は私の母校ですけど、これはどうでもいいか―のそばのちょっと高台にあったと。うちがあったんだけど、戦争から帰ってきたら「となみさっとうたん」って言うんですよ。「統並（となみ）」されていた。統並というのは、「平たくする」とか「均一にする」、「ならす」という意味なんですね。つまり、このおじいちゃんは、ブルドーザーで自分のうちは敷き均されていたということを、「統並」という言葉を使っている。こういう言葉がいくつか出てきて、改めて音源を聞くという大事さというか、改めてびっくりしましたよと、そういう話です。

**吉 成**：どうもありがとうございます。恩河さんからお話を伺っていると、「戦前」から「戦後」への連続性もそうですし、人びとの語りによってさらにさかのぼって、歴史の連続性の中で人びとの暮らしの営みがコザのまちにあるのだなと改めて感じています。恩河さん、本当に色々と貴重なお話を聞かせて頂いて、ありがとうございます。

伊敷さんにも、特に戦後史を「ヒストリート」で語り継いでいくことについての質問をさせて頂いて、お答えを頂いています。まず一つ目なんですが、

伊敷さんには沖縄市の戦後史を見つめ直すことに込める思いについてご質問させて頂きました。恩河さんからのお話にもありましたように、沖縄には、沖縄戦について後世に伝えている様々な歴史資料館がある中でも、特に「ヒストリート」では、「沖縄市」という地域史としての戦後史を伝え継ぐことに力を注いでいるところが、とりわけ私の心に残っています。今回、シンポジウムにあたって特に伺いたい点として、「ヒストリート」では沖縄市の戦後史を見つめ直すことを大切にしていらっしゃる理由について伊敷さんに質問をさせて頂いたのですが、そのことについてお答えを頂いたので、動画の方で共有させて頂きます。

**伊 敷**：今、私は二点考えています。まず一点目なのですが、沖縄市は「戦後」に特徴があるということ、それは、沖縄戦と戦後の引き揚げ、それから米軍基地に関係します。戦前ほぼ全域が農村地域だった我が沖縄市は、戦後の特に 1950 年代の本格的な米軍基地建設によって、まちは変わりました。個性的なまちの誕生です。私は、沖縄市の歴史を知ろう・伝えようを心がけています。そして、二つ目に、わがまちの特徴を知ること、それからまちの魅力の発掘、そして戦後史の情報を発信するということは、きっとこれからの「まちづくり」にもつながると考えているからです。その二点が、私は大きいかなと思っています。私たちの仕事は現在、未来の街づくりの一助だと考えています。勝手ですが街づくりの素材を提供する仕事だと思うのです。今は点でも、線になり面になる材料かもしれないので楽しんでやっています。それをどう伝えるかは色んな方法があるので、個人でみんなで考えながらやっていこうと思っています。

ヒストリート以外では、小学校や中学校、高校での平和授業による出前講座に加えて、市内の自治会や老人会、婦人会等からの講話やガイド依頼にも可能な限り対応しています。それらも私の“伝える”のひとつです。それから主になる『沖縄市史』の刊行です。活字による戦後の情報を発信しています。

**吉 成**：はい、今のこの点に関わるのですが、その際に戦後史をどんなふうに伝えていくことを心がけていらっしゃるのかも伺いました。というのは、伊敷さんが仰っていたこととして、戦中戦後のこんなつらい出来事があった、悲しい出来事があったというふうに伝えていくことも、もちろん非常に大切なんだけれども、その一つ一つの歴史の事実から私たちが何を考えていくのかも同時に重要だと伝えて下さったことがとても心に残っています。この点について、もう少し伊敷さんからお話を伺いましたので、皆さんとも共有させて頂きたいと思います。

**伊 敷**：私は沖縄市が好きです。沖縄市を知ること、地域を知ること、まちを知ることというのが、「なぜ？」を考えることにつながると思っています。例えば、「ヒストリート」には市内や市外、県外や国外から、基地内から多くの方々が来て下さり、利用しています。徐々に来館者も増えていますし、リピーターも増えています。そこから色んなことが考えられるんですけども。

ヒストリート当番の時には、館内の説明（ガイド）を求められることも多いですが、質問や疑問も多いですね。老若男女、国籍問わずです。私はそれが嬉しく楽しんでいます。例えば「沖縄戦はいつ終わったの？」、「9 月 7 日って何？」、「「戦後」っていうのはいつから？」、「特飲街ってなあに？」、「コザ暴動はいつどこで起こったの？」、「沖縄市の誕生はいつ？」等々、展示資料を見て聞いてきます。それに対して、私たちが聞き取りをした体験談や資料を用いて分析したことなど、これまで得た情報を皆さんに伝えていくことを私は心がけています。どうすれば伝わるか、短時間に何を伝えるかなど会話の中から考えさせられることも多くあり、「これから街なかを歩いてきます」、「コザの街って面白い」などの声を聞くと、嬉しくなります。そう、沖縄市の魅力や特徴が（言葉でも）伝えていければと考えています。これからも私たちは一つ一つ丁寧に調査し、それから資料を整理しながら、皆さんに展示も通して「ヒストリート」で本市の戦後史を知って頂ければと、頑張っていこうと思います。

また、小学校や中学校や高校の平和授業で、沖縄市の歴史や沖縄戦につい

て話をさせて頂くことが毎年あります。今年（2024 年）の小学校 5 年生の出前講座では、「え？！私たちのまち、住んでいる地域ってサトウキビ畑が多かったの？」とか、「家がこんなに少ないの？」など、子どもたちの「知りたい」が飛んできました。そこから、「戦争っていつ終わったの？いつからだったの？」、「どこの国と戦ったのだろう？」「なぜ多くの人が死んだの？」、「このビンは何。何に使う？」など、“なぜ”を考えていくのです。限られた時間ですが嬉しい対話です。

授業の最後には「ヒストリート」を紹介しますが、その後に親子で家族で友達と一緒に見学に来てくれた学生たちもいました。まちの戦前から現在までの歩みを知ることによって、まちの変わりようがイメージできて、今を知ることや考えることになるとも先生から伺いました。

ですから、地域を知ること、まちを知ることというのは大事なことだと。それが一地域から沖縄市全体に広がる、市全体に広がるときっと沖縄県へと。「そのときって沖縄（県）はどんな動きをしたの？」、「どういう部隊がいたの沖縄に？」などと聞いてくるんです。それから「僕おじいちゃんがいるんだけども、おじいさんは戦争の話をしないんだよね。戦後の話をしてくれるんだよ」と、“知りたい”“聞きたい”を感じさせる子もいますね。出前講座では得るものがあり、どんな形であれ、小さい頃から沖縄市のこと（歴史）を知っていることはありかなあと思います。いつか、沖縄市の魅力（面白）発見、そこから、将来のまちづくりを担う人づくりにもつながっていくだろうかと。そのときどきに教えてもらってる感じがあります。

**吉 成**：はい、今のお話にもありましたように、「なぜ？を問うこと」と、沖縄市の地域史を窓にして大きな歴史としての戦後史や、「戦前」から「戦後」の歴史が浮かび上がってくることがとても印象に残っており、勉強もさせて頂いています。最後に、そういった戦前戦後の歴史を伝えていくことに込める思いについて、伊敷さんからもう一言頂きました。それについて動画を流した後に、恩河さんからコメントがありましたら、よろしければ一言頂きたいと思います。

**伊 敷**：時代背景や「なぜ？」を説明したいと思っていますし、対話をすること、楽しむことをしています。今だから話せること、思いなどを聞かせてくれます。例えば、戦争を生き抜いてきた人たちから話を聞いたり、戦後に沖縄市に移ってきた人たちの生活の様子とか、商売をした人の話を聞いていくと、当時のようすを嬉しそうに話す方もいらっしゃるんですね。当然、沖縄戦での悲しい出来事、苦しかったこと、つらいこともあったと思いますが、その人たちがいかにたくましく生きてきたか、そして、コザのまちを、沖縄市をつくってきたかということも、皆さんに知って頂きたい、伝えていきたい、伝えていこうというふうに考えています。

**吉 成**：ありがとうございます。軽々しくは私からはなかなか申し上げにくいことでもありますけれども、先ほど伊敷さんが「たくましさ」という言葉を使っていらっしゃいました。このコザ、沖縄市で暮らしてきた一人ひとりの体験から浮かび上がってくること、その重みを、改めてその複雑性も含めて受け止めていました。以上で質問と対話については終わりたいと思うのですが、恩河さんから最後に一言、メッセージなどはありますでしょうか。

**恩 河**：的外れかもしれませんけど、私たちがコザのまちにこだわる、こだわっているというのは、沖縄の歴史上、例えば県庁所在地であったとか、交通の要衝であったとか、優れた港湾を持っているとか、こういった感じで都市が成立していくというのはままあることなんです。ところがコザは、「基地の門前町」と表現されるぐらい、米軍基地の影響下で都市化したまちなんですね。これは私が知っている限り、沖縄の歴史上、全然ないまちで、これはもう徹底して色んな面からコザの歴史文化を後世に残していかないといかんなぁという気持ちでやっています。

それからいま一つは、大学の研究テーマとかにはまずほとんどないだろうなぁと思うんですけども、自治体で、行政でこういった地域の歴史や文化を編纂するという意味ですね。それは、例えば行政は、地方自治法という法律

のもとに、総合計画（総計）を立ててまちづくりの目標を持ちなさいということが規定されているんですね。われわれも行政の中にいますので、それは決して例外ではありません。じゃあ我々、行政が―いつも市民から怒られていますけども―色んな課題や問題を抱えている中で、市史編集担当が何をできるのかを考えた場合に、やっぱり観光行政に、我々はそれなりに貢献できるんじゃないかと。沖縄市のコザの歴史や文化に基づいたまちづくりのアイディアとか、材料とか、こういったものを発信しながら―やっぱり、先ほど来お話していますように、極めて面白いというか、他にはないまちの歴史を持っていますので―それを「ヒストリート」で展示して、例えば観光客に見て頂く。あるいは結構多いんですけれども、大学の研究者や先生方がゼミ生を連れて「ヒストリート」に来るというのが最近定着しつつありまして。よこしまな発想なんですけど、吉成さんにもいつもそうして頂いているように、市内のホテルに泊まって頂いて、それから市内で食事をしてもらうという、そういったことがささやかながら我々はまちづくりに貢献しているのかなぁという、そういう気持ちでも「ヒストリート」は運営しています。

**吉 成**：恩河さん、ありがとうございました。戦後史を掘り下げていくことが、未来のまちづくりにもつながっていく、つなげていくという大変貴重なお話を頂きました。それでは、第一部の時間の方が少し超過してしまっており恐縮ではあるんですけれども、非常に貴重なお話頂くことができて、改めて恩河さんと伊敷さん、また、今日リモート接続のお手伝い頂いている渡眞利さんにも本当に御礼を申し上げます。第三部でも総合討論として参加者の皆さんとの質疑応答の時間を設けていますが、いまお二人にお話頂いたことの中で事実関係などを少し押さえておきたいという方がもしいらっしゃいましたら、チャットあるいはご発言頂ければと思います。いかがでしょうか。

**参加者 A**：よろしいでしょうか。それでは一つだけちょっと確認ですが、恩河さんのお話の中に出てきましたけども、賀谷支隊ですか。これは独立歩兵第 12 大隊のことかと思いますけども、この賀谷中佐は島尻というか、南部

で戦死だと思うんですけども、その前に泡瀬のあたりにいたということなんですね。そのときに、南部に行くにあたって 1 回解散をして、なんというんでしょうか、土地の人たちを使っていたその解散に当たって、家族などを「集団自決」に追い込むようなことを言ったということなんでしょうか。恩河さん、ちょっと教えてください。まず、南部で戦死する前に泡瀬の辺りにいたのかどうかということが一つと、それから、南部に行く前にそのような苛烈な、ひどい命令をしていったと考えてよろしいんでしょうか。この辺がよく分かっていないので、教えて頂きたいと思います。

**恩 河**：はい、一点目なんですけど、賀谷支隊（独立歩兵 12 大隊）は、第 5 中隊それから機関銃中隊とか、全部で 7 つの中隊を持っていまして、そのうちの第 3 中隊が沖縄市の「こどもの国」に駐屯していたんですね。そのときに、米軍の侵攻と同時に地域の住民を集めて、先生の仰るように「我々は南部に転進するので、皆さんはおうちに帰ってそれなりの始末をしなさい」という、そういうふうに理解できるかと思っています。ただ、本当にそれが軍命なのかを、我々は直接話者から聞いたわけではありませんので、地域の方々が「そういう軍命があって、自殺した、自決したんだよ」と証言でお話しているということです。そういう命令はあったようです。

**参加者 A**：ありがとうございました。

**吉 成**：ありがとうございます。他にご質問ある方はいらっしゃいますでしょうか。もしなければ、第一部はこれで一旦閉じさせて頂いて少し休憩を挟んでから、第二部の基調報告の方へと移っていきたいと思います。恩河さん、伊敷さん、貴重なお話を頂いて本当にありがとうございました。

コラム①

# 私の写真実践【初級編】――父と母と一緒にコザを歩く

上林 梓 *

このコラムを執筆することが決まったとき、頭の中である事がひらめきました。それは、自分の記憶のなかにある場所を訪れて写真を撮ることでした。その場所とは、吉成哲平氏の撮影による「コザ・嘉手納基地へ続くゲート通り」と題された一枚の写真を見た瞬間に、私が想起したコザのことです。

2025 年 2 月上旬、コザを再訪しようと思い立ち、急遽、沖縄へ帰ることを決めました。空港に到着してからコザに向かう途中で両親と合流し、3 人で一緒にコザに向かいました。場所をめぐる記憶とは、非常に鮮明である一方で、その場所に辿り着くために役立つような情報はほとんど含まれておらず、私は、記憶のなかの場所に自力で辿り着けるのか不安に思っていました。ですから、両親が一緒に来てくれることは心強かったですし、何より、久しぶりに親子 3 人で街歩きができることは、ただそれだけで嬉しいものでした。

まず訪れたのが、通っていたピアノ教室があった建物です。その建物は「中頭教育会館」といって、沖縄県教職員組合中頭支部の事務所が置かれています。入口には「沖教組中頭支部」「平和教育文化研究センター」と書かれています。

確か、入口から長いスロープが続いていたはず…。建物の入口に立つと、長いスロープをいくつも折り返しながら上階へと上っていった記憶が鮮明に蘇ります。当時は、（スロープを走るのは禁止だったのでしょうが）「よーい、ドン」と、弟とかけっ

* 大阪大学 21 世紀懐徳堂・特任研究員

**写真 1　「中頭教育会館」の外観。かつて、この建物の最上階のフロアでピアノ教室が開かれていた。（2025 年 2 月 筆者撮影）**

**写真 2　「中頭教育会館」の入口に筆者と母が立っているところ（2025 年 2 月 筆者の父が撮影）**

こ勝負をしながら駆け上がっていたように思います。建物の中に入ると、記憶にある風景が広がっていました。スロープの上部には、スロープに沿って、これまた長い掲示板が続いているのですが、そこには、沖縄の教育関係者の方々による平和教育の取り組み等が掲示されていました。母はそれを見て「昔と変わらないねぇ」と言っていました。当時、私と弟は、その掲示板の前を勇ましく走り過ぎるだけだったと思いますが、平和への思いが漂うこの空間を、当時は多くの子どもたちが行き交っていたんだろうなぁと感じます。

**写真 3　建物の中の長いスロープ（2025 年 2 月 筆者撮影）**

**写真 4　当時、ピアノ教室があった（と思われる）最上階の部屋の扉。残念ながら、当時の気配は感じられない。（2025 年 2 月 筆者撮影）**

**写真 5 「中頭教育会館」から真っすぐ歩いていくと、「一番街」のアーケードの入口が見えてくる。**
**（2025 年 2 月筆者撮影）**

撮影の許可をお願いするために事務所に伺うと、この建物は、老朽化によりもうすぐ取り壊されるとのこと。これを聞いて大変驚きました。再訪する時期が遅ければ、建物を見ることも、このスロープを歩くこともなかったのかと思うと、このタイミングで再訪できたことを一層感慨深く感じました。2023 年の 10 月に「コザ・嘉手納基地へ続くゲート通り」の写真を目にしなければ、私がこの建物のことを思い出すことはなかったでしょうし、本コラムの執筆という機会がなければ、建物を再訪しようという思いが生じることもなかったかもしれません。なんだか不思議なつながりを感じます。

当時、ピアノのレッスンが終わると、「一番街」と呼ばれる商店街の中にある喫茶店「たんぽぽ」へ行き、母と弟と 3 人で昼食をとるのがお決まりのコースでした。幼い頃の私は好き嫌いが多く、外食のときにはカレーライス一辺倒だったため（私を連れて出かける母は大変だったでしょうね…）、「たんぽぽ」での注文も決まってカレーライスでした。

前回のレスポンス[1]でも書いたように、インターネット上では「たんぽぽ」の情報を見つけることができませんでした。ですから、今回「一番街」を訪れたとしても、「たんぽぽ」があった場所すら見つけることはできないのではないかと思っていまし

[1] 上林梓　2023「メディアとしての身体の可能性――「写真実践」における撮影者の〈身体〉と祈りを捧げる子どもの〈身体〉」、三好恵真子・吉成哲平 編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC ブックレット第 18 巻、209-222 頁。

た。なぜなら、「たんぽぽ」の位置情報に関して私の記憶は全く当てになりませんし、かといって、頼みの綱である母も昨今では体調がすぐれず、日々の記憶にも曖昧なところがあるからです。そんな母を連れ出すことに心配もありましたが、「お母さんの体調も良いようだし、3 人で行ってみよう」という父からの後押しがあり、3 人でのコザ歩きがかないました。

母の後ろをついて「一番街」を歩いていくと…あったのです、「たんぽぽ」が。正確には、店舗はすでに閉店しており、「コーヒー たんぽぽ」という看板の跡がうっすらと残されているだけでした。私と父は思わず、「お母さん、よく覚えていたものだね」と顔を見合わせました。今では店内の様子を確認することはできませんが、私の頭の中には、食品サンプルのメニューが飾られていたガラスケースや、店内のテーブル席の様子が蘇りました。

最後に「中央パークアベニュー」に移動し、かつて母の行きつけだった布地屋さんがあった場所を訪れましたが、そのお店は那覇のショッピングモールへ移転したとのことで、現在は別の店舗になっていました。

**写真 6　「一番街」の入口**
**(2025 年 2 月 筆者撮影)**

**写真 7　「一番街」の一角にある、喫茶店の店舗跡。「コーヒー たんぽぽ」という看板の跡がうっすらと見える。（2025 年 2 月 筆者撮影）**

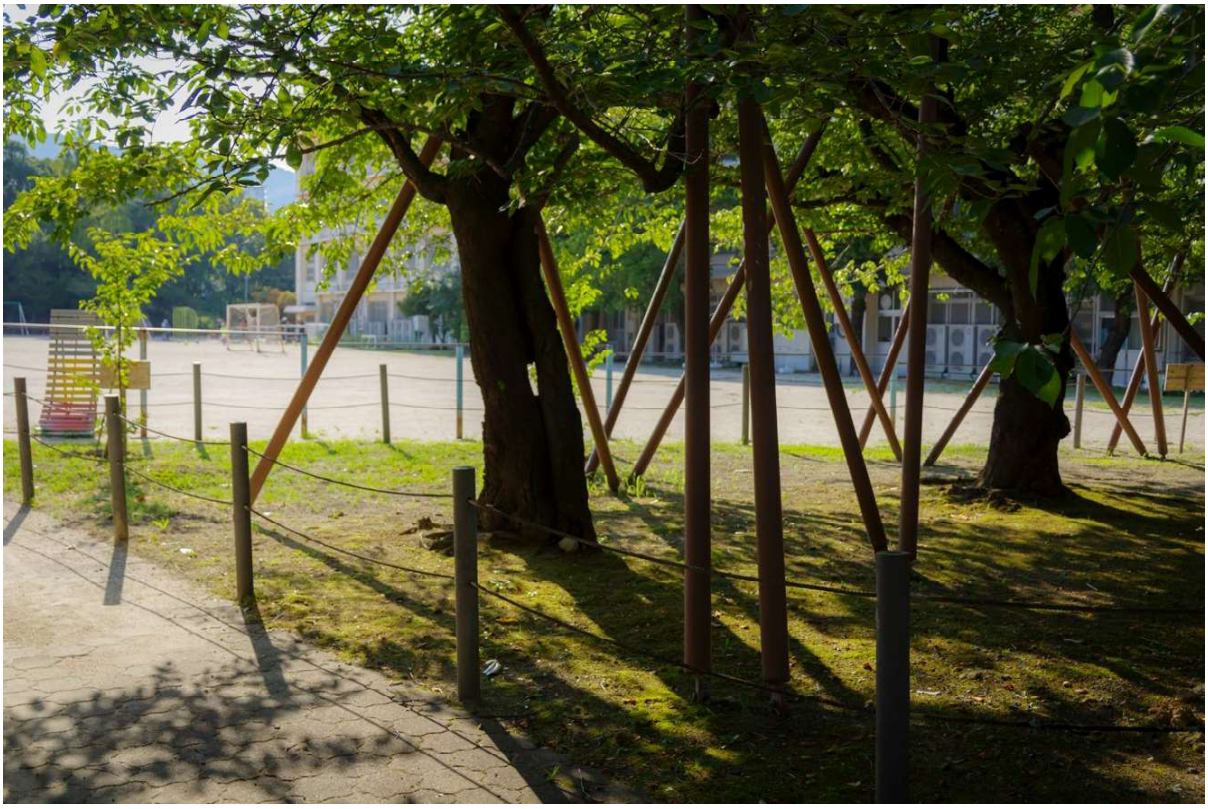
**写真 8 「中央パークアベニュー」を歩く父と母。せっかちな父は、いつも先頭をスタスタと歩く。（2025 年 2 月 筆者撮影）**

今回のコザ歩きが実現したのは、まさに「コザ・嘉手納基地へ続くゲート通り」の写真がきっかけでした。私は普段、風景の写真を撮ることはほとんどありませんし、写真を撮るという行為のもつ意味を深く理解しているわけではありません。ですが、今回の体験を通して感じたのは、誰かの記憶にある場所の写真を撮るということは、時空を超えて、（かつての自分も含めて）他者と同じ場所に降り立つことができる、そんな行為なのではないかということでした。

以上が、私の写真実践【初級編】の記録です。

# 第二部　＜基調報告＞

## 戦争がもたらした社会の変容と向き合う
## 生活者の思想的営為



（長崎・城山小学校の嘉代子桜　2024 年　©Teppei Yoshinari）

# 写真家たちが向き合った1970年前後の現実――「写真100年」の歴史から内省した現場での撮影表現の意味

吉成 哲平 *

## １．はじめに

### １）問題の所在

アジア・太平洋戦争の終結から今年で 80 年の節目を迎える一方、戦争体験者の直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」に差し掛かる中で、戦争体験やその記憶の継承が急がれている。しかし、例えば朝鮮戦争やベトナム戦争など、冷戦下のアメリカの東アジア戦略のもとで日本が戦争と密接に関わってきた歴史を振り返るならば、「戦争／戦後」という枠組みは必ずしも自明なものではない。つまり、歴史学者の成田龍一と社会学者の吉見俊哉が指摘する通り、アジアにひらかれた「複数の歴史空間が重層する場」として「戦後」を捉え直す必要がある（成田・吉見 2005）。そして、見過ごされてきた「戦後」の現実と向き合いながら暮らしてきたひとびとの多様な経験を対話させていくことは、社会学者の道場親信が示唆するように、私たちが生きている「「いま」を相対化し、別様な可能性を学びとること」（道場

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

本稿は、吉成哲平・三好恵真子　2023「写真家たちが向き合った 1970 年前後の現実―「写真 100 年」展を通じた明治期以来の記録への内省―」（『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第 49 号、51-84 頁）をシンポジウムの成果報告として構成を見直し、加筆修正したものである。

2008: 18）へ拓かれていくと考えられる。

以上の「ポスト体験時代」へ向かういま「戦後」を問い直す必要性を踏まえて、本稿では、敗戦後の急速な社会変容を前にした写真家たちの模索から浮き彫りとなる「戦後」の現実を、後述する「写真実践」という独自の方法論をもとに描いていきたい。中でも本稿で論じていくのは、敗戦からの復興と高度成長を成し遂げることで戦後日本が「豊かな社会」に到達した 1970 年前後の現実と、撮影行為を介して向き合ったそれぞれの写真家たちの思索である。「朝鮮特需」がもたらした空前の好景気により国内総生産が戦前の水準を回復し、「もはや戦後ではない」とまで謳われた 1950 年代後半以降、加速していった高度成長によって、日本は 1968 年に当時の西ドイツを抜き、世界第二位の経済大国となった。その一方で、1965 年にはアメリカが北ベトナムへの爆撃を開始し、ベトナム戦争が激しさを増す中で、日本では学生運動や公害問題、日米安保改定、そして沖縄返還等の「戦後」の繁栄の矛盾が各地で噴出していった。

このように戦後史の一つの転換点としての 1970 年前後は、日本写真史においてもまた重要な転機となっている。特に、1968 年に開催された「写真 100 年―日本人による写真表現の歴史展」（主催 : 日本写真家協会。以下、「写真 100 年」展）は当時の写真家たちに鮮烈な衝撃を与えつつ、一見すると「豊かな社会」の影に置かれた現実をいかに捉えられるのかについて彼ら彼女たちを模索させていくことになった。同展は、戦前から北国の風土や民俗のルポルタージュを中心に活躍してきた写真家である濱谷浩（1915-1999）を筆頭に、東松照明（1930-2012）、多木浩二（1928-2011）、内藤正敏（1938-）、中平卓馬（1938-2015）らが編纂を担い、写真が日本へと到来した幕末・明治から終戦までの約 100 年間の写真家たちの歴史を初めて体系化した展覧会であった。この展示は東松を始め、戦後世代の写真家たちにより主導された点でも画期的であり、日本本土から集められたおよそ 3 万枚にのぼる写真の中から総数 1640 点の写真が出展された。

第 2 章で述べる通り、「写真 100 年」展に関してこれまで写真史や写真論の既存研究では、展示に向けた収集作業を通じて発見された明治初期の北海

道開拓写真に代表される、膨大で「匿名的」な写真群を通じて浮かび上がってきた写真表現の歴史が当時の写真家たちの表現に与えた影響について強調されてきた。すなわち、同展は「偉大な作家、確固とした作家意識、偉大な作品」に特徴付けられる「近代写真」の崩壊を決定付けた出来事であるとされ（戸田 2012）、具体的には、同展に触発された中平や多木らが刊行し、「アレ・ブレ・ボケ」等の新たな表現方法を展開した雑誌『プロヴォーク』（1968-1970 年）などのラディカルな表現をめぐる運動へと繋がっていったことが今も象徴的に語られている。言い換えれば、「写真 100 年」展は、それまでの主流であり、敗戦後の社会の現実を鋭く捉えた「リアリズム写真」の退潮を後押ししつつ、広告写真や日常への私的な眼差しを重視した「コンポラ写真（contemporary photography）」の隆盛等、70 年代以降に多様化する写真表現への転換を促していったことがこれまで論じられてきた。

しかし、これらの既存研究において「写真 100 年」展の意義は、写真家の「表現意識」への懐疑とその反面での匿名的な「記録」の肯定という、概して定型的な図式の中で議論されてきたことが窺える。つまり、1970 年前後の「豊かな社会」の達成とその影に直面していた当時の写真家たちが、この写真展から果たして何を受け止めながら撮り続けていったのかが見落とされてきた課題が浮かび上がってくる。後述するように、「写真 100 年」が写し出した近代日本の歴史への反省は、職業的写真家だけに留まらない当時のアマチュアたちへも広く衝撃を与えていった。すなわち、同展がひとびとに及ぼした影響は、「開道百年」を迎えた北海道、三里塚、水俣、そして「復帰」に揺れる沖縄など、各地で顕在化する高度成長のひずみを前に、撮ることの暴力性や、撮影者と被写体との間の非対称的な関係性を各々の写真家たちが問いながら同時代の記録のあり方を模索した重要性（鈴木 2005:33-35）へ拓かれていく側面にも留意する必要がある。

### ２）研究の目的

そこで本稿では、1970 年前後に活動した当時の写真家たちが、幕末・明治維新以来の「写真 100 年」の歴史を回顧する中で同時代の現実といかに向

き合おうとしていったのかを、これまで筆者らが提起してきた独自の方法論である「写真実践」より明らかにしていきたい。ここで言う「写真実践」とは、写真家たちが刻々と残していった多様な表現媒体を渉猟し、当時の時代背景も踏まえた上で、彼ら彼女たちが撮影行為を介して受け止めていった現実を体系的に捉え直す方法論である。この方法論は、現在から過去を回顧するのではなく、写真家たちが見えない未来を眼差しつつ撮影を続けていった当時の視点に降り立つことに加えて、彼ら彼女たちの見つめた現場に筆者らが足を運びつつ、再帰的な撮影活動も積み重ねながら相補的に論証していくことを特徴としている（吉成・三好 2024, 2025）。

これまで筆者らは、「戦後写真の巨人」とも称され、少年期の敗戦と占領体験を原点としつつ、被爆後の長崎や復帰に揺れる沖縄などの戦後社会を生涯撮り続けた東松照明の撮影表現の軌跡を「写真実践」より辿り直すことで、彼が表現し続けた「戦後」の生活者の思想的営為を描いてきた（吉成・三好 2021, 2022a, 2022b, 2022c）。そして、それは敗戦後の「アメリカニゼーション」に翻弄され、葛藤しながらも脈々と営まれていったひとびとの「戦後」の暮らしであることが見えてきた。すなわち、1960 年代初頭に長崎を初めて訪れる中で、見過ごされた被爆者の窮状を知ったことへの衝撃から、東松は数十年をかけて長崎を撮り続ける過程で、一人ひとりの「被爆者」を「生活者」として捉え直していった（吉成・三好 2021）。また、1969 年に初めて訪問した復帰前の沖縄では、米軍統治下の「基地の中の沖縄」に生きるひとびとの現実を、本土に暮らす「私たち」の問題として拓いていったのである（吉成・三好 2022c）。

とりわけ、「写真 100 年」展の開催当時は、東松が沖縄での撮影を深めていく時期に差し掛かっていたことに留意したい。既存研究でも、復帰を目前に控えた沖縄へ渡るにあたり「被写体のための写真、沖縄のために沖縄へ行く」ことを掲げた東松の撮影活動に関して、「写真 100 年」展を含む 1970 年前後の「記録」のあり方を巡る自問が背景にあったことが示唆されてきた（金子 2013a, 2016）。つまり、同展が当時の写真家たちに模索させていったそれぞれの立ち位置を解明することは、復帰前後の激しく揺れ動く沖縄の現

実を東松がいかに表現しようとしたのかを描く上でも見逃せない[1]。

従って、以下第 2 章では 1970 年前後の写真表現の潮流を押さえた上で、「写真 100 年」展に関する先行研究とその課題を精査する。そして、続く第 3 章ではこの展示が開催された当時、「戦後」の繁栄の基盤としての「明治」が国を挙げて称揚される一方、明治維新以来の度重なる戦争がひとびとにもたらしてきた痛みが鋭く問い直されていた歴史的状況について確認したい。以上の近代国家としての日本の歴史への相異なる当時の評価を念頭に置きつつ、第 4 章では「写真 100 年」の歴史への内省から、当時の写真家たちがいかに 1970 年前後の現実へと向き合ったのかを明らかにする。最後に終章となる第 5 章では、大日本帝国下で生きた民衆の営為を克明に写し出した「写真 100 年」の歴史を振り返ることで、国家が再び戦争へとひとびとの暮らしを駆り立てていきかねない未来への危惧を同時代のひとびとに抱かせていたことを浮かび上がらせていく。

## ２．写真表現の転換を踏まえた「写真 100 年」展を巡る先行研究とその課題

### １）「写真 100 年」展を巡る先行研究とその課題

「写真 100 年」展を巡る先行研究とその課題を精査していくために、本節ではまずその背景として、敗戦から 70 年代前半にかけての写真表現の潮流を概観しておく。既報（吉成・三好 2021）でも整理したように、敗戦後から 1950 年代にかけては、写真家の土門拳が提起した「リアリズム写真」と、編集者であり写真家でもあった名取洋之助が戦前より広めてきた「報道写真（組写真）」の二つの潮流があった。そして、1960 年前後からは東松照明、奈良原一高、細江英公らが結成した写真家集団「VIVO」に象徴される写真の視覚的な効果を重視した「映像派」世代の写真家たちが新たに台頭してい

[1] 復帰前後の沖縄での撮影表現を巡る東松の模索に関しては、別稿（吉成・三好 2023）も参照されたい。

く。他方で、その後の「写真 100 年」展が開催された当時は、経済成長に伴う社会の価値観の多様化を背景として、写真表現においてもそれまでの特定の「主義」や「スタイル」が生じにくくなっていった（飯沢 1999: 87）。例えば写真史家の飯沢耕太郎は、1960 年代後半以降に多様化した写真表現の特徴として、広告写真の活発化やベトナム戦争の記録が社会に与えた影響力の大きさ、また、旅の経験や民俗学への関心の高まり等を挙げている（前掲書:87-96）。

とりわけ上述の飯沢の指摘に関して重要であるのは、この時期に激しく展開された学生運動が象徴するように、政治、経済、文化の広範な領域で戦後体制への根本的な異議申し立てが進む中、写真の領域においても「ラディカルな問題提起」がなされたことである（前掲書: 89）。すなわち、従来の「個」としての写真家と「世界」との確かな結びつきに疑問を投げかけつつ、いわゆる「アレ、ブレ、ボケ」などの表現技法に特徴付けられる「従来の写真の美学や文法を徹底的に破壊した断片的な映像群」（前掲書: 90）が活発に提起されていった。これは、写真家の中平卓馬や多木浩二らが刊行した雑誌『プロヴォーク』の活動に収斂していく。

一方、飯沢によれば、『プロヴォーク』の写真家たちの姿勢と対照をなしたのが「コンポラ写真」の隆盛であった。これは、1966 年にアメリカで開催された「コンテンポラリー・フォトグラファーズ　社会的風景に向かって（Contemporary Photographers: Towards a Social Landscape）」展に見られる、私的な眼差しから日常的な光景や出来事を淡々と写した写真と共通する特徴が、日本の若い世代の写真家たちにも見られたことを背景としている（前掲書:91）。つまり、『プロヴォーク』の写真家たちと共通して、「コンポラ」写真の撮り手たちも「既成の価値観に対する不安と危機意識」を抱きつつ、より醒めた視点で自己と他者との関係性を捉えていたとされる（前掲書: 92）。このように、価値観の多様化する 1970 年前後の状況を背景に、それまでの社会問題をストレートに捉えた写真とその「公共性」への懐疑の念から、「私的領域、個人の内面」等の「私性」を重視した写真表現への変遷が見られた（戸田 2012: 78）。

２）「写真 100 年」展を巡る先行研究とその課題

以上の「写真 100 年」展の開催当時の写真表現の潮流を念頭に置いた上で、この写真展を巡る先行研究とその課題点を整理していきたい。前述の通り、同展の開催に際しては、長崎に写真が渡来した幕末から終戦までの約 100 年間を対象に、1966 年から約 1 年間をかけて「北は北海道から南は鹿児島まで」の「日本全土」を取材することで約 3 万 5000 点の写真が収集、複写された。その展示の目的は、「現在という時点から写真表現の 100 年の歴史をかえりみ、それを次の時代へと投射してゆくこと」であった（渡辺編 1968）。

当時の展示の模様や写真表現の歴史的展開に関しては先行する論考（鳥海 2010；土屋 2009, 2013a）に詳しいが、ここで約 1 世紀にわたる写真表現の変遷について簡潔に整理しておくと、当時の会場図録には、「写真 100 年」の終わりである「戦争期・原爆」に至るまでの流れが以下の通りまとめられている。

> 「感材に適切な光をあてれば物の影を定着することができる、という素朴な驚きにみちたれい明期、それに続く、田本研造に代表されるような記録精神にみちみちた第一の開花期から、明治、大正の営業写真館全盛期をへて、ようやく大衆社会が成立し、その歴史的要請からグラフ・ジャーナリズムが確立し、その上に支えられてアブストラクト、シュール・リアリズム、ノイエ・ザッハリヒカイト、また自然主義的なリアリズムと多くのエコール（流派）が咲き乱れる第 2 の開花期へと写真の歴史は時に澱み、時に沈滞しながらも、しかし確実に成生・発展してきました。」（渡辺編 1968）

こうした「写真 100 年」の流れを念頭に、同展の特徴を整理した論考としてはまず鳥海（2010）が挙げられる。鳥海は当時の展示パネルの調査に加えて、編纂委員を務めた松本徳彦への聞き取りをもとに、明治初期の田本研造（1832-1912）に代表される北海道開拓時代の写真（写真 1 等）、明治後期以降に隆盛した「芸術写真」、陸軍報道部員であった山端庸介（1917-1966）が

**写真 1　「一の村(現在の札幌)の景　作者不詳　明治 4 年ころ」（日本写真家協会編 1971: 26）**

撮影した「原爆の長崎」、そして戦中の「国家宣伝」の写真が特に影響力を持ったと論じている（鳥海 2010: 13-15）。加えて同展は、プロとアマチュアを問わず、当時埋もれたままとなっていた写真の発掘・収集・保存の必要性を訴えたこと、その総括としての写真集『日本写真史 1840-1945』（1971 年、以下『日本写真史』）の出版に結実した点、そして、この展示が東松ら当時の若手世代の写真家により発案、編纂されたこと、更には、当時の写真家たちに「写真とは何か」を問いかけた点を同展の意義として指摘した（前掲論文: 15-17）。

また、美術批評家の土屋誠一（2009, 2013a）による論考は、東松や多木ら当時の中心的な編纂委員への聞き取りにも基づいており貴重である。中でも、「写真 100 年」展の「暗示的」な主題として、十五年戦争下の写真家の戦争責任の問題があったことを強調する点は見過ごせない。つまり、同展から浮かび上がるのは、戦前の写真家たちが写真の記録性への「自覚的な反省」を行わないままに、自己表現の手段として写真を用いた結果、国家による虚構的な戦争報道へ動員されていった「負の歴史」であった（土屋 2009: 247-249）。その上で、「写真 100 年」展では当時まだ存命であり、戦前から活躍してきた「権威的な」写真家たちの個別の戦争責任の追求までは行われなかった限界性も指摘している [2]。それゆえに、同展が写真「表現」の歴史を主題に掲

[2] 十五年戦争を巡る写真家の戦争責任の受け止めについては「報道写真」の歴史に関する先行研究を通じ整理されている。例えば白山(2014)は、「写真 100 年」展と同時期の写真家たちによる座談会の中で、戦前から戦後への写真表現の連続性を振り返る時、それまで対外宣伝に従事していた写真家たちが一転して戦後の新たな体制に「順応」ないしは「転向」していったことが疑問視された点を指摘する(白山 2014: 451-453)。また、このように概して戦後の写真界で戦時

げてはいたものの、写真家の表現意図を超えて克明に記録された田本らの北海道開拓写真と山端による長崎の原爆写真が当時高く評価されていたことを土屋は最も注視している。つまり、多木や中平らが戦前の近代的な「表現」のあり方を暗に批判しつつ、写真史において「写真＝表現であるという素朴な因習的理解を切断する」ために、当時の撮り手の意図を超えて歴史に残った「アノニマス」な「記録」としての写真の重要性がとりわけ訴えられていたとしている（前掲論文: 246-247）。

以上の通り、「写真 100 年」展とその総括である『日本写真史』は、写真史において、当時の写真家たちによる新たな写真表現の潮流を後押しする一方、リアリズムに代表される「写真が出来事の正確な記録であり、写真家が忠実な報告者であるという近代写真の理念」を「崩壊」させていった決定的な転換点として位置付けられてきた（戸田 2012: 49）。そして、それは写真史において叙述される主体を、従来の職業的写真家だけに留まらず、それまで「無名であった写真家たち」や「明治初期・中期の営業写真師や新聞カメラマン」、「アマチュア芸術写真家たち」等の「忘れられた古い写真家たち」へも広げつつ（戸田 2012: 84；鳥原 2013a: 196-197）、そこに写された多様な「被写体」を見出していった[3]（戸田 2012: 84）。

以上の写真史や写真論の先行研究の精査からは、これまで「写真 100 年」展に関して、編纂に携わった写真家たちが従来の「自己表現」としての写真表現を否定的に捉えた反面で、匿名的な写真の「記録」の重みを評価していた点に概して議論が集中しつつ、論じられてきたことが分かる。そして、「アノニマス」な記録より浮かび上がる歴史からは、戦時下の写真家たちの対外宣伝の虚構性に行き着く、「近代的な主体意識」の未熟さが露わとなったこ

---

下の活動を反省した者は少数に留まりつつも、例えば濱谷のように戦争協力への「慙愧の念」から戦後を歩んだ葛藤が具体化されている（井上 2014: 109）。

[3] なお写真史家の戸田昌子は、『日本写真史』の成果として、それが戦前に隆盛した「芸術写真」以降の近代的な主体意識の登場を明らかにした点を挙げる一方（戸田 2012: 65,69）、例えば家族アルバムのように、写真家だけではなく写真を享受する側が主体となる写真史を構想出来なかった限界性を指摘している（前掲書: 84）。

とを背景に生まれた中平や多木らの『プロヴォーク』など、70 年代の新たな写真表現の評価へと既存研究（小原 2013；高島 2010；戸田 2012）では議論の力点が置かれてきた。

しかし、このように「写真 100 年」展を契機とする写真表現の転換という側面を強調した先行研究では、当時の東松も述べていた通り、展示に携わった写真家たちが先人の意志を受け継ぎつつ（東松ほか 1968: 223-224）、「写真 100 年」という歴史の重みを人びとに伝えようとした当時の意図から議論が乖離しがちであった課題を指摘したい[4]。つまり、「写真 100 年」の歴史を当時の写真家たちがいかに内省しつつ、1970 年前後の「豊かな社会」の現実と向き合っていったのかについて、当時の歴史的状況も踏まえた上で読み解き直す必要がある。

加えて、これらの先行研究の中には、幕末・明治期の写真技術の導入以後の「写真の近代化」と、明治維新以降の「日本の近代化」が互いに結びつくことで、「写真 100 年」の歴史が写真評論や写真研究では肯定的に捉えられてきたことへの批判も見られる。例えば前出の土屋は、明治期の北海道の開拓に、当時の写真が「結託」していた問題点がこれまで議論されてこなかったことに疑問を呈している[5]（倉石ほか 2013: 17）。しかし、上述した従来研究の課題点を踏まえるならば、「写真 100 年」展に携わった当時の写真家たち自身が、その歴史を近代日本の発展と結びつけながら肯定的に捉えてい

---

[4] 戦中から戦後世代の写真家たちへ受け継がれた思想とは、前者が提唱した「リアリズム写真」に見られる「ヒューマニズムに基づいた写真家の主体」のあり方であったと論じた久後香純の研究は、戦争責任を巡る両者の世代間対立の側面を強調しつつも、その連続性を捉えており重要である（久後 2022）。本稿では、こうした議論も参照しつつ、世代を超えて当時の写真家たちが直面していた現実を描いていきたい。

[5] 例えば木下直之（1999）は、明治の新国家建設の可視化にあたり写真記録が当時の社会からの期待を背景に積極的に利用される中で、北海道開拓写真が政府から見れば「開拓」の写真であったが、先住民側から見れば「侵略」の記録写真にほかならなかった点を指摘しており（木下 1999: 7）、こうした批判は必ずしも当てはまらないように思われる。

たのかについても慎重に再検討する必要がある[6]。そこで次章では、同展が開催された当時の歴史的状況について、とりわけ近代日本に対するひとびとの眼差しを軸に把握していきたい。

## ３．近代日本の戦争が遺したものが問い直された 1970 年前後という歴史的状況の把握

### １）「明治百年祭」に見る近代化の称賛と戦争の記憶の忘却

「写真 100 年」展が準備、開催された当時、高度成長がピークに達していくことで、明治維新以来の近代化の歴史が国家規模で再評価されていた。歴史学者の鹿野政直は、欧米列強に伍して辛くも日本が勝利した日露戦争を描いた司馬遼太郎の『坂の上の雲』（1968～72 年）が人々に広く読まれたことに象徴されるように、1960 年代以降の経済大国化に伴い、昭和戦前の「狂信性」を否定しつつ、戦後の繁栄の源流としての「明治」を高く評価する史観が台頭していったことを指摘している（鹿野 2008b: 54-55）。鹿野の論じる「明治の“健全性”を強調する視点」に関してとりわけ押さえておきたいのは、「写真 100 年」展の開催と同じ年の 1968 年に政府が開催した「明治百年記念式典（以下、明治百年祭）」であり、その「官製」の歴史観に対して当時の少なくないひとびとが抱いていた危惧についてである。

歴史学者の石居人也によれば、「明治百年祭」は、当時若い世代に共通して愛国的な精神が薄れていることへの政府の危機意識を背景に、敗戦後の急速な復興と繁栄をもたらした強固な基盤である輝かしい「明治」を顕彰するための国家的事業として実施された（石居 2018: 38-39）。しかし、明治維新以降の国民国家としての日本の歴史を、近代化の「成功物語」として賛美することは、その影に置かれて厳しい生活を強いられてきた約 1 世紀にわたる民衆の犠牲をともすれば覆い隠す危険性があった。

---

[6] なお、当時の「写真 100 年」展には「満州」のセクションが設けられる一方で、植民地統治下の朝鮮、そして台湾で撮影された写真が展示されなかった課題点については侯（2019）が論じている。

例えば当時、歴史学者の色川大吉は「明治百年祭」の開催を前にして、明治維新の成功により「日本の近代化が世界史にもまれに見る発展を示し」、そして今日の日本が「アジアにおける最大の、また唯一の工業化に成功した国として繁栄している」ことを政府やジャーナリズムが国民的に祝うべきとしたことに強く反発していた（色川 1968: 82）。なぜなら、戦前を振り返れば、日清、日露、日中、太平洋戦争等の大戦を除いても「日本の対外出兵の数は十一回に及び」、その死者はおよそ「五百万」人に達した。そして、「戦争していなかった期間の方が短かった「明治百年」」の間に、「日本の産業化・工業化の発展」が「非常に多くのアジア人の犠牲とわが民衆の犠牲のうえに、無慈悲に推し進められてきた」からである。つまり当時の色川には、「明治百年祭」がそうした歴史を「吹っ飛ばしてしまって、お祭り気分でわれわれが明治を回想する」ことに対する強い危機感があった（前掲書: 83）。

加えて、後年から振り返る時、1966 年から 68 年にかけての「明治百年祭」の準備期間は、当時国論を二分していたベトナム戦争の支持を政府が明確化していく過程とも重なっていた。それゆえ、「明治百年祭」はアメリカの傘の下で東南アジアへの経済進出を進めようとする佐藤栄作内閣が国民の支持を集めていく役割を果たした点[7]（石居ほか 2018: 221）も見過ごせない。つまり、1970 年の日米安保改定を控えた経済大国としての戦後日本が、「愛国的エネルギー」の涵養を通じて再びアジアへ進出する足がかりとすることを「明治百年祭」の挙行は企図していたのである。

しかし留意したいのは、以上の高度成長期を通じた戦後意識の変容の一方で、泥沼化するベトナム戦争にアメリカを通じて日本も加担していることに触発されて、先の大戦における日本の侵略性や加害性を見つめ直す気運が徐々に高まっていったこと（吉田 2005: 144）である。つまり、経済成長による自信にも支えられ、アジア解放を目指した行為として先の大戦を読み替えようとする試みが生じながらも、ひとびとに刻み込まれた「帝国―植民地」

[7] ただし、この時代には明治期を生きた人びとがまだ存命であったため、「明治の歴史に関するさまざまな亀裂」が残っていた（石居ほか 2018: 229-230）。

経験が問い直されていった。とりわけ、歴史学者の成田龍一によれば、1960年代半ばから70年代にかけて、「空襲・銃後、「満蒙」開拓・強制連行」が語られ始め、「引揚げ」や「抑留」を巡る新たな証言も現れることで（成田2020: 167）、大日本帝国下で起きた「過去の「事実」」を未だ覆い隠したままの「現時の「日本」」のありようが鋭く問われていたのである（前掲書: 242）。

２）高度成長の裏側で「棄民」とされつつあった「ぼくら」

そして、以上の「帝国―植民地」経験の問い直しは敗戦により日本が喪失した「外地」の問題だけに留まらず、敗戦後も継続する「内地」の問題でもあった。特に、「写真100年」展を通じて写真家たちに衝撃を与えた開拓写真に象徴される北海道は、明治期の入植に加えて、敗戦がもたらした新たな「植民地化」の歴史と結びついていた。

敗戦により樺太と千島を失った日本では、終戦前から既に生じていた食糧難と外地からの引き揚げ者を中心とした人口移動により、北海道がその移住開拓地として新たに見出されていった（葛西 2017: 18）。そして1950年代に入ると、大規模酪農経営を目指した根釧パイロットファームの開拓事業など、多額の国家予算が投入された政府主導の開発が進められ（前掲論文: 19）、引き揚げ者や復員軍人など全国からの入植が行われた（番匠 2014: 192）。しかし、乳牛の疫病の発生や入植時の多額の負債を背景に、60 年代に入ると、機械化された近代酪農の理想からは離農者が続出していく[8]（前掲書: 191-192）。

それゆえに、経済的繁栄をもたらした国家は果たして本当に暮らしを守るのかが、ひとびとの戦中・戦後体験から当時問い直されていたことは見過ごせない。思想史研究者の葛西弘隆が論じるように、中でも『暮しの手帖』の

[8] 例えば社会学者の番匠健一は、炭鉱労働に従事していた長崎から新たな生活を求めて北海道へ開拓に向かう一家の足跡を描いた同時期の映画『家族』（1970年、山田洋次監督）を巡り、それが高度成長の「物質的な分け前にあずかれない人の視点」から当時の「繁栄」の実相を浮かび上がらせていたことを指摘している（番匠 2014: 192）。

編集者であった花森安治による当時の北海道論は、そうした国家の正統性への根底からの懐疑を投げかけたものであった。葛西によれば、花森は 1960 年代に執筆した北海道を巡るエッセイの中で、明治初期の中央政府から切り捨てられた戦前の北海道を切り開く「無名の人びとの努力」に息づいていた「開拓者精神」が、戦後の中央政府主導の開発により失われていった現状を説いていた[9]（葛西 2018a: 21）。特筆すべきは、戦中の無秩序と敗戦後の混乱による飢えを前に、時の政府は役に立たなかったというかつての花森自身の苦い経験が思い起こされることで、彼は衣食住という日常生活の具体性に即した民主主義政治の実現を求めていた点である（前掲論文: 24-27）。すなわち、花森は高度成長を通じた「豊かさ」の達成により社会的想像力が失われ、政治的には保守化し、人々の間に無関心が広まってゆく 1960 年代から 70 年代にかけての政治経済体制を前にして、「ぼくら」が既に「棄民」となりつつあることを問いかけていたのである（前掲論文: 27-28）。

## ４．「写真 100 年」展が写真家たちにもたらした衝撃と撮影表現を巡る各々の模索

### １）分析対象となる資料とその方法

以上の 1970 年前後の歴史的状況を念頭に置いた上で、分析対象となる資料とその方法を整理しておく。まず、本稿での分析の中心となるのは、「写真 100 年」展の総括として 1971 年に刊行された『日本写真史 1840-1945』（平凡社）である。この写真集には、1968 年の展示を基に幕末・明治から敗戦までの時代を写した 700 枚近くの写真が収録されると共に、以下表 1 としてまとめた通り、その写真表現の変遷に関する 11 の章からなる写真家たちによる解説文が掲載されている。加えて、分析にあたっては、同展に携わった

[9] ただし同時に葛西は、当時の花森の視野には先住民族であるアイヌの人びとの存在が入っていなかった課題点を指摘していた点（葛西 2018a: 22）に留意する必要がある。

**表 1.『日本写真史 1840-1945』に掲載された解説項目とその執筆者名**
**（日本写真家協会編 [1971]より筆者作成）**

| 主要項目 | 執筆者 |
|---|---|
| 「はしがき」 | 多木浩二（写真家） |
| 「黎明期」 | 内藤正敏（写真家） |
| 「開花期」 | 内藤正敏 |
| 「戦争の記録 Ⅰ」 | 東松照明（写真家） |
| 「芸術写真」 | 東松照明 |
| 「展開期」 | 多木浩二 |
| 「カメラの眼」 | 玉木素（評論家） |
| 「広告と宣伝」 | 多木浩二 |
| 「戦争の記録 Ⅱ」 | 多木浩二 |
| 「写真表現の自由と規制の歴史」 | 奥平康弘（憲法学者） |
| 「カメラと感光材料の発達」 | 内藤正敏 |

写真家たちが当時の社会をいかに捉えていこうとしたのかを併せて押さえるため、1960 年代後半から 1970 年代前半にかけて刊行された雑誌や新聞記事等の多様な表現媒体も分析の対象としたい。とりわけ本稿で着目するのは、「写真 100 年」展を主催した日本写真家協会の会報である『日本写真家協会会報』と『アサヒカメラ』（朝日新聞社）である。前者では、「写真 100 年」展を含む戦後写真史に関する戦前、戦後世代の写真家たちの座談会の発言録が掲載されている。また、後者では「話題の写真をめぐって」と題して、伊奈信男や渡辺勉ら戦後写真史を代表する当時の写真評論家たちを中心に、写真家だけでなく、作家や研究者など、様々なジャンルで活躍する人々を毎月ゲストに招きつつ、当時、各種媒体で話題となった写真が取り上げられていた。中でも、後者における参加者たちの議論は、当時の写真家たちが直面していた課題を読み解き直す上で貴重な証言であると考えられる。従って、以上で述べた当時の多様な表現媒体を駆使することで、「写真 100 年」の歴史を振り返りつつ、写真家たちが 1970 年前後の揺れ動く社会状況といかに向き合っていったのかを「写真実践」より具体化していきたい。

２）「写真 100 年」の歴史から写真家たちが受けた衝撃

はじめに「写真 100 年」展より浮き彫りとなる事柄として確認したいのは、この写真展が同時期の「明治百年祭」において称賛された近代化の歴史とは一線を画していたことである[10]。例えば、田本研造が中心となり精力的に撮影した明治期の北海道開拓写真に関して、編纂委員の一人でもあった写真家の内藤正敏は、当時の写真師たちが緊張感をもって「対決」したその苛酷な現実について以下のように記している。

> 「北海道の開拓は明治 2 年（1869）から、乞食や浮浪者、あるいは戊辰戦争で最後まで幕府側に戦って敗れた会津の降伏人の入植によって始まった。つづいて明治 3～4 年（1870～1871）に戊辰戦争で敗れた東北の士族団が入植し、彼らの多くは賊軍ゆえにほとんど保護を受けることもなく、餓死寸前の苛酷な開拓を続けなければならなかった。／その後、明治 7 年（1874）から 36 年（1903）にかけて屯田兵の入植、つづいて明治 14～15 年（1881～82）から開拓史上最も冷酷無比な囚人の強制労働によって道路建設や炭鉱採掘が行われ、明治 30 年（1897）ごろから土工を監禁して牛馬の如く働かすタコ部屋制度によって、多くの鉄道が建設されていくのである。華々しい北海道の開拓こそ、最も弱くて貧しい人間たちの血ぬられた慟哭の歴史だったといってよい。」（内藤 1971: 366-367）

つまり、戊辰戦争に敗れた士族たちの入植に始まり、屯田兵や囚人等の酷使に象徴される開拓の華々しさの裏側の「慟哭の歴史」と写真師たちとの対峙に同展では目が向けられていた。第 2 章で整理した通り、「写真 100 年」

---

[10] 現に東松は「写真 100 年」展開催直後の座談会の中で、同展が「明治 100 年を記念する国家事業」と開催時期が偶然同じであったために誤解を受けるとしつつ、「官製の明治 100 年展とは全く関係がない」ことを強調していた（伊藤ほか 1968: 24）。

展を巡る既存研究では北海道開拓写真の「匿名性」が概して重視されてきた一方、内藤は、当時の写真師が直面していた明治政府による近代国家建設の苛酷さを読み込んでいたことが分かる。そして、戦前の写真家たちが「現実から逃避」し「末梢的な技術」に走ることで見失っていったこれらの「第一の開花期のドキュメントの芽」は、「現代につながるドキュメンタリーの誕生」でもあった（渡辺編 1968）。つまり、克明に写された開拓写真は、1970年前後の現実を直視しつつ、歴史に記録していく重要性を当時の写真家たちに広く投げかけていたことが窺える。例えば、アマチュアである全日本学生写真連盟（以下、全日）の学生たちも同展に触発されることで、北海道の開拓 101 年目の現状を表現しようと「北海道 101」キャンペーンを展開していた。当時の全日の会報には、「開道百年」を迎えた北海道の撮影への決意が以下のように綴られている。

> 「明治初頭の写真家田本研造は、北海道開拓写真のありさまを、当時の状況とはげしく対峙する中で撮った写真として残している。（中略）今年開道百年がただ単に、お祭的かつ観光のキャッチフレーズとしてのみとらえようとしている時、われわれはこれに対して懐疑と怒りに似たものを抱き、写真でわれわれがしていかなければならないことを考えざるをえなくなった。」（全日本学生写真連盟 1968）

つまり、北海道開拓写真は遠い明治の歴史の一頁としてではなく、高度成長がもたらした「豊かな社会」の影で覆い隠された当時の現実へと地続きの問題として、プロとアマチュアを問わず、衝撃を与えていた点に留意したい。なぜなら、これらの写真群は、近代日本の歩みの中で「失ったものの累積の結果として今日があること」（福島 1974=2012: 317,320）を当時の少なくないひとびとに鋭く喚起させたからである。特に全日を主導し、安保闘争に揺れた 1960 年前後には東松照明らと共に写真家集団『VIVO』の結成の立役者となった写真評論家の福島辰夫は、明治の開拓以来の苦難の歴史の先にある 1970 年前後の北海道の現状を、次のように問いかけていた。

「そして今は……依然として室蘭は日本が鉄と石炭に賭けて以来のいわきの煙を吐きつづけ、閉山と落盤事故の相継ぐ炭鉱があり、引揚たまま動けなくなった人々の住む稚内があり、永山則夫があり、東京へ出してやった息子の出世を念じながら、なおオホーツク沿岸の飯場で働く、腕に落盤の大きな傷跡をもつ老いた父親があり、三人の父と二十なん人の兄弟をもち、給料をもらうと、その母や兄弟たちに、せっせと買物をしては送っているまだ十代の札幌へ出てきた女の子、そして礼文島でのその母親の想像を絶するような生活があり、そんなこととおかまいなしに、いま、急速に北海道を変えつつある高度成長の日本と、いたるところの自衛隊がある。人々のなかにはなにがあるのか。」（福島 1971: 140-141）

つまり、見過ごされてきた膨大な写真群から「写真 100 年」の歴史を振り返った当時の写真家たちが最も強い衝撃を受けた事柄の一つとは、明治以降の近代国家建設に伴う無数のひとびとの苦難と死とが忘却され続けながら、高度成長を通じた繁栄の頂点に戦後日本が立とうとしていることであったと言える。例えば中平卓馬は、編集途中の「ドキュメント」に収録された写真を見た友人が、「日本の近代はおびただしい死体の上に築かれてきた、しかしその中のどれ一つとして名誉ある個人の死はなかった」という感想を残したと記している。その上で、「実に市民あるいは民衆の側からの権力への抵抗がこれほど無かった、あるいは少なかった国は世界史においてもそう類を見ないのではあるまいか」と自問していた（中平 1968: 129）。

一方で、これら近代日本の「ドキュメント」の鮮烈な衝撃が同時に彼ら彼女たちへ問いかけたのは、先人の写真家たちの民衆に対する視線の弱さという課題でもあったことが分かる。例えば、「写真 100 年」展開催直後の濱谷や東松ら編纂委員たちを交えた座談会の中で写真評論家の伊藤知巳は、写真家たちが十五年戦争へと流れ込んでいった問題点に触れた上で、同展が「民衆にむける眼がひ弱だったということを痛切に一面で告発してるし、提示し

てるし、このことをもっと考えないといけない」と指摘している。そして、「共産党の被告たちが数珠つなぎになっていく写真」や「鉱山に働く婦人や少年労働者が這ってスラをひく写真」等に「もっとカメラをむけていかなきゃいかん」と訴えていたのである[11]（伊藤ほか 1968: 23）。

このように、当時の議論を辿り直すことで浮かび上がるのは、これまで既存研究において「写真 100 年」展の開催意義の一つとして指摘されてきた写真家の戦争責任の提起という論点が、先人の写真家たちが「主体的」に現実と関わってこなかった過去への反省という文脈から語られ、それは民衆への視線の弱さという課題に収斂していたことである。つまり、戦争に協力した写真家たちに対する戦後世代からの内部批判に当時の議論の力点が置かれていたというよりも、むしろ、先人たちが「自立した思想の拠点」を持ち得なかったことへの反省を踏まえた上で、いま、1970 年前後の現実といかに向き合うべきであるのかが戦前、戦後世代の写真家たちに共通して問われていたと言える。

実際に、陸軍の対外宣伝機関であった東方社で戦争報道に一時携わり、1968 年当時は「写真 100 年」展の実行委員長を務めていた濱谷浩（1915-1999）は、自らも戦争の責任を感じつつ、「戦後、高田へ行ってなんとか切りぬけようとあがいてきた」ことを前述の座談会で吐露している[12]（伊藤ほか 1968: 24）。ここで見過ごせないのは、この発言と同時期に出版された濱谷の回顧録（濱谷 1971）には、戦争への加害責任に加えて、先の大戦で前線に駆り出された自分たち大正生まれの世代こそが最も多く戦死したことへの痛切な胸中が刻まれていたことである。すなわち、この回顧録の中で濱谷は、「日

---

[11] ただし土屋（2009）も指摘するように、当時、日本リアリズム写真集団に入会していた伊藤知巳は共産党にも所属しており、70 年安保を控えた討論集会の中で北海道開拓写真の重要性を踏まえつつ、写真が社会と結びつき「民衆に奉仕する“人民の写真の系譜”」の更なる発掘、整理、点検の必要性を訴えていた（伊藤 1969）。

[12] 代表作『雪国』（1956 年）が知られるように、戦前より濱谷は新潟県桑取谷を度々撮影のために訪れ、敗戦後は雪深い高田（現・上越市）に居を構えた。

華事変以後の日本の戦死者、二百十二万一千人、その七割、百五十万人に近い犠牲者が大正生まれの人間」であった事実を忘れてはならず、それは「同時代者があらゆる機会をとらえて、さまざまな方法で、次代に報告しておかなければならぬ残酷史」であると記している（前掲書: 254）。その上で、以下のように自らの戦後の歩みを振り返りながら、1970 年前後の時代状況に対する強い危機感を投げかけていた。

> 「敗戦のとき、生き残った大正生まれは十八歳から三十三歳でした。呆然自失、支離滅裂、試行錯誤、自己嫌悪にあえぎながら破廉恥の乱世を生きなければなりませんでした。この世代が、生まれ育てられ、体験したものは何であったか。戦後二十五年を経て、今日、再確認しなければならない状況であり、発言しなければならない事態になってしまいました。」（濱谷 1971: 254）

以上の戦争協力を巡る悔恨と、同世代の戦死者たちとの紐帯の感覚に鑑みれば、敗戦から 25 年を経て、自身を含む「大正人間」が「明治の体制」に再び組み込まれつつあることを濱谷が鋭く感じ取っていた点は見逃せない。すなわち、「戦後の昏迷模索の時の流れを巧みに泳ぎきった、老獪で奸智にたけた明治人」が再び権力の座についた 1970 年の日本は、国内外から「軍国主義復活」を警戒され、「経済侵略」への挑戦により世界各国の怒りを買い、国内では「公害という名の人災」が国土を破壊しつつあった（前掲書: 254-255）。当時、やはり同じ大正生まれであった写真評論家の重森弘淹（1926-92）も、「写真 100 年」展から自らの戦争体験を振り返り、「死んでいった同世代のためにも、したがって偶然に生きることを得たわたしの重苦しい心にたいしても」戦争歌は決して歌えないと記していたように（重森 1968: 84）、同展が提起した写真家の戦争責任は、1970 年前後の混乱する現実が見据えられる中で、各々の加害と被害の問題が複雑に入り混じりながら受け止められていたことが分かる。先に述べた通り、「写真 100 年」展は、東松ら戦後に活躍する写真家たちが企画を主導した点が画期的であると評

価されてきた。しかしその背景には、戦前、戦中世代の写真家たちが戦争協力への悔恨の念を抱く一方、自らが身をもって経験した多くの仲間たちの死を悼み続けているという複雑な葛藤から、戦後世代の写真家たちに次の未来を託そうとする胸中があったのである。

３）「昭和元禄」の平和な社会の現実を捉えていく困難と葛藤

しかし、先の濱谷の発言からも窺える通り、当時の写真家たちが直面していたのは終戦から既に 20 年以上が経過し、戦争体験の風化が進みつつある現状であった。同展の開催時期とは若干前後するものの、例えば 1966 年の『アサヒカメラ』に掲載された座談会「話題の写真をめぐって」では、前出の伊藤知巳と社会学者の加藤秀俊との間で次のようなやり取りが残されている。なお、これは同時期の雑誌『カメラ毎日』に掲載された「終戦 21 年」をテーマとした投稿写真を巡る発言である。

> 「伊藤　長野君（筆者注：写真家、長野重一）が指摘したように、扱うべき事実そのものが写真化するのに一層困難になっているというのはわかるけれど……。（中略）前の福島さんのを見ても、この小西さんのを見ても、戦後はとらえにくくなったということを感じますね。
> （中略）
> 加藤　つまり世代がどんどん交代しているからですね。われわれの世代までだったら「終戦 21 年」を見てもそこにある意味を発見できるけれども、いま 15、6 の子だったらこの意味はわからないでしょう。作者と読み手の側に、幸いにして三十何歳か以上の人間がいる限りは、戦争というものを了解し合う方法がこういう形でもありうるけれど、次の世代にこれがどう伝わっていくかは大問題です。」（伊藤ほか 1966: 218）

これらの発言から窺えるのは、1960 年代後半には日常の風景から戦争の痕跡が消えつつあったために、それを写真に写すことが難しくなってきてお

り、仮にそうした写真が撮影できたとしても、戦争を直接知らない戦後生まれの世代とはその意味を共有することが困難となりつつあったことである。

なお、このようにベトナム戦争の激化する 60 年代後半において「戦争」と耳にした時、第二次大戦を経験した世代と、終戦後に生まれた世代との間では想起される戦争に乖離が生じてきていた状況は、「写真 100 年」展を訪れた当時の来場者の反応からも垣間見える。例えば東松は、小高い丘の斜面に斃れた兵士たちと、その頂上に立つ一頭の馬と兵士を捉えた日露戦争中の写真（写真 2）を前に、「目もくらむサイケデリック・デザイン」を身にまとった二人の女性が「のんびりしていてピクニックみたい」と立話をしていたエピソードを載せつつ、次のように記していた。

> 「明治 37 年といえばはるかに遠い戦闘の記録といわねばならない。第二次世界大戦の記憶すらない戦後世代の彼女たちである。祖父の時代の戦争と身近なベトナム戦争との距離を、写真という万国共通のメジャーではかる」（「百年間の記録の重み―写真 100 年展によせて―」『毎日新聞』1968 年 6 月 8 日付夕刊）

**写真 2 「日露戦争　辺汗溝東方高地大石橋の戦闘における名誉の戦死者（陸地測量部員・小倉倹司撮影 明治 37 年 7 月 25 日）」（日本写真家協会編 1971: 113）**

この写真を巡っては、当時の東松も「私が写真家だからでしょうか、ものすごく胸をえぐられるんですね」と述べる一方、撮影と同じ時期に旅順攻略を指揮した乃木希典が荒涼たる戦場を詠んだ漢詩については、「ロずさんでも、われわれにはジーンとこない」と発言していた（伊藤ほか 1968: 20）。つまり、戦後生まれの若い世代にとって 1968 年当時「戦争」と言えばベトナム戦争であり、東松ら戦中

生まれの世代にとっては第二次大戦の生々しい記憶であったように、「写真100年」展を通じて、明治から昭和へと至る歴史の中で繰り返し起こってきた戦争の記憶が重層的に喚起されていた。一方で、1969 年の『アサヒカメラ』で展開された「コンポラかリアリズムか」と題された座談会での中平による以下の発言は、特に若い世代にとって戦争が現実のものとして捉えられていない当時の時代状況を示唆している。

> 「土門さんとか、東松照明さんのころまでは、たとえば戦争体験が普遍的なものとしてあったと思うんですよ。だから必然的に、歴史を直視するために広島に向い、長崎に向った。いま、ぼくらにあるのは何かというと、あれほどドラマチックでなくなってしまって、しかも事の所在は拡散してさだかでない。ヒロシマもナガサキも、他の歴史の局面と並列的に同じ価値をもった、一つの歴史の局面だと思うようになってきている。（中略）若い人たちは、戦争といっても、戦争についての記憶もなければ、現実に皮膚で感じてもいない。だから何も起らない日常とか、太平と呼ばれるものをとらえていく以外ないんじゃないか、という気がするんです。」（桑原ほか 1969: 234）

すなわち中平は、かつて 1950 年代後半に土門拳が広島を訪れ、また 60 年代初頭には東松が長崎の被爆者の置かれた現状に鮮烈な衝撃を受けた頃と異なり、もはや若者たちには戦争の実感がないため、彼ら彼女たちは「コンポラ写真」の流行に象徴される「何も起らない日常」や「太平と呼ばれるもの」へ目を向ける傾向にあることを投げかけていた。つまり、「写真 100 年」の歴史への反省を踏まえつつも、戦後社会は表面的には「昭和元禄」の平和を享受するがゆえに、当時の写真家たちはいかにすれば社会の現実を伝えられるのかに苦悩していたことが分かる[13]。例えば、水俣病患者を今なお

[13] こうしたリアリズムへの懐疑は、当時の写真界において共通する認識であったと言える。例えば、渡辺勉は伊奈信男や金丸重嶺らと囲んだ 1972 年の座談会で、現在の日本では「GNP 世界第 2 位というような、表面的には平和な状態」

撮り続ける報道写真家としても知られる桑原史成（1936-）は、上述の中平の発言を受けて、土門の広島や東松の長崎が「歴史の、ある限界状況をルポルタージュしていると思われる」としつつ、同様の側面は今まさに起こっているベトナム戦争の報道にも見受けられる点を指摘した上で、以下のように述べる。

「そういう限界状況―政治的、社会的混乱、動乱の状態では、きわめて必然的な方法論がすぐに発見できるんですね。しかしそれと対照的に、平和な日常生活の中における方法論の発想には、わたしを含めて多くのカメラマンが大変苦悩しているんじゃないかという感じがします。その一つが新倉さんの方法論であり、高梨さん、中平さんの方法論じゃないかと思いますね。」（桑原ほか 1969: 234）

つまり 1970 年前後の社会状況と向き合った当時の彼らに鋭く問われたのは、「写真 100 年」の歴史より内省された、他ならぬ写真家自身の自律性であったと言える。そして、以下に述べるように、更にその背景には写真が国家に利用され、あるいはまた、企業に消費されることへの切迫した当時の危機感があったことが見えてくる。

この点については、特に 1966 年の新東京国際空港（現・成田国際空港）の建設決定により激化していった三里塚闘争と、1969 年の東大安田講堂事件の撮影を巡る困難を取り上げたい。なぜなら、これら二つの出来事からは、当時の写真家たちが直面していた現場を写すことを巡るジレンマが象徴的に浮かび上がってくるためである。例えば、報道写真家として知られる栗原達男（1937-）は、内藤や中平らと共に参加した 1970 年の雑誌上での座談会において、三里塚の撮影を巡る自らの葛藤を以下のように吐露していた。

「たとえば、このあいだ三里塚にいったとき団結小屋のそばで写真撮っ

---

が続き、「リアリズム」が「なかなか現実の深部まで届かないんじゃないか」と述べていた（伊奈・金丸・渡辺 1972: 200）。

たわけですよ。そうしたら農民にツバかけられたわけです。少なくともぼくが腕章をしたスタッフのカメラマンだったら、馬鹿げた権威意識みたいなもので、一言二言あったと思うのですが、ぼくはツバキを当然のことと感じて一言もそれに対して抗議する気持がなかった。不自由だな、報道写真というのは不自由なものだなという気持がこのごろわかってきた。」（栗原ほか 1970: 94）

ここで留意したいのは、上記の栗原の発言が、1969 年の東大安田講堂事件の撮影を巡る中平の疑問への応答として投げかけられていた点である。すなわち中平は、東大安田講堂事件の報道には「完全に、全的に真実の報道というものは一つもなかった」と指摘していた。なぜなら、学生たちは講堂に立て籠もる一方で、報道する側は皆その外側におり、「機動隊という権力の側の視点」からの撮影に終始していたからである（桑原ほか 1969: 234）。言い換えれば中平が問いかけていたのは、例えば同時期のベトナム戦争を巡って日本人がアメリカと共に「加担者」の側にあることを抜きにした報道が「ぼくらの共犯性を全部はずしてしまう」危険性があったのと同様に（前掲: 234）、撮影者自身の「加害性」をどのように受け止めるべきかという切実な問題であった。それゆえに、栗原は中平の問題提起への理解を示しつつ、それでも「ぼくも中平くんも、外側で写真を撮って、それを発表するという状況のなかで、ぼくとしては自分なりに一つの使命感というものがあった」と述べた上で、以下のように続けていたのである。

「あの安田講堂のなかに機動隊といっしょに入って、弁当分け合って火炎ビンのなかをくぐっているうちに、従軍記者としての連帯感が生まれたといったスタッフカメラマンがいたけど、それを批判するだけのものが果して自分にあるか。片腹いたい思いを感じて……。じゃ、とらなければいいのかというと、そうはいかない。だからこそとらなければ、と思う。」（栗原ほか 1970: 95）

この点に関して、中平もベトナム戦争について「しかし、撮らなければいいのか。ぼくはなおかつ撮る人がでてこなければ、なんにもならないという気がする」、「撮らなければヴェトナムも知らない」（前掲: 95）と述べつつ、「自分の生きる時にいかに忠実に写真を撮るという行為を結びつけるか」（前掲: 95）を問いかけていた。つまり、この座談会を受けて評論家の刀根康尚が、彼らの仕事を支えている「思想」とは、「写真家の生の自己展開のなかで、つまり、「撮影する」という行為のなかで続けられるプロセスそれ自体としてある」（前掲: 97）とまさに指摘した通り、眼前の現実に直面することで絶えず生まれていく問いや矛盾を、撮り続けることで解いていこうとしていたそれぞれの模索が明らかとなってくる。

ただし、1970 年代前後の写真家たちによる以上の発言の重みを読み解く上で強く留意する必要があるのは、列島各地での運動のうねりとその記録を巡る葛藤の中で、「表現の自由」を巡る危機が当時急速に浮上していた点である。例えば三里塚闘争では、ドキュメンタリー映画制作のために、現地で機動隊と三里塚芝山連合空港反対同盟の衝突の模様を撮影していた小川プロダクションのカメラマンが 1968 年 7 月に「公務執行妨害」を理由に現行犯逮捕され、その際に逮捕、連行の様子を写真に収めようとした朝日新聞の記者も、取り囲んだ機動隊の盾により殴打され負傷した（「独立プロ・カメラマンら逮捕　成田の衝突」『読売新聞』1968 年 7 月 12 日付朝刊）。加えて、「新宿騒乱事件」としても知られ、同年 10 月 21 日の国際反戦デーにあわせたベトナム戦争に対する抗議のために新宿駅に結集し、暴徒化した学生たちのデモでは、その様子を撮影していた国学院大学映画研究部のフィルムが捜査当局により押収される事件が発生している（「緊張する映画界　国学院大映研のフィルム押収問題」『読売新聞』1968 年 12 月 2 日付夕刊）。特に、『思想の科学』の編集にも携わり、後者の事件では「フィルム押収事件に抗議する会」の発起人の一人を務めた映画評論家の佐藤忠男は、このフィルム押収が「一見小さな事件のようであるが」、「非常に大きな意味をもった出来事である」として、その理由を次の通り述べていたことは、社会運動が先鋭化する一方で民主主義への無関心が広まりつつあった 1970 年前後の時代状況を

映し出しており見逃せない。

「なぜなら、もし、こういう名目でフィルムの差押えが自由にできることになると、デモなどの現場で報道にあたっている新聞社やテレビのカメラマンの撮影したフィルムも、警察がそれをほしいと思えばどんどん強制的に取上げることができる、ということを意味しているからである。（中略）もしそんなことをしたら、自由な報道というものは成立たなくなるし、自由な報道のないところに民主主義があり得ないことは一般に承認された常識だったからである。」（「報道の自由とはなにか」『毎日新聞』1968 年 12 月 6 日付夕刊）

つまり、当時の写真家たちがそれぞれの模索を通じて目の前の現実を伝えていこうと駆り立てられていた一方で、そこには撮影に臨む際の彼ら彼女たち自身の立場性を巡る葛藤があり [14]、更には、ともすれば国家によって撮影と発表の自由が制約されかねない複雑な状況に置かれていたことが分かる。現に多木浩二は、写真の記録性が根本的に内包している危うさに関して当時、以下の通り警鐘を鳴らしていた [15]。

「かつての三里塚の闘争を記録していたカメラマンに対して弾圧が加えられ、ある大学の映研のフィルムが押収されるという事件があいついで起ったとき、われわれはあらためて記録というものの政治性を考えざるを得なかった。（中略）権力はカメラマンをおどしつけてでも写

[14] なお、こうした側面は当時、東松が勤めていた多摩芸術学園での学生運動を巡る葛藤にも見て取れる。すなわち、封鎖された学園で東松が直面したのは「＜なぜ撮るのか＞＜撮ってどうするのか＞といった学生たちの厳しい反問と不信のまなざし」（東松 1969: 58）であった。

[15] 写真史においてよく知られるように、実際にこの翌年の 1971 年には「沖縄返還協定粉砕」を掲げた沖縄での抗議ゼネストの渦中で警察官が死亡する事件が発生し、その際に新聞に掲載された写真を「証拠」として、あるデモ参加者が逮捕されたことは中平にも強い衝撃を与えた（中平 2007: 41-73）。

真をほしがる。かれらに反抗するものの「現認報告書」となるからである。われわれが撮影し、かつその行動を支援する意味をこめて発言するときにさえ、それは権力の側の道具に転化するおそれが生まれてくるのである。ある写真のなかにうつっていた顔から、その顔をもつひとりの人間の不当な逮捕にまで発展しないとはいい切れない。／結論は明白である。記録した映像が民衆の手にあれば、権力はそれを脅威に思い、自らの手にあれば、それを利用するのである。」（中平・多木編 1970: 179-180）

ここで改めて「写真 100 年」展が提示した論点に立ち戻るならば、こうした課題は大日本帝国下での公権力による写真の利用や取り締まりの過去に通じていた。特に、1968 年当時の「写真 100 年」展の会場図録と、その総括としての 1971 年の『日本写真史』に掲載された解説を比較すると、前出の表 1 の通り、後者では「写真表現の自由と規制の歴史」として憲法学者である奥平康弘の寄稿が載せられていた。奥平は、御真影の撮影を巡るタブーを含む明治初期の出版物の取締りに始まり、日清、日露、第一次大戦、シベリア出兵等に代表される国家による戦争報道の統制、また大正期以降の治安維持法に基づく社会運動の撮影の禁止、そして太平洋戦争中の言論・出版規制等の、明治から戦中にかけての厳しい報道規制の実態を解説していた。とりわけ重要であるのは、機動隊を撮影する危険性や企業機密の名のもとに撮影や発表の自由が抑制されかねない 1970 年前後の現状がその念頭に置かれていた点（奥平 1971: 445）である。

つまり、「写真 100 年」展は、敗戦までの写真家による自律的な記録の弱さを露わにした一方で、現実には当時の写真家が社会の現状を自由に撮影、公表することには絶えず制約が伴っていた。その点では、明治初期の開拓使から中央政府への報告のために北海道開拓写真が集中的に用いられた歴史（内藤 1971: 365）も同様であったと言える。加えて、同展では言及されていないものの、開拓写真と共にその克明さが当時の写真家たちに衝撃を与えた長崎の原爆写真も、1952 年の日本の主権回復まで占領軍により公開が禁じ

られていた過去（伊奈・渡辺・伊藤ほか 1972: 23）も改めて思い起こしたい。以上の通り、「写真 100 年」展からは、写真家の存在と「写真」という表現媒体がともすれば国家により恣意的に利用されてきた過去が浮き彫りとなる。そして、それはまさに 1970 年前後の写真家たち自身が直面していた表現の自由を巡る危機にも通底する課題であったことが浮かび上がってくる。

４）1970 年前後の写真家たちが模索していったそれぞれの立ち位置

それゆえに、「平和」な日常の中で見えにくくなっていた困難な現実を前に、当時の写真家たちが模索していったそれぞれの立ち位置の重要性が見えてくる。それらは、いずれも戦前・戦中・敗戦後を通して続いてきた写真表現の重みを各々が受け止めつつ、現場での撮影行為を介して形作られており、具体的には以下の三つの類型に分けることが出来る。

第一には、『プロヴォーク』に参加した中平卓馬や森山大道らによる匿名的な写真のあり方を積極的に肯定した立場である。例えば中平は、「写真 100 年」展の編纂を通じ強く印象に残った事柄として、日清、日露戦争時の「歴史と真向から対応した」、「作者不詳」の写真に「すごい強さ」があり、そうした匿名の写真こそが今日まで残っていることを挙げていた（桑原ほか 1969: 231）。つまり、写真は最終的に「長い時間を経た後には、だれが撮ったのでもいい、“もの”を記録した一枚の写真―紙切れがある」というふうにならざるを得ず、「その悲しみをこめて、写真は資料」であるとしていた（前掲: 231）。ここで留意したいのは、中平は決して写真家としての自らの「主体性」を放棄した訳ではなく、むしろ各々の写真家が「歴史をどれだけとらえたか」、換言すれば「この時代に対してどれだけコミットしたか」を重視していた点（前掲: 231）である。その上で、中平は眼前の事物を即物的に捉えようとした姿勢が見出される。

他方で、こうした姿勢とは対照的に、第二の類型としては自らの「個性」を強く打ち出しながら目の前の現実を告発していく立場を指摘することが出来る。例えば、匿名的な写真に力点を置いた中平の発言に対して当時強く反発したのが、報道写真家の桑原史成であった。桑原は、「わたしは、中平

さんの、個人をなくし、個性をなくして記録していくということに対しては、真正面から反対の気持をもっています」と述べつつ、「これからの写真はとくに、一個のカメラマンの強烈な個性が写真の上に定着し、にじみ出てくることを期待したい」（前掲: 231-232）と訴えていた。特に、英伸三や福島菊次郎ら同時期の報道写真家たちによる座談会の中で、報道写真家にとっての撮影の原動力とは「怒り」と「衝動」であると桑原は強調しつつ、以下のように述べている。

> 「報道カメラマンが取組むとき、起っている現実の問題に対して、告発者、代弁者としての役目が果せる場合に、カメラマンのなす仕事は意義があると思う。私は、ニュース写真の現象はそれほど追いかけていない。私が告発者として写すことによってそれができるというものに取組んでいきたい。」（英ほか 1967: 257）

この発言からも明らかである通り、見過ごすことの出来ない眼前の現実を「代弁者」としての立ち位置から告発する際に、自身の激情を重視していた桑原の姿勢は、写真は作者不詳でも構わないとした先述の中平のそれとは明確に一線を画していたことが分かる。

ただし前述した通り、一見すると平和な日常の中で、従来のリアリズムという手法は、同時代の社会の現実を捉える上で有効とは言えなくなってきていた。また、撮影者の強い問題意識が先行する側面に対しては、ともすれば報道自体が自己目的化してしまうことに対する批判の声が同時代の写真家たちから上がっていたことにも留意しておきたい。例えば、かつてユージン・スミスの助手を務めた写真家の森永純は、次のように当時指摘していた。

> 「いままで何かのための写真が多すぎたわけです。たとえばリアリズム写真とかルポルタージュ写真と称されるものは、なんか目的がありすぎて、伝達してやろうという送り手側の傲慢さが匂うわけです。しかも、ある場合には週刊誌や月刊誌に使ってもらえるような撮り方をす

る。ジャーナリズムのための、ということが目的化してしまうんですね。」（森永・細江・大辻 1971: 309-310）

こうした反発を踏まえた時、とりわけ重森弘淹の以下の指摘は、当時のリアリズムを巡る課題を掴む上で示唆に富んでいる。すなわち、カメラが大衆化することで、写真が人々の暮らしに一層身近になってきた 1970 年前後の状況を念頭に置きながら、彼はリアリズムの手法を意識したアマチュアの写真が抱える課題点を当時、以下の通り指摘していた。

「生活綴り方などの生活記録が、言語の性質上、外へ向かっている自己意識をまず対象化することから始まるのに対して、写真による記録では何よりも外部への関心が先行している。外部への関心が次第に深まる過程で、外部と自己内部との矛盾葛藤がレンズのリアリズムに強い抵抗感を与えずにはおかないのだが、しかし外部を単純に自己の外の世界としてだけしか対応しえないときには、まったく平凡な現実の複写と堕してしまうほかはない。」（重森 1972: 208）

興味深いのは、ここで重森が国分一太郎らによる生活綴り方や鶴見和子らの生活記録運動との比較において写真という記録のあり方を論じている点であるが [16]、最も重要なのは、本来的に「外部への関心」から記録されるものである写真が次第に深まる中で、「外部と自己内部との矛盾葛藤」こそが現実を単純に複写することへ「強い抵抗感」を与えると述べていたことである。これは、先に述べた三里塚闘争や東大安田講堂事件を巡る当時の写真家たちの葛藤とも重なり合うことを改めて思い起こしたい。

そして第三には、東松照明に見られるように、矛盾や葛藤の中で目の当たりにした現実との「距離」を、撮ることによって絶えず埋めていこうとする立場である。前述の通り、とりわけ東松は 1960 年代初頭の長崎や米軍が統

[16] 詳細は別稿（吉成・三好 2021）も参照されたい。

治していた復帰前の沖縄で、見過ごされた「戦後」の暮らしを知った衝撃から、写真家として何が出来るのかを問いつつ、生涯をかけてそれぞれの土地を撮り続けることへ駆り立てられていった。こうした彼の独自の立ち位置については、釜ヶ崎を写したあるアマチュアの写真について写真評論家の渡辺勉が評した際に、それが「東松さん的な体質を感ずる写真」であるとして当時次のように述べていたことからも窺い知れる。

> 「東松さんもそうだけど、この人も対象をルポルタージュとしてではなく、ドキュメントとして撮ってると思うんです。愛隣地区などというと、とかく問題意識をひっさげて撮りがちですが、この写真は大上段に構えていないところがいい。何か一緒にそこで生活して、写真の日誌をつけていったという感じだ。傍観者的な姿勢が全然ないんですね。そのことが、かえって感銘を強くするんじゃないでしょうか。それじゃ、現実に癒着しているかというと、そうではなくて、一種の連帯感みたいなものを感じますね。」（渡辺ほか 1971: 265）

すなわち、即物的に捉えた「匿名」の写真という第一の類型、被写体の「代弁者」として写した写真という第二の類型を踏まえるならば、以上からは現実との距離を抱えながらも共同的に撮り続けていこうとした第三の類型が浮かび上がるのである。

## ５．写真家たちが凝視した近代日本の影と 1970 年前後の現実への連続性

以上の分析からは、戦災復興と「豊かさ」の達成が置き去りにしてきた「戦後」の現実が問い直されていく 1970 年前後においてこそ、「写真 100 年」を通じて残された数々の写真群はとりわけ重要な意味を持っていたことが明らかとなった。つまり、高度成長がもたらした繁栄とは裏腹に、当時の写真家たちは、明治以降の近代国家に従って生きてきた民衆の営為が見過ごされ

てきたことを衝撃と共に受け止めていた。そして、それはまさに彼ら彼女たちが生きる当時の現状へと連続していたのである。言い換えれば、ひとびとの生活の歴史を「戦前」「戦中」「戦後」と切り分けるのではなく、写真家たちがその重層的な時間の連続性を各々受け止め直しながら、1970 年前後の現実と向き合っていったことを改めて特筆しておきたい。

別稿（吉成・三好 2022a）で詳述した通り、例えばそれは、沖縄での撮影活動を深めつつあった当時の東松が、第二次大戦前夜の 1930 年代との近しさを感じ取っていたことからも窺える。東松は、大戦間際の「静寂と喧騒とが入乱れた狂気の時代」に青春を送り、その後従軍を経て、初老を迎えたある人が、何もかも 30 年代に酷似するものの、老齢ゆえに自らはもはや戦地に送られることはないと呟いたと記した上で、次のように続けている。

> 「歴史は繰返すというが、繰返さないともいう。いずれにしても 1930 年代生まれのぼくに 30 年代の日本が、ハッキリと記憶に残っているはずがない。しかし、体験者の重い言葉は、ぼくの中の古い血を呼びさます。ぼくは、次第に「あるいは、そうだったかもしれない」と思うようになる。」（東松 1970a: 109）

こうした戦争へと再び進んでいくかもしれない「豊かな社会」に対する危機感を抱える中で、「沖縄の人が「本土復帰」を叫ぶとき、それは戦争を放棄した日本の平和憲法への復帰を意味している。その平和憲法が、空文化している現在、沖縄はどこへ帰るのか」（東松 1970b）と東松は自問していた。それゆえに、沖縄という土地の歴史の上に脈々と受け継がれてきたひとびとの暮らしを、同じ時代を生きる一人の人間として見つめていったのである（吉成・三好 2023, 2025b）。

以上を踏まえて最後に強調しておきたいのは、写真は時代を超えて「生きて」おり、それは「戦後」社会が果たしてどのような未来へ進んでいくのか

という疑問をひとびとに投げかけていたことである[17]。例えば、戦時中に陸軍参謀本部に勤めながらも戦争憎悪の日記を密かに書き続けた作家の中井英夫（1922-1993）は、『日本写真史』から受け止めた衝撃を当時、以下のように述べていた。

> 「露探と称しての斬首、万歳事件の捕虜の処刑、タコ部屋でリンチを受けた青年たち、東北凶作で大根をかじる子供、演習中に自殺したというインテリ兵、合間合間にもったいぶった顔をした政治家たち、そして満州国の青年の徴兵検査をのぞきこむ将校の、ふとった卑しい笑いがつい三十年前まで日常のものだったことを知るとき、戦後写真というものが、戦後文学と同じようにあるとするなら、それは単にイデオロギーのふりかざしや達者な技法ではなく、世界史のなかで日本人とはついに何なのか、人類は一体どこへ向かって歩き続けているのかという素朴な疑問への解答として、それは撮り続けられるべきだろう。」（中井 1972: 57）

こうした次の未来への不安を、ひとびとの戦中戦後の生活への眼差しから滲ませた同時期の作品として、出征兵士たちへ送るために戦中に撮影された東京下町の留守家族の三十年後を、写真を手に訪ね歩いた児玉隆也（1937-1975）のルポルタージュである『一銭五厘たちの横丁』（1975 年）も示唆に富んでいる。児玉は、かつて下町の横丁から「一銭五厘」の赤紙で出征していった指物師、ペンキ屋、タクワン屋、麹屋、小間物屋、拝み屋、そしてゲタ屋に泡盛屋等の「氏名不詳」の家族たちが、戦後にまるで町ぐるみで「神隠し」にあったかのように消えてしまった衝撃の中で、横丁に今なお

---

[17] この他、『日本写真史』を巡る当時の写真関係者以外の反応としては、文芸評論家の桶谷秀昭と、作家の森崎和江による記事（桶谷 1972；森崎 1972）等が挙げられる。特に、成田龍一が、この時期に「帝国―植民地」経験を問い直した一人として朝鮮から引き揚げた「植民地二世」である森崎を挙げたように（成田 2020: 209-218）、後者は朝鮮と九州・筑豊での自らの生活経験を交えながら生活者にとっての映像の持つ意味を記しており特筆すべきである。

生きるひとびとの語りから、それぞれの家族たちの昭和史を辿り直していった（児玉・桑原 1975=2000）。時代は「列島改造論」を唱えた田中角栄から、金権政治との訣別を掲げ「クリーン三木」と担がれた三木武夫へ首相が変わる中で、児玉はそうした「為政者のことばの遊び」を馬鹿馬鹿しく思いつつ、写真に写る「天皇から一番遠くに住んだ人びと」の戦中戦後を次のように振り返っていた[18]。

> 「私は、大君の醜の御楯と出でたつことになりし横丁の蝋燭屋、麹屋、どんつくさん、下駄屋、指物師、呉服屋、湯の花屋、金具屋……の一銭五厘たちのことばを改めて思いだす。／「靖国神社法案？何だね、それ。うちには自まえの神棚も仏壇もあるよ。もうこれ以上神さまには手がまわらねえなあ」／『昭和十八年夏・記念写真』の“百分の一秒”のシャッターは、そういう昭和史と感情を記録していた。／私は、ふたたびこの種の「記念写真」を、国家が要請する時代が来ぬことを願うのみである。／古いネガから過去を追ったはずの私の追跡が、実は未来につながるとすれば、私の足は、重い。／ひどく、重い。」（児玉・桑原 1975=2000: 246-247）

本稿で論じてきた1970年前後という「未来」へ投げかけられた「写真100年」の歴史の重みを踏まえるならば、「氏名不詳」の写真を手に、戦中という過去を訪ね歩いたはずの自らの足どりが、再び「一銭五厘」で日常の暮らしが失われるかもしれない未来に繋がっているのではないかという拭い難い疑問を児玉が抱えていったことは特筆に値する。このように、1970 年前後の国家的繁栄の只中でひとびとの暮らしは続き、また、それは常に揺らいでいたからこそ、当時の写真家たちは、国家と現場との狭間で苦悩しつつも各々の立ち位置から眼前の出来事を撮り続けていった。「写真 100 年」の歴史を内省しつつ、写真家たちが 1970 年前後を生きていく中で刻々と表現し

[18] いずれも廃案に終わったが、同時期の 1969 年から 74 年にかけては、靖国神社の国有化を目指した靖国神社法案が度々国会に提出されていた。

ていった写真は、見過ごされてきた「戦後史」を問い直す上でも貴重な資料であり、それらは今を生きる私たち一人ひとりが改めて振り返りつつ、更に次の未来へ伝え継いでいくべき事柄でもある。

**写真出典**

写真 1、写真 2：日本写真家協会編『日本写真史 1840-1945』平凡社、1971 年

**分析資料**


伊奈信男・金丸重嶺・渡辺勉　1972「コンポラ、ブレボケの行方」,『アサヒカメラ』1972 年 5 月増刊号、朝日新聞社、196-203 頁。

伊奈信男・渡辺勉・伊藤知巳・渡辺義雄・林忠彦・目島計一・細江英公・松本徳彦・東松照明　1972「座談会　戦後の日本写真界を語る（その２）—1951 年～52 年の写真家、出版物の活動をみる」『日本写真家協会会報』31、日本写真家協会、14-29 頁。

伊藤知巳　1969「1970 年を文化人・文化団体はいかにたたかうか—「安保と文化問題」討論集会における問題提起」『文化評論』94、新日本出版社、2-17 頁

伊藤知巳・長野重一・加藤秀俊・坂崎乙郎　1966「「話題の写真」を巡って—現場にいた強さ“市民の目”」『アサヒカメラ』1966 年 9 月号、朝日新聞社、212-225 頁。

伊藤知巳・村上一郎・濱谷浩・東松照明・多木浩二・内藤正敏・木村恵一・熊切圭介・松本徳彦　1968「“写真 100 年”展を終えて」『日本写真家協会会報』19、日本写真家協会、9-25 頁。

奥平康弘　1971「写真表現の自由と規制の歴史」『日本写真史 1840-1945』平凡社、445-454 頁。

桶谷秀昭　1972「無心の記録のもつ重み—『日本写真史を読む』」,『アサヒカメラ』1972 年 5 月号、朝日新聞社、80-83 頁。

栗原達男・内藤正敏・中平卓馬・森永純・刀根康尚　1970「座談会 機械と

ともに見る―「沈黙」と「現在」の思想」『美術手帖』1970 年 8 月号、美術出版社、81-97 頁。
桑原史成・中平卓馬・高梨豊・新倉孝雄・嬉野京子　1969「座談会 コンポラかリアリズムか」『アサヒカメラ』1969 年 4 月号、朝日新聞社、228-235 頁。
重森弘淹　1968「<写真 100 年展>の問題提起」『SD : Space design－スペースデザイン』44、鹿島研究所出版会、84-85, 98 頁。
重森弘淹　1969「写真界でなにがはじまろうとしているのか」『季刊写真映像』1、写真評論社、117-119 頁。
重森弘淹　1972『写真の思想』潮出版社。
全日本学生写真連盟　1968「北海道キャンペーン一九六八　北海道百年　人間が刻んだ歴史＝人間に刻まれた歴史」『YOUNG EYES 全日会報』63, 1968 年 9 月 1 日付（一般社団法人「もう一つの写真記録」Web アーカイブス, https://aajps.or.jp/docs/zk/kai63/index.html#　2025 年 3 月 10 日最終アクセス）
東松照明　1969「学園の荒廃」『季刊写真映像』2、写真評論社、57-90 頁。
東松照明　1970a「美しい五月の光」『カメラ毎日』1970 年 7 月号、106-112 頁。
東松照明　1970b「沖縄」『世界写真年鑑 1970』平凡社、57 頁。
東松照明・多木浩二・平野久・内藤正敏・今井寿恵　1968「写真表現の歴史を語る―日本写真家協会・写真 100 年展について―」『アサヒカメラ』1968 年 6 月号、朝日新聞社、222-228 頁。
東松照明・福島辰夫　1971「対談＝東松照明●福島辰夫‘日本写真史’にみるアマチュアリズム」『カメラ毎日』1971 年 11 月号、毎日新聞社、25-29 頁。
内藤正敏　1969「私説・田本研造論―田本以後の写真の 100 年は不毛と暗闇の歴史だった」『季刊写真映像』1、写真評論社、164-170 頁。
内藤正敏　1971「開化期」、日本写真家協会編『日本写真史 1840-1945』平凡社、358-369 頁。

中井英夫　1972「歴史の証言者たちへ―「アルバム 71」の成果と「日本写真史」をみて」『カメラ毎日』1972 年 1 月号、毎日新聞社、55-57 頁。
中平卓馬・多木浩二編　1970『まずたしからしさの世界をすてろ』田畑書店
中平卓馬　1968「写真にとって表現とは何か?―写真 100 年・日本人による写真表現の歴史展の意味するもの」『デザイン批評』6、風土社、128-131 頁。
中平卓馬　2007『なぜ、植物図鑑か―中平卓馬映像論集』筑摩書房。
日本写真家協会編　1971『日本写真史 1840-1945』平凡社。
英伸三・桑原史成・福島菊次郎・島内英佑　1967「座談会　報道写真家の生活と意見」『アサヒカメラ』1967 年 12 月号、朝日新聞社、252-259 頁。
濱谷浩　1971『潜像残像―写真家の体験的回想』筑摩書房
福島辰夫　1971「この葬列よ　たち上れ」『KEN』1、写研、134-145 頁。
福島辰夫　2012『破綻と彷徨―福島辰夫写真評論集〈第 3 巻〉』窓社。
森崎和江　1972「島の老婆の自画像と私」『アサヒカメラ』1972 年 11 月号、朝日新聞社、76-79 頁。
森永純・細江英公・大辻清司　1971「座談会・コンポラはどこへ行く？」『アサヒカメラ』1971 年 4 月号、朝日新聞社、308-313 頁。
渡辺勉・中村立行・長野重一・安達瞳子　1971「話題の写真をめぐって」『アサヒカメラ』1971 年 4 月号、朝日新聞社、262-279 頁。
渡辺義雄編　1968『写真 100 年―日本人による写真表現の歴史展―』日本写真家協会。

**引用参照文献**

飯沢耕太郎　1999『日本写真史概説』岩波書店。
井上祐子　2014「写真家濱谷浩のグラフ・キャンペーン――一九五〇年代総合雑誌グラビア頁の試み」、赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり編『戦後知識人と民衆観』影書房、99-141 頁。
色川大吉　1968『明治の精神―底辺の視座から』筑摩書房
石居人也　2018「歴史研究における「明治」をみる眼―「明治百年」から「明

治一五〇年」への史学史として」、日本史研究会・歴史科学協議会・歴史学研究会・歴史教育者協議会編『創られた明治、創られる明治―「明治 150 年」が問いかけるもの』岩波書店、35-62 頁。
石居人也・大江洋代・長志珠絵・小沢弘明・原田敬一・平井和子・中澤達哉 2018「【座談会】「明治 150 年」が問いかけるもの」、前掲『創られた明治、創られる明治』岩波書店、215-248 頁。
葛西弘隆　2017「戦後日本の植民地主義と文明論―梅棹忠夫の 「北海道独立論」―」『国際関係学研究』43、15-28 頁。
葛西弘隆　2018a「花森安治と北海道―開拓・棄民・国家」『国際関係学研究』44、17-28 頁。
葛西弘隆　2018b「花森安治と戦後民主主義の文化政治」『津田塾大学紀要』50、 37-66 頁。
鹿野政直　2008『鹿野政直思想史論集＜第七巻＞ 歴史意識と歴史学』岩波書店
侯鵬暉　2019「「写真 100 年」展再考−置き去りにされた日本統治時代の台湾写真」『photographers’ gallery press』14、photographer's gallery、285-304 頁。
金子隆一　2013a「クロニクル一九六八―「写真」の近代を変革するために」、金子隆一・田坂博子編『日本写真の 1968―1966～1974 沸騰する写真の群れ』東京都写真美術館、7-16 頁。
金子隆一　2013b「行為としての写真―全日本学生写真連盟の成立と最初の変革」、前掲『日本写真の 1968』東京都写真美術館、178-183 頁。
金子隆一　2016「東松照明はなぜ沖縄へ向かったのか？」『越境広場』2、120-125 頁。
木下直之　1999「明治の記録写真」、長野重一・飯沢耕太郎・木下直之 編集責任『田本研造と明治の写真家たち』岩波書店、57-65 頁。
久後香純　2022「「アノニマスな記録」としての写真―1960 年代後半から 70 年代前半における写真のリアリズムについて」『映像学』108、122-143 頁。

倉石信乃・土屋誠一・冨山由紀子・小原真史・金子隆一　2014「シンポジウム 「日本写真の 1968」 全記録」『東京都写真美術館紀要』13、13-51 頁。
児玉隆也・桑原甲子雄[写真]　2000『一銭五厘たちの横丁』岩波書店。
小原真史　2013「挑発の回路―『プロヴォーク』の道程」、前掲『日本写真の 1968』東京都写真美術館、157-167 頁。
白山眞理　2014『「報道写真」と戦争―1930-1960』吉川弘文館。
鈴木勝雄　2005「方法としての「記録」―東松照明『太陽の鉛筆』と沖縄」『東京国立近代美術館研究紀要』10、33-52 頁。
高島直之　2010「荒野のラオコオン–写真・1968・夏」、四方田犬彦・平沢剛編『1968 年文化論』毎日新聞社、95-111 頁。
土屋誠一　2009「写真史・68 年―「写真 100 年」再考」『photographers' gallery press』8, photographer's gallery、242-252 頁。
土屋誠一　2013「「見出された「記録」の在処―「写真の 100 年」再考」、前掲『日本写真の 1968』東京都写真美術館、146-155 頁。
戸田昌子　2012「写真表現と写真史の 1970 年代」、緒川直人・後藤真編『写真経験の社会史―写真史料研究の出発』岩田書院、47-93 頁。
冨山由紀子　2013「曖昧さの射程―コンポラ写真と『カメラ毎日』の時代」、前掲『日本写真の 1968』東京都写真美術館、168-177 頁。
鳥原学　2013『日本写真史（上）』中央公論新社。
鳥海早喜　2010「『写真一〇〇年：日本人による写真表現の歴史展』に関する研究」『日本写真芸術学会誌』19(2)、5-21 頁。
成田龍一・吉見俊哉　2005「特集にあたって」『思想』980、6-7 頁。
成田龍一　2020『増補「戦争経験」の戦後史―語られた体験/証言/記憶』岩波書店。
番匠健一　2014「映画『家族』から見た高度経済成長」、西川長夫・大野光明・番匠健一編『戦後史再考―「歴史の裂け目」をとらえる』平凡社、182-199 頁。
道場親信　2008『抵抗の同時代史―軍事化とネオリベラリズムに抗して』人

文書院。
吉田裕　2005『日本人の戦争観―戦後史の中の変容』岩波書店。
吉成哲平(三好恵真子 監修)　2021『写真家 星野道夫が問い続けた「人間と自然の関わり」』大阪大学出版会。
吉成哲平・三好恵真子　2021「「戦争の影」を抱え展開し続ける「写真実践」―東松照明が生活の現場から証した、長崎の被爆者の生と死―」『生活学論叢』39、15-30 頁。
吉成哲平・三好恵真子　2022a「「インターフェイス」から捉え続けたひとびとの暮らし―写真家 東松照明の眼に映り込んだアメリカニゼーション―」,『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』48、147-180 頁。
吉成哲平・三好恵真子　2022b「写真家 東松照明が魅せられた, 長崎の中の中国文化―「町歩き」より受け止めていく, 東シナ海を巡る歴史の厚み―」,『アジア太平洋論叢』24、113-133 頁。
吉成哲平・三好恵真子　2022c「写真家 東松照明が直面した「基地の中の沖縄」―日米の狭間で揺らぐ復帰前の現実と歴史への責任―」『生活学論叢』41、30-45 頁。
吉成哲平・三好恵真子　2023「「私性」から「公性」へと拓かれてゆく「写真実践」―復帰前後の沖縄での表現を巡る東松照明の模索―」『生活学論叢』43、43-57 頁。
吉成哲平・三好恵真子　2024「「戦後」の生活者の思想を討究する「写真実践」の方法論的可能性―ひとびととの距離を埋めゆく東松照明の重層的経験の意味―」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』50、185-213 頁。
吉成哲平・三好恵真子　2025a「再帰的な撮影行為を介して拓かれていく「記憶の継承」の可能性―写真家たちが表現し続けた「戦後」を「写真実践」より問い直していく意味―」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』51、印刷中。
吉成哲平・三好恵真子　2025b「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」―写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感―」『生活学論叢』46、印刷中。

コラム②

# 「問う」ことで拓かれていく見過ごされた歴史――東京南部・下丸子のある工場の軌跡から見えてくる東アジアの戦争と「戦後」

吉成 哲平 *

シンポジウム第一部でもお話ししたように、これまで私が沖縄市コザのまちを訪れる中で徐々に深めてきたのは、「いつからが「戦後」なのだろう」という実感でした。1945 年 3 月 26 日に米軍が慶良間諸島へ、そして、4 月 1 日には沖縄本島に上陸したのちに沖縄戦が熾烈を極めていく過程で、沖縄市は「戦後」への道を着実に歩んでいきます。更に沖縄戦後は、1950 年の朝鮮戦争の勃発により本格的な基地建設が進められていくという複雑な現実の中で、様々な来歴を持ったひとびとがコザのまちで生き抜いていったことを、これまで沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」で教えて頂いてきました。館内に展示されている数々の貴重な写真からは、沖縄戦後に武器を生活用具にすることで暮らしていった人びとやAサインバーに集う米兵たちなど、躍動する沖縄市の歴史が伝わってきます。その一方で、毒ガスの即時撤去を求める運動や「コザ暴動」を通じて声を上げたひとびとの姿をはじめ、基地と隣り合わせの日常が直面してきた忘れてはならない「戦後」の現実の厳しさも少しずつ学んでいます。

戦争や基地について、私は直接経験したことがないために、沖縄市で教えて頂いてきた歴史を自身に引き付けながら受け止めていくには、恥ずかしながら小さくない距離があるように感じてきました。しかし、そうした戸惑いを抱えながら身近な暮らしの歴史を見つめ直していくことで、コザで鮮烈に抱いた「いつからが「戦後」なのか」

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

という問いが、実は、私のすぐ足元にも埋もれていたことが徐々に見えてきました。このコラムでは、私が生まれ育った東京南部地域の忘れられがちな「戦後」について共有したいと思います。

**写真 1　羽田海苔干し場・工場地帯（昭和 31 年、大田区提供）**

水俣を訪問した経験を振り返りつつ、工業化と戦争により失われていった海と共にある暮らしについて内省した前回のブックレット（吉成 2024）でも触れましたが、私は東京南部に広がる大田区という地域で育ちました。この地域では、東京湾に面した海苔の養殖が江戸時代から盛んだった一方で、日本が急速な近代化を遂げていく過程で工場の進出が進み、アジア・太平洋戦争へ突入していく 1930 年代以降は数多くの軍需工場が建設されたことでも知られています（写真 1）。現在は、主に住宅街や町工場が広がっています。中でも、東京と神奈川の県境を流れ、東京湾に注ぐ多摩川のそばに広がる街であり、3 両編成の小さな電車（東急多摩川線）が停まる下丸子（しもまるこ）は、私が中学高校への通学のため毎日のように乗り降りした場所でした。駅の周辺には商店が立ち並び、駅から少し歩くと見えてくる多摩川（写真 2）の土手の桜並木は、

写真 2　多摩川（2011 年筆者撮影）

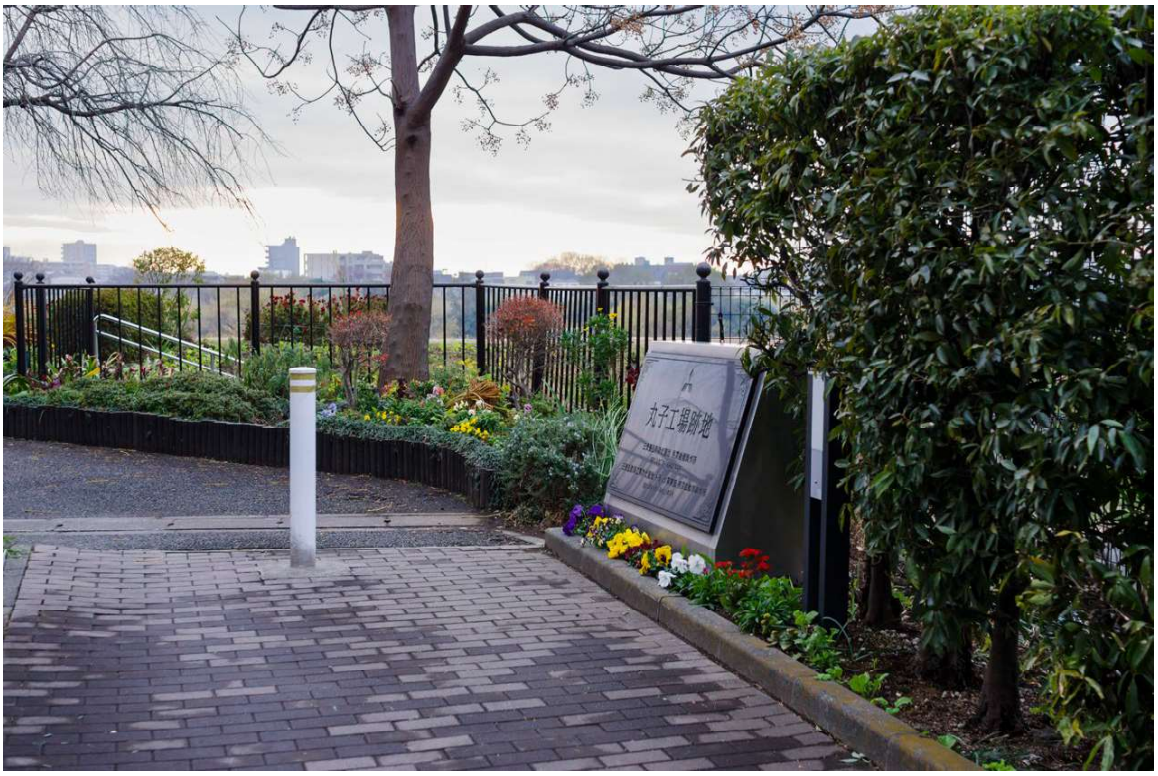



写真 3　三菱重工・丸子工場跡（2024 年筆者撮影）

毎年春になると多くの人で賑わいます。下丸子には、日本の近現代史とゆかりのある有名な史跡がこれといってあるわけではなく、アジア・太平洋戦争との関わりも、かつてこの地に軍需工場が建てられたことを除けば、これまでほとんど意識したことはありませんでした。しかし、沖縄市での学びに触発されて、「地域史」としての下丸子の歴史を辿り直しながら「まち歩き」をしていくうちに、何気ないこの場所が、実は東アジアの戦争と「戦後」の歴史へ繋がっていたことが次第に見えてきました。

例えば写真 3 は、下丸子（東京都）と川崎（神奈川県）の間に架かる「ガス橋」という橋の近くの土手の一画にあり、2000 年初頭までこの一帯に自動車関連の広大な工場があったことを伝える石碑です。碑には「丸子工場跡地」と書かれ、現在は高層マンションが林立する敷地の端にひっそりと置かれています。工場の由来が気になり調べてみた『三菱重工業株式会社　東京製作所 50 年史』（1972 年刊行、以下「製作所史」）によると、その歴史は 1930 年代まで遡ることができ、バスやトラックを大規模量産するための工場の建設が 1937 年（昭和 12 年）2 月にこの地で開始されました。しかし、起工からまもなくした同年 7 月には、日中戦争の開戦に伴い用途の転換を余儀なくされ、翌年（1938 年）からは、陸軍が指定した戦車製造の専門工場として本格的に稼働していくことになります。「製作所史」には、のどかな多摩川の川べりに建設された工場で働く戦時下のひとびとの日常が次のように記されていました。

「当時の丸子工場は周囲には家もない原っぱで、工場の敷地内にも野ウサギがいるほどひなびたところであった。従業員は駒下駄，ねじり鉢巻のいでたちで，4kg もあるグラインダをかかえて戦車の仕上作業に取組んでいた。昼休みには多摩川で泳いだが，魚が見えたというから，現在の多摩川からは想像もできない。目蒲線（筆者注：現在の東急多摩川線の前身）も 1 両編成でのんびりと走っていた。」（三菱重工業株式会社東京製作所編 1972: 27）

「製作所史」のページをめくっていくと、この工場で生産された陸軍の主力戦車は、その後、終戦を迎えるまで中国大陸や東南アジアの戦線に投入されていったことが読み取れます。これまで「軍需工場」という言葉で一括りにして、戦前戦中の地域の歴史を理解したつもりになっていましたが、これほど直接的な形でアジア・太平洋戦争

と関わってきた過去について、今まで自分が知らなかったことを内省させられます。

そして、工場の歴史は敗戦によって途切れることなく「戦後」へと続いていきます。ここで再び「製作所史」を紐解くと、終戦を契機に再び民需生産へと転換した工場は、手元の材料で鍋やバケツ、洗面器、流し台、リヤカーなどの様々な日用品をつくりはじめ、かつての戦車は改造されて戦災復興のための農耕機やブルドーザーとなりました（前掲書: 55-58）。しかし、敗戦後の軍需から民需への生産の再転換は、そう容易ではなかったことが窺えます。加えて、労働争議が立て続いて起こることで工場はGHQによる管理下に置かれ、1948年には米軍の車両再生工場に指定されることになります（前掲書: 65-69）。これは、丸子工場が再び東アジアの戦場と結びついていくことを意味しました。「製作所史」には、以下のように記されています。

「第2次大戦中，米軍は太平洋の島々と東南アジア全域に大量の軍用車両を捨ててきた。ところが戦後これらの車両を再生修理して，アジア各地に駐留する米軍と被援助国の軍事用および開発援助用として使用することが必要になってきた。米軍はこれら使用不能の車両を日本に集中して再生修理する計画をたて，これを「ロールアップ作戦」と称した。」（前掲書: 69）

現在の風景からはまったく想像ができないのですが、当時の工場内には追浜（神奈川県横須賀市）へ輸送するための鉄道が敷設され、通用門にはカービン銃を持った米兵が立ち、工場で働く人びとは「指紋を登録し，写真をとられ，常にバッジをつけなければ通行を許されない」（前掲書: 73）という、米軍による厳格な指揮監督下に置かれました。特に、米軍車両の修理工事は社外への機密保持のために、社内では「A工事」と呼ばれたそうです。そして、朝鮮戦争の勃発により車両修理もまた「特需」を迎える中で、戦場から工場に送りこまれた「なまなましい車両」（前掲書: 85）は修理され、再び朝鮮半島へ「出荷」されていきました。朝鮮戦争の開戦の翌年に大田区の町工場で働き始めたばかりであった旋盤工で作家の小関智弘（1933-）は、人づてに耳にした当時の下丸子周辺の工場の様子について、『大森界隈職人往来』（1981年）の中で後年、以下のように振り返っています。

「朝鮮戦争は激しさを増し、下丸子にある三菱自動車（当時は東日本重工業下丸子工場）では、米軍の戦車の修理をしていたらキャタピラの間から人間の肉塊が出てきたという話が伝えられた。荷物車専用の品鶴線（品川と鶴見の間を結ぶ）には米兵の死体をのせた列車が、続続と運び込まれ、ちぎれた肉塊をつなぎ合わせて一人前の遺体をつくるオンボマキのアルバイトをした学生の口から、戦争の激しさが伝えられていた。ナパーム弾を作っている町工場は、昼夜交代のフル操業をしていると伝えられた。」（小関 1981: 76)

社会学者の道場親信氏によると、丸子工場を含むこれらの米軍管理工場（PD 工場）は、立川や横田など、東京と神奈川に集中していた当時の日本本土の米軍基地の稼働を支えるために存在し、爆撃機や輸送機が基地から朝鮮半島へ飛び立つ中で「戦時」状態にありました（道場 2007: 43)。つまり、丸子工場の軌跡からは、「戦時」から「戦後」への連続性に加えて、下丸子という小さな町の歴史が、東アジアで展開されてきた戦争とも切り離せなかったことが浮かび上がってきます。

ただし、「ヒストリート」が伝えるコザのまちの歴史のことを思い起こす時、忘れてはならないのではないかと私が思うのは、こうした「戦時下」の工場で働きながら日常の暮らしとその表現を模索していったひとびとの営為です。特に、東京南部地域でも、冷戦が急激に先鋭化していく中で GHQ のレッドパージにより解雇された労働者たちが、「反戦平和」を訴えながら労働運動を展開していきました。その過程で、ガリ版刷りの詩を書き、語り合うことを通じて表現していった人びとのサークル文化運動の軌跡を、残された資料や当時を知る人たちへのインタビューに基づいて道場氏は丹念に明らかにしています（道場 2016)。それは、この地域に長く暮らしてきたはずの私自身、これまで学校や図書館、あるいは郷土資料館などで学ぶことのなかった「無数の人びとの活動の軌跡であり、「もう一つの戦後史」」（前掲書: 4）でした。

その後、朝鮮戦争が休戦したあとの 1955 年に A 工事は打ち切られ、工場は再び転換を余儀なくされていきます。その歴史について本稿では触れませんが、以上、駆け足で辿ってきた丸子工場の変遷も、「いつからが「戦後」なのか」を鋭く問いかけているように思えてなりません。とりわけ私がショックだったのは、長崎や沖縄の「戦後」について少しずつ学びを深めているにも関わらず、これまで何気なく暮らしてき

た故郷の「戦後史」については、本当のところよく知らず、これまで積極的に知ろうともしてこなかったことです。確かに、工場跡に立つ石碑は以前から何度も目にしてきました。しかし、それがどのような過去の上に立っているのかを、正直なところ想像したことはありませんでした。

一方で、同時に痛感するのは、当時のことについて知りたいと思っても、『大田区史』のほかは、先に挙げた数少ない専門書を参照しなければ具体的な歴史へアクセスすることが難しいことです。ほんの数世代前の出来事なのに分からないことも多く、容易には手の届かない「戦後史」が私たちの身近には、実は数多く埋もれているのではないかと感じています。逆に言えば、それでも当時の資料や記録を地域で大切に保存し、そして、それらの意味を丹念に紐解いてきた人びとの尽力のおかげで、見過ごされがちな「戦後史」を知ることが出来ることを有り難く思います。

下丸子をめぐる以上のささやかな経験からは、「地域史」という切り口から、東アジアへと広がっていく戦中戦後の歴史を見つめ直していくことの重要性について改めて考えさせられています。ただし、その歴史は、私たちが「問う」ことがなければ決して拓かれないままであるのかもしれません。その意味で、「記憶の継承ラボ」がお世話になっている長崎や沖縄の現場の実践家の方々は、それぞれの土地で人びとがいかに暮らしを営み続け、そしてそれは今日を生きる私たちにとってどのような意味を持つのかを絶えず問い続けていくことの大切さを教えて下さっているように改めて思います。「なぜ？」と足元から問うことで、私たちの前に徐々に拓かれていく歴史は、過去と現在、あるいは地域と地域で、ともすれば切り離されて捉えられがちなひとびとの暮らしを繋いでいく可能性を持っているのではないでしょうか。

**写真出典**

大田区「おおた Web 写真館」「羽田海苔干し場・工場地帯（昭和 31 年）」
https://www.city.ota.tokyo.jp/ota_photo/nendai/s30/s30_76w.html
（2025 年 3 月 5 日最終アクセス）

**引用参照文献**

大田区史編さん委員会編　1996『大田区史（下）』東京都大田区。

小関智弘　1981『大森界隈職人往来』朝日新聞社。

道場親信　2007「下丸子文化集団とその時代―50 年代東京南部サークル運動研究序説」『現代思想（総特集＝戦後民衆精神史）』35（17）、38-101 頁。

道場親信　2016『下丸子文化集団とその時代：一九五〇年代サークル文化運動の光芒』みすず書房。

三菱重工業株式会社東京製作所編　1972『東京製作所 50 年史』三菱重工業東京製作所。

吉成哲平　2024「水俣での学びから私たちの足元に広がる生活の歴史を見つめ直す」、三好恵真子・吉成哲平編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18、107-112 頁。

# 日中「二つの東北」の痛みと向き合いながら暮らす結婚移民の中国人女性たち――「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ結び目となりゆく歴史実践

王 石諾 *

## 1．はじめに

本シンポジウムの第一部では、コザの戦後史に関する貴重なお話を伺ったが、2023 年 11 月に初めてコザの町を訪れ、「ヒストリート」を訪問したときの情景が鮮明に蘇り、改めて深い感銘を受けた。特に、戦後の沖縄市には海外から多くの移民が集まり、それぞれ歩んできた彼ら・彼女らの人生は、一つの国家や「日本の歴史」という枠組みだけでは捉えきれないものである。また、「戦前・戦後」という単純な区分では語れない歴史の連続性の中で、人々が生活を営んでいることを再認識しながら、それが筆者自身の研究課題とも深く結びついていることを改めて痛感した。

筆者はこれまで、戦時中に日本の植民地であった中国東北部を故郷とし、戦後の新中国で生まれ育ち、また 1990 年代頃に日本の東北地方へと結婚移

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

本稿は、王石諾・三好恵真子　2024「日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生を営むという選択―「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ災害を乗り越えようとする結婚移住した中国人女性の歴史実践―」（『生活学論叢』第 45 号、15-29 頁）をシンポジウムの成果報告として構成を見直し、加筆修正したものである。

住した50代60代の女性たちの移動を介したライフストーリーに焦点を当ててきた。彼女らの国境を越えた移動の背景には、実は戦時中の人の往来などが脈々と関わっており、こうした彼女らの人生経験を理解するためには、国境を超えて、「歴史の連続性」の中で捉える視点が不可欠ではないかと考えている。従って、本稿では、そうした女性たちの日中「二つの東北」を巡る移動を介した人生経験を読み解きながら、そこから受けた示唆について論じてゆきたい。

### １）問題の所在と研究の契機

1980 年代後半、日本社会では産業化と都市化によって農業と農村が周辺化され、とりわけ東北地方の農村地域や沿岸部で深刻な「男性結婚難」という社会問題が浮上し、その解決策とされたのが「アジアからの花嫁入り」[1]であった（賽漢卓娜 2011）。筆者は、2011 年の 3・11 震災における地域の中国人の震災経験とその後の暮らしへの関心より、6 年前より東北地方で調査を始めているが、そこで気づいたのは、この地域に長年暮らしている中国人は、主として結婚移住してきた女性であり、中でも中国東北部出身者が圧倒的に多いという現実であった。それに関して、次節でも述べていくように、日中「二つの東北」は、実はそれぞれの土地柄に基づき、国際結婚の構造の一端に位置付けられてきたと考えられる。

一方、こうした日本への国際結婚移住女性に関する研究では、2000 年までは、女性の出身国による差異からは議論されず、「アジア人花嫁」として一括りにされ、また移住先の日本社会への影響に着目した受け入れ側の視点が殆どであった。そして 2000 年頃からは女性の主体性や出身社会の文脈が考慮されるようになった[2]ものの、出身地域の土地柄があくまでも女性たち

---

[1] アジアからの花嫁入りに関して、1970 年代には韓国人の割合が高かったものの、80 年代からフィリピン人、90 年代以降から中国人女性が増えていた（賽漢卓娜 2011）。

[2] 結婚移住の中国人女性をめぐる議論に関して、賽漢卓娜（2011）は彼女らを主体性のある「行為者」としての基本的視点を提示し、郝（2010）はさらに出身地域の歴史や経済的な特性にまで着目し、女性の出身地域の上位順に、残留孤

の結婚移住要因として言及されており、それに織り込まれた女性一人ひとりの人生経験については、議論の余地が残されている。

こうした研究動向を踏まえつつ、筆者はこれまで、中国東北部に生まれ、90 年代末頃に日本の東北地方の福島県に結婚移住してきた 50 代や 60 代の中国人女性の移動を介した経験に注目してきた。近年の留学などのルートとは異なり、こうした女性たちの多くは東北部の土地柄による人脈ネットワークを頼りながら（郝 2010）、片言の日本語しか話せないまま結婚移住しており、長い間日本で暮らす中でもいまだに簡易な日本語を駆使して暮らしている人が、筆者の調査地でも少なくない。特に、女性たちに共通するのは、日本人の夫が家の長男であるケースが多く、移住後は義父母との同居と介護を担うことが一般的であり、またこうした女性たちの多くは、日本人の夫の苗字を冠した日本の名前を使って福島で暮らしているため、地域の中国人同士であっても互いの本名を知らないことは珍しくないのである。

ただし、こうした移民女性の人生経験に触れる際には、彼女らの移動の原点でもある「満洲」をめぐる記憶について見過ごすことができない。なぜなら、筆者のこれまでの研究（王・三好 2023）で顕著に見えてきたのは、彼女らは「満洲」時代を直接経験した世代ではないものの、日本への移住経験を通じて、日常生活の中で移住先の東北地方に住む満洲経験者[3]である「お爺お婆」との出会いにより、改めて幼い頃から中国東北部で無意識に体感してきた「満洲」の痕跡[4]が蘇ってくることが分かった。それゆえに彼女らが母国で学んできた「帝国主義的侵略―民族的抵抗」を軸に語られる国家記憶の構造的権力の存在を意識しつつも、複層的に見えてくる「満洲」像を日々の暮らしの中で自ら模索し続けていたのである。こうした彼女らの姿勢から

---

児の歴史課題があるハルピン市方正県（中国東北部）、日系企業の多い大連市（中国東北部）、桂林市などを挙げている。

[3] 戦時に徴兵された夫側の親族や 80 年代に帰国した中国残留孤児の「お爺お婆」などが挙げられる（王・三好 2023）。

[4] 中国東北部の故郷に植民地期から残された痕跡として、町中心部の旧駅舎や通学時に乗った緑の電車、日本語の影響を受けた地元方言などが挙げられる（王・三好 2023）。

徐々に理解されうるのは、女性たちにとって「満洲」が単なる過去の歴史に留まるものではなく、中国東北部の独特な土地柄と日本の東北地方への移住経験を内面化しつつ、現在の暮らしの中で常に過去と関わりながら、「満洲」の記憶を主体的に築いていくことであった。

他方、調査を重ねる中で、筆者にとって印象深く残ったことは、移住後の女性たちが痛みを抱えながらも、その地に留まり続けて生き抜こうとする姿である。実のところ、後述するように、多くの女性にとって最初は「先進国としての日本」のイメージを抱きながら意気揚々と日本に移住したものの、その移住後の生活は、思い描いていた「幸せな人生」とは異なるものであった。こうして結婚移民の女性たちは、3・11 の震災経験を共有することで、ある程度地域社会に受け入れられているように見えるものの、女性たちの多くが依然として「心が揺らいでいる」と語っていた（王・三好 2022）。ただし、ここで見過ごしてはならないのは、中国東北出身者の女性が自発的に「インフォーマルな形」[5]で集まりながら支え合い、主体的にネットワークを構築していることである。3・11 震災直後の混乱下にて多くの外国人が帰国する中で、家族のために福島に留まり続けなければならなかった女性も少なくなかったが、言語の壁がある上に、被ばくや子供の安全への不安が高まる中で、彼女らは中国人同士の人間関係により自発的に集まりながら相互扶助のネットワークを形成していったのである。こうして震災を契機に形成され地域に点在する女性ネットワークは、それ以来、女性がリードする地域団体として発展したものもあるが、いずれにせよ、この集まりの場において、彼女らは生活の悩みや喜びを共有しながら相互に支え合う姿が見えてきた。ただしその背後には、かつての「満洲」からもたらされた傷跡と重ね合わせるか

[5] 一例を挙げると、福島県のある華人教会の活動であり、メンバーは 10 数人の移住女性で構成され、国際結婚の女性と中国帰国者が集まる場であった。週に一度の礼拝の終わりに、彼女らはテーブルを寄せ、それぞれが用意した手作り料理を並べ、食事をしながら最近の生活の話を交わすシーンを目にしてきた。彼女らは忙しい中で時間を作って集まり、この場で精神的な支えを得る一方で、築かれた相互の絆は日常生活にも広がり、例えば、農繁期には、人手が足りないメンバーの家にみんなで手伝いに行くこともしばしばあった。

のように、移住後に待ち受ける彼女らが一人では抱えきれない様々な辛さがあることも分かってきた。にもかかわらず、彼女らが日本の東北であるこの地に根を張って暮らしを営み続けるのはなぜなのであろうか。

### ２）日本の東北地方と中国東北部との関わり

先述の問いを念頭に、本節では、日中「二つの東北」を巡る社会的実情とこれらの関わりについて整理していくとともに、そこから作り出される国際結婚の歴史的社会的構造を改めて押さえておきたい。ここでは、女性たちの結婚移住の根底に繋がる日中「二つの東北」を巡る 3 回の人口移動について押さえつつ、この二つの土地が歴史文脈からどのように結びついてきたのかについて概観していく（図 1 を参照）。

**図 1　日中「二つの東北」を巡る人口移動の見取り図（先行文献を参考に筆者作成）**

まず初めは、戦時下における現在中国東北部である「満洲」への農業移民である。その背景を辿ると、1920 年代から 1930 年代にかけて、戦後恐慌以来の連続した冷害・凶作により、東北の農家の暮らしが成り立たなくなる程の困難に見舞われた。こうした不況に苦境する過剰な農村人口を減らすこと

を理由の一つとして、関東軍と政府が中心になり、1933 年から中国東北部の「満洲」開拓地への試験移民を開始した。さらに 1936 年に「二〇カ年百万戸送出計画」が策定され、約 27 万人の日本人が 13 年間に「満洲農業移民」として満洲農村に入植させられた（猪股 2006）。その中には、特に農山漁村の性格を持つ日本の東北地方からの移民が多かった[6]。また、同時期の東北農村の深刻な疲弊により、身売りのために東京へ移動する「家庭の犠牲となった」娘たちも見受けられ、「農村の不況によって一時的に潤った東京の遊廓」（薄井 1993:181）は、当時の厳しい現実の写実と言える。

次に 2 つ目として、序章の冒頭部でも触れたように、戦後の高度経済成長期以降、日本の農村へ結婚移住する「アジアからの花嫁」をめぐる事情である。高度成長期の東京への低廉な労働力の提供地として、東北では、集団就職や出稼ぎによる若年労働力の著しい流失が過疎化を促進していった。また農業と農村が周辺化され、同時に日本人女性が伝統的な農村の家族構造を避ける傾向が見られる一方で、親との同居が義務づけられた農村部の跡継ぎ男性は、結婚難に陥っていった 。こうした 80 年代からの結婚難を象徴する地域存続問題を背景に、農村男性と外国人女性の国際結婚が増加したのである。先に触れたように、1985 年に山形県朝日町で行われた全国初の行政主導による国際結婚紹介から、当時の特に東北地方におけるそうした社会問題の深刻さが垣間見られる。

一方、中国は改革開放路線へ門戸を開くことで、90 年代後半から「アジアからの花嫁」には中国人が増えていくことになり、とりわけ中国東北部出身者が多くなっていった。なぜなら、「満洲農業移民」の戦時政策により、旧「満洲」の歴史現場となる中国東北部では、中国残留邦人を中心とする日本との人脈ネットワークが残されているからである。ただし、その民間ネットワークを頼りに日本へ移住するに至った背景には、改革開放以降の中国東北部の社会状況も視野に入れる必要がある。1978 年改革開放以後、「単位制」

---

[6] 昭和 20 年 5 月頃の各県別送出員数の順位から見れば、長野（37859 人）、山形（17177 人）、熊本（12673 人）、福島（12670 人）、新潟（12641 人）、宮城（12419 人）であり（蘭 1994）、日本の東北地方の送出人員数が大きな割合を示している。

[7]の衰退が中国全土で進行する中で、とりわけ東北部は「老工業基地」としての性格を有していたため、「単位制」の影響がより浸透し、東北部の転換が他よりも遅れ、地域住民に与えた影響も格段に深刻であったと考えられる。すなわち、経済市場化が深化しつつある中で、東南地域の沿海部における経済的な発展とは対照的に、東北部では重工業を基盤とする経済構造の変化が遅れ、国営企業改革に伴う大規模なリストラが 1993 年以降本格化し、失業率の上昇が深刻な社会問題となった。さらに、戸籍制度や「単位」制度[8]により国内での社会的移動が大幅に制約される中、多くの人々が留学や国際結婚といった海外移動を打開策として選択するようになり、当時の「出国熱」という現象が注目された（坪谷 2008）。その中で、「満洲」歴史の影響により、新中国成立後も、東北部は日本語教育の中心地として機能し、中国の沿海地域では欧米への関心が高いのに対し、東北部では日本への関心が強いため、1990 年代以降、東北部から海外への人口移動が進み、とりわけ日本を移住先とする傾向が顕著となった（山下ら 2008）。以上の複層的な要因により、戦時中の満洲移民の延長線上に位置しながら、戦後の中国東北部の女性は結婚移民として、逆方向に日本へ移動したのである。

さらに 3 つ目として、2011 年の 3・11 震災による福島県民の長期的・一時的避難のために、人口の県内外の移動が強いられた。上述した日本東北をめぐる一部の人口移動の事情にも象徴されるように、赤坂ら（2012）は「東京」との関係性の中で「東北」を考えることを示唆した。すなわち、歴史的に東京への電力・資源・労働力の供給地としての「内なる植民地」と見なさ

---

[7] 第 2 章で詳述するように、「単位」制度は、中国の計画経済時期の基本制度であり、「単位」は人々の職場であると同時に、政治的や社会的機能も併せ持つ末端行政組織でもある。それを基に形成された「単位制社会」が、その世代の人々の考え方や行動に大きな影響を与えていた。

[8] 新中国が建国以来、都市と農村は分けて管理されてきた。中国の戸籍制度では、人々は出身地により農村戸籍と都市戸籍のいずれかに登録され、住宅や子供の学校教育といった様々な住民サービスは本籍地でしか受けられない。また、そのため単位の組織成員は自らの意思で他企業への転職や異動ができず、一生涯単位に縛り付けられ、組織から脱退できない（張 2020）。以上の戸籍制度と単位制度の下で、人々の移動が制限されていたことが分かる。

れた東北は、90 年代以降のグローバリゼーションによる競争で衰退し、さらに 3・11 震災に見舞われ、農水産物の汚染などによる一層の過疎化により生産基盤を失った（赤坂ら 2011）。

こうした状況から東北地方には歴史的な文脈における重層的な傷跡があることが理解される。しかし留意すべきは、本研究で注目した女性たちは、中国東北部における激変を契機としているだけであり、日本の東北についてイメージを持たずに結婚移住してきた点である。よって彼女らにとっては、特に 3・11 震災後の経験から日常の中での過去の出来事を振り返りつつ、東北地方の傷跡を徐々に受け止めていくことになるという側面を、本稿では具体化していく必要がある。実は、詳述するように、こうした「東京」との対峙に位置する日本「東北」があったように、中国「東北」も類似した立場に置かれていた現実が、本研究を通じて次第に浮かび上がってくることになる。

### ３）本稿の目的

従って、本稿では、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生を営むという選択をする中国人女性たちについて理解するために、これまでの流れから「記憶」という目には見えにくい「満州」の歴史的文脈を念頭に置きつつも、より彼女らの来歴や人生経験そのものを注視していくために、移動の端緒となる、かつての「満洲」が残した工業遺産を基に発展してきた中国東北の「工業単位制社会」の弱体化も重要な手掛かりとした。本稿の第 2 章でも詳述するように、「単位」制度は中国の計画経済時期の基本制度であり、それを基に形成された「単位制社会」がその世代の人々の考え方や行動に大きな影響を与えていた。しかし市場経済化に伴い 80 年代以降に訪れる「単位制」の弱体化の過程で、多くの人々の生活は翻弄されていった。とりわけ「典型的単位制」を貫いていた中国東北社会では、他の地域よりも急激な転換を余儀なくされ、90 年代後半には数多くの国営企業が突如消滅すると共に、人々の暮らしも「急変」した（謝 2019）。本研究で取り上げる結婚移民の女性たちは、こうした社会転換期を経験した世代であり、彼女らは激動に向き合いながら人生の局面を打開しようと模索する中で、日本の東北への結

婚移住の道を選択したのである。

そこで本稿では、中国東北における「社会主義的近代化」の影響を受けながら、日本の東北地方に移動し、長く住み続ける女性たちが、この土地の歴史に由来する深い傷跡を受け止めながら、なお留まり続ける選択をしたことについて、彼女らの「二つの東北」をめぐる生活の経験から迫っていきたい。加えてここでは、これまでと同様に、歴史学者の保苅実氏（2008）が提示した「歴史実践」という概念に着目し、人々が単なるインフォーマントではなく、「歴史している（doing history）」主体として常に日常の中で「過去を呼び起こし、歴史に触れる」という示唆を参照していく。ただし、前報（王・三好 2023）でも述べたように、保苅は先祖代々の土地に根ざしたオーストラリア先住民が日常の中で実践している歴史に着目しているものの、本研究では、女性たちの日中「二つの東北」をめぐる移動を介した経験を重視する。加えて、本稿において特に留意すべきは、地理的な意味での東北と、「南方」や「東京」に象徴される先進地域や全国との関係で問われる「東北」という二つの意味についてであり、それらを区別するために、後者を括弧付きとした。

以上を踏まえつつ、本稿では、まず第 2 章において、典型的な「工業単位社会」としての中国東北部の実情を記述しつつ、第 3 章において本研究の視座を明確化する。中軸となる第 4 章では春氏と松氏という 2 名の女性を取り上げ、社会転換と震災復興の「大きな物語」の中で激変していく生活環境に向き合いながら暮らしを立て直していく彼女らのライフストーリーを描き出していく。そして第 5 章では、結婚移住した中国人女性たちが「二つの東北」の痛みを受け止めながら相互に助け合いその地に留まり続ける意味について明らかにしつつ、結論へと導いていきたい。

## ２．「工業単位制社会」としての中国東北部

中国の東北部は、米国の五大湖地域の工業地帯と類似した発展軌跡を辿り、大型工業企業が集中し、初期の工業化による繁栄の後、ポスト工業化時代へ

と衰退したため、「中国のラストベルト（rust belt）」とも称される。しかし、米国の変遷が市場体制の変化に起因するのと異なり、社会主義国家である中国の文脈での東北部の衰退は、1978 年の改革開放政策による計画経済体制から市場経済体制への転換に関わるために、その改革による東北社会への影響を理解するには、「単位制」が一つの手掛かりになる（謝 2019, 2022）。「単位（ダンウェイ）」[9]とは、「工作単位（work unit）」の略称で、革命後の中国において社会的総資源が不足する背景の下、政権が経済組織を制御し、合理的な資源分配を組織することによって工業化をいち早く達成するために誕生した制度化された組織形態である。すなわち社会・経済・政治的機能を備える三位一体の自己完結的で閉鎖的な「小社会」（唐 2001）である。特に中国都市では、単位が都市住民に職場だけでなく、住宅や福祉サービスを包括的に提供し、住民管理や社会統合、コミュニティ形成などとして機能し得る多様な制度がその中に整備される（柴・劉 2003）。こうして、社会資源の分配は、国家から直接、個人に分配されるのでなく、単位が介入しており、「国家–単位–個人」という図式となっている（田 2007）。

一方、東北部では、新中国建国以来、単位体制が全国範囲内で確立されると「老工業基地」の固有性により「典型的単位制」（田 2007）が形成されたために、それを「工業単位制社会」（謝 2019）として特徴づけている。すなわち、1948 年に中国の他の地域より先に戦争から解放された東北部は、最も早く計画体制と単位体制に入った地区であり、また旧満洲とソ連による工業基盤[10]を生かしつつ、計画経済時代に入ると、石油や炭鉱などの伝統的な原材料産業が集中していった。国営経済の割合が高いために、都市化レベルも全国平均水準より高く、長期間にわたり全国経済の先頭に立っており、東

[9] 単位は、行政単位、事業単位と企業単位の 3 種類に分けられる。本稿の事例で登場するのは基本的に企業単位である。

[10] 植民地期のインフラ整備がある程度に残された上に、1953～1957 年の「一五計画」期間、ソ連の援助による計 156 の大型工業プロジェクトの中、1/3 が東北に位置され、それにより、高度に集中的な計画経済体制が確立された（田 2007）。

北部は単位制の推進モデルとも称された（李 1998、喬・路 2019）。同時に、単位の国家依存と個人の単位依存関係が形成されていく中で、個人の「生老病死」の全てが単位に関わるようになり、人口の地区間、職業間、単位間の流動が困難となって、単位を前にして個人のアイデンティティは後景化された（柴・劉 2003）。ただし、1978 年から始まった改革開放に伴い、単位体制が動揺・衰退しつつポスト単位体制へと転換していく中で、1991 年に「東北現象」が注目されるようになった。これは、かつて経済発展が全国の前線に立つ東北三省は、短期間に工業生産の増加率が全国最下位に逆転したという異常な現象が生じ、90 年代の後半から、さらに多くの国営企業の衰退による普遍的な失業問題が極めて深刻化した。そこで、こうした現象に対し、「典型的単位制」の性格から計画経済体制の名残が色濃く残るために、産業構造の転換の遅れといったマクロな産業政策に着目した経済学の視点が盛んになった。

ただし謝（2022）は、上記のような議論のみでは東北社会に生きる平凡な個々人の生命活動の複雑性を解釈しかねる懸念を提示している。同様に李（2018）は、中国社会の転換についてトップダウンの政策的視点からでは「科学的発展観や人本主義」といったスローガンしか見えてこないが、ボトムアップのそこに暮らす人々の視点に鑑みれば、「見知らぬ社会に圧倒される『自失』と自分自身ならではの価値と観念を確立させようする『自覚』といった双方の主体性が一人の人間の身に複雑に現れ」（王 2012:17）、そうした模索しつつ揺れ動く人々の「生活の様態」に注目する重要性を指摘している。

よって、このような激変を経験した人々を理解するために、中国における「個人化」から「単位人」への独特な価値観に接近する必要がある。李（2018）は、中国の「個人化」について、建国以降から 80 年代までの 1 度目の解放と、それ以降の 2 度目の解放を区分した。1 度目は、政治運動により個人が伝統的な親族社会から解放されたものの、個の独立性が認められず、完全に国家と集団の権力下に置かれた。こうした延長線上に置かれた上で 2 度目に突入し、制度的変動で個人化は推進されたが、80 年代以前に精神世界までも集団化されていた人々は、単位の呪縛から逃れることが容易ではなかった。

よって、「単位人（職場によって全てを管理・供給される存在）」から「社会人（社会的に独立した人間）」になったと言われても、どのように「社会人」として振る舞えば良いのか分からず、精神的に準拠すべき倫理・道徳の規範を見いだすことができずに「個人」としての精神世界が形成されにくい状況にあった（李 2018）。具体的には、単位組織が個人の全てを保障することと引き換えに、個人を単位に縛り付け、全面的に依存・従属した関係の下で、リスクや競争を好まず、結果の平等（平均主義）を求める傾向にある一部の単位人は、国営企業の「不滅神話」が消えたポスト単位体制において、常に激しい競争に身をさらされ、経済生活への不安が高まっていった（張 2020）。こうした現象について、坂部（2021）は、これまでの国家が主導する社会への動員というメカニズムが機能せず、人々の生活領域にある種の方向性の損失感や空白が生じていると論じている。

以上を踏まえると、改革開放に伴う単位制の衰退が中国全土で進行する中で、東北部は「老工業基地」としての性格を有していたため、「典型的単位制」の影響がより浸透し、東北部の転換が他よりも遅れ、地域住民に与えた影響も格段に深刻であったと考えられる。しかしながら、こうした東北部出身の結婚移民を巡るこれまでの議論の中で、単位制と繋がる人生経験に対する検討は未だ十分とはいえない。

## ３．本研究の視座

### １）個々人のライフストーリーから読み解く意義

以上の先行研究からの示唆を踏まえつつ、本研究では、中国全土における社会転換期の中での東北社会の変容を経験しながら、結婚移民として日本の東北地方で生活をはじめた中国人女性たちが、如何にして「二つの東北」を巡る移動経験に向き合いつつ、日本の東北の地で自身の生活を立て直そうとしてきたかについて、当事者の女性の暮らしの眼差しから出発し、個々人のライフストーリーを描き出しつつ検討を深めていく。

まず本研究にて、ライフストーリー法を用いる意義についてここで確認し

ておきたい。2 章で述べた通り、現在、中国東北部の国営企業が実質的に存在しなくなり、その社会変遷は実態のない「幽霊」のように捉えにくい（謝 2022）と言われる。しかし、元単位人の意識や感情、言動の中に強固に残る単位の慣習は、ポスト単位社会での単位の「見えざる存在（隠形在場）」（田・王 2017）として、東北の変遷を理解する手掛かりとしての可能性が提示されている。ただし、冒頭で述べた日本の東北地方の実情に関して、本研究に出てくる女性たちが生きた時代の教育の限界性 [11]と日本語能力の障壁に鑑み、彼女らの日本の東北に対する認識が、実にそこでの日々の生活での体感から得られていることを、筆者が調査を繰り返すうちに次第に分かってきた。こうした変化に向き合いながら日常に見え隠れする個々人の主体性と時代の痕跡を見つめていく際に、個人の「生活」に焦点を合わせ、巻き込まれた生活世界の諸相や変動を「経験の語り」から読み解くライフストーリー法（桜井 2012）が適切であると考えた。

さらに、本稿では、「いかなるインタビューの場においても語り手が調査者をカテゴリー化し、それに応じた自己カテゴリー化をもとに語りが産出されている」という「対話的構築主義」のアプローチに基づき、対話の中で徐々に見えてくる調査者と語り手がそれぞれ属するコミュニティに由来する「社会構造的非対称性」（桜井 2012）について留意していく。それゆえにここでは、聞き手の筆者と語り手の女性の関係性、特に世代間と生活地域間の差異について述べておきたい。筆者は 90 年代生まれの中国南部出身で大阪在住、女性たちは 50・60 年代生まれの中国東北出身で福島県在住であり、この差異は分析の文脈において重要になってきた。

具体的には、筆者は 6 年前より中国東北部出身で国際結婚によって日本の東北地方の福島県に移住した 11 名の女性たちと関わってきた。こうした女

---

[11] 既報（王・三好 2023）で整理したように、戦後中国における「満洲」を巡る歴史に対する捉え方の変遷について、80 年代半ばを節目に大きく二つの時期に分けられると考えられる。本稿で取り上げる女性たちの学生時代は、80 年代半ば以前の時期にあたり、この時期における国家レベルの戦争叙述の特徴として、戦勝国として前向きなトーンで語られる「進歩叙述」（盧 2019）が挙げられる。

性たちは、50・60 年代の「ベビーブーム」世代であり、60・70 年代に成長し、改革開放初期に就職、90 年代末の単位解体を経験し、改開移民ブームの比較的初期に来日している。彼女らは移住後の適応期を経てまもなく 2011 年の 3・11 震災に見舞われ、それまで築いてきた生活基盤が大きく変化したものの、日本の東北地方で生を営み続けることをいずれも選択している。本調査では、「二つの東北」を巡る移動経験を介して、日本の東北地方の置かれている立場について、徐々に受け止めながらも、なぜ日本の東北で生活を立て直そうとしてきたのかについて、当事者の女性の生活の視点から検討を深めていく。

### ２）結婚移民の中国人女性たちを取り巻く状況

次章にて結婚移民の中国人女性のライフストーリーを描いていく前に、本節では彼女らを取り巻く社会状況を考える際に重要となる、転換期当時の特徴的な制度と 3・11 以降の社会状況について押さえておきたい。

まずは、女性たちが経験した中国建国後の 2 回[12]の深刻な失業現象とその解決方法について見ていく。1 回目は、青年時代にあたる 1978-1980 年の時期であり、文化大革命（以下、文革）の終結後、経済は復興途上にあり、これまで上山下郷運動により農村へ行った知識青年（以下、知青）の集中的な都市帰還が突如として都市部の失業問題を深刻化させた。この時期の対応には、「単位人の家族にも面倒を見たり支援を行う」という単位の特性が未だ残され、基本的に親が退職後に子女が単位での職に就くことや、単位の付属集団企業に就職することとなった（李 1998）。

2 回目は、女性たちにとって社会人歴 10 数年目の頃、「東北現象」が深刻化する 90 年代末に、産業構造と体制の転換が重なり失業問題が悪化した。この時期の対応として、政府は失業者に「自分で職を見つける」ことを奨励し、第三次産業や非国営経済部門への再就職を促進し、「後工業化」と「市場化」の特徴が示され始めた（李 1998）。この時期、国営企業の余剰人員問

[12] 李（1998）の整理によれば 5 つの失業現象があったが、ここでは女性の人生軌跡に深く関わる 2 回に焦点を絞る。

題が浮上し、多くの「単位人」が単位を離れることとなった。張（2020）は、「単位人」の単位の激変への受け止め方に即し、それぞれ単位を自発的に離れた組と、不本意ながら単位を離れざるを得なかった組に分けた。前者の多くは高学歴の人材で、辞職組とやや慎重派の「停薪留職（給与を支給しないが単位内の職位を保留する）」組により構成されており、また後者の多くは学歴の欠如により激しい競争で不利な立場に立たされる人々であり、「裁員」、「下崗」や「買断工齢」などの形[13]で雇用関係を解除された。

また、女性たちはこうした中国社会の激変を経験した後の 90 年代末に日本の東北へ移住したのだが、最初の適応期を経ながらも、2011 年の 3・11 震災を節目として、それ以降の生活もまた避難や放射能物質のリスクの影に曝されている。避難に関して、第 4 章で取り上げる 2 人の女性は、強制避難させられた地域の住民ではないものの、個人の判断による自主避難か否かについても簡単なものではない。また、避難せずに留まり続ける人々が直面するのは、激しい人口流出により変わってしまった従来の地域の様相である。山内（2021）によれば、農山漁村地帯の東北三陸沿岸部では、都市社会と異なっている家族形態や共同体のあり方が存在し、そこでは、例えば野菜やコメの融通し合いなど、近代資本制では捉えられない相互扶助の優れた仕組みがかつて存在したものの、震災とその復興・復旧過程により喪失しかねない危機が示唆されている。こうした従来の「仕組み」が変わりつつあるこの土地で、女性たちが生活を成り立たせていることを念頭に置いておく必要がある。

## ４．女性たちが直面した生活環境を巡る変化とその葛藤のライフストーリー

[13]「裁員」は最低生活補償金が支給され、リストラで解雇される形であり、「下崗」は給与の一部しかもらえず、持ち場が空くまで自宅待機する隠れ失業を指し、「買断工齢」は企業と個人が話し合って金額を決め、企業が一時金を支払う代わりに、雇用関係を解除する方法である（張 2020）。

### １）調査協力者と調査方法

上記にも触れたように、筆者は 2021 年 3 月から 2024 年 3 月までに継続的に福島県に赴き、11 名の女性たちに対してライフストーリーのための聞き取り調査を行い、併せて参与観察を実施した。聞き取りは、協力者にとって母語である中国語（東北方言も混在）で行い、一人につき 6 回から 8 回、毎回 2〜3 時間程度行った。

本稿では、そのうち春氏と松氏の 2 名の女性のライフストーリーを描き出していく。この 2 名を取り上げる理由について二つ挙げておきたい。第一に、移動の端緒が同様であっても語り手としての対照的な経歴と個性がある。春氏は都市部の国営企業で生まれ育ち、改革の大波下で主体的に単位を離れた女性であり、それと対極をなす、農村部出身の松氏は、単位の倒産後に都市部への出稼ぎを余儀なくされた。つまり、3 の（2）で述べた建国後の一度目の失業現象により、二人とも「単位の子女」としてその荒波に見舞われ、大卒の春氏は単位での専門高校の教師となり、高卒の松氏は単位の付属集団企業に就職できた。しかし、二度目の失業現象により、春氏は、「停薪留職」の政策を取りながら、大学の専門知識を活かしつつ服装生産商売の起業を始めたが、松氏は農村部の付属企業の解体により、仕事を失わざるを得なかった。

第二に、異なる個性を持つ二人が、来日後の経験も含めて振り返る中で、単位時代の生活や自己への愛着を強く口にしながらも、3・11 震災後の日本東北で、単位時代との繋がりを自分の中に持ちつつ日本の東北の地での暮らしを模索する姿勢をみせた点である。ただし、改革によって中国東北社会の単位体制が動揺・衰退していく中で、安泰した単位社会から不安と競争に満ちたポスト単位社会への激変を経験した二人は、試行錯誤の末に日本の東北地方に結婚移住しているが、調査をした他の女性たちも移動の端緒として「単位制」の弱体化の影響を多かれ少なかれ受けており、3・11 震災で再び翻弄されながらもいずれもこの地に留まり続けている。冒頭で述べてきたように歴史的に重層された傷跡を受け止めつつ、震災を乗り越えながら、この土地で生を営む彼女らの姿とその意味について、二人のライフストーリーか

ら掘り下げていきたい。

### ２）春氏：「停薪留職」の政策への期待と挫折から

#### i）老車両工場と関わってきた中国東北での暮らし

春氏は 1959 年に、中国東北部の工業都市における、典型的な国営車両工場単位の元で共働き夫妻の家庭の 3 姉妹の長女として生まれた。この「都市の誇り」と称された大型国営車両工場は、最初にロシアによって建設され、2000 年前後の改造移転までの 100 年以上の歴史を誇っていた。車両場は、移転まで都市の中心部に位置し、最盛期には 2 万人も収容する大規模なものであり、敷地内には従業員とその家族が居住する住宅団地、病院や学校などの施設が完備され、「列車が走れる」ほど広かったという。車両場で育った子供時代を振り返りながら、春氏が「非常に誇りに思う」と語った。なぜなら、車両場の待遇が良く、給料が「旱澇保收（干ばつや洪水にあってもよい収穫が得られる）」と言われるほど安定していた。春氏一家は「社会主義ビル」と呼ばれる 3 階建ての建物に住み、当時では豪華に見える「三気（ガス、電気、暖房）」を享受することができた。ただし、春氏一家が入居できる理由は、経済的に工場内で最も困窮していたからだという。すなわち、「生活条件が悪いほど、より良い住まいに割り当てられる」という当時の住宅割当制度に基準が存在した。今から振り返ると、計画経済時代は「今では想像もつかない不思議」な状況で、「公平で詐欺と偽りがない」時代であり、そこで「一生が保障された」安定感を春氏は感じていた。

しかし、その安定した暮らしが長くは続かず、1978 年頃から、「知青」の大規模な都市帰還による 1 回目の失業現象により、「社会がごちゃごちゃ」になり始めた。当時の一変した社会秩序について、春氏は以下のように振り返った。

> かつて放課後は、鍵を首にかけて歩いて家に帰っていた（それほど安全だった）のだ…ただし（この時期から）窃盗が増えた。1 元や 2 元をポケットに入れて出かけると、すぐに盗まれてしまった。ここの泥棒は専用の「泥棒服」

さえ持っていた。見るとすぐにわかる。上着は中山装、下にスーツズボン、マーモット革の帽子をかぶって…それは裕福な人しか着られないものだ。泥棒はお金持ちで、「老百姓」は貧乏だ。それが当時の東北、面白いだろう？

従って、こうした失業問題を解決するために、各単位は単位人の子女の雇用問題に取り組み始め、車両工場でも無職の若者を受け入れるための専門高校を新たに設立した。教師が人手不足のために、1985 年に大学で服装専攻を卒業したばかりの春氏は、教師として改めて車両場に戻った。しかし、改革開放の深化に伴い、春氏は教師の本職に満足できず、自分の専門知識を活かして衣料品の生産販売事業を始めた。実際に、「最初に我々東北で商売をやっていたのは、70 年代末の泥棒やヤクザなどの人だ。誰も商売が目に留まらなかった」[14]といった語りから垣間見えるように、改革開放初期、個人商売が可能になったとはいえ、これまでの単位生活に慣れていた人々は企業や商売を受け入れなかった。ただし、市場経済が進展した 80 年代末から、一部の国家幹部の子女も商売を始め、こうした動向を敏感に察した春氏は、1993 年に「停薪留職」を申請し、単位内の学校から単位外の起業への移転を慎重ながらも積極的に試みたのである。最初は車両場構内でデザインや生産を行い、完成した衣料品を構外の市場で販売したが、事業が拡大するにつれ、より大規模な生産工場が必要になるため、春氏は学校の授業をやめ、車両場外で衣料品事業に全力を注ぎ始めた。

しかし、事業が好調に進む一方で、春氏の健康状態が過労により悪化し、病気で倒れた。それを機に、春氏は「パートナーの重要性に気づき」、友人の紹介で現在の日本人の夫に出会い、1998 年に事業をやめ、夫の故郷である福島に結婚移住した。こうした絶頂期に事業をやめたことは悔やまれるかと尋ねると、「その時に貯金も起業経験もあったので、何も惜しいとは思わなかった。日本に来て、機会があればまた起業できると思った」と決断力に

[14] 改革開放から 80 年代中期までの就職観に関して、「政治的地位」と「社会的地位」が青年の間で重視される中で、政治と工業が重視され、農業と商業が軽視され、実際に活路が見出せなければ、「個人営業」や商業、サービス業などの第三次産業に従事しなければならなかった（蒋 2013）。

富む春氏の答えが聞けた。ただし、当時まだ「未知の世界」である日本に結婚移住するその大胆さの背後には、実は「停薪留職」制度の保障も無視できないと、筆者は以下の対話から気がついた。なぜなら、かつて「不滅神話」や「一生の保障」であった車両場では、春氏の来日後間もなく大規模なレイオフが行われ、春氏も退職を余儀なくされたのである。

**＊（筆者発話、以下同）**：中国に帰らなかったのは、何故ですか？

**春**：色々あるけれど、当時、一番間違えたのは、退職のことだ。結局、うちの単位は崩れたのじゃないか。工場を郊外に移転して、一部の余計な人を取り除くことになって、その中で、まず「停薪留職」の人はレイオフされた。

**＊**：…ということは、来日当時は、衣料品の仕事をやめたけれど、車両場での職はまだそのまま保留してくれたのですね。なるほど、そうですね。その後、工場がなくなってから…。

**春**：（中国に戻るという）退路もなくなったんじゃないかな。レイオフされたくない場合、その時すぐ中国に戻って働かなければならなかった。でも（日本で家族を作ったばかりの）その時の私は一瞬の判断で、戻るのをやめることに決めた。…仕事がなくなったら（中国に）帰ってもどうしようもないだろう。（衣料品の）ビジネスの発展も速いから、もう追いつかなくなった。

**＊**：元々都市中心部にある老工場がなくなったことに対して、どういう気持ちですか？

**春**：…相当複雑だ。老工場が取り壊されていた時、私がその場にいなかったが、帰た時も建設が始まった。ビルも高いし、交通も便利になった…郊外（に移転した）の新工場を一回見に行った。今の出勤が打刻制から、退勤時間じゃないと、人が見えない、過去は人が多かったよ。…

こうした春氏の語りからも、急速に消え去った老車両場に対しての複雑な

気持ちが読み取れた。実質、車両場で働かなくても、そこは「いつでも帰れる」母国への「退路」があるとして、春氏に来日に対する大きな勇気を与えていたことが読み取れる。その反面、予想外の老工場の消失により、「退路」が断たれることを意味したため、本来彼女にとって「試しに見てみよう」とする来日が、母国へ「帰らざる道」となってしまったのである。

このように、春氏は、典型的な国営大工場で生まれ育ち、社会の混乱期に老工場をベースに教師また起業家として活躍しながら、日本へ移住するまで、老工場と密接に繋がっていたことが読み取れた。その後に訪れる工場の変遷に対して、春氏は社会動向を機敏に察しており、自主的に工場から離れたものの、老工場がバックアップの存在として彼女のやる気を支えてきた側面があることも見えてきた。

**ⅱ）伝統的家庭の束縛から次第に見えてきた日本の東北の傷跡**

1990 年代末期に、39 歳の春氏は、福島県の伝統的農業と蚕糸業を生計とする町に結婚移住した。春氏が現在の日本人の夫を選んだのは、「彼は公務員だから」という単純な理由からである。彼女にとって、公務員は中国の単位人と似た信頼できる存在であった。結婚して夫と義父母と一緒に暮らし、2 年後には息子が誕生したが、移住生活では予想外の困難に直面していた。特に義母との日常的な衝突が日に日に悪化し、その深刻な嫁姑関係に対して夫の無関心さが春氏の苦しみを増幅させた。結婚から 5 年後、ある大喧嘩の末に離婚を決意し、息子を連れて中国に帰った春氏であるが、「父親に会えない息子に対して後ろめたさを強く感じた」ため、数年後再び福島に戻り、夫との復縁を試みた。しかし結局、義母との関係は改善せず、再度揉め続ける日々に戻り、うつ病に陥った。そして 2011 年の 3・11 震災を契機に、息子を連れて家を離れ、二人で東京での長期避難生活を始めたのである。

義母が亡くなってから 10 年以上経った今でも、春氏は夫一家の話題になるたびに、激しい感情を顕にし、その怒りが収まると、語りには悲しみの色も見え隠れした。

入浴の時間や料理、些細なことで毎日義母に叱られ、理不尽なことばかりだった。…私はかつて自分でお金を儲けたのに、どうしてここで食事の時さえも人の顔色を見なくてはならないのか（泣き声）…夫も何も見て見ぬ振りをして、暴力的な傾向があったことに後で気付いた。毎日は戦い、常に緊張していた。…と言っても、彼（夫）も実は被害者だと分かっている。あれは病気だ。義母もそうなんだ。

その「被害者」を巡る対話がさらに進む中で、夫一家の戦争と関わる家族史が浮かび上がってきた。大正 5 年生まれの義父母は、福島の土地を代々生き抜いてきた農家である。義父は家庭 3 子のうちの次男で、戦争末期に海軍として戦場に送られ、戦後アルコール依存症となり、泥酔状態の時に土地の相続権の放棄を兄嫁に誘導されたという。土地を受け継がなかったため、義父夫妻は、町人に雇われて畑仕事をしたり、地元工場で日雇い労働をしたりすることで生計を立てていた。一方、義母は、9 人兄弟の貧しい家庭で育ち、子供の頃、姉がやむを得ない身売りにより重病に倒れ隔離された際に、独りぼっちの姉に食事の世話をするなど、厳しい生活を経験した。また、結婚してからも家事が不器用であったため義父とその父親からの暴力に、義母は長年に耐えていた。よって「この暴力は遺伝的だ」と春氏は語っており、これが春氏の結婚生活に影響を及ぼしていると考えられる。実は、筆者が知るところによれば、春氏のような例は珍しくなく、多くの中国結婚移民の女性が、夫の家族の問題に来日以降に気づき苦労している。春氏はこれらの男性を「選りすぐられた林檎の箱の中の残り物」と比喩していたが、その厳しい表現から、国際結婚が抱える問題の一端を垣間見ることができた。

しかし、そのような辛い思いがあったにも関わらず、これまで福島の家を何度も離れた春氏は、息子が大学に進学後に再び戻ってきた。「夫に脅迫された」という理由を最初は語っていたが、実際には、対話の隅々から、それ以外に春氏の離れがたい理由が徐々に見えてきた。

＊：母国には頼れる親族がいますが、帰国ではなく、また福島に戻ったのは、

夫との関係性を作り直そうと考えていたからですか？

**春**：彼の性格はよくないけど、被害者でもあったからだ。彼に徹底的に失望したというわけでもない。私たち夫婦の間には、ずっと義母がいた。（今義母が亡くなり、）もう一回二人でお互いをすり合わせてみようかと思った。私が彼を大切にすれば、彼も私を大切にしてくれるだろうと思うけど、やはり（今は）違うのだ。

**＊**：「違う」というは、昔の老工場での生活ということですか…？

**春**：影響は大きい。（子供の頃の生活は）性格を決めてしまうよ。その時は非常に純朴で優しい近隣関係だった。

**＊**：そういえば、（移住先の）ここで仲良しのお隣同士を作ろうと思っていたのですか？

**春**：…私、確かに努力していた。だけど、何というか…この家族は百年以上もこの町に住んでいたから、近隣関係って、嫁一人で変えられるものではない。…私、39 歳になってから結婚できたのね、もうこんな年。やはり「面子」を大事に見ていたね。こんな結婚生活を送っているのを、他の人に知られたくないし、必死に隠そうと、全てを自分で飲み込もうと…。

以上から、中国で教師や起業家として活躍した春氏は、高い自尊心を持って幸せな家庭を築くために日本に来たものの、逆に日本の東北地方の伝統的な家庭に縛られてしまった。こうして結婚前後の生活のギャップに春氏は苦しみつつ、その背後に潜む構造的な原因に徐々に気付いていった。しかしそれには、東北の山村社会で暮らす人々の戦時中の過酷な経験が、世代を超えて影を落とし、現在彼女の婚姻の苦悩の一因に繋がったのだと春氏は考えているようである。他方で、老工場の生活経験により、春氏の根底には互いを支え合う穏やかな人間関係への憧れがあり、そのことが、彼女が何度も福島に戻り、夫との関係を作り直そうとした理由であろうと筆者らは考えている。

それに関連して、最初の頃のインタビューでの一場面をここで挙げてみたい。「福島は春さんにとってどのような場所ですか」と尋ねた際に、震災前の町の文化祭について、彼女は不意に話し始めた。子供たちが町の服を着て、幼い息子も行列の中で手を振り踊り、春氏が後ろからついていって踊っていた光景であった。それを振り返りながら、「ここは静かで住みやすい場所だ」と春氏は語った。しかし、少し考え込んでから、「福島の山々に息苦しさを感じる」と一言付け加えた。この土地に抱くこうした対照的な感情は、春氏の内面を反映していると言えるのだろう。それは、幼少期の集団生活の経験がもたらした、安定した親密な関係と心の居場所を求める願望がある一方で、この土地の過去の傷跡に縛されながら生きる苦悩もあるという葛藤である。

### iii）翻弄される人々への共感

「この地域には満洲に行ったお年寄りがたくさんいるよ。騙されて行ったのだ」と春氏は語った。しかし、春氏の日本語能力には限界があり、これ以上満洲からの引揚者たちと話を続けることは出来なかった。なぜ彼らが騙されて行ったことを知っているかを尋ねると、町で開催される平和のための戦争展示会における次のような言葉が出てきた。「そこで多く見た。戦時中に人を甲乙丙丁に分け、戦闘の前線を支援するために国内に残った女性は工場で働かされた。中国の大躍進みたいだね。」という語りである。その断片的な話から、恐らく戦時の徴兵制度や国家総力戦体制下で女子挺身隊の展示内容を指していると推測できた。また、春氏が口にする「大躍進」は、戦後の中国が国民を動員して実施した大規模な非科学的な増産運動のことである。それらはいずれも、国の大きなスローガンによる動員から始まり、一層貧困化した庶民の生活で終わるものであった。春氏には言語の壁はあったものの、町での日常を通じて徐々に人々に写し出されてくる傷跡に気付いていったのである。特に、戦時下の人々が国策で戦場や外地に送られたことについて、「世界のどこでも、貧しい人々はただの駒に過ぎない」と春氏は語っていた。

なぜ春氏は戦時下の日本人庶民の経験に、これほど強く共感できるのだろうか。それは恐らく、実家の家族史や、彼女自身が経験した中国東北の単位

制の弱体化と結びついている。春氏の母方の兄弟は、戦争下での飢饉に耐えかね、生き延びるために兵士となり戦場に送り出された。ようやく終戦を迎えたが、内戦により母の家族は再び分断された。そのような戦争世代の体験について、平和な時代を生きた春氏が幼い頃から受け継いで、さらに 80 年代の単位制の弱体化に伴い、今回彼女は社会の激動について身をもって感じ取ったのである。

**＊**：80 年代以降の政策によって、中国東北の経済的立ち位置が逆転したことについて、その変化を常に感じていますか？

**春**：私たち「老百姓」は、そうした事はコントロールできないだろう。みんなが大きな袋に詰め込まれて、政府がその袋を振るう感じだ。我々はただ袋の中で混沌とした生活を送って、上の政策がどうなっているのか分からない。…我々の東北は非常に閉鎖的で、みんなが外へ出ることを恐れていた。80 年代後半に失業者が増え、仕方なく南方へ行ってから初めて別の世界を知ったんだ。

**＊**：以前は車両場で、皆さんは（単位に）よく見守られていたけれど、急にその保障が失われた時に…

**春**：戸惑った。何も分からなかった。まるで羊の群れが突然別の方向に散らばるようなもの。（方向を変える）理由は分からないけど、とりあえずは群れに付いていくしかない。

これまで安泰していた単位から激変する環境に置かれ、社会転換に翻弄された春氏の人生体験は、「袋に詰め込まれた」や「羊の群れ」と彼女が表現するように、政策の動向に敏感でありつつ積極的に対応していたものの、実際には戸惑いと不安を抱えつつ、単位への愛着と依存の狭間で、懸命に生き抜こうとしていたと言える。一方で、春氏が語っていた「閉鎖的な東北」を理解するために、彼女が頻繁に言及する「南方」という言葉を考慮する必要

がある。春氏によれば、「南方」は東北より南にある上海のような海外貿易が盛んな都市を指し、地理的な意味以上に、経済的な進歩を象徴する「憧れの地」として認識されていたことが分かった。それに対し、「東北」は経済的や人々の考え方の面で遅れを取った地域とみなされるニュアンスが、若干浮かび上がってきた。

### ３）松氏：戦争と震災の影を受け止める暮らしから

#### i）単位時期の農村からポスト単位社会の都市へ

松氏の生まれた家から 1 キロメートル離れた所に、大きな川が流れている。春の雪解け水が集まり、その川はこの小さな町と松氏の幼少期を潤していた。「川には大きな魚が跳ねていた。冬には川が半分凍ると、魚が浮かんで見えた。母は私たちを連れて釣り針で魚を引っ掛け、食べきれない分は干してアヒルや豚の餌にしていた」という。また、父親は行政単位の農電所で働き、仕事で時々村を回って村民の家を訪ねた。幼い松氏はよく父親について行き、爺ちゃん婆ちゃんに元気よく挨拶する度に、相手から喜んで自家栽培の柿をもらったという。これらの話から、豊かな自然に恵まれ、温かい近隣関係に囲まれた農村生活が窺える。

1983 年、高校卒業後、松氏は「単位の子女」として農電所の付属集団企業で就職し、家電製品などの販売を担当した。当時の仕事は「最高だった」と彼女は語り、従事内容が基本的に楽で、売り上げに関係なく安定した給与があり、単位の提供する豊かな食事に満足していた。また、同僚もみんな「単位の子女」で、「電力単位関係者以外は（ここでの）就職ができない」という。そこから、福利厚生が手厚く保障されていたことで、単位で働けることが当時ではどれほど見栄えが良く、誇りに思われることであったかが窺える。

しかし、改革開放による社会風潮の変化を、松氏は徐々に体感していった。こうした時代の転換が、松氏に真正面から押し寄せてきたのは 1993 年、すなわち単位生活での生活 10 年目に、集団企業が解体し、松氏は職を失った。単位時代に生まれ育ったが、急に単位の保障を失った松氏は、当時の多くの人々と同様に途方に暮れた。実際、単位が運営に困難を極めた最後の 2 年間

は、民間の個人業者への請負契約が促されていた。しかし、「集団」という概念に慣れ親しんでいた松氏にとって、「個人」や「私人」といった新しい概念には馴染めず、逆に受け入れることができなくて恐怖を感じたという。その後、「黒猫であれ白猫であれ、ネズミを捕まえる猫が良い猫だ」という当時の鄧小平の名言に、松氏は感銘を受け、故郷を離れて就職の機会を探す決意をした。それから、長春の市場でお菓子を売ったり、百貨店で靴を売ったり、ハルビンで洋服販売やリゾートでの調理補助など、様々な小売り商売を手がけてお金を稼ぎ、当時の限られた「万元戸（当時年収 1 万元以上の大金持ち）」にもなった。しかし 1995 年前後、松氏は中国人の夫と離婚した。夫の浮気が離婚の理由であったものの、ここで留意したいのは、「（単位での）安定した仕事があれば離婚までにはならない。あの時、みんなは仕事を重視していた」という松氏の語りであった。そこから、いくら儲けたといっても、単位から排除された引け目は、依然として彼女の意識の根底にあったことが窺える。こうした故郷の農村部から都市への人生経験について、松氏は以下のように振り返った。

＊：そう見れば、単位が破れなかったら、故郷の町を出ることはなかったですかね。

**松**：出るはずはないだろう。（故郷での暮らしは）他に比べるものがあるのか？正直、改革開放は私たちにとってあんまりよいことではないのだ。思い切って何かをやりたい人にとって、それはいい時代かもしれない。

＊：安定した仕事のある人にとって、それはいいことではないということですか？

**松**：うん。「被逼上梁山（追い詰められてやむを得ない状況）」だ。（単位の）解体がなければ、日本に来ることも絶対なかった。…サルみたいね、東に行ったり、西に行ったり、安定性がないのだ。

＊：不安定であったといっても、実は小売業でそれなりに儲けたと言ってい

ましたよね。

**松**：うん、ただ金銭運は良かった。でも、その時は愚かだ。本気で仕事に没頭しちゃった。…お金も権力もなければ、（生き抜く）道もないよ、人間関係などの手段を使わないと。私はそういう形勢についていけないのだ。

こうして経済体制の変化が都市と農村の雇用格差を深刻化させたため、松氏は故郷の自給自足の生活を離れて都市へ移動し、小売商売を転々とする生活を余儀なくされた。以上の対話から、松氏の勤勉さは物質的な富をもたらす一方で、故郷や単位を離れた漂流感、そして単位時代と大きく変わった金銭と権力を重んじる社会の新風潮への不慣れを、実際には抱えていることが読み取れた。こうして、中国東北社会において「集団」の概念がどこよりも強く根ざしている中で、経済的進展がもたらす「光」よりも、後ろ盾を失いつつある松氏にのしかかる「影」の方が、強く印象に残った。

**ⅱ）戦争と震災の影で営まれる日本東北での暮らし**

松氏が日本に移住するきっかけは、高校時代の友人が関係していた。その友人は福島に嫁ぎ、近所の日本人男性から嫁探しを頼まれ、当時離婚した松氏を紹介したのである。2000 年頃に、松氏は結婚移住したが、想像していた繁栄する日本の都市部とは異なり、伝統的な養蚕農業と繊維産業で生計を立てる静かな町であった。「見下ろすと田んぼ、見上げると山にサルがいる。」というのが松氏のこの町に対する初印象であった。夫は、地元の家庭の 3 人兄弟のうちの次男で、以前は首都圏で働いたが、長男が突然姿を消したため、老いた母親の世話をするために故郷に戻ってきた。実は、夫一家は戦後に再編された家族であった。義父は新婚二日目に中国東北部の戦場に出征し、新婚妻は戦時下の厳しい環境で病死した。また、義母の元夫も同時期に徴兵され、生還することができなかった。義父が復員後、戦争で家族を失った二人は再婚し、新しい家族を築いた。その家族史を語った後、松氏は一時的に沈黙に陥っていた。

今も戦争の話をすればね…昼休みにテレビでパレスチナの戦争のニュースを見ると、同僚の日本人のおばあさんは皆叫んでいた。「戦争イヤだ！」って…うちの町では毎年文化祭があって、戦時中の血のついた衣類や手紙などが展示されるのだ。あんなに多くの人が亡くなって、（みんなが）もう（戦争には）うんざりだ。

結婚数年後に息子を出産した松氏は、この町で「短い幸せ」な時を過ごした。しかし、息子がまだ小さい頃に、夫が急病で亡くなり、義妹に家を奪われたため、松氏は息子を連れて家を出て、二人で県営住宅に移ることになった。それは彼女にとって「人生で一番苦しい時期」でもあった。

2011 年の 3・11 震災は、引っ越してからの出来事であったが、当時の直接的被害よりも、それ以降の影響が長く松氏の生活に影を落としていた。余儀なく離れなければならなかった旧養蚕の町は、震災後の除染作業で本来の風景を失い、自宅の畑は 9 年前から放射能汚染土の中間貯蔵地として政府に利用されることになった。そのことに対して、松氏は「（誰もいないので、その畑は）どうせ使わないから、（そのまま放置するより、政府に使われることで）賃金はもらえているし」と語った。そういった原発と除染に関連する話題になると、「考えていない」、「国の仕事だ」と、彼女がいつも淡々と話すように見えた。ただし、それは決して無関心からではなかった。なぜなら、被災した農家を語る際に、松氏の話しには次のように複雑な感情が滲み出ていたからである。

（海辺の）相馬に行ったんだけど、（潰れた民家に）服がそのまま干してあって、ほこりだらけになって、全部流されちゃった。あんなに立派な家が…。地震から 2 年も経たない時、そこのお爺が元の場所で新築を建て始めていた。怖くないの？と尋ねたら、「津波は 400 年に一度だから大丈夫」って言われた。自分で自分を騙しているんじゃないかって思ったよ（苦笑）。でもね、手放せないんだよ。「故土難離（故郷を離れがたい）」っていうから。（本来は）いい

場所だ。タケノコがいっぱい生えて、魚も釣りたい放題。私が行くと、いつも自家製の漬物や山菜をたくさんもらったの…。

ここで留意したいのは、友人の多くが被曝への不安から長期避難のために他県に移住した中、松氏は留まり続けたことである。彼女の放射能に対する考え方は、以下の会話から若干窺うことができる。

**松**：前回東京に行った時に、ある人に聞かれたんだ。「あなたのところで生産されたもの、食べるの？」って。「食べるよ！（大声）」って答えた。食べなかったらどうするの？…正直、最初は食べるのが怖かった。今も、海水はどんなに処理されても、100%何も入っていないものに戻すことができるだろうか？

**＊**：実は心の奥で心配しているんですね。そんなふうに問われた時、どんな感じでしたか？

**松**：この辺は風が強いだろう。いつも窓が風でパタパタ音を立てている。実際に何かあったら、どんなに遠くても飛んでくる。誰ひとり避けられないと思っていた。

**＊**：…あの人が言ったリスクを、松さんも思っているんですかね。

**松**：うん。姪っ子は長春の大学にいるんだけど、彼女は私に言ったんだ。「あれは、見えないし触れられないから、おばちゃん油断しないでね」って。でも、どうすればいいの？空気みたいなもので、おばちゃんは呼吸しないわけにいかないよね。…（呟き）ここの果物は美味しんだから。桃も大きいし、さくらんぼもこんなに大きいんだ。木に実ってみずみずしくて、食べないわけにはいかないだろう。

こうして、引き続き現在も進行中の放射線汚染問題について、松氏の反応は、他人に対する憤りと、家族に吐露する無力感といった複雑な感情を露わ

にしていた。一見矛盾したように見えるそれらの態度は、恐らく松氏の内面の葛藤の表れであると推察される。正直なところ、福島県外の関西部に在住する筆者自身も、この話題に触れる度に聞きにくさを感じていた。一方で、この対話を通して、松氏への筆者の感じていた「聞きにくさ」は、地理的な距離による汚染問題の客観視が原因ではないかと自問し続けていた。しかし、松氏が幼少期から自然風土に親しんできた視点からは、自然は流動的で一体的な存在であり、県境や国境で区切られるものではないことも見えてきた[15]。さらに、一見すると国の政策対応に無関心のように見える松氏であったが、実際には本来豊かであった福島の自然が震災後には忌避されてしまう現実を前に、彼女の語りの隅々までに溢れる不安と哀しみを読み取ることができる。

**iii）留まり続ける背後に**

松氏は、人生の前半において生き抜くために、中国東北部の農村から地方都市へ、そして日本東北地方の農村から地方都市へと転々として過ごしていた。しかし先述のように、震災後、友人たちが福島から去る中で、松氏はその流れに逆らって残ることを選択した。「また引っ越すの？また人に頼むの？もういいよ。ここにはまだ仕事がある。他の場所では何ができるか分からない。」という語りからみられるように、これまで言語の壁などを乗り越えて、ようやくこの地で築いてきた生活を容易に手放せない思いが強く見えてきた。他方、以前は母国の家族と日本での暮らしとの間に「一つの心が両

[15] 2024 年 2 月、筆者は「記憶の継承ラボ」の活動の一環として、院生メンバーたちと共に東日本大震災の影響を受けた福島県の浜通り地区を訪れた。そこで、いわきでのフィールドワーク中に出会った地域住民から、松氏の考え方とよく似ている、印象的な言葉を聞いた。「津波の辛い経験の後、海を嫌になる気持ちがあるか」という質問に対し、「どうして海を嫌うことができるのか、海を嫌うことは自然を嫌うこと、私たち人間も自然の一部だから」という答えであった。これは、普段都市部で、自然から切り離して暮らしている私の見方に、深く思いを巡らせるきっかけを与えた。

方に引っ張られている」と語っていた松氏は、今では母国に戻ることについては曖昧な姿勢を示している。その理由として、「二つの東北」の土地柄に繋がる人間関係の濃淡が鮮明に見えてきた。

日本の東北において、実は近隣から多くの助けをもらったという。例えば、夫の病死で涙が枯れるほど絶望した際に、普段ほとんど話しもしなかった町の近隣住民が、食事の提供や葬式全般についてたくさん手伝ってくれた。また、県営住宅へ移住してからは、団地のスーパーで意外にも中国語を話せる人が多いことに気づき、尋ねたところ彼らが日本に戻ってきた中国残留孤児であることを知った。その後徐々に、この地域が残留孤児や低所得高齢者が多く住むコミュニティの性格を持つことを知った。こうして、松氏は雪の日にはお年寄りが滑るのを心配し、いつも息子に通学途中に近所の高齢者のゴミ出しを手伝わせていた。その代わりに、息子の大学進学を知った近隣の人は万札を入れた封筒を黙々と渡しにきた。「見た目は冷たく見えるけど、心は温かい人たちだ」と松氏は語った。他方で、経済的に進展した中国東北に対して、以下の語りから松氏の複雑な感情が窺えた。

> …ここにも 20 年以上いるし、中国に一時帰国すると日本のことが恋しくなって、日本に戻ってきたら逆に中国のことを思っている（笑）。どちらが家なのかわからない。…福島は静かで寂しいけど、誠実に働けば稼げる。（ここで）キュウリが食べたくなったら、みんな採りに来てって声かけてくれる。食べきれない（ほどある）。中国では何でもあるけど、競争が激しい。今は両親がいなくなったし、もう帰りたくない…今の中国は昔と違う、人の感情が薄れている。

以上から、松氏が母国の急速な発展を誇りに思う一方で、人間関係の冷え込みに寂しさを感じている様子が窺えた。その代わりに、福島で自給自足の暮らしや助け合うご近所同士の関係を経験し、それらが松氏にとって母国で失われつつあるものだと言えるかもしれない。したがって、松氏の留まり続ける選択の背後には、馴染み込んだ故郷の川沿いの暮らしを、再び深い傷を

負ったこの福島の地で見つけることができたと言えるのかもしれない。一方で息子の将来に関しては、「戻ってこないでほしい、福島はもう発展していないから。」と松氏は語った。つまり、中国東北部の過去の「豊かさ」を映す純朴な土地を松氏は選んだものの、息子には戻って欲しくないのは、依然として震災の影が色濃く残る土地であるからである。そうした土地の二面性が松氏の心の葛藤に繋がっていると示唆される。

## ５．二つの痛みを受け止めつつ「結び目」となりゆく女性たちの歴史実践

坂部（2021）によれば、中国独自の「社会主義的近代化」により、計画経済の単位制時代には家事や育児などの再生産領域がある程度に社会化され、伝統的な家父長制も一定範囲で弱まった。一方で、日本の資本主義的近代化の下での国際結婚が、日本の農村の基底をなす「家」や「村」の伝統的な論理に負担をかけ、アジア人女性が生産力と再生産力の両面で期待され、迎え入れられている（賽漢卓娜 2011）。本研究においても、日中「二つの東北」における独自の歴史的発展が追い風となった国際結婚は、実にそれぞれの近代化の文脈の交錯に位置し、そこから生じるジェンダー的役割観念の食い違いが、女性たちの移住先での家族との衝突の一因となったと推察される。春氏の事例で反映されたように、実際にも、筆者らが現地で関わっている女性たちの多くは、多かれ少なかれ深刻な嫁姑問題や夫婦関係に悩まされている様子が観察された。

加えて、先述したように、日中「二つの東北」が国際結婚の背景に位置づけられるのは、戦時中の「満洲農業移民」政策下の人々の移動と深く繋がっている。こうした戦争の歴史の痕跡は、両地域を結ぶ人脈ネットワークだけでなく、世代を超えて連鎖した心の傷も残したと言える。例えば、春氏が夫の「暴力」が「遺伝的」であると語ったことや、「駒」のように翻弄されている地域の満洲引揚者の存在に気づいたことである。また松氏は夫一家の戦争と関わる家族史や職場のお婆たちの戦争への恐怖を知ることになる。ここ

で重要になるのは、それらに象徴される日本東北地方の痛みについて、女性たちは最初から知っていたわけではなく、むしろ移住後に、ぎこちない日本語を駆使しつつ身体を通じて日常の細やかな側面から察していったことである。実際に思い描いた暮らしとは異なるものの、彼女らは辛さを抱えながらも長くこの土地と関わっている中で、かつて中国東北で生まれ育った経験を思い返しながら、日本の東北の痛みを背負って生きる身近な庶民一人ひとりの生に共感するようになっていったのである。

ここで強調したいのは、こうした共感まで辿り着くことができたのは、異なる「二つの東北」の対立や断絶に着目するのではなく、時間と共に流れる共通する「東北」の痛みに目を向け、身をもって感じ取ろうとする彼女らの歴史実践である。つまり、戦時の「満州農業移民」から、高度成長期以降に農村男性の結婚難の解決策とされる「アジアからの花嫁」、そして東京への電力供給地となる福島原発まで、20 世紀で定まった日本国内の分業体制の下で、「東京中心主義」の犠牲となる「東北」問題（赤坂ら 2011）は、実は重層した形で女性たちの暮らしの隅々に見え隠れしている。これと類似する関係性が、中国社会の文脈においても、「南方」と「我々東北」という象徴的な言葉があるように、単位制が弱体化しつつある社会転換の過程で見えてきた。このように、戦争の歴史において「植民地支配—被支配」の両端に置かれる「二つの東北」は、それぞれ異なる近代化の経路を歩んできたものの、類似した大きな進歩叙述が牽引する下で、再び共に「中央」との関係で対置される「周辺」の立場に追い込まれた。

しかし、そうした中で、地域の「よそ者」と見なされる女性たちが、常に互いの痛みを共感しながら暮らしを続ける地道な営みは何を意味するのであろうか。「東北学」を提議した赤坂憲雄氏は、「どのような単位で東北を見る」のかという問いに対し、「暮らしとか生業の舞台として」の「地域」を「起点としてはじまる」が、「その地域がみずからの内にはらんでいる文化の多様性というものを眺めていると、それはものすごく広い、可能性としては国家を超えていくような領域に広がっている」と示唆した（赤坂・鶴見 2015:124）。この指摘に照らし合わせると、本稿で取り上げた女性たちは、

まさに自らの暮らしの舞台となる「地域」に根ざした日々の営みを通じて、実に「東アジア内海世界」のように、「国境によって閉ざされる」ことのない、「人と人とがさまざまな形で交わり、結びあっている」、いわゆる「二つの東北」の「結び目」（赤坂・鶴見 2015:136）を生み出す可能性を秘めていると言えるのではないか。

ここで冒頭の問いに立ち返るならば、歴史的構造に由来する生き難さに加え、3・11 震災の影響が重なる中で、女性たちが県外避難の流れに逆らって福島に留まり続ける理由は何であろうか。中国東北での経験を振り返ると、彼女らは他の地域よりも単位に依存しており、その崩壊が精神的に大きなクライシスに陥ったと考えられる。だからこそ、移住先の日本東北地方では、心の居場所や人間関係を再構築する願望が強烈にあったのではないかと推察される。それゆえに、この地で築いた生活基盤を簡単に手放せなかったのではないだろうか。

さらに、ここで対話的インタビューの場面にて補足するならば、筆者は中国南方出身で大阪に住むことから、「あなたたち南方人」、「あなたたち大阪人」といった言葉が度々女性たちの口から聞かれ、他意はない距離感を確実に感じていた。一方で、かつての単位生活や豊かな農産物について話す際には、彼女らの隠しきれない誇りと喜びの中に、一抹の寂しさも窺えた。それは、広く語られる進歩叙述に遅れている自覚や、絶え間ない開発や生産で失われた人間と自然の「豊かさ」を取り戻したいという矛盾した思いから生じたのではないだろうか。こうした状況からも、中国の経済的躍進で失われた純朴な人間関係や自給自足の農村暮らしを、この深い傷を負っている日本の東北地方で再び見出していたのではないかと考える。このように進歩叙述に回収されない、庶民としての「豊かさ」への素朴で強烈な思いは、「二つの東北」をつなぐもう一つの「結び目」となり得るかもしれない。

## ６．おわりに

最後に、昨年度のシンポジウムの報告から、本研究がこだわり続けている

「二つの東北」の意味を再確認しつつ締め括りたい。一つは、これまでの研究の中で一貫しているように、結婚移民として日本の東北の暮らしで感じたことが、かつての中国東北での暮らしを思い起こさせ、双方の東北での経験を自ら応答しつつ理解しようとする女性たちの姿を表現してきた。それを踏まえつつ、二つ目として、さらに本稿では、「南方」と「東京」の対極にある「周辺」としての二つの「東北」が共有する痛みの意味が見えてきた。

ただし、彼女らにとってそれは容易なことではなく、3・11 震災を契機に立ち上げられた女性ネットワークが示すように、共に味わった悲痛な震災経験が、彼女らを「よそ者」から地域社会に受け入れられる存在へと変え、そこから初めて、地域との絆を深めながら、互いに知り・理解し・支え合うようになったのではないかと推察される。この意味において、震災経験は、図らずも彼女らが日本東北地方の重層的な歴史を知ろうとする情動的な起点ともなったのではないだろうか。本研究では、「満洲」移民など特定の歴史的出来事に焦点を当てるのではなく、あくまでも 3・11 震災を経験した中国人女性たちへの暮らしの調査から出発した。ただし、加害/被害の視点に立たないからこそ、調査を続けていく中で、国際結婚を機に日本の東北の地に来たものの、過去から現在に引き続く傷跡を重ね併せながら、さらに災害をも経験した女性たちの営みに重要なもう一つの意味が見えてきたのである。

すなわち、「二つの東北」の三つ目の意味は、彼女らが日々の生活の中で受け止めてきた双方の「東北」の痛みというものが、国境を越えて移動する一人ひとりの生活者として、東アジアの歴史の連続性を実感させるものであり、それゆえに国境を越えた生活の「豊かさ」とは何かを模索しながら展開される日々の営みが、尊い「結び目」なり得る可能性を示唆しているのである。つまり、彼女らは「二つの東北」のそれぞれの土地柄に翻弄されながら、国際結婚を通じて移住した女性たちである。しかし、彼女らに貼られた数々のレッテルを一つずつ剥がし、ただただ国境を越えて移動する一人ひとりの生活者としての本質に見つめると、より広がりを持つ彼女らの世界観が浮かび上がってくる。つまり、彼女らの人生が「植民地支配―被支配」、「進歩―落後」といった大きな物語に分断され、翻弄されながらも、その心の奥底に

は、誰かにも定義付けられない、進歩叙述にも回収されない、庶民としての「豊かさ」への思いが宿っていることに、時間を掛けた対話の中で、ようやく徐々に理解することができた。この女性たちの素朴で強烈な思いこそが、自分たちをこれらの強固な枠組みから解放し、「東北」という地域を暮らしの舞台として、絶えずにもう一つの生き方を模索していく原動力となっていると示唆される。こうした地道な模索が、図らずも東アジアの重層的な歴史において「被害―加害」の両端に置かれた「二つの東北」を繋ぐ尊い「結び目」となる可能性はあるのではないだろうか。

冒頭で触れたように、福島には複数のネットワークが存在しており、多くは3・11震災を機に立ち上げられたものである。これらは当初、移住女性たちの自助グループとして活動を始めたが、実はそれ以来、地域とのつながりを徐々に深め、多様な活動を展開してきた。例えば、ハーフの子供たちを対象とした「継承語教室」、中国残留孤児・婦人のお茶会、国際結婚家庭の交流会、さらに地域の日本人住民たちも関わる祝日のイベントなどがその例として挙げられる。こうした活動は、単に「中国人同士」の集まりに留まらず、「一人の地域の住民として、共にこの土地で生きる近所同士と繋がりたい」という女性たちの切実な思いを反映したものなのかもしれない。

本稿を執筆するにあたり、改めて痛感したのは、調査協力者の女性たちと対話を重なるなかで、実は常に学びを得ていたのが、調査者であり聞き手である筆者自身であったということである。女性たちの生き様から受け取った深い示唆は、単に彼女らへの理解を深めただけでなく、私自身の人生にも多大なる影響を与えてくれたと言っても過言ではない。庶民一人ひとりの弱さがあるのと同時に、苦しい記憶を抱えながらも生き抜く生活者のたくましさもあり、こうした生活者の営みが筆者自身の視野を広げる貴重な糧となっていると実感している。こうして本稿を締めくくるにあたり、このような無知な筆者をいつも温かく見守ってくださった福島の一人ひとりの方々に、語り尽くせない感謝の意をいまここに心を込めて伝えたい。

## 引用参照文献

**和文**

赤坂憲雄・小熊英二　2012『「辺境」からはじまる:東京/東北論』明石書店。

赤坂憲雄・小熊英二・山内明美　2011『「東北」再生:その土地をはじまりの場所へ』イースト・プレス。

赤坂憲雄・鶴見和子　2015『地域からつくる：内発的発展論と東北学』藤原書店。

蘭信三　1994『「満州移民」の歴史社会学』行路社。

猪股祐介　2006「満洲農業移民と中国残留日本人」『中国残留孤児の叫び:終わらない戦後』勉誠出版。

薄井三男　1993『福島公娼史:社会の底辺に生きた女たち』薄井三男。

王石諾・三好恵真子　2022「国際結婚で福島県に嫁いだ中国人女性の主体性とその形成過程」『アジア太平洋論叢』24(1)、97-112 頁。

王石諾・三好恵真子　2023「結婚移民として日中『二つの東北』を生きる中国人女性の歴史実践：ライフストーリーから読み解かれる『満洲』記憶」『生活学論叢』43、28-42 頁。

岡田知弘　2013「災害と開発から見た東北史」大門正克・岡田知弘・川内淳史・河西英通・高岡裕之（編）『「生存」の東北史：歴史から問う 3・11』大月書店。

郝洪芳　2010「日中国際結婚に関する一考察：業者婚する中国女性の結婚動機を中心に」『京都社会学年報』18、67-81 頁。

賽漢卓娜　2011『国際移動時代の国際結婚：日本の農村に嫁いだ中国人女性』勁草書房。

坂部晶子　2021「社会主義的近代化の経路と公私領域にかんする問題構成:中国のジェンダー研究と関連分野を中心に」『中国 21』54、176-193 頁。

桜井厚　2012『ライフストーリー論』弘文堂。

柴彦威・劉志林　2003「中国都市における単位制度の変化と生活活動および都市構造への影響」『東京大学人文地理学研究』16、55-78 頁。

蒋純青　2013『中国の大卒者就職制度の変遷』Senshu University。

高橋哲哉　2012『犠牲のシステム：福島・沖縄』集英社。

張英莉　2020「ポスト単位体制における中国企業の組織と個人」『埼玉学園大学紀要』20、11-22 頁。
坪谷美欧子　2008『「永続的ソジョナー」中国人のアイデンティティ:中国からの日本留学にみる国際移民システム』有信堂高文社。
唐燕霞　2001「計画経済期の国有企業：社会学の視点からの考察」『東北アジア研究』2、49-61 頁。
保苅実　2018『ラディカル・オーラル・ヒストリー:オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店。
山下清海・尹秀一・松村公明・杜国慶　2008「在日華人ニューカマーの中国における送出プロセス―中国東北地方の事例から―」『人文地理学会大会研究発表要旨（2008 年）』人文地理学会大会、128-129 頁。
山内明美　2021「女性視点から考える＜三陸世界＞」『Academia:会誌』181、1-10 頁。
李培林　1998「老工業基地の失業治理后:工業化と市場化―東北地区 9 家大型国有企業の調査」『社会学研究』4、3-14 頁。
李妍焱　2018『下から構築される中国:「中国的市民社会」のリアリティ』明石書店。

**中文**

盧姣娜　2019『集体記憶的論理－以日中両国対戦争記憶的塑造為例』華東師範大学。
喬榛・路興隆　2019「新中国 70 年東北経済発展：回顧為与思考」『当代経済研究』11、5-12 頁。
田毅鵬　2007「『典型単位制』的起源和形成」『吉林大学社会科学学報』47（4）、56-62 頁。
田毅鵬・王麗麗　2017「単位的『隠形在場』与基層社会治理：以『後単位社会』為背景」『中国特色社会主義研究』2、87-92 頁。
王洪波　2012「当代中国社会転型中的個人与群体関係」『学術界』3、15-22 頁。

謝雯　2019「歴史社会学視角下的東北工業単位制社会的変遷」『開放時代』6、25-44 頁。
謝雯　2022「変遷中の社会与个体生命:以我国東北地区研究為例」『公共管理評論』4（3）、157-166 頁。

コラム③

# 東アジアをめぐる各地域で営まれ続けてきたひとびとの暮らしの経験とその記憶の「対話」に向けて

吉成 哲平 *

本書の「第一部に際して」でも触れたように、長崎、沖縄、福島、水俣などの各地を訪れる中でこれまで私たちが徐々に学びながら実感を深めているのは、それぞれの土地に暮らす人びとの戦中戦後の経験とその記憶の「対話」の重要性です。それゆえ、私たちにとって嬉しい出来事だったのは、今回のシンポジウムを通して沖縄と長崎の記憶の継承の現場が繋がっていったことでした。とても有り難いことに、今回のシンポジウムには、2023 年に開催のシンポジウム「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」にて長崎から登壇して頂いた城山小学校平和祈念館（写真 1）の山口政則さんと松尾眞一郎さんもオンラインで参加して下さいました。山口さんと松尾さんをはじめとする城山小学校の関係者の皆さんには、毎年 8 月 9 日の「長崎原爆の日」にあわせた同校への訪問など、「記憶の継承ラボ」の活動にもいつも大きな力を頂いています[1]。そして、今回のシンポジウムの終了後には、第一部でご登壇頂いた沖縄市の恩河さんと山口さんがお電話で直接お話をされたそうです。沖縄市は長崎と広島に各年交代で「平和大使」を送っているとのことで、それぞれの現場での平和学習

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

[1] 長崎の実践家の方々との貴重な縁については、前回のシンポジウムの総括として刊行したブックレットにてまとめています。併せてご覧下さい。
吉成哲平　2024「第二部に際して 城山小学校平和祈念館の実践家の方々との出会いから広がり、深まってきた長崎との縁（えにし）」、三好恵真子・吉成哲平 編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18、141-146 頁。

**写真 1　長崎・城山小学校平和祈念館（2021,23 年筆者撮影）**

や戦争体験の継承の取り組みについて共有されたことを後日お二人から伺い、私たちも大変有り難く受け止めていました。

今回のシンポジウムの開催に際して、昨年（2024 年）10 月中旬に「ヒストリート」にて恩河さんと伊敷さんと打ち合わせをする中で、特に、深く心に刻まれた出来事があります。それは、各地の現場で日々尽力する実践家の方々から教えて頂いてきた今なお続く「戦後」の複雑な現実を、私たちがどのように受け止めながら、行動していけるのかについて考えさせられていることをお二人にお話しした時のことでした。私が目を開かれる思いがしたのは、沖縄だけではなく、それぞれの地域が直面してきたはかり知れない戦争と「戦後」の現実があるからこそ、各地域の状況についてお互いが対話し、情報交換をすることで理解を深めつつ、前へ進んでいけたらいいですねと、恩河さんと伊敷さんが仰って下さったことです。それは、沖縄市の「ヒストリート」や長崎の城山小学校平和祈念館を訪れる様々な人びとと現場で日々向き合うお一人おひとりが、まさに日常の中で大切にされている事柄でもあるのではないかという実感を深めることにも繋がりました。その根底には、むごい戦争により命を落としてい

**写真 2　沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」（2024 年筆者撮影）**

ったひとびとの死の重みがあるからこそ、「戦争を起こさないために、どうするのか」という地域を超えて結び合う志が、忘れてはならない歴史を未来に伝え継ぐ活動へと、一人ひとりを駆り立てているのではないかと受け止めています。

むろん、それぞれの土地が経験してきた歴史は決して一括りにすることは出来ず、その歴史の上にある今日の現実をいかに捉えるのかを巡っても、きっと様々な考え方や立場もあると思います。しかし、沖縄や長崎をはじめとして、現場の方々が私たちにいつも教えて下さっているのは、容易には「理解」することの難しい、身を切るような痛みを伴う過去の出来事や暮らしの経験がそれぞれの地域にあることを学びつつ、それでも、お互いの「距離」を埋めていくために一歩ずつ模索し続けていくことの大切さです。

「記憶の継承ラボ」が携わってきたこれまでのシンポジウムの開催を経て、以上の現場で頂いている貴重な示唆を改めて振り返る時、写真家の東松照明さんが長崎や沖縄に暮らしながら撮影を続けることで表現していった、各地に脈々と受け継がれゆく生活者の思想的営為についても自ずと思い出されます。例えば、1960 年代初頭に初めて目の当たりにした被爆後の現実の衝撃に突き動かされ、被爆者の「伴走者」とし

て撮り続けた長崎にて、東松さんは「その人だけの掛け替えのない生と向き合う、個としての存在」（東松 1995）として、原爆による死と向き合う彼ら彼女たちがいかに被爆後の日常を生きようとしていったのかを共に見つめていきました。そして、後年には自身も長崎に暮らし、「まち歩き」をする中で、中国との海上交易やキリシタン殉教など、数百年にわたる歴史と文化が濃密に詰まった長崎の町で、多様な背景をもって生きてきた人びとの暮らしの歴史の厚みを受け止めていったことが、その軌跡を辿り直すことで浮かび上がってきました（吉成・三好 2022）。とりわけ、晩年の東松さんは、長崎の町の中に脈々と息づいている中国文化に関心を寄せながら、古来人びとが海を越えて交流し続けてきた「東シナ海をめぐる長崎・沖縄・福建というトライアングル」（東松・今福 2009: 24）へと次第に魅せられていったといいます。

ここで見逃せないのは、そうした東アジアを巡る重層的な歴史の上で、長崎の被爆や「基地の中に沖縄がある」現実を徐々に捉え直していったことです。つまり、長い時間をかけて様々な人びとの足跡が「チャンポン」あるいは「チャンプルー」しながら織られてきた歴史の上に暮らしつつ、激動する社会の中で、目の前の現実へと出来る限りのことを続けながら日々の生活を切り拓いてきた各地の人びとの営為を見つめていたように思います。このように、体験者と非体験者とを繋ぐべく存在である「伴走者」として戦後社会の行方を生涯撮り続けた東松さんの撮影表現の軌跡もまた、東アジアをめぐる各地域の生活者の経験とその記憶をお互いに「対話」させていく重要性を私たちに投げかけているのではないでしょうか。

沖縄のことも、長崎のことも、そして自分自身が暮らしている土地の歴史（本書「コラム②」で詳述）さえも知らないことばかりだと、現場で出会う方々から大事なお話を伺うたびに、恥ずかしさと共にいつも気付かされます。しかし、それぞれの土地で暮らしてきた経験に基づくお一人お一人の貴重な語りを介するからこそ、身をもって受け止めていく戦中戦後の生きられた歴史があり、それらを学んでいくことは、歴史に対する自らの限られた視点を常に相対化しつつ、厚みをもって今日の現実を捉え直しながら、記憶を継承していくことへと拓かれていくのではないかと考えています。いつも現場で温かく迎えて下さっている方々への感謝の気持ちを込めて、東アジアの各地域に内包されている戦争・戦後体験とその記憶をめぐる「対話」を深めていきたいと、今回のシンポジウムを契機として思いを一層強くしています。

**引用参照文献**

東松照明　1995『長崎＜11:02＞1945 年 8 月 9 日』新潮社。

東松照明・今福龍太　2009「『長崎の美術一写真/長崎』展開催記念 対話：長崎の『時』」『長崎県美術館研究紀要』2、5-29 頁。

吉成哲平・三好恵真子　2022「写真家 東松照明が魅せられた、長崎の中の中国文化―「町歩き」より受け止めていく、東シナ海を巡る歴史の厚み―」『アジア太平洋論叢』24、113-133 頁。

ディスカッサント

# 戦中戦後の経験を伝える一人ひとりの声の「多様性」

小林 清治 *

第二部のテーマは、「戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為」となっている。ただ今のお二人のご報告を踏まえて、それぞれの土地で戦中戦後の現実と向き合い続けながら営まれてきた生活者の思想的営為を、「ポスト体験時代」を生きる私たちがいかに受け止めながら未来へと生かしていくことができるかについて、参加者の皆さんとともに考えることがこの企画の趣旨である。お二人の基調報告を振り返りながら、私なりにそのヒントとなることを考えてみたい。

吉成さんの研究は、写真家たちが表現し続けた「戦後」の暮らしの現実あるいは生活者の思想的営為に、「写真実践」という独自の方法論を通じてアプローチするものである。写真実践とは、写真家たちが残した写真やそれ以外の多様な表現媒体を渉猟し、当時の時代背景も踏まえた上で、彼ら彼女たちが撮影行為を介して受けとめていった現実を当時の視点から体系的に捉え直すとともに、その現在までの連続性を、吉成さん自身が撮影の現場に足を運んで、再帰的な撮影活動を積み重ねながら相補的に論証していく試みであるとされる。

現在、吉成さんの研究対象となっているのは、戦後の代表的な写真家の東松照明であるが、今回の発表は、1968 年に日本写真家協会が開催した「写

* 大阪大学人間科学研究科・准教授

真 100 年」展を題材として、東松を含む戦後の写真家たちが当時の現実にどう向き合ったかを論じるものとなっている。

この「写真 100 年」展の歴史的意義は従来、リアリズムの退潮と「コンポラ写真」や広告写真などに例示される写真表現の多様化として、もっぱら写真表現の手法上の転換点として論じられてきたとされる。

これに対して吉成さんは、繁栄の裏側で公害、ベトナム戦争への加担、地方の衰退などのひずみが露呈しつつあった 1970 年前後の時代背景のなかで、写真 100 年の歴史の重みを踏まえて、改めて当時の現実に対してどのように向き合うべきかを写真家たちに問いかけた点に、「写真 100 年」展の意義を見出している。

その際に、当時の現実に向き合った写真家たちにとっての共通の課題として受けとめられたのは、若い世代に戦争を伝えることの困難、紛争などの現場を写す際に意図せず権力側に加担してしまう撮影者の「加害性」といった問題であったとされる。ちなみに、北山修作詞、杉田二郎作曲の「戦争を知らない子供たち」が、全日本アマチュア・フォーク・シンガーズ名義のシングルとしてリリースされたのは、まさに 1970 年の 11 月のことであった。

そして吉成さんは、これらの課題への応答において分岐していく写真家たちの姿勢を、①写真の匿名性を肯定し、即物的に目の前の事物を捉える姿勢、②自らの個性を強く打ち出すことで現実を告発していく姿勢、③現実から矛盾を抱く中で自らが感じた「距離」を撮り続けることで埋めてゆく姿勢という 3 類型に整理し、東松を③に属する写真家と位置づけた。

吉成さんの今回の発表は、戦後写真史のひとコマを扱うものであり、東松個人に焦点を当てたものではなかったので、本筋からは若干外れるかもしれないが、ひとつおたずねしたい。東松照明は長年にわたって、長崎の被爆者、そして沖縄の現実を撮り続けてきたということだが、撮影対象との関係形成において、長崎と沖縄で何か違いはあるのだろうか。というのも、東松は「基地のなかに沖縄がある」現実に対して、「本土の人間としての責任」を自覚

していた。吉成さんの別の論文[1]では、東松は自分の立場は、国に対しては被害者だが、沖縄に対しては「加害者」であると自認していたとも書かれている（上述した撮影者の加害性とは別の問題）。この点は、長崎の被爆者に対する姿勢とは異なると理解される。東松は沖縄の人々とのどのような関係性を形成することを望んだのか。自らの加害性を自覚した上で、それとどのように向き合っていくべきか、そのような観点からお尋ねしたい。

王さんの研究は、中国東北部から日本の東北地方の福島県に国際結婚で移住した女性たちを対象とし、移住と大震災という経験が女性の人生に与えた影響を、ライフ・ストーリーという手法を用いて解明する試みである。

その研究においては、女性たちが上の世代からあいまいなかたちで受けとった「満州」の記憶が、日本への移住、とりわけ福島での中国残留帰国者との交流によって、より輪郭の明確なものになったこと、そして、移住を契機に、中国東北地方での生活経験が呼び起こされ、女性たちはその経験を通じて日本の東北を理解しようとしていることなど、興味深い事実が明らかにされている。

一方で、私の見落としかもしれないが、これまでの研究[2]では過去の記憶や生活経験の再生ということに重点が置かれてきたためか、移住前後、特に日本の東北が彼女たちの生活にとってどのような社会的文脈となっているのかが、十分具体的に説明されてはこなかった印象も残っていた。

しかし今回の発表では、女性たちが向き合っている「『二つの東北』の痛み」の社会的背景として、中国の東北における「工業単位制社会」の崩壊、日本の東北における「中央」「周辺」の構造的格差と伝統的な家族観などが説明されており、問題の構図に対する理解が深まった。とくに、松さんが結

---

[1] 吉成哲平・三好恵真子　2022「写真家 東松照明が直面した「基地の中の沖縄」―日米の狭間で揺らぐ復帰前の現実と歴史への責任―」『生活学論叢』41、30-45頁。

[2] 王石諾・三好恵真子　2023「結婚移民として日中「二つの東北」を生きる中国人女性の歴史実践―ライフストーリーから読み解かれる「満洲」記憶―」『生活学論叢』43、28-42頁。

婚後に経験した姑のいじめを、戦争の残した傷あととして理解していることは、とても印象的であった。また、原発事故との関連では、避難しないで現地にとどまった外国人は少ないので、松さんの事例は貴重だと思われた。

震災の被災地はいま、人口の流出と過疎化・高齢化が著しく進行しており、自治体としての存続が危惧される地域もあるという。政府は移住促進の施策を進めているが、全国的な人口減少傾向のなかでどこまで効果があるのか疑問に思う。すると、外国人移民の導入を、という声も出てきそうだが、その前に移民の人びとが暮らしやすい社会をどうつくっていくか、実際の移民の視点から見直していく必要があることに気づかされる研究であると思われた。

さて、お二人の研究はそれぞれ対象も方法も同じではないが、一つの共通点が見出せるように思う。王さんの研究では、結婚移住によって「二つの東北」に生きる女性たちの日常生活の場に息づく歴史記憶が、一人ひとりのライフ・ストーリーとしてていねいに描かれている。また、吉成さんの研究によると、東松照明は、長崎と沖縄の戦争の傷跡に圧倒的な衝撃を受けて、写真家として何ができるかを問い続けながら、同時代を生きる「伴走者」の立場から、一人ひとりの人生の歩みを描いていったとされる。これらの研究が重視しているのは、「それぞれの土地で戦中戦後の現実と向き合い続けながら営まれてきた生活者の思想的営為」の、何らかの属性（「中国人女性」「被爆者」「ウチナーンチュ」など）によってひとまとめにすることのできない、「複数性」ではないだろうか。

じつは私自身は前回のシンポジウムで、王さんの研究対象の女性たちとはちょうど逆のパターンとなる、福島県出身で「満州」移住と震災・原発事故を経験したある女性の人生の軌跡を紹介した[3]。そして、国策に協力した結

[3] 小林清治　2024「福島と満州のあいだ――ある女性の軌跡から垣間見えるもの」、三好恵真子・吉成哲平 編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18、119-132 頁。
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/94661/

果として二度とも大変な目にあったにもかかわらず、政府の責任に言及しようとはしない、その女性の沈黙の意味について考えてみた。満足のゆく結論とはならなかったが、改めて確認できたのは、同じような境遇を経験しても、受けとめ方は人それぞれであり、単一の何かに収斂していくことはないということである。

私たちは、戦後の経験を伝える一人ひとりの声の多数性を、ともすれば大きな主語の下に回収してしまいがちだが、むしろこれらの多数の声に多数のままに耳を傾け、そして、それらのあいだでの対話を醸成していくことが、記憶の継承を実りのあるものすることにつながるのではないかということを、前回と今回のシンポジウムを通じて改めて考えさせられた。

コラム④

# 集団就職から戦後日本の鉄鋼業発展を支えた技術を生み出し次世代へと道を拓いたある職人の物語――二つの博士号へと結実させたリカレント教育

三好 恵真子 *

2007 年 10 月における大阪大学と大阪外国語大学との統合により、大阪大学人間科学研究科の大学院に「グローバル人間学専攻」が新設されました。現代世界は、グローバル化の進展により、政治構造、経済格差、社会生活などの面で大きな変革期の渦中にあり、貧困の深刻化、紛争の頻発、人口・食糧問題、資源・環境問題、教育機会の欠如、感染症の拡大など地球規模での種々の課題が山積し、人びとの平和で安心できる生活を確保することが、きわめて困難な時代を迎えています。このような世界情勢において、一人ひとりが輝きを保ちながら生活し、自らの生きる社会を創造的に築き上げていけるかどうかという課題への取り組みが強く求められるようになりました。そこで新設のグローバル人間学専攻では、これら複雑化する世界の各地域における諸課題に立ち向かうために、学際的・複眼的かつダイナミックな新しい教育研究の新たな創造が目指されたのです。

こうしたグローバル人間学専攻における大学院生の第一期生として迎え入れ、その後、私の指導学生として初めての博士号取得者となった方が、このコラムにて紹介していきたい姉﨑正治さんです。姉﨑さんは、2015 年 9 月にグローバル人間学専攻を修了し、当時 73 歳にて博士（人間科学）を取得されました。この博士号取得は、お

*大阪大学人間科学研究科・教授

よそ 30 年前の 1985 年 3 月に授与された 41 歳での工学博士（論文博士，東京大学）に続いて、二つ目となり、その偉業は、ＮＨＫや関西テレビ、朝日新聞、読売新聞、産経新聞など各社のメディアで報道されました。また修了式における総長式辞の中でも紹介され、「飽くなき向学心、探求心に深い尊敬の念を抱きました。また、大阪大学が、現在、さまざまな高度人材プログラムで目指しております、異なる分野、特に自然科学分野と人文学･社会科学分野をクロスした高度な博士人材の輩出の典型あるいは模範を姉崎さんは実現してくださいました。」との激励の言葉を賜りました[1]。

**写真 1 修了式後、研究室のメンバーに祝福され、学位記を手にして喜ぶ姉崎正治さん（2015 年 9 月 筆者撮影）**

このように奇しくも自慢の弟子となり、また人生の尊ぶべき先輩でもある姉崎さんのことを、私は日々「姉崎師匠」と呼び、また「職人」という言葉で描写しながら、私自身では到底叶わない域に姉崎さんがおられることへの敬意の念を示していまし

[1] 大阪大学公式 HP「平成 27 年度秋季の卒業式・学位記授与式を挙行」
https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/topics/2015/09/20150925_01

た。このコラムの執筆に際し、姉﨑さんが夢を追い燃やし続けてきた向学心とそれにより達成した人生そのものの軌跡が、戦後社会に暮らしてきた人々に勇気と力を与えてくれるものであるに違いないと確信し、ここで職人姉﨑師匠の人生物語について心を込めて書き記して置きたいと思います。なお、姉﨑さんは自らの人生史を記事にまとめ[2]、それを「『楽業』[3]という道」と称し、二つのリカレント教育の結実によるものであると語っておられますが、訪れた一つひとつのチャンスを丁寧に活かしつつ全身全霊で対応してきた姉﨑さんの弛まない努力の証しに敬意を払いつつ、私の言葉で紹介させて頂きます。

姉﨑さんは、中学を卒業後、1958 年 4 月に集団就職により住友金属工業（株）（現在の日本製鉄（株））に入社しました。その当時の社会では、家庭の経済的理由から中卒で社会にでることは珍しくなかったそうです。一方、入社後、鉄鋼業界による「（関西）鉄鋼短期大学（現在の産業技術短期大学）」が 1960 年 10 月に認可され、1962 年 4 月に開校されるという報に接しました。ここでは現場の実務経験 3 年間が入学の条件でしたが、姉﨑さんは 6 年間の社内実務経験を経て、晴れて 1964 年 4 月同短期大学鉄鋼科の 3 期生としての派遣が許可されました。これが姉﨑さんの一つ目のリカレント教育のはじまりになります。そして短大卒業後には引き続き 2 年間の京都大学工学部鉄冶金研究室への内地留学の機会に恵まれ、ここでは「溶鉄の吸窒と脱窒の速度論」を研究され、大きな反響を呼ぶ論文を輩出することができたそうです。

こうした企業からの研究教育への計らいにより、短期大学や大学において研鑽した研究経験を糧に、その後、姉﨑さんは総合技術研究所等において独自の研究を積み重ねられた末に、1985 年に東京大学工学研究科において博士号（工学）の取得の夢が叶いました。この快挙は、当時の社会に大きなインパクトと勇気を与えた瞬間であり、報道各社に取り上げられました。姉﨑さんの最初の博士論文[4]は、戦後日本に導入さ

---

[2] 姉﨑正治　2020「『楽業』という道――2 度のリカレント教育の果実」『生産と技術』72 巻第 1 号、106−113 頁。

[3] 1985 年 3 月に姉﨑さんが東大にて工学博士号を拝受された時に、当時の住友金属鹿島製鉄所長であった栗田満信氏より、所属している坐禅同好会の 10 周年記念に頂いた額に描かれていたのが「楽業」という言葉である。以来、姉﨑さんの脳裏に残り、人生の中で常に振り返る言葉となったという。

[4] 姉﨑正治　1985『転炉における複合吹錬法の開発に関する研究』東京大学、工学博士学位論文。

れたLD転炉に関し、その後の技術改良の進展に大きな役割を果たすことになる長年の研究成果をまとめたものです。つまり短期間のうちに世界最大の鉄鋼輸出国へと変貌を遂げることができた、まさに高度成長期の日本の鉄鋼業発展の軌跡を大きく支えた偉大なる技術の一端は、姉﨑さんの地道な研究成果により生み出されたものであったのです。

その後、姉﨑さんは、企業研究者として職務を全うされながら定年退職を迎え、二つ目のリカレント教育の機会が訪れることになります。姉﨑さんは、大阪外国語大学外国語学部（現在の大阪大学外国語学部）に社会人入学し、スペイン語・歴史学を学ぶことになります。そこで授業のテキスト『ラテンアメリカ史』の中で描かれていた「ポトシ銀山における製錬法」に出会うことになり、卒業論文、さらには本研究科の大学院博士課程に進学して環境問題に関する文理融合研究に挑戦するに至るまでの一貫したテーマに繋がっていきました。

姉﨑さんの人間科学における二つ目の博士論文[5]は、持続可能な貴金属鉱業技術の方向性を金・銀・水銀を軸に「16 世紀スペイン統治時代のポトシ銀山」、「現代の小規模金採掘」、「現在と今後の都市鉱山」の三つの側面から分析することにより、鉱害を克服する方策を提示した野心的な論考です。研究手法は、極めて独創性が高く、工学を基礎として人文・社会科学を連結させながら、歴史的な時代、および現代において、それぞれの地域の生活を成り立たせている鉱物資源採取の実態を明らかにしつつ、その持続可能性を探った文理融合研究を大成されたのです。換言すれば、16 世紀後半に世界最大の産銀を記録した鉱山史に秘められた（製錬に関する化学式の存在していなかった時代の）科学知を再評価したことに加え、その叡智を極めてシンプルな手法による現代社会における都市鉱山開発に活かす巧みな視点など、企業研究者として長年地道な研究を積み重ねてきた姉﨑さんの、まさに職人としての経験知と深い洞察力があってこそと評価できると思います。このように姉﨑さんの博士論文は、まさに個人の中で文理融合を果たしているもののみに許される貴重な論考となり、基礎・応用・実践を網羅した追従を許さぬ前人未踏の実績を成し遂げられた成果でした。

[5] 姉﨑正治　2015『貴金属鉱業における金、銀、水銀に関する資源・環境問題の歴史的射程から未来へ連動する文理融合研究―ポトシ銀山技術の再評価および小規模金採掘の地域再生、都市鉱山の開発を包摂する持続可能性原理の討究―』大阪大学、博士論文。

通常、都市鉱山開発に関する技術開発は、理工系分野を中心に様々な基礎・応用研究がなされておりますが、姉﨑さんの研究において特筆すべきは、かつての地域の生活を成り立たせるために鉱業の中で培われた、過去を生きた人々の経験知から抽出された開発であるという点です。そしてそのことが、結果的に現実の社会の中で確実に運用してゆく実践面での優位な展開（多様性を持つ社会に受け入れられ、かつ浸透しやすい）に結びついているのではないかと推察されます。すなわち、技術を実際に活用するのは「人間」であるため、逆にその人間の生身の営みから技術開発の鍵を探るという姿勢は、基礎研究の高度化への注視だけでは見落としがちな、社会に柔軟に対応できる技術開発のあり方として改めて気づかされる思いがしました。

こうした技術開発の成果は、経済産業省主催の特別展示会での公表の機会を得、また KSB 瀬戸内海放送において「今日の特集／未来を変える−レアメタルに光−」（2010 年 12 月 13 日）及び「今日の特集／レアメタル回収技術−最大級展示会へ−」（2011 年 1 月 26 日）という特集として組まれ、二度にわたりテレビ報道されました。一方、大学院在学中には、日本シルバーボランティアの委託により中国太原鋼鉄公司において技術指導を行ったり、学内の学生環境サークルにおいての講演や活動実践協力したりと、国境を越えて次世代への継承にも熱心に取り組んでいました。

さらに姉﨑さんの博士論文は日本生活学会第 3 回博士論文賞授賞の栄誉にも輝きました[6]。このように姉﨑さんの研究を典型に独創性の高い文理融合研究が可能になったのは、冒頭で述べたグローバル人間学専攻の複眼的思考性を重視するその研究教育方針の柔軟性に他ならないと思われます。残念なことに、同専攻は 2016 年の改組により、およそ 8 年間の幕を閉じ、その最初の大学院生であり、かつ最終年度の博士号取得者となったのが姉﨑正治さんでもありました。

姉﨑さんは、大学院修了後、大阪大学グローバルコラボレーションセンターの招へい研究員を経て、2016 年 4 月にかつての母校である産業技術短期大学の特任教授に就任されました。産業技術短期大学は、1962 年創学以来、半世紀以上にわたり「リ

[6] 姉﨑正治　2017「博士論文賞を受賞して　受賞作『貴金属鉱業における金、銀、水銀に関する資源・環境問題の歴史的射程から未来へ連動する文理融合研究—ポトシ銀山技術の再評価および小規模金採掘の地域再生、都市鉱山の開発を包摂する持続可能性原理の討究—』」『生活学論叢』31、66 頁。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/lifology/31/0/31_66/_article/-char/ja/

カレント工業教育」を実践しています。その最初の恩恵を受けた姉﨑さんは、ご自身の歩んできた道のりを振り返りながら、引き続き、教育者として次世代の育成に励まれました。2019 年度には、「50 年の実績から描くスマート化する製造業の現場力向上へのリカレント工業教育の研究」という研究課題で、科学研究費の獲得も果たしており、同短期大学全体としてその偉業を盛大に讃えました[7]。

**写真 2 中国太原鋼鉄公司において技術指導をされる姉﨑さん（写真は姉﨑さんから提供されたもの）**

このように研究者として、また人間としても尊ぶべき存在の姉﨑さんですが、「職人」と表したくなるのは、その独特の実験スタイルにありました。私たち研究者が実験計画を立案する際は、まず既存の理論をベースに推論していくことがほとんどです。しかし姉﨑さんの場合は、自身の経験知や洞察力から組み立てていくことが多かったように感じております。「なぜそうするのですか？」という私の問いかけに、「勘です。」と姉崎さんはいつも最初におっしゃるのです。しかしながら、最終的に必ず明快な解を導き、時として予想を超えた成果にも結びつきました。例を挙げれば、軟

[7] 産業技術短期大学公式 HP「平成 31 年度科学研究費助成事業に本学姉崎特任教授の応募が交付内定を受けました！」
https://www.sangitan.ac.jp/topics/2019/04/post-110.html

らかい食品に使う精米用スクリーンミルの分離機構を、極めて硬い物質である使用済携帯電話の破砕に援用する目の付け所により、ブレード式高速回転ミルの同時分級・分離装置を開発するという発想[8]は、まさに奇想天外と言えるものでした。時折、「先生、大発見！」と実験室から嬉しそうに声を掛けてくださる姉﨑さんの姿が、今も眩しく脳裏に焼き付いています。

もう一つ姉﨑さんとの出会いが、運命的な出来事としてここで記しておきたい個人的なエピソードがあります。姉﨑さんが博士論文を書き上げた際に、30 年前に授与された工学博士を讃えたある新聞記事を私たちにも見せてくれました。その時、高校生だった頃の記憶がみるみる蘇り、「こんな素晴らしい方がおられる。努力すれば夢は叶う。」と言いながら、当時、これと同じ新聞を見せてくれた父の姿が浮かび上がってきました。つまり、苦労の末に博士号を取得した姉﨑さんを新聞報道の中で知り、父が我がごとのように喜んでいる姿が私の記憶の底に残っていたのです。父は姉﨑さんとほぼ同世代で、子どもの頃に戦争を体験し、戦後の激動の中で仕事をしながら夜間の大学に通った苦学生でもありました。その後に、こうして姉﨑さんの二つ目の博士号取得の偉業を達成されること、さらにそれが自分の子どもである私の指導学生として学位を取ったことを知れば、父は底知れぬ喜びを表したに違いありません。残念ながら、父は長らく闘病の末に、その半年前の 2014 年末に亡くなっておりましたが、父が姉﨑さんとの運命的な出会いの「結び目」となってくれているようにさえ感じました。

遺憾ながら、姉﨑さんはコロナ禍で体調を崩され、2021 年 5 月に享年 78 歳でご逝去されました。しばらく入院生活を送られておりましたが、コロナ禍ゆえにお見舞いにも行くことができず、せめてもの気持ちで時々お見舞いメールをお送りしておりました。2021 年の 3 月の半ばにインターネット配信の講義企画[9]に出演する機会があり、その際、姉﨑さんのことについてもお話したので、宜しければご覧になってくださいとご連絡しました。恐らく病床にて携帯電話のメールから「有り難うございます。少

---

[8] 姉﨑正治、三好恵真子　2015「水平ブレード式高速カッティングミルによる一次破砕後の使用済携帯電話砕片の乾式粉砕過程に関する実験的検討」『廃棄物資源循環学会論文誌』26、128−138 頁。

[9] YouTube ライブ「はちげんめっ！第 11 講（ゲスト:環境行動学者　三好恵真子先生）」https://www.youtube.com/watch?v=6DN84PHfo8k

しよくなってから必ず拝見します。とにかく、先生の全てに心から感謝しています。」という短いながらも心のこもったメッセージが届きました。それが最後のやり取りになってしまいました。姉﨑さんは教授になられてからも、最後の最後まで、師弟関係への感謝を示し続けてくださいました。

以上のように、集団就職からの弛まない努力の果てに高度経済成長期の鉄鋼業発展を支えた技術を生み出し、二つの博士号へと結実させ、さらに晩年、リカレント工業教育を軸に後進の指導に携わりながら、次世代への道を切り拓くべく実践されたという姉﨑さんの功績とその意義を私たちは真摯に受け継いでいくべきであると心しています。すなわち、戦中・戦後の厳しく苦しい生活に耐え抜きながら、そこで培われた知恵こそが社会をおおきく変革していく動力を生み出すことができ、それは「生活の必要が生み出す思想」が持つ力[10]であったと言えるのかもしれません。こうした姉﨑さんのレジェンドとしての物語を、これからも大切な宝として守り抜きつつ未来へと受け継ぎ、そして、まだ見ぬ人びとにも勇気を与え続けてくれること願ってやみません。

姉崎正治さん、大変お疲れ様でした。そして心の底から有り難うございました。

[10] 天野正子　1992「民衆思想への方法的実験―「ひとびとの哲学」から「身上相談」への位相―」安田常雄・天野正子編『戦後「啓蒙」思想の遺したもの』久山社、107-129 頁。

# 第三部　＜総合討論・応答＞

# アジア地域史から共に考える私たちの暮らし

（沖縄・中城村・久場崎[戦後引揚者上陸の地]　2024 年　©Teppei Yoshinari）

総合討論

# シンポジウムにおける質疑応答の記録

吉成 哲平(モデレーター)*, 恩河 尚 *, 小林 清治 *,
三好 恵真子 *, 王 石諾 *, 他参加者

**三 好**：それでは時間に限りもございますので、第三部の総合討論「アジア地域史から共に考える私たちの暮らし」ということで、まとめに入らせて頂きたいと思います。第一部にご登壇頂いた恩河さんも、よろしければ、ここでお話を続きで伺いたいと思います。学生主体ということなので吉成さんに再びファシリテーターをお願いしながらこの場をまとめていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

**吉 成**：三好先生、ありがとうございます。それでは引き続きファシリテーターとして進行させて頂きたいと思います。今回、恩河さんからのお話を頂きまして、基調報告を踏まえつつ、最後に「アジア地域史から共に考える私たちの暮らし」ということで、広く参加者の皆さんと共に考えていきたいと

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程
* 沖縄市役所総務部総務課・市史編集担当
* 大阪大学人間科学研究科・准教授
* 大阪大学人間科学研究科・教授
* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

本稿は、シンポジウムの第三部における総合討論「アジア地域史から共に考える私たちの暮らし」の録画の文字起こしを元に構成したものである。

思うのですけれども、参加者の皆様からご質問、あるいは、もう少し恩河さんに聞きたいことなどはありますでしょうか。大変貴重な機会ですので、よろしければ是非ご質問頂けると幸いです。

**参加者 A**：ありがとうございます。実はですね、第一部から第三部まで本当に久しぶりに熱心に聞きました。あんまり全部をこんなに熱心に聞くことはないんですが。というのは、私は最初メディア社会学といって、吉成さんに関係するような勉強をしていて、それで、ある時にハワイに立ち寄った時に沖縄系の移民の方に出会って、そこからすっかり沖縄系の海外移民の方々の歴史に関心を持つようになったんですね。ですから、恩河さんの話も非常に関係のある話として聞きました。それで、この三部にわたって共通するものがあるなと思ったのは、王さんが提出された「歴史実践」という言葉だろうと思いました。それは今日のテーマから当然のことですけれど。

私は社会学者なんですが、社会学的な想像力と、こう、なんというんでしょうかね、合わせて考えると、今日のことが非常に色んな意味で自分にしっくりきました。もう少し具体的に申しますと、例えば恩河さんのお話の中で、日本史の中での沖縄の歴史ということがありましたけども、やはり沖縄の歴史と日本史というのは両方あって意味があるんだろうと。つまり、「日本史の中の沖縄史」じゃなくて、「沖縄史」と「日本史」というのは、二つがちゃんと立って、存在して、意味があるということを思ったんですね。それをどこで思ったかというと、ハワイの沖縄ウチナーンチュの歴史をずっと調べている時に思ったんですね。つまり、ハワイのウチナーンチュの生き方というのは、絶えずヤマトンチューというか、ナイチャーの、内地の人々との関係の中で成立していたということなんですね。ですから、ぜひ、なんていうんでしょうか、複眼の歴史観というのか、単眼ではなくて複眼の歴史観の中で地方史と日本史というのがあるんだということを考えてみるといいんじゃないかなと。もちろん、もう考えておられるんでしょうけど、そう思いました。

ついでに申しますと、ハワイのウチナーンチュと沖縄との関係でいいます

と、やっぱり象徴的には、例えば比嘉武二郎（タケジロウ・ヒガ）という帰米二世が激戦の中で沖縄に米軍の一員として行って、ガマなんかに隠れているウチナーンチュにウチナーグチで話しかける。それに呼応して何人かの人たちが出てきて命が助かったという、この一つの出来事から考えると、やっぱり「ウチナーグチ」という言葉がずっと続いているんだ。そして、今の三世、四世の沖縄県人会、ハワイ沖縄県人会の連中の最も大事にしている、彼らのウチナーンチュ・スピリットとして、「ちむぐくる」という言葉をずっと大事にしているということは、やっぱり沖縄市史の中に海外ウチナーンチュの歴史も含まれるんだろうなというふうに思って聞きました。

それで、吉成さんの話を聞いていて、吉成さんは見事にマクロな視点で写真の社会的な意義を捉えられました。その時にふと思ったのが、私は学生時代から石川文洋さん—本土で生まれ育ったウチナーンチュなんですけども—石川文洋さんの文章を読み、そのうち知り合って、文通をするようになって思ったことは、ミクロな視点で一人の、まあ彼は「フォトジャーナリスト」って言うんでしょうかね、つまり文章も書く人なわけで、こういう一人のフォトグラファーのライフヒストリー—ライフストーリーと言ったほうが正しいですね—ライフストーリーを聞くことによって、その人の志のあり方とか、その変遷であるとか、社会との関わりであるとか、そういったことが見えてくることはあるんじゃないかなと思ったんですけど、そういう方法というのは取られるかどうか、視野に入っているかどうかというのは聞きたいと思います。

王さんのお話は、本当にマクロな視点とミクロな視点、この二つの間の社会学的想像力を非常に喚起するようなお話で、とっても、なんというのでしょうか、エキサイトしました。まあ感想と質問みたいなものですけど、ありがとうございました。

**吉 成**：昨年に引き続き今年も先生に参加して頂いて、大変ありがたく思います。また、貴重な示唆に富むコメントと質問も頂き、本当に感謝いたします。まず、私にも質問を頂いているのですが、色々と貴重なご示唆を頂きま

したので、まずは恩河さんの方から今のコメントにお答えなどはありますでしょうか。是非よろしくお願いいたします。

**恩 河**：はい、恩河です。私みたいな歴史畑の人間というのは、癖って言うんですかね、「なぜ？」とか、「どうなった？」みたいな歴史的な背景や意義というものをいつも考えがちで、そういうことで仕事を進めているんですけど、先生が仰ったように、複眼の歴史観というんですかね、今日のシンポジウム全体もそうですけど、普段私の周辺ではあまり勉強できないようなすごい刺激的なインパクトがありました。大変勉強になりました。先生、ありがとうございました。

**吉 成**：恩河さん、ありがとうございます。それでは、いま頂きました先生からのご質問に、僭越ですが私のほうからお答えさせて頂きます。石川文洋さんの足跡のことも大変興味深く伺わせて頂いたのですが、私はこれまでの 2 回のシンポジウムでお話させて頂いたように、特に復帰前の 1969 年の沖縄を初めて訪れた東松照明さんが「基地の中の沖縄」の現実に衝撃を受けて、それまで知らなかった現実に対して本土の人間として何が出来るのかと問いかける中で、2012 年に沖縄で亡くなるまで生涯をかけて撮り続けていった足跡を辿り直しています。仰る通り、ライフストーリーや、どちらかというと写真家のライフヒストリーという形で、当時の東松が残していた多様な表現媒体から、彼が受け止めていた、例えば復帰前後の沖縄の現実とはいかなるものであったのかを浮かび上がらせています。ですので、ライフストーリーとも、ライフヒストリーとも関わる側面があるかと思います。ただ、それではなぜ「写真実践」から捉えていく必要があるのかという点についてですが、先ほどの報告の中で少しお話させて頂きました通り、自分自身も写真を撮り続けてきたという撮影行為を介した視点から、当時の東松が表現しようとした現実をもう一度たどり直していく、そしてその過去が、いま私たちが生きている現在へとどう繋がっているのかを再帰的に表現していく点が重要ではないかと考えています。

**参加者 A**：ありがとうございました。

**吉 成**：王さんのほうからは何かありますでしょうか。

**王**：先生、ありがとうございます、コメントを頂いて。先生が仰った通り、やっぱり女性たちの歴史実践を、私はこれまで女性たちと長く関わっている中でずっと見つめてきて、今回の発表ではあまり触れていないんですが、実は中国東北部出身ではなくて、中国の南方の地域出身の私が、東北出身の女性たちへのインタビューや対話を通じて徐々に気づいたのは、対話の場面で女性たちがなかなか言いづらいこと、あるいは語りにくいことや沈黙があることでした。その背後には何があったのかを考え続けてこれまで研究してきました。先ほども少しお話させて頂いたように、日常の中の、隅々のところに女性たちの営みの大きな力があるのではないかなと改めて感じました。

**参加者 A**：ありがとうございました。

**吉 成**：先生、貴重なご意見とコメントを頂きありがとうございました。他の参加者の方々から是非、いかがでしょうか。……もしなければ、大変貴重な機会ですので、引き続き私から恩河さんへ少しご質問させて頂きたいと思います。先ほど第一部で、とても貴重なお話を頂きました。なかなかセンシティブな話でもあるのですが、やっぱり語りにくい経験や、語り得ない戦中戦後の沖縄市の一人ひとりの体験者の方々のお話があるのではないかなと思っています。そのように、時間が経っても今も語れないことがある一方で、これから時間が経つことによって、初めて語ることができるようになることも多分あるのかもしれないなと、沖縄市の、非常に複雑な一人ひとりの暮らしの現実についてお話を伺うと感じています。恩河さんと伊敷さんをはじめ、沖縄市史編集の皆様がこれまでずっと聞き取りを行い、そして、それを『KOZA BUNKA BOX』のような形で記録としても残してきた中で、何かそういったことを受け止めてきた、感じてきたエピソードなどがありましたら

共有して頂けるとありがたいのですが、いかがでしょうか。

**恩 河**：オーラルをやる上で難しいこと、そういうことですか？これはもうたくさんございまして、まず第一に、コザの特飲街で働いていた女性たち、彼女たちのインタビューは、ほとんどもう全戦全敗という感じですね。まず私が男性であるということも災いしているかもしれませんけど、ほとんどインタビューに応じてくれない。最近の番組なんですけど、東京のテレビ番組を少しお手伝いさせて頂いたことがありまして、直接コザで働いていた女性たちのインタビューというのは、やっぱりできなかったです。それでどうしたかというと、先ほど少し出たんですけど、奄美大島やその辺の出身で、コザで働いている女性たちもいましたので、その関係をあたっていくなど、何か少しワンクッション置いたような形でしか女性たちのインタビューは難しいということですね。我々はもう 2、30 年前から、本土の東京の大学の先生にお願いして（女性ですけど）、インタビューを試みているんですけど、滅多に（インタビュー）できんという感じですね。

それから「コザ暴動」の話も出ましたけども、たいてい我々は周辺の情報からわかっていて、この方は車焼いたなとか聞いていますけど、なかなか「うん、焼いたよ」と仰る人は、まずいないという。今、吉成さんが仰っているように、だんだんだんだん年を取って行けばというか、そういう感じで言うと、少しずつ話をして頂けるという方が出てきているのは確かですね。沖縄戦も、もう最近です。悲惨な目にあった方々が、あるいはそういう場所で体験した方々がお話しするようになったのは、ぼちぼち最近かなということですね。かなり高齢化していってからのお話だと思います。

あとですね、全然ご質問とは関係ないことなんですけども、「カッペン移民」ってご存知ですかね。ブラジルとボリビアの境の、「カッペン」というのはゴムの木の汁を取る会社の名前なんですけど、それがいつの間にか地名みたいになって、カッペン移民と言うんです。ジャングルの奥地、そこで大変な目にあって、沖縄の人たちが行ったんです。例えば、もう戦後移民は、だいたい沖縄に帰ってくるということはあまり考えないで行くんですね。そ

うすると、全財産を売り払ってカッペンに行くと。すると、だいたいゴムの木を植えていたらしいんですけど、僕が聞いた範囲で、ゴムの木は 5、6 年経たないと収穫できないらしいんです。ところが、持っていった財産は 2、3 年で使い果たした。それでしょうがなく都会に出てくるというお話、いっぱい苦労した話をお聞きしました。最後に聞いたお話が少しショックでして、彼はサイパンで戦争を経験して、それからブラジルに行っているんですけども、「カッペンは何でもなかった」と、最後ぽつりと仰っていた。「え、どういうことですか？」と聞いたら、もう次の言葉がショックでしたね。「(カッペンには) 爆弾は落ちてこんから。サイパンは大変だったよー」と。「でも、カッペンはどんなに苦労しても爆弾が落ちて死ぬということはないから、何でもなかったよー」ということを仰っていまして、それは頭に残っています。やっぱり戦争というのは、そんだけ人の人生に影響を与えるんだなというふうに思った。これ、少しお話ししたかったんです。

**吉 成**：恩河さん、貴重なお話をありがとうございます。もう少し伺いたいことが今のところであるのですけれども、いま挙手をされている方がいらっしゃいますが……。

**参加者 B**：いいですかね、今日は素晴らしいご発表、ありがとうございました。今の沖縄のことに関連して、女性のインタビューが非常に難しいって仰っていましたよね。私も、石川真生さんという沖縄の女性の写真家がいくつか写真集を出しておられたり、それに関するエッセイなんかを書いておられるところで、女性の働いている様子とか、それから、そこに来ているお客さんの感じが少し掴めたんですけれども。私がお伺いしたいことは、もし不謹慎な質問だったらお許しください、お答え頂かなくてもいいです。今日のご発表の中で、1945 年の 4 月から 6 月、7 月、夏にかけて、南に逃げたり、あちこち逃げなかったりっていう話がありましたよね。それで、逃げなかった人は割と初期の段階で亡くなった方が多い。逃げた人も 6 月ぐらいに亡くなった人が多いというふうに理解したんですけれども、今、例えば「戦雲―い

くさふむ―」という映画とかで、南西諸島を含む軍事化が進んでいるじゃないですか。沖縄がまた再び戦場の先頭に立たされるんじゃないかという危惧を持っているんです。もしくは、また戦争が始まったら。そんな中で、もしまた同じようなことが起こったら、恩河さんだったらどのような行動を、もしくは、その当時にいらしたらされるのかなというのが、研究というよりも、こう、どんどんどんどん軍事化していく現代の中で、どこに、どうしたらいいんだろうということを、私自身が個人的に考えることがあって。なので、色々調査などをしてこられて、そのような状況に置かれたらご自身はどんな行動を取られるのかなということを、もし可能であればお伺いできたら嬉しいです。

**恩 河**：はい、ありがとうございます。多分、全然お答えできないですけども、ご質問の中にあった市内に残った方々というのは、お話をお伺いする限り、沖縄のどこに逃げても生き延びられないという、そういう発想で、そうだったら、どうせ死ぬんだったら、先祖と一緒に死のうということで、お墓の中に隠れるんですね。そういうような意味で残っていたそうです。それで、ご質問の恩河だったらどうするかということなんですけども、ちょっと答えられないんですけど、そういった戦争のメカニズムみたいなものを少しずつ、どんなちっちゃなことでもいいので積み上げていって、解明していって、なるべく戦争が起こらないような調査研究を自分たちの立場としてはやるべきじゃないかと。実際そうだったらどうなるかは、ちょっとお答えできないんですけども、歴史編集の立場としては、どんな些細なことでもいいんですけども、戦争が起こるメカニズムを少しずつでも解明していく、それが我々の仕事かなというふうに思っています。お答えにならないとは思うんですけど。

**参加者 B**：いえいえ、ありがとうございました。

**吉 成**：ありがとうございました。今のお話について改めて私も思い出して

いたのですが、恩河さんと伊敷さんとお話させて頂く中で、沖縄市の、あるいはコザの歴史の事実、戦後史について学んでいくことから、戦争を起こさないためにどうするのかにつなげていくというお話が、感銘を受けたというと大変おこがましいんですけれども、非常に心に残っていました。戦争を起こさないためのメカニズムということを今、仰っていましたけれども、そのことを思い出していました。ありがとうございます。

時間がよろしい方はお付き合い頂ければと思います。先ほどの、語られなかったことが徐々に浮かび上がってくるという点について、以前、伊敷さんとお話ししていく中で、今回あまり触れられなかった「コザ暴動」の証言も、それから 40 年という節目の時に聞き取ったこと、また、50 年という節目の時に聞き取ったことでは新しいことが浮かび上がってくるというか、それまで知られていなかったことが、また違う側面から見えてくるというようなお話が印象に残っています。この点について、恩河さんの方からお話や、あるいは印象に残っていることなどがありましたら共有して頂けるとありがたいのですが、いかがでしょうか。

**恩 河**:「コザ暴動」に関しては、あれから 40 周年とか、50 周年という形で、「ヒストリート」で色んなゲストの方、話者を呼んで―あれは 40 名くらいかなー調査しているんです。ただ私、ずっと考えているのは、「コザ暴動」がなぜ起きたかはだいたい見えてきたというか、そういう感じがするんですけど、じゃあ、「コザ暴動」が沖縄もしくは日本政府、アメリカ政府、日本社会、アメリカ社会にどんな影響を与えたかみたいなことを今、考えていまして。例えば、沖縄国際大学の野添文彬先生という方がいらっしゃるんです。まず、沖縄を代表する辞典の中に「コザ暴動」の歴史的な意義として、復帰を早めたという議論があるんですけども、復帰が決まったのは「コザ暴動」の前なんです。1969 年 11 月に「佐藤・ニクソン会談」があって、その時点で復帰が決まっていましたので、(「コザ暴動」が)復帰を急がしたというか、復帰への道が早まった、みたいな議論は多分おそらく間違いだと思う。それで、先ほどの野添先生の議論で言うと、「コザ暴動」が起きる十日ぐらい前

に、米兵による糸満の主婦の轢殺事件が無罪になったんですね。そういうこともあって「コザ暴動」が起きたという背景はあるんですけれども、野添先生が仰っていたのは、裁判権を軍じゃなくて、なるべく民間の方に持って行こうという考え方ができてきた、そういうようなことを意義として考えられるんじゃないかということが一つです[1]。

もう一つは、やっぱりあのとき（1970 年）は復帰直前ですので、「コザ暴動」への対応で、日米両政府は、この事件があんまり（復帰に）影響を受けないようにもみ消したというんですかね、なるべく穏便に済まそうみたいなことがあったよということは、少しずつ分かりつつあります。やっぱり、そういうことも考えているということです。お答えになるか分かりませんけど。

**吉 成**：ありがとうございます。お話を頂いて、やはり出来事の歴史的な意義について、もう一度精密に読み解き直していく必要性を大変受け止めております。時間もそろそろ少しずつ近づいているんですが、ディスカッサントの小林先生の方から、何かご質問やコメントなどはありますでしょうか。

**小 林**：すいません、ありがとうございます。細かいことで恐縮ですが、チャンプルー文化のところでタコスの話が出てきたと思うんですけど、タコスはメキシコ料理で、それがアメリカに行ってアメリカ風のメキシコ料理になって、それを沖縄の人が沖縄に持ち込んだと。そうしたら、タコライスになったということでしたよね。チャンプルー文化に行く前にハイブリッドの状況があるというふうに恩河先生が言われたんですけど、これはハイブリッドの状況がアメリカ風のタコスで、タコライスがチャンプルーだというふうに理解していいんでしょうかね。

**恩 河**：すごい難しい質問、深津さんに直接お聞きしたいようなご質問です

---

[1] 野添文彬　2021「「コザ暴動」と日米関係―裁判権移管問題と基地縮小問題を中心に―（特集「『コザ暴動』を考える―あれから 50 年―」寄稿論文②）」『KOZA BUNKA BOX』17、34-50 頁。

けど、なんというんですかね、チャンプルーになるような感じでタコライスというものを生み出したと思います。つまり、タコスだけじゃなくて、それにライス、日本人の主食ですよね、それを加えることによって沖縄の人にも、日本人にもタコライスとして定着していったというような議論だと思います。例えば、メキシコからアメリカになぜ移ったか、アメリカ風のメキシコ料理って何かというと、タコスの皮がございますよね。この皮をアメリカ社会では炙って、固くしたらしいんです。それでアメリカ人に受け入れられた、そういうような議論です。それぞれの国民性にあった形で、だんだんだんだん文化というのは変容していく、あるいは受けいれられていく、そういうことだと思います。私なりに。

**小 林**：まあ、ポイントとしてはいきなり入ってきても、いきなり混じることはないということですよね。

**恩 河**：はい。そういう状況を、ハイブリッドという時間帯を少し置いておくべきじゃないかというふうに考えているということでございます。

**小 林**：ありがとうございます。具体的に理解するとこういうことかなと思って、ちょっとお尋ねしました。

**恩 河**：ありがとうございます。

**吉 成**：小林先生、恩河さん、ありがとうございました。それでは、時間の方も徐々に迫っており、総合討論は一応 30 分くらいの時間と考えておりましたので、そろそろ閉会の方に移りたいと思うのですが、最後に、本当に貴重なお話を頂いた恩河さんからコメントなどを頂けましたらありがたく思います。

**恩 河**：コメントですか。私からは特にございませんけども、まずは三好先

生、こういう機会に我々を呼んで頂いて、大変ありがとうございます。心から感謝申し上げます。それから、今日はだいたい 130 名余りの方々がご登録頂いていると聞いたんですけど、少しお話しました、コザの歴史や文化をテーマにしているのでしたら何でもいいですので、奮って『KOZA BUNKA BOX』への投稿と言うんですかね、（ちょっとなんですけど）原稿料もご用意しますので、ぜひ、『KOZA BUNKA BOX』に投稿してください。今日はありがとうございました。

**吉 成**：恩河さん、ありがとうございました。それでは最後に、三好先生からご挨拶の方よろしくお願いいたします。

**三 好**：皆様、長時間にわたりお付き合い頂き、本当にありがとうございました。本日ご参加頂きましたお一人お一人の中で未来に向けて、若い学生さんたちもたくさん参加して下さっておりますけれども、それぞれご自身の研究の中に何か参考になることがあればというふうにと思っています。この機会に、ぜひコザへ、そして「ヒストリート」へ、また、昨年のシンポジウムの長崎も含めて記憶の継承を祈念しながら頑張っておられる現場へ足を運んで頂いて、そこの営み、その人たちがどのように暮らし、生きているかということを、私たちの暮らしと照らし合わせながら考えて、そして未来を考え、平和を考えていく機会をつくって頂けたらということを切に願っております。

昨年のシンポジウムのまとめが 1000 件以上閲覧して頂き大好評頂いておりますように、このシンポジウムもブックレットとしてまとめていきたいと思っています。ご参加頂いた方にもご案内させて頂きますし、ここに参加頂いている若手の方々にも、参加記録として、またリアクションを載せていくということも考えたいと思いますので、何卒ご協力頂けたらと思っております。少しこの後 Zoom も開いておりますので、もし何か交流をしておきたいという方がおられましたら、遠慮なくここに残って頂けたらと思います。恩河さんもお仕事の中で大変申し訳ありませんけれども、もし宜しければ少し

残って頂けたらと思います。本当にありがとうございました。この 3 回のシンポジウムを持って、私どものまずは拠点形成プロジェクトのまとめとなりますが、今後も「記憶の継承ラボ」として活動を続けながら、現場の方や学生と共に考えて、私たちも教育に携わる大学の一人として、心に残るようなことが残せればというふうに思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。本日は本当にありがとうございました。

レスポンス①

# 「実践された場所」としての沖縄――おばぁを演じる

上林　梓 *

## １．はじめに

今回のシンポジウムでは、副題にある「アジア地域史」の一つとして沖縄・コザの戦後史が取り上げられた。前回のレスポンス[1]でも書いたように、コザという場所、そして吉成氏が撮影した一枚の写真（「コザ・嘉手納基地へ続くゲート通り」）におさめられた風景は、筆者において、幼い頃の懐かしい記憶を想起させる。同時に、戦後のコザやそこに暮らした人々と筆者との間にある隔たりを、筆者に強く意識させるものでもある。シンポジウムの第一部では、現場からのレスポンスとして、「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」と題する、恩河尚、伊敷勝美の両氏（沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」・沖縄市史編集担当）からお話があった。そのなかでは、「戦後のコザを知る女性たちにインタビューを試みても、なかなか答えてもらえない。インタビューをとること自体が難しい」ということが語られた。このことには、戦後の「アメリカー本土ー沖縄」をめぐる歴史的・社会

* 大阪大学 21 世紀懐徳堂・特任研究員

[1] 上林梓　2023「メディアとしての身体の可能性――「写真実践」における撮影者の〈身体〉と祈りを捧げる子どもの〈身体〉」、三好恵真子・吉成哲平 編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC ブックレット第 18 巻、209-222 頁。

的背景が大きく影響している。

今回、本稿を執筆するにあたり、改めて戦後のコザの歴史について調べ、当時の写真を眺めてみた。だが、知れば知るほどに、考えれば考えるほどに、筆者が心のどこかでずっと気になっていたこと―当時のコザを生きた女性たちのこと―を、どのように言葉にすればよいのかわからなくなってしまった。沖縄にルーツをもつこと、女性であること、今は沖縄を出て本土で暮らしていること、コザという場所の記憶があること、このような背景をもつ筆者だからこそ、何かを語らなければならないというある種の責任感と、自分には当時のコザを生きた女性たちについて語ることなど到底できないという無力感とを同時に覚えながら、しばらく筆を進めることができなかった。

2025年2月上旬、自らの記憶の中にあるコザを訪れてみようと思い立ち、沖縄に戻った（これについては、本誌のコラム①に寄稿している）。コザの各所を訪れて、現在の景観に自らの記憶の中のイメージを重ね合わせると、何ともいえない不思議な感覚に陥った。場所にまつわる記憶が次から次へと想起され「あのとき、私はここにいた」と強く実感する反面、想起された記憶の数々は、「それは本当にここでの出来事なのだろうか」と思われるほどに、場所とのつながりが曖昧なようでもあった。資料館等で見聞きした「コザ」と、自らのうちに想起するコザという場所の記憶とは、なおさら結びつかないように思われた。これは、「コザ・嘉手納基地へ続くゲート通り」の写真を目にしたときの経験と似ていた。

場所をめぐる記憶のことでいえば、筆者にはもう一つ、いつまでも忘れられない経験がある。それは、即興劇において沖縄の高齢女性を演じようとしたときに、沖縄をめぐる記憶が想起されたという経験である。本稿では、この経験に焦点をあて、ある特定の場所をめぐる記憶というものについて考えてみたい。この経験に焦点をあてる理由は二つある。一つは、この経験において想起された場所の記憶が、文字や写真、風景といった目に見えるものからではなく、演じるという行為によって想起されたものであるという点である。前回のレスポンスにおいては、写真を媒介した記憶の想起について論じたが、今回は実践における記憶の想起についての議論を試みたい。論を先取

りすれば、本稿で焦点化される経験には、ミシェル・ド・セルトーがいうところの「実践された場所」の記憶が示される。沖縄の高齢女性を演じるという行為における記憶の想起に焦点をあてるもう一つの理由は、この経験が、筆者にとって、戦後の沖縄を生きた（であろう）女性との出会いの意味をもつからである。筆者の力不足ゆえ、本稿で直接論じることはかなわなかったが、戦後のコザを生きた女性たちのことを心におきながら、この試論を本シンポジウムへの応答としたい。

## ２．おばぁを演じる

筆者は、これまで、演じるという行為をテーマとする研究や実践を続けてきた。今から 20 年程前になるだろうか。筆者は、沖縄の「おばぁ」（沖縄では高齢女性のことをこのように呼ぶ）を即興で演じるという経験をした。以下の記述は、この経験から 10 数年が経過してから再帰的に書き起こしたものである。

*何年も前のある土曜日、私は即興演劇のワークショップに参加した。12～13 人の参加者は、そのほとんどがワークショップ慣れしているといった雰囲気だった。ワークショップへの参加経験がほとんどなかった私は、初めこそ少し緊張気味であったが、少しずつ場に馴染んでいった。*

*ワークショップの最後は、「沖縄の基地問題」というテーマのドラマワークだった。ファシリテーターは、「少し重たいテーマかもしれませんが」と断りながら、少し緊張しているようにも見えた。とはいえ、それまでの活動で場は十分に和んでいたし、参加者たちは変わらずくつろいだ雰囲気だった。ファシリテーターは、自分が沖縄に 15 年ほど住んでいたこと、そこで基地問題を知ることになったことを話し、「今日はたまたま沖縄出身の人が参加してくれているんです」と私のことを紹介した。*

*ファシリテーターによって、基地に関するいくつかの資料が提示されたあと、参加者は三人ずつのグループに分かれ、それぞれで短いドラマを演じる*

*ことになった。登場人物が「沖縄の基地」について会話を交わすという条件のもと、登場人物や場面設定はそれぞれのグループで話し合うことになった。*

*私が黙っていると、他の二人が「ちょっと難しいよね」「詳しく事情を知らないし」と切り出した。短い話し合いのあと、私がおばぁ役、二人が孫役、おばぁと孫が部屋の中でおしゃべりをしているという場面設定が決まり、あとは即興で演じることになった。このときから、憂鬱さが私の身体に少しずつ染み広がっていった。*

*「おばぁ、基地なくなった方がいいと思う？」。唐突に尋ねられ、頭が真っ白になる。私は記憶の断片を手繰り寄せる。祖父母の家のにおい、軍用機の音、基地で働くおばさんが持ってくるおみやげ…。そしてことばをしぼり出す。*

*ほんの 2 分くらいのやりとりだったのではないかと思う。「軍用機の音が聞こえるといつも空を見上げて目を閉じる。こんな音は聞きたくない。基地がなくなれば、聞かなくてすむのに。ふと目を開けると、基地で働く自分の娘が、「ただいまー」とお土産を持って帰ってくる。基地のことは難しくて私にはわからない」。おばぁ役の私はこのような内容を語ったと記憶する。*

*演じ終わると、その場の空気がピンと張りつめていた。他のグループの発表のときと明らかに空気が異なっていた。「ああ、やっぱり」。なんとなくこうなることがわかっていた。憂鬱さに浸った身体はずっしりと重くなっていた。*

*ワークショップの最後に、活動を振り返って参加者どうしで感想を共有した。「ホントウのおばぁがいるみたいだった」「沖縄の人が沖縄のことばで演じるとやっぱり違うよね」。参加者の何人かが私の「おばぁ役」を称賛した。私に投げかけられた言葉が、砂ぼこりのように、ざらっと私の身体をなでて通り過ぎた。「ホントウのおばぁ」を演じてしまったことを私は後悔していた（2020.03.15）。*

おばぁ役が割り当てられた筆者は、演じる前から何となく憂鬱になっていた。その憂鬱さは、人前で演じることによる緊張とは明らかに異なっていた。

それは、沖縄にルーツをもつ自らに、おばぁ役が課されたことによって引き起こされたものであった。ただし、記憶の限り、筆者は祖母と基地問題について話し合った経験はなく、したがって、おばぁを演じる際に特定のシーンを思い浮かべることはなかった。この憂鬱さの誘因は、何か具体的な体験そのものというよりは、何か別のものであるように思われた。一体それが何であったのか、筆者にはずっとわからないままであった。

当時、沖縄を離れて生活する筆者は、沖縄をめぐる状況からは物理的にも心理的にも遠くにいて、日常生活のなかで、沖縄の「基地問題」について思いを巡らすことはほとんどなかった。それゆえ、おばぁを演じることが決まった途端、沖縄にルーツがありながらも、沖縄から遠くにいるという自らの立ち位置を自覚せずにはいられなかったのだろうと思う。このときの憂鬱さとは、そのような自分が、「沖縄」を象徴する「おばぁ」を演じることに対して感じる負い目であった。

## ３．実践された場所の記憶

おばぁを演じようとする筆者に想起されたのは、沖縄という場所から想起された日常の記憶の断片―祖父母の家のにおい、軍用機の音、基地で働くおばさんが持ってくるおみやげ―であった。これらの記憶の断片のうち、「祖父母の家のにおい」は極めて個人的な経験に関わるものである。対して、「軍用機の音」は、「沖縄の基地問題」として象徴化される。一方、「基地で働くおばさんが持ってくるおみやげ」は、米軍基地内での就労を示唆する点では「沖縄の基地問題」を象徴するが、叔母からおみやげを受け取るという日常経験の記憶でもある。このように、場所から想起される日常の記憶には、個人的な経験や、他者と共有可能なレベルまで象徴化されたイメージとが混在している。

ピエール・ノラ（Pierre Nora:1931-）によれば、「記憶とは生命であり、生ける集団によって担われる」ものである（ノラ 2002, p.31）。他方で、歴史とは、もはや存在しないものによって再構成された「過去の再現（représentation）」

（ノラ 2002, p.32）である。記憶が具体的な空間（lieux）に紐づけられるの対し、歴史は一連の出来事（événement）に紐づけられる（ノラ 2002, p.32）。この見方に基づけば、筆者において想起された記憶とは、出来事に紐づけられた歴史ではなく、沖縄という場所に紐づけられた記憶であるといえる。だが、先にあげた記憶の断片には、すでに象徴化された「軍用機の音」や、象徴化されつつある「基地で働くおばさんが持ってくるおみやげ」が含まれている。このことは、場所に紐づけられた日常の記憶であっても、場所の歴史性と完全には切り離すことができないことを示唆する。「沖縄」という、複雑に歴史性を帯びている場所であればなおさら、場所の記憶の象徴化を防ぐことは容易ではない。象徴化された記憶は自ずと歴史に組み込まれることになる。「祖父母の家のにおい」という極めて個人的な経験の記憶の断片もが、「沖縄」という場所に紐づけられることによって「沖縄」というアイデンティティを帯びていく。「ホントウのおばぁがいるみたいだった」という他者からの意味づけは、個人的な記憶の断片を、「沖縄」の物語として紡ぐ。結局のところ、筆者において想起された日常の記憶は、沖縄という場所に紐づけられることによって、その歴史のなかに埋もれていく運命にあるのだろうか。

ここで今一度、ミシェル・ド・セルトー（Michel de Certeau: 1925-1986）における「実践された場所（un lieu pratique）」という概念を手がかりとしながら、場所をめぐる記憶について考えてみたい。まず、セルトーにおいては、場所（un lieu）と空間（espace）とが異なる二つのありかたとして定義される。場所とは、諸要素が適正（propre）に配置され、安定性（stabilité）を備えたありかたを意味する（ド・セルトー 2021, p.284）。いうなれば、「物体としてのありかた」及び「死んだものがそこにあるというありかた」である（ド・セルトー 2021, p.286）。これに対し、「空間というのは、それを方向づけ、情況づけ、時間化する操作がうみだすもの」、すなわち「石でも木でも人間でも、それにはたらきかける操作によって規定されるありかた」を意味する（ド・セルトー 2021, p.284）。セルトーにおいて、これら二つのありかたは相互に転換可能なものとして捉えられる。場所から空間への転換について、セルトーは以下のように述べる。

> 要するに、空間とは実践された場所のことである。たとえば都市計画によって幾何学的にできあがった都市は、そこを歩く者たちによって空間に転換させられてしまう。おなじように、読むという行為も、記号のシステムがつくりだした場所―書かれたもの―を実践化することによって空間をうみだすのである（ド・セルトー 2021, pp.284-285）。

ここで述べられるように、「幾何学的にできあがった都市」を「歩く」という行為や「書かれたもの」を「読むという行為」―セルトーはこれを「歴史的な主体の行為」（ド・セルトー 2021, p.286）とも述べる―によって、場所から空間へと、空間的なありかたの転換が生じる。では、何がこの転換を生じさせるのか。それは、実践のなかの記憶というメディアである。セルトーは次のように述べる。

> 実践のなかの記憶は、多様な変容のはたらきによって調整されている。というのも記憶は外的なものとの出会いによってたちあらわれ、他者のもてる代々の紋章と彫りものを寄せ集めなければ成りたたないからだが、そればかりでなく、この不可視のエリクチュールは、新たな情況によってしか「よび起こされない」からである（ド・セルトー 2021, p.225）。

実践のなかの記憶は、ただそのものとして在るのではなく、「他者のもてる代々の紋章と彫りもの」という、いわゆる歴史的なものによって構成されるが、その構成要素や構成のされ方は常に変化し続けている。このように、かたちを変え続ける記憶は、それゆえ、「外的なもの」である他者との出会いの瞬間にしか、その姿を確かめることはできない。

おばぁを演じたときに想起された場所の記憶とは、まさに、演じるという行為のなかの記憶であった。それは、もはや、自らの個人的な記憶そのものではありえず、そこには個人的な記憶と「沖縄」を象徴させるイメージ（＝歴史的なもの）とが混在し、すでにそのかたちを変容させていた。それにも

かかわらず、筆者は、自らの記憶が変容させられること、そして「沖縄」という物語に回収されてしてしまうことに強く抵抗していたのであった。それは、自らが演じたおばぁが「ホントウのおばぁ」へと象徴化されてしまうことへの抵抗でもあった。よって、あのときの筆者は、「ホントウのおばぁがいるみたいだった」という他者の言葉を受け止められずにいた。しかしながら、セルトーがいうように、記憶という「不可視のエリクチュール」が、「新たな情況」によってのみ立ちあらわれるとするならば、あの記憶を想起させたのは、「おばぁ、基地なくなった方がいいと思う？」という他者からのよび起こしではなかったか。よび起こしに何とか応答しようとする行為によって姿を立ちあらわせた記憶（メディア）は、あの空間を「実践された場所」としての沖縄へと転換させた。だからこそ、あの場にいた誰かが「ホントウのおばぁがいるみたいだった」と語ったのではないだろうか。もしかすると、実践された場所としての沖縄で、われわれは、（もはや確かめようがないけれども）おばぁと出会っていたのではないだろうか。

## ４．おわりに

本稿では、沖縄のおばぁを即興で演じるという自らの経験に焦点をあて、場所をめぐる記憶の想起について論じた。本稿で記された沖縄をめぐる記憶とは、あのときの演じるという実践によってしか想起されえないものであった。それは、個人的な記憶とも沖縄の歴史とも意味づけられないようなものであったが、それこそが、実践された場所の記憶なのであった。

沖縄が自らのアイデンティティに関わる場所であるからこそ、沖縄という場所の記憶を傷つけられまいとする筆者は、あのときの憂鬱さからずっと逃れられないでいた。だが、われわれの記憶とは、いかに脆弱に思われようとも、われわれが思うよりもずっとしなやかで逞しいものなのかもしれない。なぜなら、記憶は、誰かひとりによって守られていくものではなく、われわれが他者からのよび起しに応答すること―実践すること―によって繰り返し生まれていくものなのだから。

## 引用参照文献

ド・セルトー、ミシェル 2021『日常実践のポイエティーク』(Michel de Certeau. L'Invention du Quotidien. Vol. 1, Arts de Faire. Union générale d'éditions. 1980. 山田登世子訳）ちくま学芸文庫。

西村清和 2009「場所の記憶と廃墟」『美学』第 60 巻 1 号(234 号)、2-15 頁。

ノラ、ピエール 2002『記憶の場−フランス国民意識の文化=社会史』（Pierre Nora. Les Lieux de mémoire, Gallimard. 1984 谷川稔監訳）岩波書店。

レスポンス②

# Hip Hop のローカルな時空間、あるいは光の暴力と記憶の系譜学についての随想

中谷 碩岐 *

「戦後」と呼ぶことすら憚られる国際情勢のなか、前の世界大戦と呼ばれる戦争から 80 年が過ぎ去りつつある。当時その戦争を「体験」し、その後各々の体験を各地で語り継いできた語り部の数の減少と共に、それらの記憶も否応なく生々しさを失っていく。2024 年 10 月 26 日に大阪大学で行われた公開シンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承」は、かつての「体験」がその想起の重要性を増し続け、にもかかわらず忘却されつつある現在の状況において、取り組まれるべき喫緊の課題へと応答するものであった。

とはいえ私にとって、この「ポスト体験時代の記憶の継承」という主題は、即座にそこにやっかいな問題があることを予想させるものでもあった。私は語り部たちが語る「記憶の継承」が問題となる当の出来事を体験していない。だとすれば、私は体験できない出来事の「記憶」にどのように向き合えばよいのだろうか。そしてその「継承」は、どのようにして可能なのだろうか。この問いを巡るすこし長いまえがきから、この随想を始めることにしたい。

「体験していない記憶の継承はどのようにして可能なのだろうか」という問いに、さらに踏み込んでこう続けることも出来るだろう。「私はその資格を有しているのだろうか？」と。今回の原稿の依頼を受けるにあたっても、こうしたためらいがなかったと言えば嘘になる。先の戦争を経験していない、

*大阪大学人間科学研究科・博士前期課程/日本学術振興会特別研究員 DC1（予定）

ましてや沖縄出身ですらない自分が「沖縄」の「戦争体験」の「記憶の継承」について訳知り顔で語る？それはまさに、エドワード・サイードやガヤトリ・スピヴァクといった思想家たちが警鐘を鳴らし続けた「声の簒奪」ではないだろうか。一方で、記憶の継承をめぐる私の「語り」には、避けがたい仕方でこうした疑念が付きまとうことになる。

しかし他方で、「沈黙」もまた、継承の要請に対するひとつの答えであることにかわりない。そしてこちらもまた、私にとっては許容しがたいものである。世界には、たしかに「記憶」し「継承」されるべき出来事が存在する。それに対し沈黙することは、ときに最悪の暴力を引き起こすことになる。

「知らないなら語るな」という言葉は、たしかに「正しい」。しかし私からすれば、それはむしろ「賢明」であるにすぎない[1]。「表象不可能性」という有名な議論を持ち出すまでもなく、私たちが出来事から常に隔てられているとすれば、こうしたテーゼは、その「正しさ」ゆえに容易に沈黙を産出する。しかしだとすれば、それはいったい何のための「正しさ」なのか。

「記憶の継承」がことさら問題になっている事象ーそれは逆説的に、その継承の困難を含意するーにおいて、こうした沈黙が行為遂行的に有する意味は見過ごされるべきではないだろう。当の出来事が有する「重さ」、それは常に、語りよりも沈黙を生み出すものである。そしてそれはしばしば、あまりにも容易に不可逆的な忘却へと繋がってしまう。

体験していない記憶を継承するというのは、それが負の記憶である場合はとりわけ、その継承への切迫と躊躇とを同時に引き起こす。率直にいって、私の中で未だこうしたジレンマを引き受け、それを乗り越えるための「正解」は出ていない。しかし、この問いに「正解」はあるのだろうか。

この問いに端的な「正解」はないのだとすれば、論点は「沈黙」と「語り」のどちらを、より実感に沿った仕方でいえば「正しい沈黙」と「誤った語り」のどちらを自らの課題として引き受けるのか、という「決断」に帰着する。

---

[1] こうした私の「決断」が（そしてこの注の存在が）私自身の知識の不足や論考の不備、そして何よりこの論考が有する暴力性を罷免してくれるわけではない。これは「真理」ではなく「政治」の問題である。

「私はこのテーマを論じるには不適格です」と依頼を断ることは簡単だったかもしれない。しかし私は、出来事を闇へ葬る沈黙という「夜の暴力」よりも、それが暴力的な身振りであることを自覚してなお「光の暴力」としての言葉を発することを選びたい（ジャック・デリダ）。記憶の継承とは、おそらくはこうした政治的な決断によってしか可能ではないのだろう。

とはいえこの決断を単なる居直りへと陥らせないためには、言い換えればその暴力を最小のものにするためには、個人の/共同体の「記憶」を「体験」に至るまで辿り直す、いわば「記憶の系譜学」とも呼ぶべき議論が要請されるように思われる。その議論は、以下のふたつの要求を満たす必要がある。一方でこの系譜学は原初的体験に忠実に、その源泉へと記憶を「収束」させるものである必要があるだろう。また他方でそれは、体験をより広く、より遠くへと「拡散」することで、それを継承するものである必要があるだろう。

しかしそれでは「記憶を収束させる」と「記憶を拡散する」という、この真逆のふたつのテーマを、どのように折り合わせることが出来るだろうか。その内実について、現時点で私がはっきりとした答えを持っているわけではないが、さしあたり本稿では、私が昨年のシンポジウムに参加し、私なりに「ポスト体験時代の記憶の継承」のための議論を構築する可能性をみたある領域、すなわち Hip Hop をとりあげ、そこからはじまる「記憶の系譜学」の端緒を素描することにしたい。

＊

最初に断っておきたいのは、本稿で私が念頭においており、それゆえ以下の議論において取り上げるのが「現代」「日本語ラップ」という、ある意味で極めて「ローカル」な事例であるということである。そしてこの選択は、それ自体読者を戸惑わせるものであるかもしれない。というのも、Hip Hop はその背後に巨大で「グローバル」な歴史的背景を有しているからである。

ここで詳述することはできないが、1960 年代アメリカにおける黒人公民権運動において政治的なメッセージを発する媒体として重要な位置を占めていたこの文化運動は、その後も今日に至るまで「権利を奪われた者たちの

代弁者」という役割を担い続けてきた。それゆえ本来は、Hip Hop を語る上でその歴史と起源について語らないということは不可能すらある。

しかしながら同時に他方で、Hip Hop の特徴のひとつは、このような文化運動から出発した Hip Hop が世界各地で受容される中で、ローカル文化と融合しながら独自の変容を遂げてきた点にある（cf. 島村 2024:9）。それぞれの土地で受容された Hip Hop は、単に使用言語の差異のみならず、楽器や技法、そして何よりそこで歌われる「事柄」において、その土地の「記憶」を反映する仕方で変容を遂げてきた。そしてその時問題となっているのは、もはや「アメリカ」という Hip Hop の単一の起源ではなく、むしろそれぞれの土地の「ローカル性」なのである。

本稿において私は、Hip Hop の「グローバル」な歴史というよりはむしろこの「ローカル性」を強調したい。Hip Hop が政治的な文化運動を超えて、ここまで人口に膾炙する一般的なものになり得たのは、この「ローカル性」によるところが少なくないように思われる。ひとは Hip Hop において歌われている出来事が何かわからないとしても、リズムに乗り、感動し、エンパワメントされることができる。そのとき、Hip Hop の受け取り手たちは、必ずしもその歴史性を理解しているわけではないだろう。しかしそうであるからこそ、Hip Hop は逆説的にも「記憶の継承」を可能にする「記憶の系譜学」の構築にひとつの導きの糸を提供するように思われる。正直に告白すれば、私は Hip Hop が好きでよく聴いてはいるものの、あまり詳しいとは言い難い。しかしここで私が問題にしたいのは、まさに私のような「素人」をも触発し、「記憶の継承」を促すような、Hip Hop のもつ「ローカル性」なのである。

その内容について、「空間/時間」という観点から更に掘り下げていこう。一方で、先に確認した通り、この「ローカル性」とは地域性の別名でもある。この Hip Hop の空間的な「ローカル性」という観点から見た時、「沖縄」という今回のシンポジウムの主題地域は、それが近年の日本語ラップの中心地のひとつでもあるがゆえに興味深い。たとえば、沖縄ラップを代表する曲のひとつに 2023 年にリリースされた Awich・唾奇・Ozworld・CHICO CARLITO の四人の沖縄ラッパーによる楽曲「RASEN in OKINAWA」があげられる。

タイトルからも見て取れるように、この曲はビートや歌詞、MV、歌唱者、使用言語に至るまで、徹底して「沖縄」という地域性に根差し、「沖縄」というローカルな文脈を強く織り込んだものである。最終的にその MV は、プエルトリコ系軍人だった祖父の愛称をその名に冠する CHICO CARLITO[2] が歌うコザ gate 通りと共に締めくくられる。シンポジウムにおいて議論の焦点のひとつとなっていた「コザ文化」とは、この「RASEN」が体現しているものだというのは言い過ぎだろうか。

また「ローカル性」は、空間的なものだけでなく、時間的なものでもある。シンポジウムを聴く中でとりわけ印象的だった場面は、沖縄市史の編集担当をされている恩河尚さんが、そのお話の中で具体的な「日付」を繰り返し強調されていたことである。私にとっては、この「日付」というモチーフは、フランスの哲学者ジャック・デリダがその著書『スィボレート』(1986) において展開した、ユダヤ人の詩人パウル・ツェランの詩における「日付」を巡る議論を想起させるものであった。ここでその議論を詳細に論じることはできないが、この著作においてデリダは「日付」というモチーフを「一回性」と「反復」という相反するふたつの観点から捉えていた。このふたつの観点こそ、ここで私がいう「ローカル性」の時間的側面を示すものである。

一方である出来事は「日付」を付されることを通じてその一回性・特異性を際立たせられることになる(例えば 1945 年 8 月 9 日の長崎への原爆投下、1973 年 8 月 11 日のニューヨーク・ブロンクスにおける Hip Hop の誕生)。市町村の統廃合や名称変更を中心として数日・数か月単位で目まぐるしく変化する終戦後の沖縄情勢について、その具体的な歴史を「日付」という尺度で論じることは、単に「1945 年　終戦」と述べることによっては捉えられない複層的で特異な現実を詳細に描き出すものであっただろう。

しかし他方でこの「日付」は、1 年ごとに巡り、回帰するものでもある。そして私たちは、この「日付」をトリガーとして、過去の出来事を記憶し、想起するのである。「8 月 9 日」や「8 月 11 日」に生じた一回的な出来事が、

[2] この出自自体、沖縄の基地の存在なしには語れないことは言うまでもない。

それでもなおこの「日付」において回帰するからこそ、私たちは毎年 8 月 9 日の朝過去に黙祷を捧げ、未来の平和を祈念する。そしてラッパーたちは、8 月 11 日に、あるいは 8 月 11 日を歌うのである。沖縄の歴史の「記録」において日付が問題となるのは、それが私たちの「記憶」に、その「継承」に必要不可欠であるからにほかならない。このとき「日付」は、それが指示する特異な出来事をそのつど反復するものとなるだろう。

一回的で特異な出来事を、複数的で特異な出来事へと変化させるための「日付」。それは一方で、祈念を形式化・儀礼化することによって出来事の記憶を薄めてしまう、という危機感を抱かせるものかもしれない（「Hip Hop が当初持っていた理念の薄まり」は、今日しばしばいわれることである）。しかし他方で、こうした「反復」の契機がなければ、純粋に特異な出来事は、時代の波によって削られ、摩耗させられていくことになるだろう。「日付」はそこに、たしかに「なにか」があったということを教えてくれる。そしてこの日付の記録こそが「記憶の継承」を可能にする。

とはいえ最後に述べておきたいのは、この「ローカル」が出来事の「記憶」への忠実さだけではなく、不忠実さをも帰結するということだ。Hip Hop が「ブロンクス」という起源の記憶から断絶し、沖縄という異なる「ローカル」と結びつくように、「沖縄」という起源もまた、その記憶を継承する私たちに「ローカル」な仕方でしか与えられない。ある日付は、それがまさに当の日付ではないからこそ反復し、繰り返し記憶のトリガーとなることができる。このとき、その起源にある当の出来事は常に私たちから離れたところにある。この意味で「ローカル性」は逆説的にも、出来事への裏切りを帰結しもする。

出来事の記憶は、その継承の過程において拡散を免れることができない。しかしおそらくは、ある意味でこの「裏切り」によってしか、記憶の継承は可能ではないのだろう。「ローカル」であるということ、それは出来事への忠実さであり、そしてある意味で出来事を裏切ることでもある。この二重の意味において「記憶の系譜学」は「ローカル」なものでしかあり得ない。

この忠実さと不忠実さを引き受けた上で、私たちは各々の場所で、各々の時間において、各々の仕方で記憶を継承していく必要があるだろう。本稿の試みもまた、この「記憶の継承」の要請に対する「ローカル」なレスポンスであることは言うまでもない。

## 引用参照文献

島村一平　2024「辺境ヒップホップ論　ー結びつく周縁から辺境のノイズへ」、島村一平（編）『辺境のラッパーたち　立ち上がる「声の民族誌」』青土社、9-48 頁。

レスポンス③

# 場所記憶と場所依存が促す離島地域活性化の力学
# ――沖縄小浜島の観光体験がもたらす示唆

黄 璇 *

## １．はじめに

沖縄離島の小浜島は、独特な自然環境と豊かな文化遺産を持つ観光地である。しかし、竹富町の公式データによれば、2019 年以降、転出人口が転入人口を上回る状況が続いており、地域社会の持続可能性が重要な課題となっている。この傾向は COVID-19 流行による一時的な影響に留まらず、パンデミック終息後も転出超過が改善されていないことから、地域活性化を阻む構造的な問題として深刻に受け止める必要がある。

観光業は小浜島を含む離島経済の重要な柱であるが（飯田 2017）、人口減少と高齢化により観光資源の保全や振興を担う人材が不足し、特に若年層の減少が深刻な影響を及ぼしている（秋山 2016；普久原 2017）。この課題には、定住促進や観光施設の整備に加え、地域への愛着と関与を高める視点が求められる。近年、場所記憶と場所依存が地域の持続可能性に寄与し得る要素として注目され（Lewicka 2008）、これらを活用することで地域の魅力を再認識し、活性化を促す可能性がある。本稿では、小浜島の観光体験を通じ、場所記憶と場所依存の視点から地域の魅力の維持と活性化の

* 東京大学大学院農学生命科学研究科・生態水文学研究所・学術専門職員

可能性を探り、持続可能な地域づくりへの知見を検討する。

## ２．先行研究から抽出した離島地域の持続可能性を支える新たな視座：場所記憶と場所依存

離島地域は、狭小性や遠隔性を持つ閉鎖的なシステムであり、独自の文化や風習を育んできた（飯田 2017）。しかし、人口流出や高齢化により、担い手不足や文化財継承の課題が顕在化している（金山 2007）。これらの課題を解決し、地域活性化を促すには、住民・移住者・観光客といった多様な主体の関与が求められる（飯田 2017）。

地域活性化を考える上で、Relph の「場所の現象学」における「場所の感覚」と「場所アイデンティティ」の概念が参考になる。Relph は、人が特定の場所を「内側」から体験することで「場所の感覚」が形成され、地域の持続可能性を高めると指摘している（富田ら 2014）。この「場所の感覚」には、「場所記憶」と「場所依存」が深く関与する。

場所記憶は、地域の歴史や文化に根ざし、文化財の保護や観光振興の基盤となる（Lewicka 2008）。祭りや伝統建築は地域文化の象徴であり、住民と観光者が歴史的文脈とつながる場を提供する（Chan et al. 2024; Lewicka 2008）。こうした記憶の共有は、地域愛着を深め、持続可能な発展にも寄与する（Kokorsch et al. 2025）。一方、場所依存は、その地域特有の自然や文化への依存を指し、観光地の魅力や観光者との持続的な関係を築く要素となる（Chen et al. 2021）。地域での体験は再訪意欲を高め、経済や文化の活性化に貢献する（大谷 2013）。

以上の先行研究を踏まえ、本稿では、小浜島の観光体験をもとに、場所記憶と場所依存が地域の魅力維持や活性化に与える影響を整理し、離島地域の持続可能な発展について検討する。

## ３．小浜島の観光資源と文化財

小浜島は沖縄県竹富町に位置する、面積約 8 ㎢、周囲 16.5km、2024 年 12 月時点で人口 615 人の小規模な有人離島である。観光施策として「伝統芸能と風光明媚なリゾートの島」を掲げ、自然環境と文化財を基盤とする観光業が主要産業となっている。

観光資源には、サトウキビ畑を抜ける「シュガーロード」、細崎海岸の白砂ビーチ、八重山諸島を一望できる大岳展望台などがあり、観光者に深い印象を与える。また、リゾート施設やゴルフ場も整備され、多様な観光ニーズに対応している。

文化財では、島内に 22 件の国指定文化財、登録文化財および竹富町指定文化財が存在する。国指定の重要無形民俗文化財「種子取祭」「結願祭」は、住民の精神的支柱であり、観光資源としても機能している。登録文化財には大盛家住宅が含まれ、竹富町指定文化財には史跡、天然記念物、名勝、工芸品、舞踊・民謡などがあり、地域の歴史と文化的価値を伝えている。

## ４．観光体験に見た場所記憶と場所依存の力学

### １）島民の地域愛着と文化継承

筆者は 2018 年 7 月と 2021 年 6 月に小浜島を訪れた。島内には赤瓦屋根の集落や「シュガーロード」のサトウキビ畑など、自然と文化が調和した象徴的な風景が広がっていた。これらは、島民が長年守り続けてきた生活文化の象徴であり、地域愛着の基盤となっている。以下では、筆者の観光体験を通じて、島民の地域愛着の強さと、文化を次世代へ継承しようとする姿勢を紹介する。

・内部で守る文化：外部者の関与が制限された「豊年祭」

筆者が滞在した民宿の主人から「豊年祭」について聞いた。この祭りは、収穫への感謝と豊作祈願を目的とする伝統行事であり、島民の絆を深める精神的支柱となっている。外部者の参加は制限され、祭りの純粋性を保ちつつ、次世代へ文化を継承する重要な役割を果たしている。このように、

島民は「場所記憶」を守るため、外部の影響を極力抑えながら特定の文化を継承している。

・外部へ発信する文化：「KBG84」の取り組み

一方、島の文化は外部へ積極的に発信される側面もある。筆者が訪れた居酒屋では、沖縄民謡が流れる中、島の歴史や文化について島民と直接対話する機会を得た。その際話題に挙がったのが、高齢女性アイドルグループ「KBG84」である。平均年齢 84 歳の彼女たちは、民謡や舞踊などの無形民俗文化財を新たな形で発信し、地域文化の継承に貢献している。戦争や多くの困難を乗り越えてきた彼女たちは、島の誇りを象徴し、文化を現代的に再解釈しながら広めている。

**２）移住者の地域社会への貢献**

小浜島には、自然や文化、穏やかな環境に魅了され移住する人々がいる。筆者が宿泊した民宿の経営者夫婦もその一例で、かつて観光客として訪れたことを契機に移住し、現在は民宿を営みながら地域文化の魅力を発信している。以下では、移住者が地域文化を尊重しながら新たな価値を創出し、地域経済の活性化に寄与する様子を述べる。

・地域文化を尊重する姿勢：祭りへの配慮

移住者は地域文化を理解・尊重し、島民との調和を保ちながら生活している。例えば、「豊年祭」の期間中、民宿の夫婦は観光客が行事の会場に立ち入らないよう配慮し、祭りの歴史や意義を丁寧に説明し、その価値を伝えていた。このように、移住者は単なる外来者ではなく、地域文化の保護と継承に貢献する存在となっている。

・伝統産業と観光をつなぐ取り組み

移住者たちは島の伝統産業と観光を結びつけ、地域の魅力を発信している。例えば、小浜島では、伝統的な織物や島内の製糖工場で作られる黒糖

がお土産として販売され、民宿の夫婦も観光客に積極的に紹介している。かつて琉球王国時代に日常着や貢納品として生産されていた織物は、現在、観光向けの工芸品や体験プログラムとして継承されている。また、サトウキビ栽培や黒糖製造の見学を観光プログラムに組み込み、観光者が地域の伝統産業への理解を深める機会を提供している。これらの取り組みは、観光客の再訪意欲を高め、地域経済の活性化にも貢献している。

## ５．場所記憶と場所依存が生む離島地域活性化の展望

小浜島の観光体験は、場所記憶と場所依存を通じた地域活性化に示唆を与える。島の自然や文化が観光者や住民の記憶と結びつき、地域資源との関わりを深めることで、持続可能な発展の基盤となる。本章では、若年層の地域回帰、移住者の定住促進、観光者の再来が人口流出の抑制や離島の持続的な活性化にどのように寄与するかを論じる。

### １）若年層の地域回帰と移住者の定住促進

離島地域では、進学や就職を機に若者が島を離れ、人口流出と高齢化が進行し、地域文化の継承や地域社会の活力低下が課題となっている（沖縄県企画部 2021）。この状況を改善するには、地域の魅力を活かし、若年層の地域回帰と移住者の定着を促す施策が不可欠である。

地域回帰には、地域資源の魅力を再認識し、場所記憶を喚起することが重要である。小浜島の赤瓦屋根の集落やサトウキビ畑、豊年祭のような伝統行事は、地域愛着を醸成する要素であり（大谷 2013）、教育プログラムや体験型イベントを通じた伝統工芸・農業・漁業の体験機会の提供が有効とされる（秋山 2016）。また、文化財保護や観光振興に関わる雇用創出は、地域でのキャリア形成や文化継承に寄与する（沖縄県企画部 2021, 秋山 2016）。

移住者の定住促進も地域活性化の重要な要素である。小浜島には、観光体験を通じて形成された場所記憶が契機となり移住した人々がいる。彼ら

の生活と生業は島の自然・文化・伝統産業と密接に関わり、地域との持続的な関係を築く「場所依存」を形成している（Chen et al. 2021）。民宿経営者のように、移住者が地域文化を尊重しながら新たな価値を生み出すことで、地域の魅力が高まり、観光業や伝統産業への新たな視点の導入も経済の発展に貢献する。

このような取り組みは、若年層や移住者の定着を促し、文化継承と経済発展の両立を図る持続可能な地域づくりにつながる。

### ２）場所記憶と場所依存の形成が促す観光者の再来

場所記憶は訪問時の体験を通じて形成され、地域への愛着や再訪意欲を高める（Lomas et al. 2024, Bowen 2020）。一方、場所依存は、観光者が地域の自然や文化、商品や体験に継続的に関わることで、その地域との結びつきを強める現象を指す（Chen et al. 2021）。この二つが相互に作用することで、観光者の再訪や地域との持続的な関係が生まれる。

小浜島では、サトウキビ栽培や黒糖製造の体験を提供し、観光者が地域の歴史や文化に直接触れる機会を創出している。また、特産品を活用した料理体験や、外部者も参加可能な伝統工芸のワークショップを通じて、住民との交流を促し、地域文化への理解を深めることができる（千足・蓼郷 2021）。

さらに、観光者が持ち帰る文化的価値のある記念品も、場所記憶の再生と場所依存の形成に寄与する。それにより、観光者は日常の中で島での体験を振り返り、地域との心理的な結びつきを深める。こうした記憶の積み重ねは、再訪意欲を高めるだけでなく、地域との持続的な関係構築へとつながる（Chen et al. 2021）。

このように、観光者に深い場所記憶を刻み、場所依存を強化する観光体験は、離島地域の持続的な発展を支える要素となる。観光者の再訪を通じて地域経済や文化が活性化し、やがて移住につながる可能性もある。

## 6. おわりに

本稿では、小浜島の観光体験を通じ、場所記憶と場所依存が地域活性化に果たす役割を論じ、地域愛着や再訪意欲を高める可能性を示した。この視点は小浜島に限らず、他の離島地域にも応用可能であり、持続可能な発展に寄与する一助となれば幸いである。

## 引用参照文献

### 和文


秋山太郎　2016「『地域の価値』発見への視座」『地域の風土・産業・文化を生かした離島・本島活性化の課題――周防大島と沖縄本島の見学調査をふまえて』産業・地域システム研究会、44-46 頁。

飯田晶子　2017「島嶼部における RAKUEN 指標の開発：沖縄県石垣島・パラオ共和国を事例として」『環境省環境研究総合推進費終了研究成果報告書』。

大谷華　2013「場所と個人の情動的なつながり：場所愛着、場所アイデンティティ、場所感覚」『環境心理学研究』第 1 巻第 1 号、58-67 頁。

沖縄県企画部　2021「次代を拓く持続可能な島づくり計画：新・沖縄 21 世紀ビジョン離島振興計画（令和 4 年度～令和 13 年度）」。

金山智子　2007「離島のコミュニティ形成と交流発展―隠岐中ノ島編―」『Journal of Global Media Studies』第 5 号、1-14 頁。

富田俊明・上村豊・仲間伸恵・藤沢レオ　2014「わたしたちよりおおきなもの；場所、地域、グローバルな文脈に鋭敏な美術教育をめぐる沖縄と北海道の対話」『北海道教育大学 学校・地域教育研究センター へき地教育研究支援部門 へき地教育研究』第 69 巻、97-116 頁。

普久原朝隆（編）　2017「定住・交流人口の維持・増加に向けた考察」『公庫レポート』第 150 号、株式会社尚生堂。

千足耕一・蓼郷尚代　2021「帆掛けサバニの現代的な意義に関する事例研究―サバニ帆漕レース参加者に対する調査の質的分析―」『沿岸域学会誌』第 33 巻第 4 号、51-59 頁。

**欧文**

Bowen, H. J. (2020). Examining memory in the context of emotion and motivation. *Current Behavioral Neuroscience Reports, 7*(3), 193–202.

Chan, S. H. G., Lee, W. H. H., Tang, B. M., and Chen, Z. (2024). Legacy of cultural heritage building revitalization: Place attachment and culture identity. *Frontiers in Psychology*, 14, Article 1314223.

Chen, N. C., Hall, C. M., & Prayag, G. (2021). *Sense of place and place attachment in tourism.* Routledge.

Kokorsch, M., Kongsager, R., Lie, L. B., Baron, N., and Eriksson, K. (2025). Years matter: The role of memory and place attachment in remote Nordic areas facing natural hazards. *Regional Environmental Change*, 25(2), Article 2.

Lewicka, M. (2008). Place attachment, place identity, and place memory: Restoring the forgotten city past. *Journal of Environmental Psychology, 28*(3), 209–231.

Lomas, M. J., Ayodeji, E., & Brown, P. (2024). Imagined places of the past: The interplay of time and memory in the maintenance of place attachment. *Current Psychology*, 43(2), 2618–2629.

レスポンス④

# 「あなたはモンゴル人？それとも中国人？」――内モンゴルのモンゴル人として生きる私の葛藤

朝木日力格 *

## １．はじめに

今回のシンポジウムで報告された沖縄の事例は、私にとって非常に示唆に富むものであった。沖縄市史編集担当の恩河尚さんは「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」を話題提供する中で「チャンプルー」という言葉を紹介された。「チャンプルー」は、沖縄方言で「まぜこぜ」という意味を持ち、元来は料理の名前である。例えば、「豆腐チャンプルー」は、豆腐と野菜などを混ぜた料理である。この「まざりあう」概念は、戦後の沖縄市の文化を象徴する言葉としても用いられるという。

この話を聞いた時、私は中国内モンゴル自治区（以下内モンゴルと略す）でモンゴル語を話す者として、自らのアイデンティティをめぐる葛藤と重ねずにはいられなかった。沖縄では、戦後のアメリカ統治や日本復帰などの複雑な歴史をたどる中で、沖縄語を残そうとする努力も続けられている。一方、内モンゴルでは中国語の影響がますます強まり、モンゴル語の使用が制限される状況が広がっている。沖縄と内モンゴルの状況は異なるものの、「言語が揺らぐ社会の中で、どのように自らの文化を守りながら生きていくのか」

* 大阪大学人間科学研究科・博士後期課程

という共通の課題があることに気づかされた。

そこで、本稿では、私の日本留学を通じた個人的経験を交えながら、内モンゴルにおける言語的な葛藤について触れたい。

## ２．個人的な経験――日本に留学後の対話

私は 2020 年 1 月に日本に留学し、現在で 5 年目になる。この 5 年間で、私は何十回も「どこから来たの？」「お国は？」と尋ねられてきた。その問いに対して「内モンゴルからです」と答えると、多くの人は「ああ、モンゴルから来たのか」と返してくる。最初の頃、私は「モンゴルではなく、内モンゴルです」と、自分が生まれ育った地域を理解してもらおうと努めた。また、「中国の内モンゴルからです」と答えると、「ああ、中国人か？」と言われることもあり、そのたびに、「私は中国人ではなく、中国で生まれ育ったモンゴル人です」と説明したこともあった。そのようなやりとりを繰り返すうちに、私は次第に疑問を抱くようになった。「なぜ、私は『内モンゴル』と答えたのに、相手は『モンゴル』や『中国』と返してくるのだろう?」と。しかし、時間が経つにつれて、私はこうしたやりとりに疲れ、「ああ…中国人か？」「ああ…モンゴルからか？」と言われても、言い返さなくなってしまった。なぜだろうか。単に説明することが面倒になったのか、それとも、説明しても相手に理解してもらえないことに諦めたのかもしれない。

2021 年 5 月に東京から大阪へ引っ越した際、アルバイト先で、私がモンゴル人であることを知ったある年配の男性客が、突然こう言った。「モンゴルって二つあってさあ、ややこしいじゃないですか？統合したらいいんじゃないですか？」。私は一瞬、戸惑いながらも、「そうですか？ややこしいですか？」と微笑んで返した。このような対話は、日本で暮らす中でしばしば経験することであり、内モンゴル出身者としてのアイデンティティの複雑さを痛感する瞬間でもある。

このような経験を通して、私は改めて「アイデンティティとは何か」という問いに向き合うようになった。私にとって、内モンゴルは故郷であり、モ

ンゴル語は母語である。しかし、中国の一部として育った私はモンゴル語も日常的に使用し、中国語も学んできた。言語や文化の境界が曖昧な環境の中で生きてきた私は、「私は何者なのか」と考え続けてきた。日本に来てからの 5 年間で、私は自身のアイデンティティを他者に説明し、理解してもらうことの難しさを実感した。しかし同時に、それは私が自分自身をより深く知るための過程でもあった。

## ３．モンゴル国と内モンゴルの言語的分断

写真 1 のように、単に国境を挟んだ地理的要因だけでなく、モンゴル国と内モンゴルでは同じモンゴル語を使用しているにもかかわらず（もちろん地域によって方言の違いはある）、使用されている文字が異なる点も、大きな違いとして挙げられる。具体的には、国境の両側では写真 2 のように全く異なる二つの文字――内モンゴルでは伝統的なモンゴル文字、モンゴル国ではキリル文字――がそれぞれ用いられている。この文字の違いは、歴史的・政治的な背景によって生じたものである。

モンゴル国では 1940 年代にソ連の影響を強く受け、1941 年 3 月にキリル文字の導入が正式に決定され（テグス 2015）、それ以来、キリル文字が常用されるようになった。一方、内モンゴルでは歴史的に伝統的なモンゴル文字が使用されてきたが、モンゴル国におけるキリル文字の導入の影響を受け、1945 年の内モンゴル自治区政府成立直後から、キリル文字を学習する動きが見られるようになった（テグス 2015）。そして、1955 年 7 月、内モンゴル自治区人民委員会は「キリル文字を普及させる件に関する自治区委員会の決議」を採択し、キリル文字の導入を正式に宣言した。しかし、この試みは長く続かなかった。

当時の中国では反右派闘争の中で民族主義への批判が強まり、さらにその後の大躍進運動などの政治運動の影響も受けた。こうした状況の中、1958 年 3 月、内モンゴル自治区人民委員会は「キリル文字の普及を停止し、モンゴル文字を継続使用する」決定を下し、キリル文字導入の試みは終焉を迎え

**写真 1**　モンゴル国と中国内モンゴル自治区の位置 [1]
（八木風輝作成）

**写真 2**　モンゴル文字（左）とキリル文字（右）
（筆者作成）

[1] 画像出典：神戸映画資料館 HP「知られざるモンゴル映画特集」
https://kobe-eiga.net/program/2019/02/4525/　（2025 年 3 月 11 日最終アクセス）

た[2]。結果として、内モンゴルとモンゴル国の間で文字の統一化は実現せず、両者の文字体系は決定的に異なるものとなった。この文字の違いは、単なる表記方法の違いにとどまらず、言語の語彙や表現にも大きな影響を及ぼしている。モンゴル国ではキリル文字への移行に伴い、大量のロシア語の語彙が流入した。一方、内モンゴルではモンゴル語に中国語の語彙が浸透するという対照的な現象が生じている。この違いは、モンゴル国と内モンゴルのモンゴル人が互いを理解する際の障壁の一つにもなっている。

しかし、モンゴル国にキリル文字が導入されてから既に 80 年以上が経つ中で、今年 2025 年 1 月 1 日から、モンゴル国では行政公式文書をキリル文字と縦書きの伝統的なモンゴル文字の両方で作成することが決定された[3]。実は、この事前情報を知ったのは、私が 2017 年から 2019 年まで内モンゴル大学に在学していた際のことだった。モンゴル国から内モンゴルを訪れた学者たちの講演会に何度も参加し、その中で伝統的なモンゴル文字の復活に関する話を聞いた。その場にいた私は、この動きに大きな期待を寄せ、大変喜びを感じたのを今でも覚えている。

一方で、内モンゴルでは状況が異なる。内モンゴルに住むモンゴル人の人口は、モンゴル国の総人口を上回るほど多いにもかかわらず、2020 年 9 月から民族学校（小・中・高・大学校を含む）におけるモンゴル語教育が大幅に縮小された。具体的には、それまで民族学校で教えられていた「モンゴル語文」が、中国全国共通の「語文」という中国語科目へと切り替えられた。さらに、2021 年度からは「政治（道徳＋法治）」、2022 年度からは「歴史」授業も中国語で行われるようになり、モンゴル語で受けられる授業の範囲は次第に狭まっていった。しかし、それ以前の民族学校では、「語文」以外の全ての科目がモンゴル語で教えられ、中国で「高考」と呼ばれる大学共通テストもモンゴル語で受けられていたが、2025 年から中国語での受験が義務

---

[2] テグス　2015「内モンゴルにおけるキリル文字導入運動」、ボルジギン・ブレンサイン編集（赤坂恒明 編集協力）『内モンゴルを知るための 60 章』明石書店、285-289 頁。

[3] https://moe.gov.mn/post/152215（2025 年 3 月 7 日最終アクセス）

づけられることとなった。

こうしてモンゴル国が伝統的なモンゴル文字を復活させる一方で、内モンゴルではその伝統が失われつつある――この現実を目に当たりにするたび、私は複雑な気持ちに襲われる。こうした歴史的な経緯を踏まえると、モンゴル国と内モンゴルの分断は、単に国境や地理的な距離の問題に留まらず、文字や言語政策の違いによって両地域の文化的・社会的な隔たりが生じていることが改めてよくわかってきた。

## ４．おわりに：内モンゴルのモンゴル人として生きる

モンゴル国と内モンゴルにおける言語を巡る転機の動向から 5 年が経ち、私はある疑問を抱くようになった。それは、「モンゴル国が伝統的なモンゴル文字の復活を進める一方で、内モンゴルではなぜモンゴル語教育が縮小されているという状況に直面しているのか？」ということである。何百年もの間、内モンゴルのモンゴル人たちは伝統的なモンゴル文字を受け継いできたが、今日ではその文字さえ失われる危機に直面している。このような状況は、長い複雑な歴史の中で、モンゴル人がどのように伝統的な文化を守り、継承してきたのか、そして今、変化の中で人びとがどのように自らの言語と文化を守ろうとしているのかという問いを私に投げかけるものだ。

私にとって、幼少期からの「モンゴル語」と「中国語」のバイリンガル教育を受け、そして日常的に両言語を使いこなすことは、ごく当たり前だった。しかし、日本に来てから、世界の視点からみれば、これが「漢化」政策の一環とみなされていることを改めて実感した。それでも、私自身にとっては、モンゴル語を話しつつ中国語を学び、自由に使いこなせる環境は、決して「文化の喪失」ではなく、一つの「生存戦術」でもあった。

しかし、それらは単なる個人的な経験にとどまらず、長い歴史の中で生じた複雑な社会的背景の中で形作られたものだと考える。これらの状況を踏まえ、私は自らのルーツと向き合いながら、モンゴル語やモンゴル文化の継承について考え続けていきたい。言語と文化を守るために何ができるのか、未

来に向けてどのような行動をとるべきなのかを模索し、そして最も重要なことは、その土地で生きていくために、先人たちが育んできた知恵に目を向けることだ。厳しい社会環境の中で生き抜くために人びとが、磨いてきた知恵や文化を学び、私もまた、この時代に生きるモンゴル人としての役割を見出していきたい。

## 引用参照文献

### 参照 Web サイト

「ТӨРИЙН АЛБАН ХЭРГИЙГ 2025 ОНООС КИРИЛЛ БОЛОН МОНГОЛ БИЧГЭЭР ХОСЛУУЛАН ХӨТӨЛНӨ」https://moe.gov.mn/post/152215 （最終アクセス：2025 年 3 月 5 日）

神戸映画資料館 HP「知られざるモンゴル映画特集」
https://kobe-eiga.net/program/2019/02/4525/ （最終アクセス：2025 年 3 月 11 日）

### 和文

テグス　2015「内モンゴルにおけるキリル文字導入運動」、ボルジギン・ブレンサイン編（赤坂恒明 編集協力）『内モンゴルを知るための 60 章』明石書店、285-289 頁。

レスポンス⑤

# 中国内陸農村の高齢者女性たちの「声なき声」に耳を傾ける意味

張 曼青 *

## １．はじめに

シンポジウムを拝聴し、記録されていない記憶および共有されていない記憶にどのように向き合うべきかについて、改めて考えさせられた。

オーラルヒストリーを含むさまざまな質的調査・質的研究は、長らく外的妥当性に関する指摘を受けてきた。研究方法を紹介する教科書では、必ず事例の類型化、すなわち、全体の状況を把握したうえで個別の事例を研究することが重要であると述べられている（野村 2017）。言い換えれば、自分の研究事例の位置づけを明確化することである。しかし、それだけでは十分ではないと考える。質的調査の対象者の数には限りがあるため、実際に誰を研究対象とするのか、また誰をインタビューできるのかが、研究結果に影響を与えることがある。しかしながら、理想的な「サンプリング」を行うことは容易ではなく、調査にはさまざまな不確定要素が伴う。

例えば、語り手が誰であるか、その個人の経験や記憶が重要であることは明白である（対話的構築主義の視点から見れば、聞き手も同様に重要である）。そのため、語り手以外の人々や、記録に残されていない人々の記憶は、自然

* 京都大学フィールド科学教育研究センター・特定助教

と主流の歴史から外れてしまう。これは、冒頭で述べたように、これらの記憶にどのように対処すべきかという問題につながる。

また、王石諾さんのご報告「日中『二つの東北』の痛みと向き合いながら暮らす結婚移民の中国人女性たち――『単位制』の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ結び目となりゆく歴史実践」は、大変興味深いものであった。「結婚移民の中国人女性」という集団の歴史記憶は、主流の歴史叙述においてほとんど取り上げられることがない貴重なものだと考える。本来、女性史研究においても指摘されているように、女性の各種活動（例えば家事、生殖、労働など）は長らく記録に値しないものとされ、女性の記憶も周縁化されてきた（倉敷 2007）。さらに、移民女性というホスト社会から見ればマイナーな立場の人々の経験は、日常の中で「見えない」ものとされがちである。そのため、今回の報告を通じて、歴史の主流叙述に埋もれがちな記憶の掘り起こしがいかに重要であるかを再認識し、改めて深い感銘を受けた。

## ２．意図せざる研究対象の偏り―調査のエピソード

筆者自身の研究反省に立ち戻ると、これまで中国内陸農村で長年にわたり現地調査を行い、ありのままの「中国農民像」に迫ろうと試みてきた。しかし、その過程では何度も失敗を経験した。その一つが、「意図せざる研究対象の偏り」であった。

筆者は中国農民を対象に、畜産廃棄物や化学肥料、有機農業に対する考え方について調査を行っている。言い換えれば、中国内陸農村の農民全体を母集団とし、その中から適切な調査対象者を選択すべきである。しかし、結果的には、直接インタビューを行えたのはほとんど男性であった。この偏りが生じた理由について、以下のエピソードを通じて説明したい。

ある時、「農民がどのような肥料を使っているのか知りたいが、誰に聞けばよいか」と地域の知り合いに尋ねると、彼らが直接案内してくれることが多かった。そして、訪問先では決まって男性農民が紹介された。たとえ家に女性がいたとしても、案内人が「旦那さんはいませんか」と尋ねるのが常で

あった。

時には農地で畑仕事をしている女性を見かけ、インタビューを申し出ることもあった。しかし、その際も「それなら、うちの夫に聞いてください」といった反応が返ってくる。もちろん、直接家庭を訪問した場合でも同様であった。つまり、中国農村で調査を行う際、最終的に質問に対応するのは常に男性だったのである。

調査を始めた当初は、たまたまその家の男性のほうが農業に詳しいか、あるいは話好きだからなのではないかと考えていた。しかし、次第にこれは単なる偶然ではないと気づいた。日本の農山村での調査においても、筆者がリビングで男性に聞き取りを行い、女性がお茶の準備をしているという光景を何度も目にした。同じく家父長制の影響が根強く残る日本と中国の農山村では、社会構造が男性中心であることが強く反映されている。また、中国農村では、来客をもてなす際に女性がメインテーブルにつかない（中国語：「不上桌」）といった慣習も、一部の地域で現在も見られる。

このように、筆者の研究は本来、中国農民全体を対象としているにもかかわらず、意図せずして調査対象がほぼ男性に偏ってしまった。このような現象は、筆者のようにフェミニズム研究を専門とせず、特定のジェンダーに焦点を当てない農村研究者にとって、しばしば経験する事態かもしれない。こうした偏りを意識し、調査手法や対象者の選定方法を見直すことが、今後の研究において重要な課題となるだろう。

## ３．中国内陸農村高齢者女性の「声なき声」

前述した通り、意図していないものの、結果的に女性をほとんどインタビューできなかった。これは、彼女たちの声が外に届きにくいという現実を浮き彫りにしており、「声なき声」の存在を示唆している。

「声なき声」という言葉は、多くの場合、社会の主流の声に埋もれた社会的弱者やマイノリティの声を指す。一方で、個々の人生経験は千差万別であり、田中（2024）が「交差性（インターセクショナリティ）」の概念を用い

て論じているように、個人の中には様々な社会的アイデンティティが交錯し、それが交わる地点で見過ごされてきた抑圧や差別が生じる。つまり、同じ農民であっても男性と女性では異なる経験を持ち、また同じ農村女性であっても、それぞれ異なる「生きづらさ」を抱えている。相互の経験の違いを尊重し、連帯の可能性を明らかにするために、田中は「声なき声」という概念を用い、それぞれの声が無視されてきた個々人の経験を「公共的な問題」として提起している。

中国農村の高齢者女性は、経済的な状況、年齢、性別、戸籍など、さまざまな側面においてマイノリティの特徴を持つ。しかし、社会転換期における特徴として、農民の生業の通時的流動性（張 2022）のために、同じような経済状況や社会的属性を持っていた人々であっても、その後の生活状況が大きく異なることは珍しくない。例えば、息子世代の経済状況や政策の変化によって、従来の生活環境が一変することも少なくない。

本稿では、特に近代化の波に乗れなかった人々の「声」に耳を傾ける必要性を強調したい。さらに範囲を絞ると、中国農村の高齢者女性の中には、一度も村を出たことがない人もいる。特に、極端に人口の少ない村に残っている女性たちは、以前にも増して自立的な生活を強いられている。外部との物理的なつながりが一層希薄になり、結果として「声なき声」がより際立つことが、調査を通じて明らかになってきた。この現状を踏まえ、彼女たちの声を掬い上げ、社会的な議論へとつなげることが重要である。

## ４．見過ごされてきた農村高齢者女性のマイナーサブシステンス――彼女たちの「声」から分かったこと

中国農村の高齢者女性の「声なき声」への気づきを契機として、筆者は彼女たちを意識した研究調査を開始した。その調査を進める中で、彼女たちが外部からは気づかれにくいが、実際には非常に多様な生業活動に従事していることが明らかとなった。これらの活動は文字や統計で表現しきれないほど細やかであり、日常生活の中に深く根付いている。

一方で、市場経済の進展や都市化に伴い、サブシステンスは男性の賃労働および資本主義経済に従属する形へと変容しつつある。特に、農村女性の家庭労働や副次的な生業活動は「シャドウワーク」として扱われ、その重要性が軽視されがちである。中国農村の生計に関する議論では、「世帯分業を基礎とした半工半耕[1]」という表現が頻繁に用いられる。しかし、この枠組みの中では、出稼ぎ労働者や男性農民の農業活動といった大規模な経済活動に注目が集まり、農村の高齢者女性の生業活動は周縁化され、見過ごされることが多い。

高齢者女性の生業活動は、換金を目的とせず、主に自家消費のために行われることが多い。そのため、現金収入として換算されにくく、計測が難しい「マイナーサブシステンス[2]」が中心となる。こうした女性によるマイナーサブシステンスを整理すると、いくつかの類型に分類できる。

まず第一に挙げられるのは、採集活動である。高齢者女性たちは、地域の自然環境を活かしながら、山菜、野草、果実、薬草などを採集する。この活動は、彼女たちの長年の経験と知識に基づいて行われており、季節ごとの変化や生態系の理解が不可欠である。採集されたものは家庭内で消費されることが多く、家族の食生活を支えるだけでなく、時には近隣との物々交換の手段ともなり得る。さらに、採集は単なる生計手段にとどまらず、自然との触れ合いを通じた精神的な充足感や、他の女性たちとの交流の場としての機能も果たしている。

次に挙げられるのは、栽培活動である。ここでいう栽培活動は、稲作のような主生業とは異なり、水田の畦畔やため池などの空間を活用した小規模な

---

[1] 中国農民の生計は、家族という農村社会の基本単位で見ると、中国農民の複合的な生計、すなわち若い世帯が都市で働き、親世帯が農村で農業を続けるという「世帯間分業を基礎にした半工半耕生計モデル（中国語：以代际分工为基础的半工半耕的家计模式）」である（賀 2013）。

[2] この「マイナーサブシステンス」という概念については、民俗学や人類学の分野で多くの研究が蓄積されてきた。本稿では、松井（1998）の定義を参考にし、「生計を維持するための主要な生業にはなりえないが、経済的意味はさほど大きくない生業」として捉える。

**図 1（左上）葛根掘り（食用）**[3]　　**図 2（右上）水草取り（飼料用）**

**図 3（左下）野草採り（飼料用）**　　**図 4（右下）木の実採り（食用）**

作物の栽培を指す。例えば、図 5 に示した菱はため池で栽培され、その茎も地元で食材として親しまれている。また、図 6 に示すように、水田の畦畔ではホモロコシやダイズが少量栽培されている。女性たちは、栽培だけでなく、収穫後の「下処理」や料理に至るまでの一連のプロセスにも深く関与している。

さらに、家禽・家畜の飼育活動も重要な生業の一つである。飼育活動は、採集や栽培とは異なり、毎日継続的に行わなければならず、長期間の外出が困難となる。調査地では放牧が基本であり、その作業は細かく多岐にわたる。例えば、餌づくり、餌やり、小屋掃除、個体数の確認、放牧先での状況確認、鴨の誘導などが挙げられる。中国農村の生計モデルの中では、子供世代が都

[3] 写真は全て 2023 年筆者撮影。

**図 5（左）菱の実の栽培と販売**
**図 6（右）畦畔におけるホモロコシとダイズの栽培**

市へ出稼ぎに行き、親世代の男性が農閑期に日雇い労働に従事することが多いため、結果的に飼育活動は女性が主に担当することになる。

また、飼育活動は採集や栽培とも密接に関連している。例えば、家禽の餌には採集した野草や水草が使用され、栽培した農作物の余剰分も活用される。こうした活動の相互関係が、農村における女性の生業活動の持続性を支えている。

このように、「農作業」という大きな括りの中には男女の役割分担が存在する。筆者が調査を行う際、「農業の話を聞きたい」と考えてアプローチすると、調査対象者は自然と「メイン」の稲作に関わる男性が中心となる。しかし、実際には女性も様々な形で農作業に関与しており、彼女たちの貢献は必ずしも十分に認識されていない。

さらに、筆者自身の研究調査経験を振り返ると、意図的に調査しないわけではないが、「高齢者女性」を意識して調査しないと、その存在や役割が看過されてしまうことが多い。このような視点の欠落が、彼女たちの生業活動の価値を見落とす要因となっている。本稿では、こうした女性たちの活動の実態をより詳しく掘り下げ、その意義を再評価することを試みたのである。

## ５．まとめ

本稿では中国農村の高齢者女性の「声なき声」と彼女たちの生業活動について考察した。農村高齢者女性のマイナーサブシステンスは、経済的価値が小さいと見なされがちである。しかし、彼女たちの生業活動を個別に分析することは、農村社会への深い理解や生活文化の継承において、不可欠な役割を果たしているのではないか。

そもそも彼女たちの生業活動が見過ごされている原因として、男性中心の社会構造や生業の特徴が挙げられる。高齢者女性の多くが従事する生業は、主生業と比較すると、それぞれの規模は小さく、経済的価値は限定的ではあるものの、その種類は極めて多様である。また、身体知やローカル知が活用される場面が多く、当事者にとっての「楽しみ」の要素も含まれる。これらの活動は、空間的・時間的に限定されることが多いため、外部からはさらに見えにくく、しばしば研究や政策の議論において考慮から除外されやすい。

したがって、高齢者女性の「声なき声」の実情をより深く考える必要があると感じている。本研究を通じて、筆者自身の調査方法について改めて省察する機会となった。また、インタビューを通じて得られたデータ（対象者の記憶や語り）の重みを再認識すると同時に、インタビューが難しい人々の存在にも意識を向けざるを得なかった。この点は、一種のジレンマとも言える。記録に残る記憶と残らない記憶との間で、どのようにバランスを取るべきかは、今後の重要な課題として検討していきたい。

## 引用参照文献

### 和文

倉敷伸子　2007「女性史研究とオーラル・ヒストリー」『大原社会問題研究所雑誌』588、15-27 頁。

田中瑛　2024『<声なき声>のジャーナリズム マイノリティの意見をいかに掬い上げるか』慶應義塾大学出版会。

張曼青・三好恵真子　2022「社会転換の荒波を生きる中国農民の「農」をめぐる葛藤と主体的な選択―施肥に関するライフストーリーから読み解

くもう一つの農民像―」『生活学論叢』42、15-28 頁。
野村康　2017『社会科学の考え方：認識論，リサーチ・デザイン，手法』名古屋大学出版会。
松井健　1998『民俗の技術』朝倉書店。

**中文**

賀雪峰　2013『小农立场』中国政法大学出版社。

レスポンス⑥

# 阿賀の過去と現在

馬 建 *

## 1．はじめに

本シンポジウムに 3 年連続で参加した。2022 年には、戦争によってもたらされた東アジアの変容や、現代中国の経済、環境、農村社会に関するさまざまな歴史的・社会的課題が紹介された。2023 年には、戦後沖縄の歴史と未来への視座、日中「二つの東北」での生活経験を持つ中国人女性の戦争認識、中国の環境 NGO リーダーのライフヒストリーが取り上げられた。2024 年には、沖縄市戦後の歴史やコザ地域の歴史と現状が紹介され、前年度の 2 つの課題へのさらなる分析・解明を行なった。記憶の継承を視座に「過去」と「現在」を往来しながら、以上の課題群を解像し、「未来」への展望を描いていた。

日本にとって、戦争は無論、公害も歴史書に記された「過去」のことである。しかし、2017 年に中国において大気汚染などの環境問題を経験して来日した筆者にとっては、日本の「過去」は中国の「現在」と重なって見えた。この思いを巡らせると、公害問題をある程度克服してきた日本の「現在」から、中国にとって一つの「未来像」を窺わせるのではないか、という考えに辿り着いた。本レスポンスでは、日本の経験から中国への示唆を深く考察す

* 新潟食料農業大学食料産業学部・助教

るまでには至らないが、その前段階の作業として、新潟水俣病の「過去」と「現在」を写し出していく。

## ２．阿賀の過去

第二次世界大戦終戦後の日本では、20 年の間に四大公害事件に代表される環境汚染事件が次々と起こった。その中で、公害の原点といわれる熊本水俣病が 1956 年に公式確認されたにもかかわらず、1965 年には、まったく同様の発病メカニズムによる新潟水俣病が公式に確認された。戦後の日本は、戦争の痕跡を払拭しながら、新たな負の遺産を生み続けていった。

県境にある荒海山を源とする阿賀野川は、日本で 2 番目の年間流出量を誇り、水力発電にも多く利用されている。一方で、下流域では新潟市北区の平野部を流れ、農業・工業・水道用水を支え重要な水源となっている。豊かな自然生態系を育み、美しい四季を映し出す風景は、川沿いに住む人々に親しまれ、「阿賀」と愛称されている。

1965 年 5 月 31 日、新潟大学の椿忠雄教授と植木幸明教授が「原因不明の水銀中毒患者が阿賀野川下流沿岸部落に散発」と新潟県衛生部に報告した。その後、新潟県、新潟市と新潟大学医学部が合同で研究・対策本部を設立し、原因究明を進めた。その結果、阿賀野川上流にある鹿瀬町の昭和電工鹿瀬工場の排水口付近から高濃度の有機水銀が検出され、同工場が原因である可能性が高まった。

熊本水俣病の前例もあり、チッソと同様のアセトアルデヒド製造工程を持ち、この時点ですでに自社の責任を認識していたはずであった昭和電工は、県・市・新潟大学が主張した「工場排水説」を否定し、当時、安全工学の権威とされていた横浜国立大学の教授が作り上げた「農薬説」という机上の空論を堅持した。さらに、通産省（経済産業省前身）も熊本水俣病の時と同じように、人体中毒のメカニズムのさらなる研究を要求し、企業の責任を曖昧にし、公害を「不可知論」の方向へと誘導しようとした。

1967 年 6 月 12 日、新潟水俣病第 1 次訴訟が提起された。原告団長は新潟

水俣病被災者の会会長近喜代一、弁護団は団長渡辺喜八、幹事長坂東克彦らによって構成された。これに対し、昭和電工側の弁護団は、当時の日本弁護士連合会長をはじめとする強力な布陣であった。公害裁判では、原因究明のために莫大な時間や費用を要する。原告側の弁護士や協力科学者たちは、手弁当で戦った。

1971 年 9 月 29 日、「農薬説」が棄却され、昭和電工の過失が認められ、原告の勝訴が確定した。裁判は 4 年におよび、口頭弁論 46 回、出張尋問 15 回、検証 5 回、鑑定尋問 3 回が行なわれた。この間、被害は拡大していった。発病によって死者が出ただけでなく、身体的障害を抱えた被害者は、家庭内や職場でのいじめ、地域内外からの差別、中傷、偏見などの社会的被害にも苦しめられた。

新潟水俣病第 1 次訴訟の勝訴は、近代日本の公害裁判の先駆けとされ、「門前立証」理論の確立によって、公害事件の判決の手本を示した。事件は完全に解決されたわけではないが、昭和電工は現在、確実に補償を履行し、鹿瀬工場跡地に「新潟昭和」を設立して、地域雇用に貢献しつつ、一般社団法人あがのがわ環境学舎と連携し、公害研修および環境教育を行なっている。

**写真 1　阿賀野川の下流域（2025 年 2 月筆者撮影）**

## ３．阿賀の記憶が風化する現状

先日、ゼミ合宿中に新潟市出身の大学生 S さんと新潟水俣病について話をした。小学生の頃に一度新潟水俣病について学習した S さんは、現在、事件に関する記憶が薄れ、百年前の出来事だと勘違いしていた。S さんに、戦後に発生した四大公害病について改めて話したうえ、四大公害病が国内外において広く知られる環境事件であることを伝えた。すると、S さんは「え、それ、知られたくないな」と返答した。筆者は「いいえ、むしろ新潟の経験は貴重で、さまざまな公害対策が講じられた結果、他の国々にも公害を乗り越える知見を提供し、みんなが新潟の経験を学んでいるんだよ」と話すと、S さんは「なるほど、他の国でも同じようなことがありましたね」と納得した様子だった。一過性教育による若い世代の認識不足に伴い、負の遺産に対する悪いイメージは雲散していないようだ。

新潟水俣病の教育・啓発を担う新潟県立環境と人間のふれあい館（以下、「ふれあい館」）の利用頻度も低下している。ふれあい館の藤田館長は、館内での展示紹介や出前講座を精力的に実施しており、Zoom を活用したリモートでの語り部の口演も実現させている。しかし一方で、ふれあい館の年間利用者数は、50 周年を迎えた 2015 年には 44,594 人とピークに達したが、その後減少し、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた 2020 年には 17,670 人にまで落ち込んだ。現在は回復傾向にあるものの、依然として以前の半分程度の年間 2 万人台で推移している [1]。

さらに、被害発生メカニズムの究明および公害裁判の中心人物である椿忠雄教授と植木幸明教授、近喜代一会長、渡辺喜八弁護士、坂東克彦弁護士らはすでに他界している。また、公害の生き証人である語り部も平均年齢 80 歳を超えている。記憶の風化が進むなか、新たな語り手の育成と記憶の継承が重要な課題となっている。

---

[1] 新潟県立環境と人間のふれあい館―新潟水俣病資料館―「令和 5 年度（2023 年度）事業実施報告」、4 頁より。

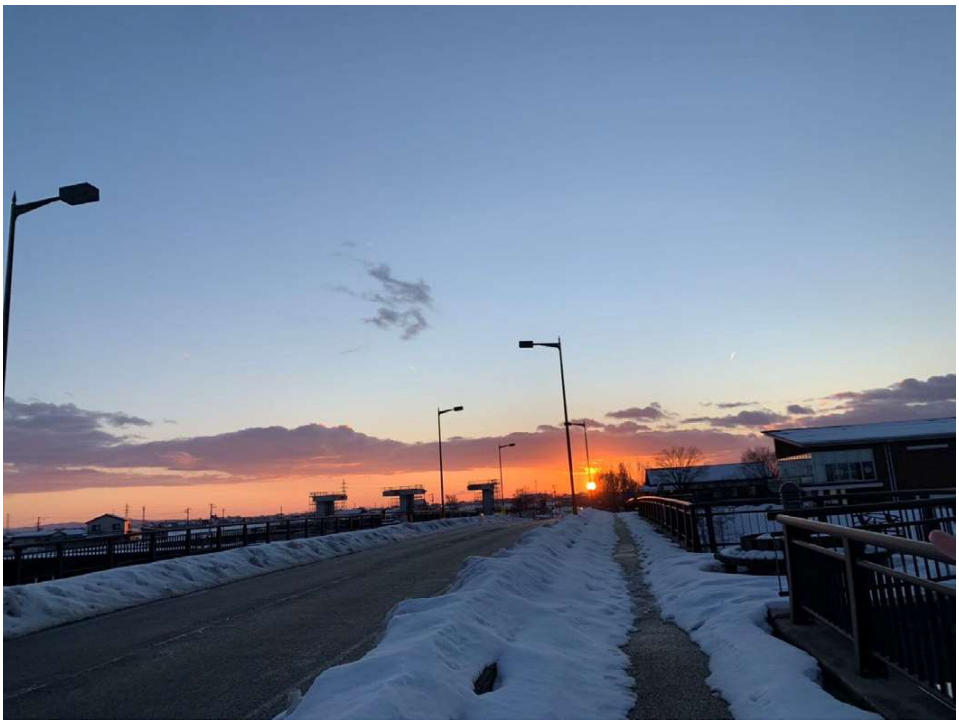


**写真 2　ふれあい館前の夕陽（2025 年 1 月筆者撮影）**

2025 年は、終戦から 80 年、熊本水俣病の公式確認から 69 年、新潟水俣病の公式確認から 60 年を迎える年である。しかし、熊本および新潟の未認定被害者による、国や原因企業に対する損害賠償請求を求めた「ノーモア・ミナマタ第 2 次訴訟」は現在も進行中であり、国の責任は認められず、被害者の認定基準も依然として厳しいままである。60 年以上が経過した事件は、本来であれば解決されて歴史として扱われるべきであったが、当時の問題はいまだに未解決のままである。

## ４．むすびにかえて

戦争と同じく、公害問題も人的被害であり、加害者と被害者を明確に特定できる。公害問題の場合、加害者はしばしば原因企業や一部の行政機関、さらには一部の学者であり、被害者は公害病患者、地域住民、地域環境である。成功した公害訴訟の背後には、一生をかけて戦い続ける良識ある弁護士や医師たちの存在があった。

日本の公害経験をまとめると、以下の 3 点が挙げられる。第一に、法規制によって汚染物質の排出基準を厳しく設定し、企業の汚染行為を抑制することに成功した。第二に、行政機関による被害者救済の道のりは長引いているものの、公害裁判を通じて、有識な学者や医師の努力が現在も続いている。第三に、地域住民の心の傷跡や、地域の風評被害の払拭など、地域社会の再生が課題として残っている。

一方、中国は急速な経済発展の中で、環境汚染問題の解決プロセスも短縮化されているように見える。2010 年代から本格的に対策が始まり、現在では企業排出による環境汚染は大幅に改善されつつある。しかし、日本とは異なる体制のもと、公害被害者の救済や地域社会の再生に関する独自のアプローチの確立が課題であり、この点について今後の研究で究明したい。

このシンポジウムは若手研究者を中心とした歴史叙述の場であり、これまで教科書やドキュメンタリーで学んできた歴史とは異なる視点を提供している。専門外の筆者にとっても、歴史の継承について「私たちはいかに過去の出来事と向き合うべきか」を深く考える機会となった。ポスト体験時代に

**写真 3　阿賀野川ふれあい公園（2025 年 2 月筆者撮影）**

ある私たちは、先人が過ごした時間をストーリーとして耳を傾ける際、単に「現在」とかけ離れている「過去」として冷淡に認識するのではなく、その温度を少しでも感じ取ろうとする姿勢も求められているのかもしれない。

## 引用参照文献


清水万由子・林美帆・除本理史編　2023『公害の経験を未来につなぐ　教育・フォーラム・アーカイブスを通した公害資料館の挑戦』ナカニシヤ出版。

新潟県立環境と人間のふれあい館―新潟水俣病資料館―　2024「令和 5 年度（2023 年度）事業実施報告」。

新潟県　2024「新潟水俣病のあらまし＜令和 5 年度改訂＞」。

原田正純　1972=2023『水俣病』岩波新書（第 52 刷）。

宮本憲一　2014『戦後日本公害史論』岩波書店。

レスポンス⑦

# 「知りたい」を通して過去とつながる――ポスト体験世代の生活者として

西村 花菜 *

シンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承ーアジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアローグー」を拝聴し、様々な視点から戦中～戦後という時代とそこで生きた人々について考える機会をいただいた。記憶の継承への真摯で強い想いとともにご活動されているみなさまのお話をうかがい、私自身も意欲を掻き立てられるとても刺激的な時間となった。

2025 年は、戦後 80 年の節目の年である。今年の夏は、きっといつもより多くの人が 80 年前の出来事に目を向けるだろう。秋も冬も春も来年も再来年もそうであったらいいなと思う。しかし、現実は厳しい。

昨年あるラジオ番組では、ゲスト出演する新聞記者が「時期を問わず戦争関係報道を行うことから「常夏記者」と呼ばれている」と紹介されていた。太平洋戦争を取り上げるテレビ番組やネット・新聞記事などの多くは夏、特に 8 月に集中するため、「8 月ジャーナリズム」と揶揄される状況がある。同様に一年を通しての報道は、その前後と比べると節目の年に集中するだろう。過去に関心を持ち、学び、いま起きていることを理解しようとすることは特定のタイミングだけでなく、もっと普段の生活に近いところで行われるべきではないか。まずは私自身が、どうすれば過去と接点を持ち続けられるだろうか。

* 放送大学・人間と文化コース・全科履修生

今回のシンポジウムはそんな私の疑問にヒントを与えてくれた。それは私自身が、歴史を「知らない」のだというシンプルな気づきである。第一部で恩河さんがお話ししてくださった、沖縄戦の南北での状況の違いは衝撃的だった。私がこれまで学校で学んできた歴史は、追い詰められた市民による「集団自決」やひめゆり学徒隊についてなど戦線の南下を中心に語られるものが多く、正直なところ、その時中部や北部はどのような状況だったかということは考えたことがなかった。第二部の吉成さんのご発表で取り上げられた、“戦後”を生きた写真家たちの葛藤と実践は、1970 年前後といえば高度経済成長期の右肩上がりで物質的に豊かになっていく日本経済という一面的なイメージを持っていた私にとって、別角度から時代を捉えるきっかけになった。また、中国から福島県に移住された女性たちが辿られてきた道のり、日中の東北地方への想いについても、福島県在住ながら王さんのご発表を拝聴するまで知らなかった。私は、いままさに生活している土地についてさえ実はよく知らないのだ。

大人になるにつれ様々な情報に接し、「知っている」と思い込んでいるものは多い。世の中の複雑さを前に、「まあ、難しいよね」と言って深く考えることを避けるようになった。それは目に見える範囲に波風立てず、自分が穏やかに生活するために習得したスキルであると同時に、「知らない」ことに気づき、「知りたい」と思うチャンスを奪う落とし穴でもある。

ポスト体験世代のひとりとして、また、主に情報の受け手である一般人のひとりとして、私は知らないことを知らないままにせず、「知りたい」に変えていきたいと思う。誰かが決まった時期に組んでくれる特集を待つのではなく、本を読み、土地を訪れ、人に会い、生活にあえて波風を立てていくことは、経験していない他者の記憶を積極的に自分の中に取り込んでいく作業でもある。素朴な取り組みだが、「知らない」から「知りたい」という気持ちの動きを絶やさないことが過去とのつながりを作っていくのではないだろうか。いまの私にできるファーストステップである。

私は現在通信制大学に在籍している。そこで学生同士として知り合ったある男性は、会話の中でよく「僕は昭和 20 年生まれだから」と言う。“戦後”

と同じ年に生まれたことを誇りに思っているような、少し重荷に感じているような、いつもそんな口調である。彼の人生には“戦後”がぴったりとくっつき、切り離せないものなのだろう。本シンポジウムを通じて、80 歳を迎えてもなお情熱的に学び続ける彼もまた戦後という時代に向き合い続けている実践者であるのだと感じた。まずは彼ともっと話をしてみたいと思う。

最後になるが、昨年に続きレスポンス執筆の機会をいただき、自分の考えを整理し新たな気づきを得ることができた。貴重な経験をさせていただき、記憶の継承ラボはじめ本シンポジウム関係者のみなさまに心から感謝している。

コラム⑤

## その他参加者の声

今回は自分の知らない沖縄の戦後の様子を知ることができ、有意義な時間でした。

そして、昔の写真や地図によって視覚的にも、アメリカ軍の基地に沖縄があるという認識を強めました。

平和の中で埋もれてしまっている戦争の歴史ですが、唯一の被爆国である日本には世界に向けて発信し続けていく使命があるように思います。
それを先生の研究室の方々が担ってくださっていることに感謝いっぱいです。

（学内のある職員より）

先日、シンポジウムに参会する貴重な機会をいたたき、誠にありがとうございました。私は 2018 年から 2020 年の間に人間科学研究科で、教育環境の改善の勉強をしておりました。今回普段触る機会がなく、全く違う分野の研究内容のシンポジウムに参加が出来て嬉しいです。それに、色んな有識者から生の声を聴かせて、幸いです。

今回皆様の研究内容を聞いて、吉成さんと王さんの研究にすごく興味がありました。二人の研究内容には、同じ太平洋戦争が背景としても、ちょっと違う部分もありますよね。それは、王さんの方は詳しく言うと、日中戦争ですよね。そこは、私結構興味深いと思いました。

（登壇者の友人より）

先日のシンポジウムでは大いに勉強させていただきました。ありがとうございました。
かなりしっかり準備されたのではないかと思います。本当に頭が下がります。

最近日本思想史の若手の人たちの読書会に参加して吉本隆明の南島論を読んでいるのですが、吉本は当時沖縄に暮らしていた人のことはほとんど考えずに歴史や祭祀のことばかり書いていて、しかも結局議論がまとまらないまま終わるので、だいたいいつもみんな頭を抱えて終わります。

読書会のたびに、吉本も東松や吉成さんみたいに沖縄に行って生活したり話を聞いたりすれば、南島論を完成させられたのではないかと思っています。先日のシンポジウムで吉成さんがヒストリートの方から真摯にお話を聞いていらっしゃる様子を見て、「南島論」をするのであれば、このような姿勢が必要なはずだという思いを強くしました。

（学内のある教員より）

前回のシンポジウムについて嬉しいご言及を頂いたとのことでしたので、ありがとうございました。
山口さんの沖縄交流は、会長にしか出来ない領域と思い、ありがたく思っています。
私も自分らしく役割を担っていきたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いいたします。

（長崎のある実践家の方より）

今回のシンポジウムを通じて、沖縄の方、吉成さんと王さんのご発表を通じて、日本の沖縄の戦後や中国東北地方の建国後、時代の変遷で生きた人々の急激な生活変化に衝撃を覚えています。東アジアの全体の歴史の変化とは別に、地域の複雑な実情そして、個々人の語りを通じて、より総合的な視点の大事さがわかりました。

（学外のある院生より）

## 附録①： シンポジウム案内用チラシ

# ポスト体験時代の記憶の継承

## ―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―

アジア太平洋戦争の終結から79年が経ち、戦争体験者の直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」へ入りつつある今日、未来世代への継承が喫緊の課題となっています。そこで、次世代を担う学生たちを主体としながら戦争・戦後体験の意味を問い、未来への展望を描いていくために、昨年、私たちは「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」を立ち上げました。これまで、長崎、沖縄、水俣、福島などの各地を訪れる中で、記憶の継承に向けて尽力する現場の人びとの出会いがあり、その経験の重みと複雑な現実を学びながら多くの示唆を頂きました。沖縄戦とその歴史を背負った現在について学ぶために沖縄へ、とりわけ冷戦下の1950年代に建設が本格化した嘉手納基地の門前町として発展する中で独自の文化を築いてきた街として知られる「沖縄市コザ」を訪れた際、沖縄が数世紀にわたり経てきた歴史の厚みを受けとめつつも、現在も同地で起きている出来事をめぐり、私たちは複雑な葛藤を抱かざるを得ませんでした。

ただし、そうした私たちに対して、現地での貴重な出会いを頂くのみならず、様々な背景を持ってコザに暮らす一人ひとりの模索やエネルギーにより、この街がつくられてきたのだという戦後史を諭してくださったのが、市史編集に日々尽力する職員の方々でした。そこには、これからの街をつくっていくために、コザに多くの人びとが訪れてその歴史を知ってほしいという、コザに暮らす人たちの視座による「コザの戦後史」の継承への願いが託されていました。それゆえに私たちは、ともすれば先の大戦を巡る歴史記憶が、ナショナリティや「加害／被害」の対立構図へと分断的に回収されがちであるものの、それぞれの地域に生きる人びとの営み続けてきた戦中戦後の「生活の現場」を重層的な歴史空間として連続的に捉え直していく重要性を強く認識するに至りました。

そこで本シンポジウムでは、沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」に関わる現場の方々をお招きし、私たちの記録写真と応答させながら、対話形式にて沖縄市の戦後史に関する貴重なお話を頂きます。続いて「戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為」を基調とする研究成果報告を行いながら、それぞれの土地で戦中戦後の現実と向き合い続けながら営まれてきた生活者の思想的営為を、ポスト体験時代に生きる私たちがいかに受けとめながら未来へと活かしていくことが出来るかについて、参加者の皆様と共に考えたいと思います。

**2024年10月26日（土）13:00～16:30**

**オンライン開催 with Zoom/無料（要申込）**

主　催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト
「21世紀課題群と東アジアの新環境:実践志向型地域研究の拠点構築」

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・
IMPACTオープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」
（記憶の継承ラボ）

共　催：沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」
大阪大学中国文化フォーラム

【問い合わせ先】emako[a]hus.osaka-u.ac.jp

＜参加登録URL＞
（締切：10月25日（金））
https://forms.gle/EZFVDXfsBNKQdCE5A

# ポスト体験時代の記憶の継承

## ―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―

開催日時：2024年10月26日（土）13:00～16:30

【プログラム】

趣旨説明：三好 恵真子（大阪大学人間科学研究科）（13：00～13：10）

**第１部 ＜話題提供＞**（13：10～14：30）

**コザの戦後史の継承が拓いていく未来への展望**

モデレーター：吉成 哲平（大阪大学人間科学研究科DC）

**① それぞれの土地の歴史を背負う現在から浮かび上がる東アジアとの結びつき**

「記憶の継承の現場で展開される「戦後」を生きる人びとの複雑な経験」

「記憶の継承ラボ」の院生メンバー

**② 現場からのレスポンス「コザの戦後史の継承に込められた思索の軌跡」**

「沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」の取り組み」

恩河 尚（沖縄市史編集担当）

伊敷 勝美（沖縄市史編集担当）

― 休憩（10分）―

**第２部 ＜基調報告＞**（14：40～16：00）

**戦争がもたらした社会の変容と向き合う生活者の思想的営為**

司会：三好 恵真子（大阪大学人間科学研究科）

**① 生活の中で生まれゆく写真表現から「戦後」を捉え直す**（14：40～15：10）

「写真家たちが向き合った1970年前後の現実

―「写真100年」の歴史から内省した現場での撮影表現の意味―」

吉成 哲平（大阪大学人間科学研究科DC）

**② 国境移動の経験を通じて心身で受けとめていった重層的な歴史**（15：10～15：40）

「日中「二つの東北」の痛みと向き合いながら暮らす結婚移民の中国人女性たち

―「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ結び目となりゆく歴史実践―」

王 石諾（大阪大学人間科学研究科DC）

ディスカッサント：小林 清治（大阪大学人間科学研究科）（15:40～16:00）

**第３部 ＜総合討論＞**（16：00～16：30）

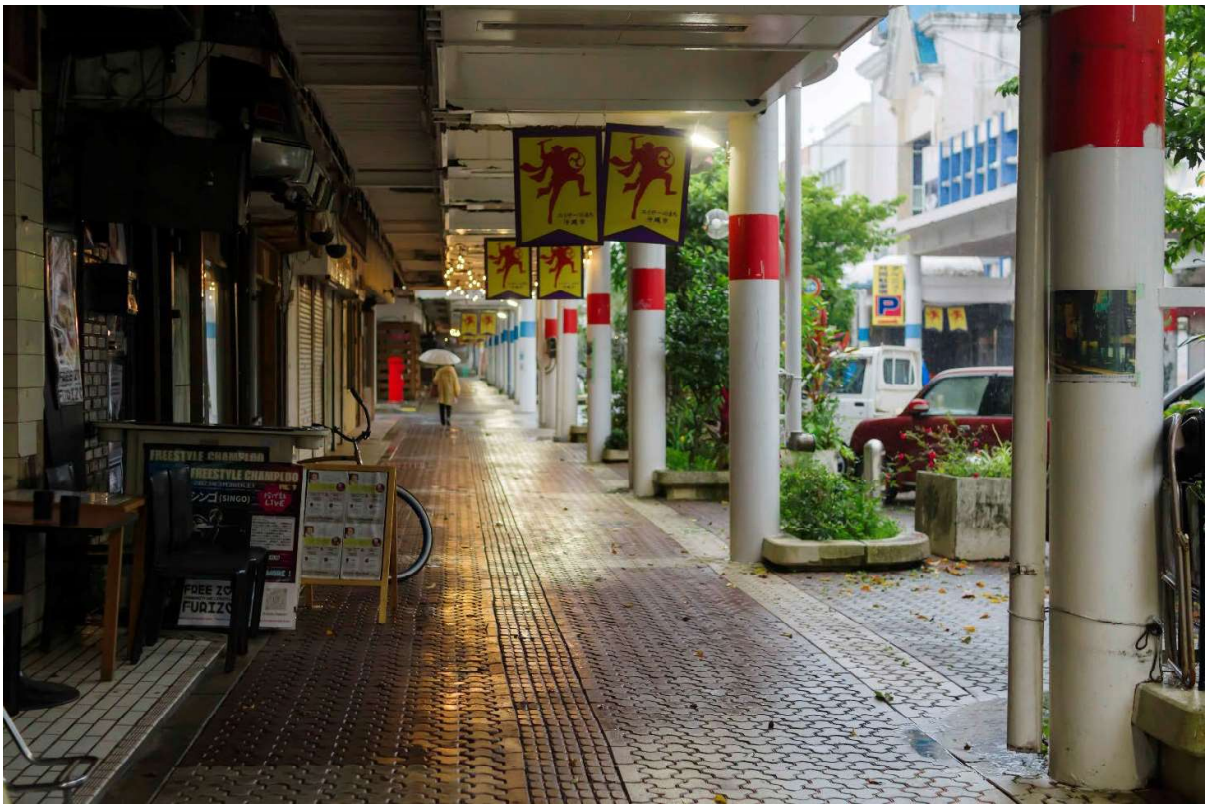
**アジア地域史から共に考える私たちの暮らし**

**主 催：** 大阪大学 グローバル日本学教育研究拠点 Osaka University Global Japanese Studies Education and Research Incubator　Project IMPACT

**共 催：** 沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」

大阪大学 中国文化フォーラム Osaka University Forum on China

# 附録②：フィールドの写真




（沖縄市・中央パークアベニュー　2024 年　©Teppei Yoshinari）

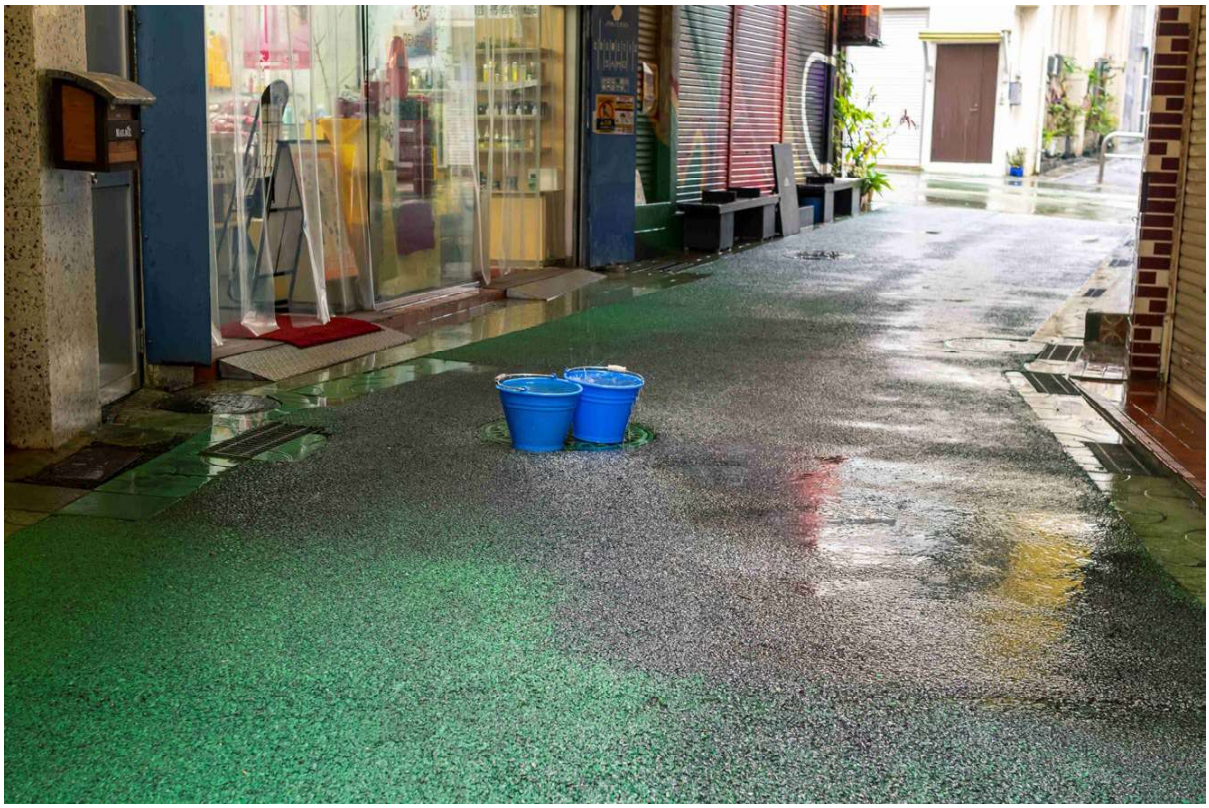
（那覇市・那覇軍港　2024 年　©Teppei Yoshinari）

（那覇市・第 32 軍司令部壕　2024 年　©Teppei Yoshinari）

（読谷村・渡具知　2025 年　©Teppei Yoshinari）

（嘉手納町・「道の駅かでな」　2024 年　©Teppei Yoshinari）

（沖縄市・八重島　2024 年　©Teppei Yoshinari）



（沖縄市・照屋　2024 年　©Teppei Yoshinari）

（沖縄市・胡屋十字路　2025 年　©Teppei Yoshinari）

# 執筆者紹介（氏名/所属/主要業績）

【編者】

三好恵真子（みよし　えまこ）［刊行に寄せて・コラム④・第三部］

大阪大学・人間科学研究科・教授

『現代中国社会変動與東亜新格局第二輯、第一輯』（社会科学文献出版社、2020 年、2012 年、共著）

『バイオサイエンス時代から考える人間の未来』（勁草書房、2015 年、共著）

『共進化する現代中国研究―地域研究の新たなプラットフォーム―』（大阪大学出版会、2012 年、共編著）

『現代中国の社会変容と国際関係』（汲古書院、2008 年、共著）

『トラウマ的記憶の社会史−抑圧の歴史を生きた民衆の物語−』（明石書院、2007 年、共著）

『忘れてはならない環境ホルモンの恐怖―子どもたちの未来を守るために―』（大学教育出版、2003 年）

*Gums and Stabilizers for Food Industry*, Vol.11，Vol.10，Vol.9（The Royal Society of Chemistry, 2002, 2000, IRL Press, 1998, joint authorship）

*The Series Progress in Colloid & Polymer Science; Physical Chemistry and Industrial Application of Gellan Gum*（Springer, 1999, joint authorship）

吉成哲平（よしなり　てっぺい）［第一部に際して・第一部①②・報告①・コラム②・コラム③・第三部・あとがき］

大阪大学・人間科学研究科・博士後期課程

『写真家 星野道夫が問い続けた「人間と自然の関わり」』（三好恵真子監修、大阪大学出版会、2021 年）

「復帰後の沖縄の現実から問い直された「戦後」―写真家 東松照明が島々で確かめていった生活の実感―」（『生活学論叢』46 号、2025 年、共著、印刷中）

「「私性」から「公性」へと拓かれてゆく「写真実践」―復帰前後の沖縄での表現を巡る東松照明の模索―」（『生活学論叢』43 号、2023 年、共著）

「写真家たちが向き合った 1970 年前後の現実―「写真 100 年」展を通

じた明治期以来の記録への内省―」(『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』49 号、2023 年、共著)
「写真家 東松照明が直面した「基地の中の沖縄」―日米の狭間で揺らぐ復帰前の現実と歴史への責任―」(『生活学論叢』41 号、2022 年、共著)
「「戦争の影」を抱え展開し続ける「写真実践」―東松照明が生活の現場から証した、長崎の被爆者の生と死―」(『生活学論叢』39 号、2021 年、共著)

【執筆者】

恩河尚(おんが　たかし)[第一部①②・第三部]
沖縄市役所総務部総務課・市史編集担当
『沖縄市史　第 5 巻　戦争編』(沖縄市役所、2019 年、共編著)
『沖縄市史資料集・6 美里からの戦さ世証言』(沖縄市役所、1998 年、共編著)
『沖縄市史資料集・5 インヌミから―50 年目の証言』(沖縄市役所、1995 年、共編著)

伊敷勝美(いしき　かつみ)[第一部①②]
沖縄市役所総務部総務課・市史編集担当
『沖縄市史　第 5 巻　戦争編』(沖縄市役所、2019 年、共編著)
『沖縄市史資料集・6 美里からの戦さ世証言』(沖縄市役所、1998 年、共編著)
『沖縄市史資料集・5 インヌミから―50 年目の証言』(沖縄市役所、1995 年、共編著)

王石諾(WANG Shinuo)[第一部①・報告②・第三部]
大阪大学・人間科学研究科・博士後期課程
「日中「二つの東北」を生きる結婚移民の女性たち―ライフストーリー法から拓かれていく「歴史実践」―」(『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』51 号、2025 年、共著、印刷中)
「日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生を営むという選択―「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつ災害を乗り越えようとする結婚移住した中国人女性の歴史実践―」(『生活学論叢』45 号、2024 年、共著)

「結婚移民として日中「二つの東北」を生きる中国人女性の歴史実践—ライフストーリーから読み解かれる「満洲」記憶—」(『生活学論叢』43 号、2023 年、共著)
「国際結婚で福島県に嫁いだ中国人女性の主体性とその形成過程—東日本大震災経験者のライフストーリーから読み解く—」(『アジア太平洋論叢』24 号、2022 年、共著)
「コロナ禍において「境界」に生きる在日中国人—生活実践とライフストーリーからの考察—」(『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』47 号、2021 年、共著)

冷昕媛(LENG Xinyuan)[第一部①]
大阪大学・人間科学研究科・博士後期課程
「社会転換期における環境ガバナンスへの参与——中国環境 NGO リーダーの奮闘記から読み解かれる内在的自律性とその啓示」(『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18、2024 年)
「中国社会転換期における環境 NGO と環境ガバナンスに関する再考—「国家–社会」から「制度–生活」へのパラダイムの転換—」(『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』49 号、2023 年、共著)
「中国社会転換期における若い世代が牽引する新しい環境 NGO の課題と展望—ライフストーリーから読み解く光と影—」(『アジア太平洋論叢』24 号、2022 年、共著)

姜星羽(JIANG Xingyu)[第一部①]
大阪大学・人間科学研究科・博士前期課程
「中国における基層管理の変遷とその実践的展開—黒竜江省チチハル市における末端管理者「網格員」に着目して—」(日本生活学会第 51 回研究発表大会、連名発表、2024 年)
「学生企画による PBL 活動の実施報告:日本の持続可能な水産業の形成について考える」(『大阪大学 CO デザインセンター紀要 Co*Design NOTE』5 号、2024 年、共著)

小林清治(こばやし　せいじ)[ディスカッサント・第三部]
大阪大学・人間科学研究科・准教授
「中国における廃棄物処理施設をめぐる紛争に関する実証研究—「二重の社会的不正義」の再検討と環境正義の多次元性からの考察—」

（『生活学論叢』36・37 号、2020 年、共著）
「廃棄物処理施設をめぐる紛争に関する研究の日中比較―中国における事例研究への示唆―」（『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』46 号、2020 年、共著）
「塩ビ＝ダイオキシン問題の知識社会学・試論―久喜宮代衛生組合における社会的合理性と科学的合理性の対抗的相互補完関係―」（『開発と環境』1 巻、2000 年）
「自然の社会化と環境リスク―環境リスクの社会学的位相―」（『大阪外国語大学論集』19 号、1998 年）
「アンドリュー・フィーンバーグ『テクノロジーの批判理論』における方法」（『情報問題研究』8 号、1996 年）

上林梓（うえばやし　あずさ）［コラム①・レスポンス①］
大阪大学・21 世紀懐徳堂・特任研究員
『実践につながる道徳教育論』（藤川信夫監修、北樹出版、2024 年、分担執筆）
『子どもと教育の未来を考えるⅡ』（岡部美香編著、北樹出版、2017 年、共著）
「人間科学による一つの狂詩曲―人間科学研究科による利他コンポジウムの報告」（『未来共生学』第 4 号、2017 年、共著）
『実践ドラマ教育―想像と表現の参加型学習』（武田富美子編著、晩成書房、2013 年、分担執筆）

中谷碩岐（なかたに　ひろき）［レスポンス②］
大阪大学・人間科学研究科・博士前期課程／日本学術振興会特別研究員 DC1（予定）
「前期デリダの現象学受容におけるフーコーの位置付け―『言葉と物』と『グラマトロジーについて』におけるエピステーメー概念に着目して」（『フランス哲学・思想研究』28 号、2023 年）
「前期デリダのフッサール読解における正常性の問題」（『現象学年報』40 号、2024 年）
「現前への信と「吐き出されるもの」:「エコノミメーシス」における「音声＝ロゴス中心主義」と信の問題」（『哲学の門』6 号、2024 年）

黄　璇（HUANG Xuan）［レスポンス③］
東京大学・大学院農学生命科学研究科・生態水文学研究所・学術専門

職員
Fostering Public Participation in Watershed Pollution Governance: A Case Study of Civilian Environmental Supervisors in Guiyang’s Dual River Chief System（Water 16(24), 2024, joint authouship）
『流域ガバナンスをめぐる「双河長制」に関する実践研究 : 貴州省貴陽市における事例からの考察』（『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』47 号、2021 年、共著）
『中国の「双河長制」の実践プロセスから誕生した民間環境監督員が地域環境保護活動に参与する意義 : 貴陽市清鎮市の事例からの考察 』（「現代中国と東アジアの新環境」国際セミナー、2021 年、共著）

朝木日力格（CHAO Murilige）［レスポンス④］
大阪大学・人間科学研究科・博士後期課程
「中国内モンゴル自治区における生業の変容とその影響―半農半牧村における作物栽培を手がかりとして―」（日本生活学会第 51 回研究発表大会、連名発表、2024 年）
「中国内モンゴル自治区の放牧制限化における畜舎牧業―定住化にて生活するモンゴル人がなぜ牧畜から離れないのか―」（日本現代中国学会関西部会 2024 年度大会、2024 年）

張曼青（ZHANG Manqing）［レスポンス⑤］
京都大学フィールド科学教育研究センター・特定助教
「郷土中国」とポスト「郷土中国」の間への凝視―中国集団農業時代における郷土性の変遷―」（『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』51 号、2025 年、印刷中）
「2012 年以降の「里山」研究の動向について」（『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』50 号、2024 年）
「新中国建国後の肥料農法の漸進的な転換と農民の主体性―「土化肥」の使用を基軸とした考察―」（『村落社会研究ジャーナル』58 号、2023 年、共著）
「社会転換の荒波を生きる中国農民の「農」をめぐる葛藤と主体的な選択―施肥に関するライフストーリーから読み解くもう一つの農民像―」（『生活学論叢』42 号、2023 年、共著）
「中国皖南都市公共スペースでの「アウトロー」農業―「県城」で生活する離土離郷人々がなぜ農業から離れないのか―」（『アジア太平洋論叢』24 号、2022 年、共著）」

馬建（MA Jian）［レスポンス⑥］

新潟食料農業大学・食料産業学部・助教

「中国生活ごみ分別の実施現状と課題」（『日中経協ジャーナル』、2024年）

「家庭ごみの資源循環に係る中小規模都市の先進事例に関する考察―上勝町、大木町、上田市、逗子市へのヒアリング調査をもとに―」（『社会科学研究年報』（54）、2024 年、共著）

「市町村におけるプラスチック製容器包装減量・リサイクル推進の実態と施策に関する研究―京都市、横浜市、福岡市へのヒアリング調査をもとに―」（『龍谷政策学論集』12 巻 2 号、2023 年）

「中国の都市生活ごみ分別政策の変遷と今後の課題」（『人間と環境』49 巻 1 号、2023 年）

西村花菜（にしむら　はな）［レスポンス⑦］

放送大学・人間と文化コース・全科履修生

「行動からはじまる」（『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18、2024 年）

# あとがき

数年前にアラスカへ留学し、現地の先住民文化に関する講義を受けていた時に衝撃を受けた出来事があります。それは、アジア・太平洋戦争におけるアリューシャン列島での日本軍の占領と米軍による奪還作戦を通して避難を余儀なくされた生存者が、証言映像の中で苦渋に満ちた表情で当時を語っていたことでした。そこで失われた生活に、一度でも想像力を働かせたことがあったかと愕然とし、日本からの留学生として鈍い痛みを覚えていました。

それぞれの土地に営まれてきた日常の暮らしがあり、戦争はそれを容赦なく奪う。しかし、生き残った一人ひとりの「戦後」の生活は続いていく。それは当たり前のように思えて、過去の出来事を固定的に捉える視点や「大文字の歴史」からは、見過ごされてしまいがちな事柄でもあるのかもしれません。そして、今年で敗戦から 80 年の節目を迎えようとする一方、世界各地での戦争は終わりが見えない現状において、いま、それは切実な重みを増しているように思います。それゆえ、本書で展開されている議論は、そうした過去から現在への連続性を、今日を生きる私たちが内省しながら未来に繋げていく模索でもあるのではないかと、有り難く受け止めています。

特に、本シンポジウムにご登壇頂いた沖縄市史編集担当の恩河尚様と伊敷勝美様には丁寧に原稿へ目を通して頂いただけでなく、改稿への重要な助言も頂きました。厚く御礼を申し上げます。そのほかお一人お一人の名前を記すことは出来ませんが、シンポジウムの開催とその総括としての本書の刊行にお力添え頂いたすべての方々に深謝いたします。本書が多くの読者の方々のもとへ届き、そして、実際に現場にも足を運んで頂くことで、各地域の戦争・戦後体験とその記憶をめぐる「対話」がより一層豊かなものとして未来に拓かれていくことを祈念しています。

2025 年 3 月

編者を代表して　吉成哲平

「21 世紀課題群と東アジアの新環境」
シンポジウムシリーズ③

# ポスト体験時代の記憶の継承

## ―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―

2025 年 3 月 27 日発行
編者　三好恵真子・吉成哲平
印刷・製本　㈱アイジイ

OUFC ブックレット　第 19 巻
http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/booklet.htm
ISSN 2187-6487（オンライン）
大阪大学中国文化フォーラム事務局（as-c-forum@hus.osaka-u.ac.jp）